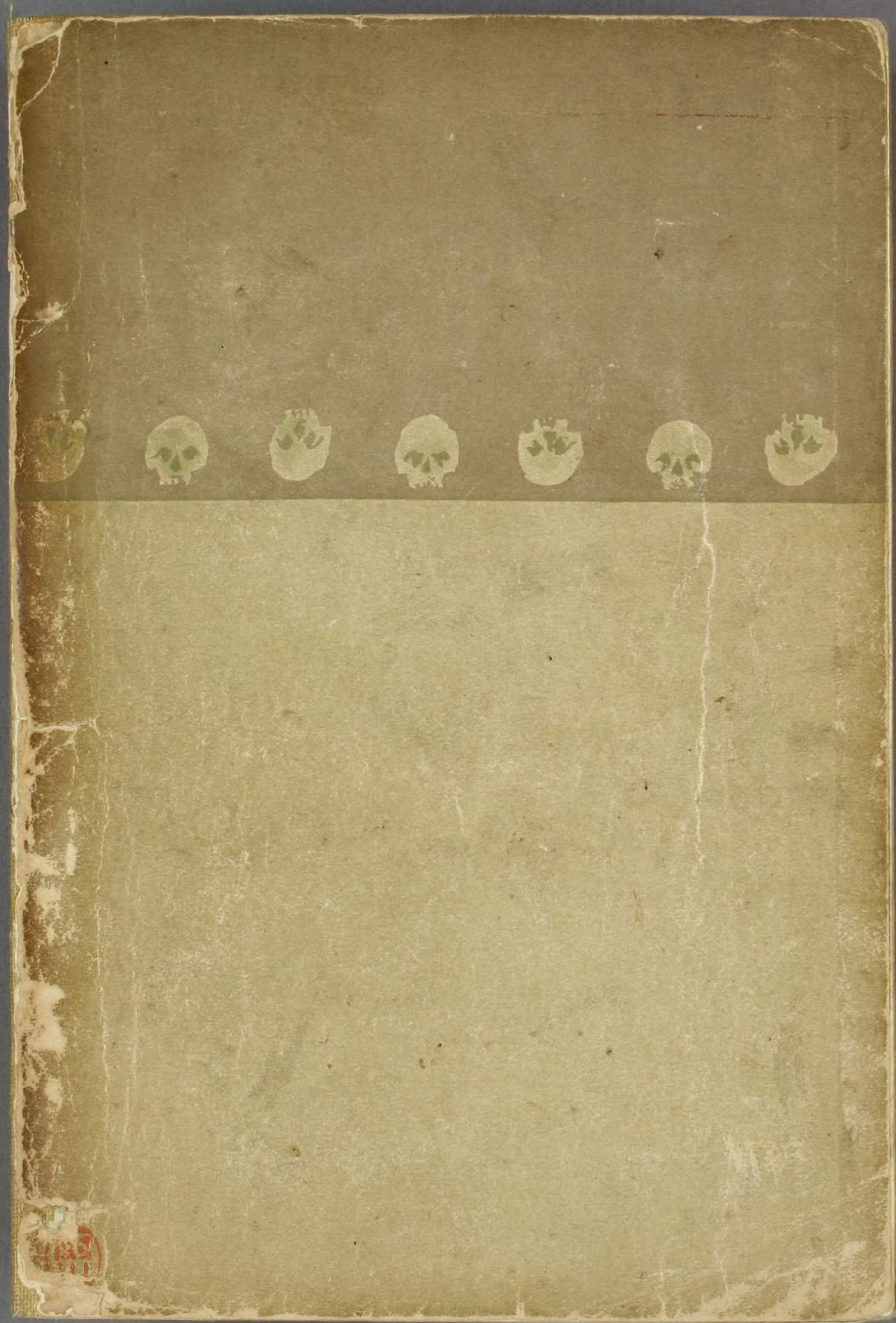


遠谷全集

文武堂

本問文庫
文庫 14
D 40







透谷全集



文庫14
D40



蘇谷全集



4

折れた
喉に
子
夏
春

粹を論じて伽羅枕に及ぶ

就きて一言すも無益ならざるべし。抑も當時

武門の権勢漸く内に衰へて、華美を競ひ遊惰を事と

すに及びて、凡教を依持す可き者として、僅に朱子

子を宗とすも儒教ありしのみ。而して儒教の凡教

を支配する事能はざるは、往時以て利に附馬教の勢

力地に隨ちて教令の唯だ集會所たるが如き觀あり

粹を論じて伽羅枕に及ぶ

粹

心して我文學史を讀む者必ず徳川氏文學中に
粹たる者の勢力を窺ふべし。彼の所謂洒落本主人にや
子以前に多く此語を見ず其尤も盛なるハ文字屋
以後にありと云ふべし。彼の所謂洒落本主人にや
く本及び草紙類の作家が惟一の理想とし武壇の士
の八幡麻呂支天に托けるが如く此粹様を仰ぎ尊み
たるの跡蹟を滅す可うらず。

粹様の系統を討ねれば平家朝の凡雅之れが遠祖
たる。語を換へて言へば日本固有の美術心より自
然的展曲を經て茲に至りし其尤も近き
親の戲曲と遊廓にてありし其尤も近き
戲曲の事他

粹を論じて伽羅枕に及ぶ

書

心して我文學史を讀む者必らず徳川氏文學中に
粹たる者の勢力をわそかたらしむるを見む。集林
子以前に多く此語を見ず其尤も盛なるは文字屋
以後にありと云ふべし。彼の所謂洒落本主人にや
く本及び草紙類の作家が惟一の理想とし武備の士
の八幡麻呂支天に托けるが如く此粹様を仰ぎ尊み
たるの跡~~跡~~滅す可うらず。

粹様の系統を討ねれば平家朝の凡雅之れが遠祖
たる。語を換へて言へば日本固有の美術心より自
然的展曲を経て茲に至りし其果而して其尤も近き
親の戯曲と遊廓とにてありし事。戯曲の事他
日論す可ければ此に攔きつ遊廓と粹様の關係に
就きて一言すとも無益ならざらべし。抑も當時

武門の権勢漸く内に衰へて華美を競ひ遊惰を事と
すに及びて凡教を依持す可き者として儘に朱子
子を宗とす儒教ありしのみ。而して儒教の凡教
を支配する事能いざらむ往時以を利に龍馬教の勢
力地に墮ちて教令の畦だ集令所たるが如き觀あり

序 文

飛星水に白きが如く落月汀渚に動くが如き君の生涯は、われにいかなる妙機をや教えし。吾が君と相知りしは實に壬辰秋の頃よりなりし、夜もすがら慨世悲歌の物語に曉色の半窓を犯すを知らず、詩興大に到りて情致の機微に筆を執らんとを約す、既にして曉鐘幽かに庭樹に響くや、共に坐に堪えずして潜々たるものあり、吟哦交々喉を塞ぎて沈痛の氣は室を繞れり、柳は黒く月は咽びたる、中宵綺疏を歩むの此日此夜の感は、今も尙ほ忘るゝ能はず。袂を引きて君は言へり、吾が死後吾が傳記を記さん者は誰ぞと。吾は言ふ、そは他に其人ある

べきか然れども若し君の熱涙を一冊子に集むるの人ほど問はゞ夫れ吾れなりと言はん。斯くして越ゆると僅かに二ヶ年、其春吾が北遊の旅より歸るや、先づ武陵の便りを聴くものは君が他界に消え去りし音づれなりし、人事無常の迅速に愕くものあり、茫然として直ちに君が墓前に走れば、幽鳥聲空しく閑境に落ちて復た君が飄落たる面影を見る能はず、白雲央々たり、想ふて雲路阻て、長し、せめてもの心斗りに其年君が知友を相會し、俎橋畔亭に君が追悼の志を爲すや、知名の文士争ひ集りて波浪に脱れし巨魚を惜まぬ者おらず、其秋君が文集一冊を成して透谷集と命じ、杜子が所謂飄然として群ならざる君が詩想を江湖に問ひぬ。爾來年を追ふて漸く君を知

る者多く、折れしまゝ、咲て見せたる君が心花を追慕して、吾れに其全集を成さんを追る者多し。偶々君が家人の、一少女を伴ひて吾を訪ふあり、其何者なりやを問ふに、これ透谷子が半身を投げ與えしといふ其人の、心を籠めし、君が遺愛の片身なりし、沈痛の氣孤憤の相は君が眉宇を再び爰に見るの思ひあらしめぬ。此夜枕頭荐りに君の遊魂と談りて、之れより復た他事を排して君の遺稿を完からしめんと發意するに、禿木子亦此志ありて助成すると尠からず。今年漫りに君が遺篋を探りて其斷片隻句を拾集補綴し、以て君が半生の傳記たるもの、又は未定稿の腹案をも知るべきもの、總て其日記に併せて終に日誌摘録を卷尾に編むの罪を犯せり。君が戲言遂に實

と成りて吾が誓言を全ふせしめ、爰に全集完成を告げしむる
の悦びを悲む。

明治壬寅の初秋

知友 星野 天知識

序 文

硝煙彈雨の間に殘壘を死守する勇士の奮闘は悲壯なり。
一國の安危を双肩に擔ふ志士の盡瘁も悲壯なり。然れども
想界の戦士が苦戦は更らに悲壯なり。畏友、故透谷北村君、君
は詩人なりき。思想家なりき。而して又戦士なりき。君先
づ世と戦ひ人と戦へり、次で魔と戦ひ靈と戦へり、終に自己と
戦へり。孤劍陣頭に立ちて慨然として叱咤したる其風姿今
なほ見るが如し。悲ひべし、幾千百の年を経たりし敵は君の
獨力に動かざりき。君終に仆れぬ。見よ、此の集、君が揮ひし
鐵槌こゝにあり。君が翳し、太刀彼處にあり。鎧袖ちぎれ

兜落ちたり。ア、想界荒寥草茫々として當年は夢の如し。
君世を去る前數日、君が僑居を芝の公園に訪ふ。君談笑常の
如し。去るに當り家人眉を顰めて曰く、君等と談する時、しか
く樂しきが如し、何の故ぞ孤獨の時、かの狂亂に似たると、悲惨
の事跡終に吾が腦裏を去らず。透谷全集新に成れども君ま
た返らず。痛恨殊に深し。

明治三十五年九月誌

戸川秋骨

亡友を吊ふ 平田秃木識

春の夜の雨しめやかなるに、ひとりことくにの詩人が恨み
を想ひて、薄命の記をつくりしその筆未だかわかず、われは我
友を吊ふの不幸に逢ふ。露をくみ風に吟じ、蟬の羽のかるく
江湖にさすらひしもの、一朝斷續の聲を遺して、孤清の姿を葉
がくれのけふりにかくす、悲哉。

蟬羽子北村透谷君、君が清高の音なほわが耳にあり。君が
獨苦の姿なほ我眼にあり。あはれ死といふもの、あやしき。
われは君が逝きしをまこと、も思はず。君なきをまこと、
も思はず。悲壯君が如きもの、死して何ぞ靜なる。激切君が

如きもの、死して何ぞ寂たる、されど勁瘠の氣はなほ君か眉宇に溢る。沈痛の氣はなほ君が眉宇に溢る。死といふもの、わやしき、われは君なきをまこと、も思へず。

去年夏七月、どもに携へて青山流水の間に遊ぶ、時に無聲は袋を負ひ、破箝にすがりて石山のはどりに漂ふ。東西日を期して富嶽のもとに會す。須磨の浦風に吹かれ。芳野の花の下に迷ひし無聲がもの語りに、われ等は共に武陵塵中の哀れを告げて、痛飲夜を徹すると二日、悲喜こもく、大笑のうち、に投ず。蟬羽子酔ふて笈中の一曲を讀む。これそのつくるどころ悪夢の一篇なり。起て袖を振てオフェリアの一曲を歌ふ。凄婉の聲なほわが耳にあり、俯して狂公子が獨語を誦す。

沈鬱の音なほ我胸を去らず。

かくて蒼梧洞も來り會し、沼津より車をやどひ馬を驅て函嶺に向ふ。道崎嶇として石を轉するが如く、蟬羽子單衣破笠、起て自ら鞭を取る。青山流水馳するが如く、四個快哉を叫びて三島に到り、酒を酌むで更に山に登る。ゆくこと幾何、山茫茫として草なく水なし。蟬羽子佇立久しく西方を望む。黙して語なし。既にして曰く、我も亦瞬時の詩人たるを得たりと、笑て更に道を追ふ。黄昏湖畔の破宿に投ず。

葦の湖は沈々たり。月は破雲にかくれて、凄光僅に崖頭の孤松にかゝる、湖上朦朧として煙の如く、満目の静寂身は幻境にある者の如し。四個相顧みて語なし。稍久ふして蟬羽子

僅に口を開きて曰く。人生何ぞ悲涙多き、わが半生何ぞ慘々たる
と、かくて暴雨の前の花のいろ、蛛網のかすかなるよりも果
敢なき人の心を悲しみては、往時を語り、今昔を想ひ、嗚呼誰か
我死後に我一生の悲涙を傳へむと、四個相顧みて語なし。凄
々たるその貌、沈々たるその語、なほわが胸奥に刻むものあり。

翌蟬羽子袂を分ちてひとり奥羽の山河に向ふ。秋かへり
て湘南の一江村に退き、一家とともに静に其心を養ふ。時に
京にいでて相往來す。一日透谷橋畔の家に君を見る。君曰
く、大濤怒り激浪躍るにあらすや。人間何ぞ獨り静なるを得
むと、また語をつぎて、誰か我一生の悲しき事を傳ふるものぞ
といふ。この時蘇峰氏の囑によりて、エマアソンが傳を編ま

むとす。蝶の歌をつくる前後三篇、悲凄々人の心を襲ふ。こ
れ終焉の作となる、悲しからずや。

無聲が長途の旅よりかへるや、かれは北邱の一村寺にあり。
一日蒼梧洞を訪ふ、蟬羽子あり。三個ともにいで、我庵に向
ふ。天王寺の塔夕陽に映つるを見、愛護精舎の前をよぎり、い
で、一破亭に酌む。蟬羽子の曰く、何等の清遊、われは世の破
れざるが故に我心を破るを恨むと。既にして曰く、悟るとい
ふ事が氣にくはぬ、迷ふならば飽くまで迷ふにしかない、尊氏
のやうなもの、光秀のやうなもの、なせに一生の終りにこの悟
りといふものに欺された、清盛のやうに。將門のやうに、なせ
に迷ひ盡くさぬのである。嗚呼この語われに終焉の辭とな

る、慘ならずや。

かくて夕暮れに手を携へて小西湖畔に到る、柳葉枯れ落ちて影を止めず、廢荷凋殘凄風寒し。ともに語をひそめて世途の崢嶸を語る。車に駕して江戸橋畔に袂を分たむとす。蟬羽子燈影に我を顧みて、佇立久ふす。われ又これより蟬羽子を見ず。

嗚呼人間の孤獨なる、その悲涙と熱血を擔ふて、自ら凄慘の淵に逝かざるべからざるか。蟬羽子、君に妻あり、兒あり、君に友あり。なほ獨り自らその悲涙を負ふて、逝くべき處に逝かざるべからざるか。なほ獨り自らその熱血を沸かして、落つべき處に落ちざるべからざるか、二十七年五月十五日、夜深く

して臥床人なし。月光朦朧破窓を洩る。蟬羽子獨り庵をいで、何れにかゆきし。綠樹蔭暗く早や夏虫の聲かすかに、君が心をさそふ者ありしか、君が燈火の如き眸をかきたて、遙かに嫦娥の光を追ひつゝ、幽林の間かしこにさすらひ、こゝにさまよひしならめ。かくて月は西へくと落ちて寂として其光の消えし一刹那、曉の風寒く脊骨を吹きて、露冷に君の病の袂に落ちし時、君が半生の悲涙と熱血は如何なる狂ひをわかしけむ、眠るが如くにしてこの悲惨の一生は終りぬ。嗚呼剽瘠の氣はなほ君が眉宇に溢る、沈痛の氣はなほ君が眉宇に溢る、われは君なきを眞とも思へず。こえて十七日、族子知友相會し、香煙の冥々たるなく、讀經の寂々たるなく、魂は白金瑞

松禪寺の清風に葬られぬ。

氣君の如き、かつて劔を按して起ちしといへり。情君の如きかつて飛蛾をころさすといへり。想を功名に寄せて得ず。筆を騷壇にたてゝ果さず。いたづらに薄倖の名を江湖にとどむ。コンコオドの聖者が傳の如き、僅に蘇峰氏が平生の眷顧に報ひしのみ、去年病中に稿を脱す。梓に上りて僅に半月、未だ卷を手にするに暇あらず、早くこの不幸に逢ふ。かつて鎌倉に遊び、凡ての秋の悲を想ひて、一新哀詩をものせむとす。果さず、又身をさゝげて劇部に投せむとするの志あり。五縁十夢十餘編の戯曲を成さむとす。悪夢は其一なり。病中の稿斷編の今庵中に遺るありといふ。

亡友反古帖

島崎藤村

北村透谷子の書捨たる反古にして、積んで其書齋に堆き中より、抜き集めて吾書架の一隅に保存し置きたるものあり、頃日かの反古を棚の上より取りおろし、塵をはたきて彼是と讀み行くに、亡友彷彿として吾眼前にあるが如く、轉た懷舊の情に堪えず。

飄遊を好める面白き男として彼を知れるものもあるべし、俠骨を愛し慈善を好みたる志士として彼を知れるものもあるべし。外面極めて飄逸にして内部極めて沈鬱なる詩人として彼を知れるものもあるべし。自然の研究者として、靈活

なる評家として彼を知れるものもあるべし。彼は常に吾に告げて曰く余には友少なし、また強て友を求めんともせず。然れども彼は勉めて交遊を怠らざりければ、彼を知れる知名の君子も少なからざるべし。吾は彼と相知り相慕ひてより極めて深情ある親友として忘るゝこと能はざるなり。

歲月江水の如し。げに吾は舊友の再び見るべからざるを思ふごとに、歲月の人の希望と相容れざることを歎せずんばあらず。惜しいかな芳蘭夭折して既に幾春秋、幽明境を異にして再び相語ること能はずと雖も、子よ、子よ、幽界の事は子が生前に於て想像せしが如きものありや、否や。いかに冷たき泥土に覆はるゝとも、いかに重困しき石碑を戴くとも、いかに

一點の日光だも通せざる暗孔に押込めらるゝとも、子は今や何の傷むところ何の羈絆を苦しむところなきか。春くれば櫻の花の子が墓の上に散り、秋は秋草亂れ茂りて墓畔に露の玉の如きものありとも、子は今や何の情を動かすところなきか。今一度人間世界に歸り來つて舊友と相見ること欲せざるや。嗚呼子よ、子が歩みつゝある死とは夫れ詩人の歌ふ眠の如きものか、眠ならば樂しき眠にてあれかし。

透谷子戯曲に志あり。彼が書捨たる反古を見るに、戯曲の稿を成さんとして成らざりしもの頗る多きが如し。彼が遺筐また韻文に富めり、其か多くは未定稿なり。私に思ふ文藝の事は一朝一夕にして成るものにあらず、其琴は一人の琴

にわらず其韻は一世の韻にあらず、夫れ鬼神をわはれと思はせ、武き人の心を動かし、男女の間をも和ぐる迄には、必ずや數多の詩人が熱情と苦心とを合せて、其の聲、其の力、其の火、其の涙、皆な活けるものとなりて、琴心に宿らすんばあらず。吾は亡友の反古をくりひろぐる毎に、今日の詩人の苦心を思ふに堪えざるなり。

聽く「エオリヤン」の琴を窓前に懸くるや、風來つて之に觸れて音を成すといへり。思ふに詩人の生涯もまた斯の如きものあるか。透谷子が始めて詞壇に志せしは十九歳、または二十歳頃なるべしと覺ゆ。當時風南子、無性子などの號あり、その頃の反古多くは散逸して首尾全からざる者多しと雖も、草稿

の吾許に存せるものにて、江藤浩作、新奇好男子(脚本第四齣)まで會話體、南洲の石碑、薄命、袖はぬらさど(韻文)、桃太郎遠征記、小兒の時、貴人滑稽流の詩として中等以上の人士が遊惰放縱なることを詰責すべしとあり、東北振興中原之鹿(小説)又脚本めきたり、林中會議、四條畷(脚本草稿)、世の感、文學の平天地、志士の門出、僧雄正坊、南洲翁脚本第一齣丈、これは小説脚本韻文小品等の題目にして論文の草稿には、女子に就て、嗚呼遊廓の大弊害、自由黨自身の病性、日本の婦人に代り俯仰天地に訴ふ、などあり。

少年より大人に飛躍せりとは、テインがバイロンを評したる語なり。透谷子の如きも亦然りと言ふべきか。彼が思想

上の歴史に於ては、一步は一步よりも高く登れるにあらずして、寧ろ點々飛躍の痕を留めたるが如し。彼が二十二歳より二十三歳の頃までの反古と思はるゝ者には、人間村漫遊記、別乾坤搜索日記、初夢、地獄極樂巡遊日記、我がいほり、お園薄命兒、篁村翁を評す、渡守太郎、東屋、無我村、漂流人、夢中の夢韻文、嗚呼かく弱き人ぞゝろ、嗚呼かく強き戀の情などの句あり、たびどころも、平家行、常盤曲、當世文學の潮様々、現今文學の批評、義經曲、春の曲、夏の曲、秋の曲、冬の曲、美文學總論、おその(脚本にして幾度か稿を草したるものと見え稿本三四あり、余は憶せずおそのを出さん若し多くの駁撃者あらば一部の反駁書を出すべし)などあり、荒野の戦ひ(其脚色は、非常に豊饒なる野ありてこ

ゝに會て蛇を平げたる一の大なる蛭蚰が野の長となり、でんぐ、虫が箱をかついで配權を執行し居り、其臣下には蛇、蜂、とんぼ、螢、芋虫、毛虫、蚯蚓、蜥蜴、まつ虫、すゝむし、くつはむし、蛙、さりとく、す、蟬、蜻蜓、赤とんぼ、蠶、はつた、ひぐらし、かじか、虱、蚤、宮守、蟻、油虫、蠅、蚊、げじく、百足、わらし虫、けら、ふくろぐも、くさひばり、玉虫、黄金虫などありて、雙蝶を主人公となし、こゝへ蛇外より來りて彼等と戦ひ全く荒野となるの趣向、これら先づ題目の重なるものなるへし。

五縁十夢とは平生彼が戯曲に對する希望にして、其内五縁の方は一縁も筆を染めず、十夢の中、透谷集に出でたる斷篇の悪夢、別に毒夢と題せしものも見たり、蝶の夢も亦たこの夢中

の一夢なるべきか。

蝶の夢脚色

第一齣 雙蝶を點出し花上に舞はしめ

第二齣 二人の少年男女を出して熱き愛情を寫し

第三齣 再び雙蝶を點出して

蝶と人と同じきが如く同じからざるがど
とくすべし

また左の如き想像と脚色とを記したるものあり、

蚯蚓を見て感あり

蚯蚓、鼠、猫、狐等いろくものを人間位の大き

戯曲さにして、形を造りて各その思ふところを言は

しむべし、而して之を人に比較すべし。

智情意の動物をして各其性質を顯はさしめば妙

吾が知りてより透谷子四度居を轉せり。高輪の舊寺に寓
せし時庭前草花あり、花園に隣りて畑あり室のうしろは老杉
鬱蒼古墳壘々としてかの「鬼心非鬼心」を草せしは爰なり。高
輪を去て芝公園紅葉館の裏手なる小堂に移りしや、絃歌手に
取るが如く聞え、古木堂を擁し、蚊多く、室暗く、猫を捨てられて
心を傷めし事も度々なりといふ話もあり、老鼠堂の庵に近く
して永機宗匠をやりこめたる話も聞けり。こゝも住みうく
てや麻布に轉じ、山羊を買ひて面白からず、霞町に轉じてまた
面白からず、後ち相州國府津の舊寺の一堂を借受けてこゝに

一家を楽しみ、波の音に蝶の夢を破られて再び都に上り、芝
公園の舊堂に歸りて病んで再び起たざりき。嗚呼想ひ來れ
ば吾が眼前に浮び出で、吾をしてこの文を草せしむと雖も、
文に情なく詞に力なく不肖徒らに彼をして幽界のあなたに
一笑を催さしむるに過ぎざるのみ。

凡例

一 曾て故透谷北村門太郎氏が遺稿斷篇の散逸せんことを惜
み、透谷集なる一冊子と成して刊行せしが、久しく絶版と成
りて、其清雋激切なる文字に思を寄せらるゝ諸君子の望に
添ふと能はざりしを憾み、同人相謀り、更に加ふるに氏が篋
底の遺珠數篇、小説宿魂鏡及び蓬萊の一曲を以てし、爰に透
谷全集と題す、即ち氏が廿五才より其辭世の年廿七才に至
る間の作品全集にして、尙餘す所エマアソンの一編あり、そ

は別に一冊子を成して既に發行せるものあるを以てこゝに加へず。

一編輯法は、論議、時評、美文、韻文、小説、斷篇類、劇曲、日記の各種に類列して、其各種何れも逆行編年の法方に據れり。

一卷頭の肖像、表紙及篇中收むる所の挿畫は畫家丸山古香氏の作品たり、氏は透谷子の實弟にして今回同人等の此舉を喜び、寄せて本篇に貢獻する所たり。

一「心機妙變を論ず」の一文は「處女の純潔を論ず」と徳川時代平民的理想との間に挿入すべかりしを、脱して後に心付き、餘儀なく卷尾に掲げたり、讀者幸に之を恕せ。

一本集を成すを聽きて未知の人々書を寄せ、透谷子の傳記を添へんことを勸む、然れどもものゝしき小傳を書かんよりは、氏の自記の日記漫録こそと思ひ、それを抜萃拾集して載るととせり、聊か人物傳記を知るを得んか。

一本集出版に付ては文友館主人伊藤君の少からぬ奔走あり、又文武堂主人大橋君の淺からぬ協力あり、之を爰に記して後の紀念とす。

一編輯校正は専ら星野天知の手に成りしを以て、其過失等の責は同人これに任す。

一透谷子の文友少からず、其諸友の詩文を請ふて卷頭に編入

せんと企及せしが出版の時期切迫して其暇を與えず遺憾
ながら僅かに編者の四文を以て止みぬ。

明治壬寅の秋

編者代表者

星野慎之輔誌

透谷全集目次

萬物の聲と詩人……………(明治廿六年十月稿)……………一

情熱……………(同 年九月稿)……………二

國民と思想……………(同 年七月稿)……………一九

思想上の三勢力

今、思想界に於ける創造的勢力

姉と妹

國民の一致的活動

國民の元氣

地平線的思想

高踏的思想

何をか國民的思想と謂ふ

創造的勢力の淵源

熱意

頑執安排の弊

内部生命論

人生に相渉るとは何の謂ぞ

満足

快樂と實用(明治文學管見の一)

精神の自由(全二)

變遷の時代(全三)

(明治廿六年六月稿)……………三九

(同) 年五月稿)……………四五

(同) 年同月稿)……………五二

(同) 年二月稿)……………七一

(同) 年四月稿)……………九一

(同) 年同月稿)……………一〇一

(同) 年同月稿)……………一三三

(同) 年五月稿)……………一三六

政治上の變遷(全四)

他界に對する觀念

處女の純潔を論ず

(富山洞伏姫の一例の觀察)

徳川時代平民的理想

徳川時代平民的虛無思想

厭世詩家と女性

桂川(吊歌)を評して情死に及ぶ

罪と罰の殺人罪

歌念佛を讀みて

油地獄を讀む

(同) 年同月稿)……………一四六

(明治廿五年十月稿)……………一五三

(同) 年同月稿)……………一六八

(同) 年七月稿)……………一八三

(同) 年同月稿)……………一九九

(同) 年二月稿)……………二二五

(明治廿六年七月稿)……………二三三

(同) 年一月稿)……………二三九

(明治廿五年六月稿)……………二四七

(同) 年四月稿)……………二五九

「伽羅枕」及び「新葉未集」……………(同) 年三月稿……………二七二
粹を論じて「伽羅枕」に及ぶ……………(同) 年同月稿……………二八〇
一夕觀……………(明治廿六年十一月稿)……………二九〇

(其) 一
(其) 二
(其) 三

哀詞序……………

山庵雜記……………

(其) 一
(其) 二
(其) 三

(同) 年九月稿……………二九二
(同) 年二月稿……………二九九

(其) 四
(其) 五
(其) 六
(其) 七
(其) 八
(其) 九

富嶽の詩神を思ふ……………

鬼心非鬼心……………

秋窓雜記……………

(其) 一
(其) 二

同 年一月稿……………三〇四
(明治廿五年十一月稿)……………三二〇
(同) 年十月稿……………三二九

- (其 三)
- (其 四)
- (其 五)
- (其 六)
- (其 七)
- (其 八)
- (其 九)
- (其 十)
- (其 十二)

三日幻境……………(同 年八月稿)……………三六
上

下

星 夜……………(同 年七月稿)……………三四五

脱蟬子に與へて其星夜を評す

脱蟬子の答へ

又脱蟬子へ

我牢獄……………(同 年六月稿)……………三六三

蓮華草……………(同 年五月稿)……………三七五

松島に於て芭蕉翁を讀む……………(同 年四月稿)……………三七八

ゆきだをれ……………(明治廿六年十一月稿)……………三八八

はたる……………(同 年同月稿)……………三九五

蝶のゆくへ……………(同 年九月稿)……………三九六

雙蝶のわかれ	(同)	年同月稿	三九七
眠れる蝶	(同)	年同月稿	四〇〇
露のいのち	(同)	年十一月稿	四〇三
鬮舞	(舊)	稿	四〇四
彈 琴	(舊)	稿	四一〇
みゝすのうた	(舊)	稿	四二二
月前の柳	(舊)	稿	四二三
花間蝶	(舊)	稿	四二四
雨後の花(其他)	(舊)	稿	四二四
發 句	(舊)	稿	四二五
宿魂鏡	(明治廿五年十二月稿)	四二六

上
下

悪夢(斷編)	(明治廿六年稿)	四六四	
實朝館				
三浦義村館				
春駒(斷編)	(舊)	稿	四九一
マンフレッド及ひフォレスト(斷編)	(舊)	稿	四九六
蓬萊曲	(明治廿四年五月稿)	五〇一	
第一齣(蓬萊山麓の森の中)				
第二齣(蓬萊原の一、二、三、四、五)				
第三齣(仙姫洞・蓬萊山頂)				



湖

透谷全集目次終

蓬萊曲別篇……………六五五

透谷子漫錄摘集……………(明治廿二年ヨリ同廿六年マデ)……六六六

楚囚之詩……………

附 錄……………

心機妙變を論ず……………(明治廿五年十月稿)……七八四

透谷全集

北村透谷遺稿

星野天知
島崎藤村編
平田禿木
戸川秋骨

萬物の聲と詩人

萬物自から聲あり。萬物自から聲あれば自から又た樂調あり。蚯蚓は動物の中に於て醜にして且つ拙なるものなり。然れども夜深々窓に當りて斷續の音を聆く時は人をして造化の生物を理する妙機の驚ろくべきものあるを悟らしむ。自然は不調和の中よ調和を置けり。悲哀の中

に欣悦を置けり。欣悦の裡に悲哀を置けり。運命は人を脅かすなり、而して人を驅つて怯懦卑劣なる行爲をなさしむるなり。情慾は人を誘ふなり、而して人を率ひて我儘氣隨のものとなすなり。自然は廣漠たる大海にして人生は延々たる浮島に似たり。風浪常時に四圍を襲ひ來りて寧靜なる事は甚だ稀なり。四節は追はずして駿馬の如くに奔馳し、草木の榮枯は輪なくして廻轉する車の如く、自然は常變なり。須臾も停滯することあるなし。自然は常動なり。須臾も寂靜あることなし。自然は常爲なり。須臾も無爲あることなし。その變、その動、その爲、各自一個の定法の上に立てり、而して又た根本の法ありて之を支配するを見る。淵に臨みて靜かに水流の動靜を察するに、行きたるものは必らず反へる、反へれるものは必らず行く。若きもの必らず老ゆ、生あるもの必らず死す。苦あるものに樂あり、樂あるものに苦あり。造化は偏頗にして偏頗にあらず、私

にして無私なり。差別の底に無差別あり。不平等の懷に平等あり。然り、造化の妙機は秘して其最奥にあるなり。人間の最奥なるところ之を人間の空と言ひ、造化の最奥なるところ之を造化の靈と言ふ。造化の最奥！造化の靈！そこに大平等の理あるなり。そこに天地至妙の調和あるなり。人間はいかほぞに卑しく拙なくありとも、天地至妙の調和は之によりて毀損せらるることなきなり。あはれこの至妙の調和より、萬物皆な或一種の聲を放ちつゝあるにあらずや。

形の醜美を見て直ちに其醜美を決するは未だ美を判するの最後にあらず。外極めて醜なるものにして、内極めて美なるものあり。外極めて美にして、内極めて醜なるものあり。醜と美とを判つは必らずしも其形象に關はるにあらざるなり。形骸にあらはれたる醜美を斷ずるは獨り眼眸のみ。眼眸は未だ以て醜美を斷ずる唯一の判官となすべきにあら

す。鼓膜亦た關つて力あるべきものなり。否、否、眼眸も鼓膜も未だ以て眞に醜美を判すべきものにあらざるなり。凡そ形の美は心の美より出づ。形は心の現象のみ。形を知るものは形なり、心を視るものは又た心ならざるべからず。造化は奇しき力を以て、萬物に自からなる聲を發せしむ、之を以て聊かその心を形狀の外にあらはさしむ、之を以てその情を語らしめ、之を以てその意を言はしむ。無絃の大琴懸けて宇宙の中央にあり。萬物の情、萬物の心、悉くこの大琴に觸れざるはなく、悉くこの大琴の音とならざるはなし。情及び心、一々其軌を異にするが如しと雖、要するは琴の音色の異なるが如くに異なるのみにして、宇宙の中心に懸れる大琴の音たるに於ては均しきなり。個々特々の悲苦及び悦樂、要するにこの大琴の一部分のみ。悲しき時は獨り悲しむが如くなれども、然るにあらず、凡てのものゝ悲しむなり、喜ぶ時は獨り喜ぶが如くなれども、然る

るにあらず、凡てのものゝ喜ぶなり。自然は萬物に私情あるを許さず、私情をして大法の外に縦なる運行をなさしむることあるなし。私情の喜ひ故なきの喜なり、私情の悲は故なきの悲なり、彼の大琴に相涉るところなければ、根なき萍の海に漂ふが如きのみ。情及び心、個々特立して而して個々その中心を以て、宇宙の大琴の中心に聯なれり。海も陸も、山も水も、ひとしく我が心の一部分にして、我れも亦た渠の一部分なり。渠も我れも何物かの一部分にして歸するところ即ち一なり。四節の更迭は、少老盛衰の理と果して幾程の差違かあらむ。樹葉の凋落は老衰の末後と如何の異別かあらむ。花笑ふ時に我も笑ひ、花落つる時に我も落つ。實熟する時に我も熟し、實墜つる時に我も墜つ。渠を支配する引力の法は即ち我を支配する引力の法なり。渠を支配する生命の法は即ち我を支配する生命の法なり。渠と我との間に「自然」の前に立ちて甚しき相違ある

ことあし。法は一あり。法に順ふものも亦た一あり。法と法に順ふものとの關係も亦た一あり。情及び心、漠として捕捉すべきやうなき如き情及び心、渠も亦た法の中にあり、渠も亦た法の下にあり。法の重きこと斯の如し。斯に於て、凡ての聲、情及び心の響ある凡ての聲の一致を見る、高きも低きも、濁れるも清めるも、然り此の一致あり、この一致を觀て後に多くの不一致を觀ず、之れ詩人なり。この大平等大無差別を觀じて而して後に多くの不平等と差別とを觀ず、之れ詩人あり。天地を取つて一の美術となすは之を以てなり。あらゆる聲を取つて音樂となすは之を以てなり。詩人の前又は凡ての物、凡ての事、悉く之れ詩なるは之を以てあり。多くの不一致の中の一不一致を取り、多くの不平等の中の一不平等を取り、多くの差別の中の一差別を取り、而して之に懸着するを知つて、彼の大一一致、大平等、大差別に悟入すること能はざるものは未だ以て天地

の大ある詩たるを知らざるものあり。難いかな詩人の業や。

道德を論ずるの書は多し。宗教の名と其の教法を設くるものは多し。然れども道德は未だ人間をして縦又製作せしむる程は低くならざるなり。宗教も亦た人間をして隨意又料理せしむる程は卑しくならざるなり。道德の底は一の道德あり、宗教の底は一の宗教あるは、美術の底に一の美術あると相異なる所なからんか。要するはモラリチーは一あるのみ。政治的又所謂道德なりとするところの者例せば儒教の如きもの未だ以てモラリチーの本然とは言ふべからず。宗派的又所謂道德なりとするところのもの未だ以てモラリチーの本然と言ふべからず。宗教の中の宗教とすべきはその人性人情又感應する所多きもあり。モラリチーも亦た然らんか。美術も亦た然らんか。必竟するは宗教も美術も人心の上と臨める大感化力なるは於ては相異なるところある

なし。然れどもラスキンの言へる如く、美術は道義を圓滿とするの力を有すれども、宗教の如く道義を創作することは能はず。宗教の天啓たるが如く、美術も亦た一種の天啓なり。宗教の高尙なる使命を帯びたる如くに、美術も亦た高尙ある使命を帯べり。ヒューマニターは其の唯一の目的なり。無より有を出す、又あらざる有を取りて之を完ふするものなり。尤も劣等なる動物より尤も高等なる動物を作るにあらず、尤も高等なる動物をして、その高等なる所以を自覺せしめ、その高等なる職分を成就せしむるにあり。宇宙の存在は微妙なる階級の上に立てり。一點之を傷くるあれば必らずその責罰としての不調和あり。之れ即ち調和の中に戦へる不調和の原意^{エレメンツ}ある所以なり。微妙なる階級微妙なる秩序、これありて萬物悉く其の處を安んずるを得るなり。東に吹く風は再び西に吹き來る、氣燥くところに雲自から簇むるなり、雲は雨となり、雨は雲と

なる、是等のものとして宇宙の大調和の爲に動くところの、小不調和は、あらざるはなし。萬物の事皆な空として法のみ獨り實なり、法のみ獨り實として法に違ふところの萬物皆な實なるを得べし。自然は常變にして不變常動にして不動常爲にして無爲、法の眼に於て然り。

宗教完全にして美術も亦た完全ならんか、美術と宗教と相距ること數歩を出でざるなり。然れども宗教にしていつまでも乾燥なる神學的の論據に立籠らんか、美術も亦た己がじまくなる方向に傾かんとするは當然の勢なり。宗教の度と美術の度とは殆ど一種の比例をなせり。一國民の美術は到底その倫理の表象なり。野卑なる國民は卑野なる美術に甘んじ、高尙なる國民は高尙なる美術を求め、勇敢なる國民に勇武の物語出で淫逸なる國民に淫逸なる史乘あり。必竟するに萬物その自からなる聲をなして、而して美術はその聲を具躰にしたるもの、又過ぎさ

れば、形は如何にありとも、その聲の主なる心にして卑野なれば美術も卑野ならざらんと欲して得べからざるは至當の理なり。宇宙の中心に無絃の大琴あり、すべての詩人はその傍にありて、己が代表する國民の爲に己が成育せられたる社會の爲に、百種千態の音を成すものなり。ヒューマニチーの各種の變狀は之によりて發露せらる。眞實にして虚飾なき人生の説明者はこの琴絃の下にありて、明々地にその至情を吐く、その聲の悲しき、その聲の樂しき、一々深く人心の奥を貫ぬけり。詩人は己れの爲に生くるにあらず、己が圍まれるミステリーの爲めに生れたるなり、その聲は己れの聲にあらず、己れを圍める小天地の聲なり、渠は誘惑にも人に先んじ、迷路にも人に後るゝなし、渠は無言にして常に語り無爲にして常に爲せり、渠を圍める小天地は悲をも悦をも、彼を通じて發露せざるとなし、渠は神聖なる蓄音器なり、萬物自然の聲、渠は蓄へ

られて而して渠が爲に世に啓示せらる。秋の蟲はその悲を詩人に傳へ、空の鳥は其自由を詩人よ告ぐ。牢獄も詩人は之を辭せず、碧空も詩人は之を遠しとせず、天地は一の美術なり、詩人なくんば誰れか能く斯の妙機を聞て之を人間よ語らんか。

情熱

ミルトンは情熱を以て大詩人の一要素としたり。深幽と清楚とを備へたるは少なからず、然れどもまことの情熱を具有するは大詩人にあらざれば期すべからず。サタイアをもユーモアをも適宜に備ふるものは多くあれど、情熱を欲くが故に眞正の詩人たらざるもの擧て數ふべからず。情熱なきサタイアリストの筆は諷刺の半面を完備すれども、人間の實相を刻むこと難し。ポルテアとスウヰットの偉大なるは、その諷

刺の偉大なるに非ずして其情熱の熾烈なるものあればなり。ユートモリ
ストに到りては自ら其趣を異にすれども、之とても亦た隱約の間に情
熱を有するにあらざれば戲言戲語の價直を越ゆること能はざるべし。
然はあれども尤も多く情熱の必要を認むるはトラゼチーに於てあ
るべし。シユレーゲルも悲曲の要素は熱意なりと論じられぬ。熱意、情熱
必竟するに其素たるや一なり。情熱を缺きたる聖淨は自から講壇より
起る乾燥の聲の如く、美術のエボルーションには適ひ難し。情熱を缺き
たる純潔は自から無邪氣ある記載に止りて將た又た詩的の變化を現
し難し。情熱を缺きたる深幽は自からアンニヒレーチーフにして、物に
觸れて響なく、深淵泓澄たる妙趣はあれども、巨瀑空に懸つて、岩石震動
するの詩趣あらず。凡そ美術の壯快を極むるもの、莊嚴を極むるもの、優
美を極むるもの、必らず其の根底に於て情熱を具有せざるべからず。内

に鬱勃するところのものありて、而して外に異彩ある光線を放つべし。
情熱はすべてこのものに奇異なる洗禮を施すものなり。特種の進化を
與ふるものなり。神聖といふ語、純潔といふ語などに、無量の味ある所以
のものは必竟或度までは比較的のものにして、情熱と纏繫するに始ま
りて情熱の最後の洗禮によりて終に殆んど絶對的の奇觀を呈す。
詩人は人類を無差別に批判するものなり。神聖も、純潔も或一定の尺
度を以て測量すべきものにあらず、何處までも活きたる人間として觀
察すべきものなり。時と場所とに限られて、或る宗教の形に拘はり、或る
道義の式に泥みて人生を批判するは詩人の忌むべき事なり。人生の活
相を觀するには極めて平靜なる活眼を以てせざるべからず。寫實は到
底是認せざるべからず、唯だ寫實たるや、自から其の注目するところに
異同あり、或は特更に人間の醜惡なる部分のみを描畫するに止まるも

あり、或は殊更に調子の狂ひたる心の解離に従事するに意を籠むるも
あり、是等は寫實に偏したる弊の漸重したるものにして、人生を利する
ことも覺束なく宇宙の進歩も益するところもあるなし。吾人は寫實を
厭ふものにあらず、然れども卑野なる目的に因つて立てる寫實は好美
のものと言ふべからず。寫實も到底情熱を根底に置かざれば、寫實の爲
に寫實をなすの弊を免れ難し。若し夫れ寫實と理想と兼ね備へたるも
のに至りては情熱なくして如何に其の妙趣に達するを得べけんや。

情熱は虚思の反對なり。情熱は執なり。放にあらず。凡そ情熱のあると
ころには必らず執るところあり、故に大なる詩人には必らず一種の信
仰あり、必らず一種の宗教あり、必らず一種の神學あり、ホーマーに於て
希臘古神の精を見る、シェーキスピアに於て英國中古の信仰を見る、
西行に於て西行の宗教あり、芭蕉に於て芭蕉の宗教あり、唯だ俗眼を以

て之を視ること能はざるは凡ての儀式と凡ての形式とを離れて立て
る宗教なればなり。彼等の宗教的觀念は具體的なるを得ざるも、之を以
て宗教なしと言ふは、宗教の何物たるを知らざる論者の見なり。人類
對する濃厚なる同情は以て宗教の一部分と名づく可からざるか。人類
の爲に沈痛なる批判を下して反省を促がすは以て宗教の一部分と名
づく可からざるか。トラゼチーも以て宗教たるを得べく。コメデーも以て
宗教たるを得べし。然れども誤解すること勿れ、吾人は彼の無暗に宗教
と文學を混同して、その具體的の形式に箝めんとまでに意氣込みたる
主義に左袒するものにあらず。

宗教(余が謂ふ所の)は情熱を興すに就いて疑ひなく一大要素なら
んべあらず。是非と善惡とを辨別するに最大の力を持てる宗教なかつ
せば、寧ろナル・タルなる情熱を得ることあるとも優と聖と美とを備

へたる情熱は之を期すべからず。宗教的本能は人心の最奥を貫きて純乎たる高等進化をすべての觀念に施すものなり。あはれむべき利己の精神によつて偷生する人間を覺醒して、物類相愛の妙理を觀せしめ、人類相互の關係を悟らしむるもの宗教の力にあらずして何ぞや。茲に宗教あり、而して後に高尚なる情熱あり、宗教的本能を離れざる情熱が美術の上に異妙のエポルーションを與ふるの力豈輕んずべけんや。

いかに深遠なる哲理を含めりとも情熱なきの詩は活きたる美術を成し難し。いかに技の上は情巧を極むるものと雖、若し情熱を飲けるものあれば丹青の妙趣を盡せるものと云ふべからず。美術に餘情あるは、その作者に裡面の活氣あればなり。餘情は徒爾に得らるべきものならず、作者の情熱が自からに湛積するところに於て餘情の源泉を存す。單純なる摸倣者が人を動かすこと能はざるは之を以てなり。大なる創作

は大なる情熱に伴ふものなり。創作と摸倣、必竟するに情熱の有無を以て判すべし。然り丹青家が無意味なる造化の摸倣を以て事とし、只管に虚譚をのみ心とするは抑も情熱を解せざるの過ちなり。

顧みて明治の作家を屈ふるに、眞に情熱の趣を具ふるもの果して之を求め得べきや。露伴に於て多少は之を見る、然れども彼の情熱は彼の信仰(宗教?)によりて幾分か常に冷却せられつゝあるなり。彼は情熱を餘りある程に持ちながら、一種の寂滅的思想を以て之を滅毀しつゝあるなり。彼がトラセサーの大作を成さるは他にも原因あるべけれど、主として此理あればなるべし。紅葉の情熱は宗教と共に歩まず常に實際と相追隨するものなり。故に彼は世相に對する濃厚なる同情を有する。雖、其の著作の何とやら技の妙に偏して、想の靈に及ばざるは、擧る情熱の眞ならざるに因するにあらずとせんや。美妙に於ては殆情熱と

名くべきものあるを認めず、叙事家としては知らず、寫實家としての彼の技倆は紅葉に及ぶべからず。湖處子を崇拜する人々にして荐りに彼の純潔を言ふ者あるは好し、然れども余は彼の純潔が情熱の洗禮を受けたるものにあらざるを信するが故に、美しき純潔なりと言ふを許さず。嵯峨のやにおもしろき情熱あるは實なり、然れども彼の情熱は寧ろ田舎法師の情熱にして大詩人の情熱を離るゝと遠しと言ふべし。頃日古藤庵の悲曲續出するや、讀者孰れも何となく奇異の觀をなすと覺ゆ、要するに古藤庵の情熱自から從來の作者に異るところあればなるべし。悲曲としての價値は兎も角も吾人は其の情熱を以て多く得難きものと認めざるを得ず。齋藤綠雨におもしろき情熱あるは彼の小説を一見しても看破し得るところなれど、憾むらくはその情熱の素たる自から卑野なるを免かれず、彼の如く諷刺の舌を有する作者にして彼の如

く野卑の情熱をもてるは惜しむべき至りなり、彼をして一年間も露伴の書齋に籠もらしめばやと外目には心配せらるゝなり。今日の作家が病はその情熱の缺乏に基づくところ多く、人間觀に嚴肅と眞實とを今日の作家に見る能はざるもの職として之に因せずんばならず、好愛すべきシンプリーチャーと愛憐すべきデリケーシーとを見る能はざるも職として之に因せずんばならず。若し日本の固有の宗教を解剖して情熱と相關するところを發見するを得ば文學史上に愉快なる研究なるべけれども、之れ余が今日の業にあらず聊か記して識者に問ふのみ。

國民と思想

思想上の三勢力

一國民の心性上の活動を支配する者三あり、曰く過去の勢力、曰く創

造○的○勢○力○、曰○く○交○通○の○勢○力○。

今日の我國民が思想上に於ける地位を詳らかにせんとせば、少なくとも右の三勢力に訴へ而して後明らかに、其關係を察せざる可からず。「過去」は無言なれども能く「現在」の上に號令の權を握れり。歴史は意味なきペーザの堆積にあらず、幾百世の國民は其が上に心血を印して去れり。骨は朽つべし、肉は爛るべし、然れども人間の心血が捺印したる跡は之を抹すべからず。秋果熟すれば即ち落つ、落つるは偶然にして偶然にあらず、春日光暖かにして、百花妍を競ふ、之も亦偶然にあらず、自然は意味なきに似て大なる意味を有せり、一國民の消長窮達を言ふ時に於て、吾人は深く此理を感せずんばあらず。引力によりて相繋纏する物質の力、自由を以て獨自卓犖たる精神の力、この二者が相率ひ、相争ひ、相呼び、相結びて、幾千幾百年の間、一の因より一の果に、一の果より他の因に、轉

々化し來りたる跡、豈に一朝一夕に動かし去るべけんや。

然れ共「過去」は常に死に行く者なり、而して「現在」は恒に生き來るものなり。「過去」は運命之を抱きて幽暗なる無明に投じ、「現在」は暫らく紅顏の少年となりて、希望の袂に縋る。一は死て、一は生く、この生々死々の際一國民は時代の車に乗りて無盡無絶の長途を輪轉す。

何れの時代にも、思想の競争あり、「過去」は現在と戦ひ、古代は近世と争ふ、老ひたる者は古を慕ひ、少きものは今を喜ぶ。思想の世界は限りなき四本柱なり。梅谷も爰にて其運命を終りたり、境川も爰にて其運命を定めたり、凡そ爰に登り來るもの必らず又た爰を去らざる可からず。この世界には永久の桂冠あると共、永久の義罰あり。この世界には曾つて沈靜あることなく、時として運動を示さざるなく、日として代謝を告げざるはなし。主觀的に之を見る時は、此の世界は一種の自動機關なり、自

ら死し、自ら生き、而して別に自ら其の永久の運命を支配しつゝあるものなり。

一國民に心性上の活動あるは、自由黨あるが故にあらず、改進黨あるが故にあらず、彼等は劇場に演技する優人なれども、別に書冊の裡に隠れて、彼等の爲に臺帳を制する作者あるなり。偉大なる國民には必らず偉大なる思想あり。偉大なる思想は一投手一舉足の間に發生すべきにあらず、寧んぞ知らん、一國民の耐久[○]的[○]修養[○]の力[○]なるものを俟つにあらざれば、鬱鬱たる大樹の如き思想は到底期すべからざるを。

過去の勢力は之を輕んずべからず、然れども徒らよ過去の勢力に頑迷して、乾枯せる歴史の稿木に夢酔するは豈に國民として、有爲の好徴とすべけんや。創造的勢力は何れの時代にありても之を缺く可からず。國民の生氣は、その創造[○]的[○]勢力[○]によつてトするを得べし。尤も多く保守

的なるとき、尤も多く固形的なる時、國民は自然に墳墓を眺めて進みつゝあるなり、創造的勢力は、潮水を動かして、前進せしむるもの、之なくては思想豈に圓滑の流動あらんや、之なくては國民豈に進歩的生氣あらんや。

創造的勢力と馬を駢べて、相馳驅するものあり、之を交通の勢力とす。今や、思想に對する世界は日一日より狭くなり行かんとす、東より西に動く潮あり、西より東に流る潮あり、潮水は天然なり、人工を以て之を支へんとするは癡人の夢に類するものなり。東西南北は、思想の側^{ナイズ}のみ、思想の城郭にあらざるなり。思想の最極は圓環なり。叨りに東洋の思想に執着するも愚なり、叨りに西洋思想に心酔するも癡なり、奔流急湍に舟を行るは難し、然れども舟師は能く富士川を下りて、船客の心を安ふす、富士川を下るは難し、然れどもその尤も難きは東西の二大潮が狂湧

猛○瀉○し○て○相○撞○突○す○る○の○際○に○あ○り○此○際○に○於○て○能○く○過○去○の○勢○力○を○無○み○せ○
ず○創○造○的○勢○力○と○交○通○の○勢○力○と○を○鐵○鞭○の○下○に○驅○使○す○る○も○の○あ○ら○は○吾○人○
は○之○を○國○民○が○尤○も○感○謝○す○べ○き○國○民○的○思○想○家○な○り○と○言○は○ん○と○欲○す○。

今の思想界に於ける創造的勢力

つらく、今の思想界を見廻せば、創造的勢力は未だ其の絃を張つて
箭を交ふに至らず、却つて過去の勢力と外來の勢力とが、勢を較して陣
前馬頻りに嘶くの聲を聞く、戰士の意氣甚だ昂揚して、而して民衆は就
く所を失へるが如き觀なきにあらず。

見よ詩歌の思想界を嘲るものは、その餘りに狹陋にして硬骨なきを
笑ふにあらずや、見よ政治を談するものは、空しく論議的の虚影を追隨
して停まるどころを知らざるにあらずや、見よ、デモクラシーは宿昔の
長夜を攪破せんとのみ悶き、アリストクラシーは急潮の道前を妨歇せ

んとのみ噪ぐあらずや、斯の如き事たる素より今の思想界の必當の
運命たるべしと雖、心あるもの陰に前途の濃雲を憂ふるは又た是非も
あき事共かな、今の思想界は實に斯の如し、徒らよ人間の手を以て造化
の力を奪はんとする勿れ、進むべき潮水は遠慮なく進むべし、退くべき
潮水は願盼なく退くべし、直ちに馳せ直ちに奔り、早晚大に相撞着する
ことあるを期すべし、知らずや斯かる撞着の真中より新たに生氣勃々
たる創造的勢力の醸生し來るべき理あるを。

姉と妹

某の村に某の家あり、三千年の系圖ありと誇稱す。この家近き頃まで
は、全村の舊家として勢威赫々として犯すべからざるものありて存せ
り。然れども是れ山間の一小村にして四圍層巒を以て繞らし、自然に他
村と相隔絶したるの致せしのみ、今を距ること三十年、一度び他村との

交通を開きてより、忽ち衰廢して前日の強盛は夢の如く泡の如く、再び回へすべからざるものとなりぬ。この家に二個の娘子あり、姉は幼なきより隣村の某家に養はれて人と成るまで家に歸らず、渠の養はれし家は實貨充實を理する事一々其機又投せざるなし、之を以て彼の芳紀正に熟するや、豊頬秀眉一目人を幻するの態あり、或時人に伴はれて其の實家に歸り、その妹を見しに風姿は聊も毀損するところなけれど、自から瘦弱にし顔色も光澤を缺けり。姉は頻りに己れ的美貌を以て妹に誇負するところあらんとす、妹即ち曰く、爾は躰健かに美形なりと雖、他家に寓して人となれり、我は躰弱く形又醜くしと雖、祖先の家を守りて暫らくも爰を離れず、誇るべきところ我にあり、何ぞ爾の下にあらんやと。

姉の頭にはデモクラシー(共和制)と云へる銀簪燦然たり、インヂピチ

ユアリズム(個人制)といへる花釵きらめけり、クリスタンモラリチーも亦た飾られたり、眞に之れ絶世の美人なり而して妹の頭には祖先の血によりて成りたる毛髮の外何の有るなし、妹の形は悄然たり、姉の面は嬌妖たり、妹の未來は悲觀的なり、姉の將來は希望的なり、姉を娶らんか、妹を招かんか、國民よ少しく省みよ、爾の中に爾の生氣あらば、爾の中に爾の希望あらば、爾の中に爾の精神あらば、安くんぞ此の婚嫁によつて爾の大事を決せんとするを要せむ、この二娘子の一を娶らざるべからずと信する勿れ、止むなくんば多妻主義となりて、この二娘を合せ娶れよ、汝はこの婚嫁によりて爾の精神を失迷せしむべからず、然り、爾に大なる元氣(Genius)の存するあり、一夫一妻となるも、一夫多妻となるも、爾の元氣に於て若し損するなければ、爾は希望ある國民なり。

國民の一致的活動

凡そ一國民として缺く可からざるものは、其の一致的活動なり。活動、われは之を心性の上に於て云ふ政事的活動の如きは我が關り知る所にあらざればなり。凡そ心性の活動あらずして外部の活動あるはあらず、思想先づ動きて動作生ず、ルーッあり、ポルテールあり、而して後に佛國の革命あり。國民の鞏固なる勢力は、必らず一致したる心性の活動の上に宿るものなり。此點より觀察すれば、國民の生命を證するもの實に其制度の舞臺に於て能く國民を一致せしむるあると否とに存せり。何を以て國民に心性上の結合を與へん。如何なる主義を以て此の目的に適ひたるものとせん。如何なる信條を以て此の目的に合ひたるものとせん。吾人は多言を須ひずして知る、尤も多く彼等を教ふるもの、尤も多く最多數の幸福を圖るもの、尤も多くヒューマニチーを發育するもの、尤も多く人間の運命を示すもの、即ち此目的に適合する事尤も多き

者なるを、斯の如く余はインヤピシユアリズムの信者なり、デモクラシーの敬愛者なり。然れども、

國民の元氣

國民の元氣は一朝一夕に於て轉移すべき者にあらず。其の源泉は隠れて深山幽谷の中に有り、之を索むれば更に深く地層の下にあり、砥の如き山之を穿つ可からず、安くんぞ國民の元氣を攫取して之を轉移することを得んや。思想あり、思想の思想あり、而して又た思想の思想を支配しつべきものあり、一國民は必らず國民と成すべき丈の精神を有すべきなり、之に加ふるに藪醫術を以てし、之を率ふるに輕業師の理論を以てするとも、國民は頑として之に従ふべからざるなり。渠を圍める自然は渠に與ふるに天然の性情を以てし、渠に賦するに、特異の性格を以てす、是等の性情、是等の性格は幾千年の間その國民の活動の泉源たり

しなり、その國民の精神の満足たりしなり、國民も亦た一個の活人間なり、その中に意志あり、その中に自由を求むるの念あり、國家てふ制限の中に在て其の意志の獨立を保つべき傾向を有せずんば非ず、以太利は如何に斧鉞を加へて盛衰興亡の運命を悟らしむるも其の以太利たるは依然として同じ、獨逸も亦た斯の如し、佛蘭西も亦た斯の如し、國民の元氣の存する處に其の豫定の運命あり、死すべきか、生くべきか、嗚呼、國民も亦た無常の風を免れじ、達士世を觀する時宜しく先づ命運の歸するところを鑑むべし、若し我が國民にして、果して秋天霜滿ちて樹葉、黃落の曉にありとせんか、須らく男兒の如く運命を迎ふべし、然り、須らく男兒の如く死すべし、國民も亦た其の天職あるなり、其の威嚴あるなり、其の死後の名あるなり、其の生前の氣節あるなり、之を破らす之を折らす而して能く生存競争の國際的關係を全ふし得るの道ありや、否や。

デモクラシー(共和制)を以て、我國民に適用し、根本の改革をなさんとするが如きは極て雄壯なる思想上の大事業なり、吾人は其の成功と不成功とを論らはず、唯だ世人が如何に冷淡に此の題目を看過するかを怪訝しつゝある者なり、吾人は寧ろ進歩的思想に與するものなり、然りと雖、進歩も自然の順序を履まざる可からず、進歩は轉化と異なれり、若し進歩の一語の裡に極めて危険なる分子を含めることを知らば、世の思想家たる者何ぞ相戒めて、如何に眞正の進歩を得べきやを講究せざる。國民のデニスは退守と共に退かず、進歩と共に進まず、その根本の生命と共に深く且つ牢き基礎を有せり、進歩も若し此れに協はざるものならば進歩にあらず、退守も若し此れに合ざるものならば退守にあらず。

地平線的思想

政事の論議に従事し一代の時流を矯正して民心の歸向を明らかにする思想家、素より偏見僻説を頑守し、衆を以て天下を脅かす的の所謂政事家なるものに比較すべきにあらず。然れども其の説くところ概ね卑近にして、俚耳に入り易きの故を以て人之を俗物と稱す。吾人は、今斯の如き俗物の感化が、今の米國を造り、今の所謂文明國なるものを造るに於て大なる力ありし事を信する者なり。凡そ適切なる感化を民衆に施こして、少歲月の中に大なる改革を成就すること、多くは謂ふ所の俗物なるものゝ力にあり、マコーレーも或意味に於ては俗物なり、エモルソンも或意味に於ては俗物なり、彼等は實に俗物なりしが故に、グレイトなりしなり。教養は素と自然を尊びて、眞朴を主とするものなり、古より大人君子の成せしところ蓋し之に過ぐるなきなり、平坦なる眞理は遂

に天下に勝つべし、此意味に於て吾人は所謂俗物なるものを崇拜するの心あり。然れども、爰に記憶せざるべからざることあり、世間幾多の平坦なる眞理を唱ふるものゝ中には、平坦を名として濫りに他の平坦ならざるものを罵り、自から謂へらく平坦なるものにあらざれば眞理にあらざると斯の如き即ち眞理を見るの眼にあらざして平坦を見るの眼なり。

思想界には地平線的思想と稱すべき者あり、常に人世の境域にのみ注ぎ、社界を改良すと曰ひ國家の福利を増すと曰ひ、民衆の意向を率ゆると曰ひ、極て尨雜なる目的と希望の中に働らきつゝあり、國民は尤も多く此種の思想家を要す、凡そ此種の思想家なき所には何の活動もなく何の生命もなし、然れども記憶せよ、國民は此種の思想家のみを以て甘んずべきにあらざるを、眞正のカルチコーアを國民に與ふるが爲には、地

平線的思想の外に更に一物の要すべきあり。

高踏的思想

吾人は之を高踏的思想と呼ぶ、數週前に民友先生が言はれし高踏派といふ文字と其意味を同ふするや否やを知らず、吾人は實に地平線的思想の重んずべきを知ると雖所謂高踏的思想なるものゝ一日も國民に缺くべからざるを信するものなり。ヒューマンチーを人間に傳ふるは獨り地平線的思想の任にあらず、道德は到底固形の善惡論にあらずれば、プラト一の眞善美もミルトンの虚想も、人間をして正當に人間たる位地に進ましむるに浩大なる裨益あるとを信するなり。ヒューマンチーは社會的義務の爲めにのみ存するにあらず、人間の性質は倫理道德の拘束によりてのみ建設すべきものにあらず、純美を尋ね、純理を探る、世の詩人たり、學者たる者、優に地平線的思想家の預り知らざる所に

於て人類の大目的を成就しつゝあるにあらずや。

何をか國民的思想と謂ふ

必ずしも國民といふ題目を以て詩歌の材とするを國民的思想といふにあらざるなり。マルセーユの歌に對して製りたる獨逸祖國歌は非常の賞賛を得て一篇の短歌能く末代の名を存せしと聞く、然れども是れ賞賛のみ、喝采のみ、一の國民の私に表せし同情のみ、未だ以て眞正の詩歌界に於ける月桂冠とは云ふべからざるなり。吾人は「早稻田文學」と共に少くとも國民的思想を得んとを希望すること切なりと雖、世の詩歌の題目を無理遣りに國民的問題に限らんとする輩に向ひては聊か不同意を唱へざる可からず、國民の友會つて之を斯題目として詩人に勧めし事あるを記憶す、寔に格好なる新題目なり。彼の記者の常々斯般の事に爛眼なるは吾人の私に畏敬する所なれど、世には大早計にも

之を以て詩人の唯一の題目なる可しと心得て、叨りに所謂高踏的思想なるものを攻撃せんとする傾きあるは豈に歎息すべき至りならずや。詩人は一國民の私有にあらず、人類全躰の寶匣なり、彼をして一國民の爲に歌はしめんとするの餘りに、彼が全世界の爲に齎らし來りたる使命を傷らしめんとするは、吾人其の是なるを知らず。

然りと雖詩人も亦た故國に對する高妙の觀念なきにあらず、邦國の區劃は彼に於て左までの事にはあるまじきが、その天賦の氣稟に於て少くともその國民を代表する所なき能はず。之を以てバイロンは如何にその故國を罵ることも、英國の一民たるに於ては終始變るところなく深く之を其の著作の上に印せり。之を以てレッシンクは佛國の思想がライン河を涉りて縦に其の郷國の思想を横領するを惡みて大に國民の夢を醒したり。斯く詩人も亦た其の郷土の愛國者たるは、抜くべから

ざる天稟の存するあればなるべし。

詩人豈に國民の爲にのみ産れんや、詩人豈に所謂國民的なる狭少なる偏見の中にのみ限られんや、然れども事實に於て詩人も亦た愛國家なり、詩人も亦國民の中に生くるものなり。那翁の侵略に遭ひて國亡び家破れんとするに當て從容として、那翁の玉座に近づき、彼をして言ふ可からざる敬畏の念を抱かしめたるギョーテが、戰陣に臨みて雜兵の一人となり、戸を原頭に曝らさるの故を以て國民的ならずと罵るものあらば、吾人は其の愚を笑はずんばあらざるなり。

創造的勢力の淵源

吾人は再び曰ふ、今日の思想界に缺乏するところは創造的勢力なりと。摸倣卑しき摸倣之れ國民の尤も悲しむべき徵候なり。我は英國文學を唱道すと宣言し、我は獨逸文學を唱道すと宣言し、我は佛國文學を唱道

す。と宣言す、その外に、又た、我は英國思想を守ると曰ひ、我は米國思想を傳ふと曰ひ、我は何、我は何と、各々便利の思想に據つて國民を率ひんとす。而して又た、少しく禪道を謂ふものあらば、即ち固陋なりと罵り、少しく元祿文學を唱ふるものあらば、即ち苟且の復古的傾向なりと曰ふ。嗚呼、不幸なるは今の國民かな。彼等は洋上を渡り來りたる思想にあらざれば、一顧の價なしと信ずるの止むべからざるものあるか。彼等は摸倣の渦卷に投げられて、何時まで斯くてあらんとする。今日の思想界達士を俟つこと久し、何ぞ奮然として起り、十九世紀の世界に立つて恥づるなき創造的勢力を此の國民の上に打建てざる。復古爾も亦た頼むべからず。消化爾も亦た頼むべからず。誰か能く剛強なる東洋趣味の上に、眞珠の如き西洋的思想を調和し得るものぞ、出でよ。詩人、出でよ。眞に國民的なる思想家。外來の勢力と、過去の勢力とは、今日に於て既に多きに過ぐるを見るなり。缺くところのものは創造的勢力。

熱意

眞贋の隣に熱意なる者あり。人性の中に若し熱意なる原素を取去らば、詩人といふ職業は今日の榮譽を荷ふこと能はざるべし。すべての情感の底に熱意あり。すべての事業の底に熱意あり。凡ての愛人の底に熱意あり。若しヒューマニチーの中に熱意なるもの無かりせば、恐らく人間は歴史なき他の四足動物の如くなりしなるべし。

労働と休眠は物質的人間の大法なり。然れども熱意は眠るべき時に人を醒ますなり。快樂と安逸は人間の必然の希望なり。然れども熱意は快樂と安逸とを放棄して苦痛に進入せしむることあり。生は人の欲する所、死は人の恐るゝ所、然るに熱意は人をして生を捐て死を甘受する

事あらしむ。人間の事恒に己を繞りて成れり。己を去つて人間の活動ない。然るを熱意は往々にして己を離れ、身を輕んじて他の爲に犠牲とならしむる事あり。愛國家の心靈を鼓舞して、天下蒼生の爲に、赫々たる功業を奏せしむるものもこの熱意なり。忠臣君の爲に死し、孝子親の爲に苦しむも、この熱意あればなり。戀人の相想も、讐仇の怨惡も、その原素に於ては即ち一なり。人間を高ふするもの人間を卑ふするものも、義人を起すものも、盜兒を生ずるものも、その原素に於てはその熱意の外あるとなし。

熱意とは何ぞや。感情の激甚に外ならざるなり。感情の中の感情たるに外ならざるなり。且つ湧き且つ静まり、且つ燃ゆ且つ消ふる感情の、一定の事物の上に接續して、連鎖の如き現象を呈する者即ち熱意なり。人間は道義的生命の中心として愛を有つと共に、感情的生命の中心とし

て熱意を有つなり。熱意は凡ての事業に結局を與ふる者なり。痴情の熱意には、痴情の結局を見るの意あり。節義の熱意には、節義の結局を見るの意あり。熱意は常に結局を睨んで立てり。熱意の終るところは結局にあり。

人間の五官は、靈魂と自然との中間又立てる交渉器なり。靈魂をして自然を制せしむる是なり、而して人間の靈魂をして全く自然を離れて獨立せしめざる者も亦た是なり。靈魂の一侧は常々此の交渉器を通じて、自然と相對峙す、而して靈魂の他の一侧は他の方面より想像の眼を假りて、自然の向ふを見るなり、自然を超て、自然以外の物を視るなり。人に想像あるは人に思求あるを示すものなり。人に思求あるは、人に熱意あるを示すものなり。熱意は冷淡と相反す。冷淡は人を閑殺し、熱意は人を活動的ならしむ。冷淡は思求なき時の心靈の有様に於て、人生の意味

少なき場合を指すなり。幸福なる生涯には、熱意なる者少なし。熱意は不幸の友なり。熱意は悲哀の隣なり。幽澤、邃谷の中、濃密なる雲霧を屯せしむ。平地には斯の如き事あらず。國亂れて忠臣興るなり。家破れて英兒現はるゝなり。遂げ難き相思益々戀を激發し、成し難きの事業愈々志氣を奮勵す。不幸の觀念は何物をか捉へんとして捉ふること能はざるより生ずるなり。此の觀念の存在する限は、心靈の平衡を失ひたる者にし。て、熱意なる者は蓋し此の平衡を回復せんが爲に存するなり。磁石に消極、積極の二質あり、この二質が平均せざる限は、引力といふ不可思議の力を此世より絶つこと能はざるなり。斯の如く人間も亦た心靈の平衡を回復せざる限りは、熱意といふ不可思議の力を絶つこと能はざるなり。熱意は力なり。必らず到着せんとするところを指せる、一種の引力なり。この引力は人をして適ま偉大なる人物とならしめ、適ま醜惡なる行

爲をなさしめ、或は善或は惡、或は聖愛、或は痴情、等の名を着たる百般の光景を現出して、人生を變幻極りなきドラマたらしむ。

人は夢の如き事實を追隨する事あり。事實の如き夢を追隨する事あり。虚心を以て觀る時は夢にして、而して熱意を以て觀る時は事實の如く視らるゝ者あり。熱意を以て觀る時は夢にして、虚心を以て觀る時は事實の如く視らるゝ者あり。虚心は想像を容れず。熱意は想像の好友なればなり。虚心は徹頭徹尾、事實の中に注ぎ、熱意は往々にして、想像の跡を追ふて、事實の域を脱す。虚心は意味ある者を意味なくし、熱意は意味なき者に意味を加ふ。虚心は波瀾を迎へ、熱意は風濤を生ず。諒解力は常に道理と伴はず。道理は能く人を抑制し、諒解力は能く人を興發す。夢と事實とは、其物の夢と事實とにあらず。之を夢とする者と之を事實とする者との別あるのみ。預言者の先見は夢の如くにして、而して事實なる

事あり、商賣人の蓄財は事實の如くにして而して夢なる事あり。熱意は凡ての事に洗禮を施す者なり。熱意なきは活火なきなり。活火なきは意味なきなり。

意味多き生涯と、意味少なき生涯とは、プロピテンスの手に握れる斧の撃ち方の相異より生ずる差別なり、人間の額上に刻める皺波は即ち意味多きと意味少なきとを見分けべき字引の一種なり。

人生を解釋せんとする者は詩人なり、而して詩人の尤も留意するところは意味の一字にあり。熱意は即ち意味なり。全く熱意なくして意味ある者あらず。意味を生ずるものは熱意なり。人生に意味あるは即ち熱意あるが故なり。熱意あるが故に執着あり。執着あるが故に、困難あり、又た不幸あり。悲哀なる出し物に對して、悲哀の同感を生ずるは彼方の熱意が此方の熱意を誘發すればなり。熱意はトラセデーの要素にして、而

して、悲哀の物に對する快感の要素の一なり、人生に熱意あるは即ち戯曲にトラセデーある所以なり。熱意之れ詩人が討究すべき一題目ならずや。

頑執妄排の弊

宇宙を觀察するの途二あり、一は宇宙を「死躰」として觀るにあり、他は宇宙を「生躰」として觀るにあり、人生を觀察するの途二あり、一は人生を今世に限られたるものとして觀るにあり、他は人世を未來に亘るものとして觀るにあり。爰に於て吾人は知る、人間世に處するの途は現在に希望を置くと未來に希望を置くとの二岐に分るゝあるのみ。更に去つて歴史を觀るに、盛衰興亡の端多く、一去一來の跡空しきも、之を要するに、歴史の中心潮は、未來の希望を現實に適用するにあるのみ。悠々たる

天と遡々たる地の間に孰れの所にか墳墓なる者あらんや其の之あるは人間の自から造れる者なり國民の自から造れる者なり印度自から其墳墓に埋もれたり羅馬自ら其墳墓に沈みたり彼等は去れり然れども彼等を葬りし墳墓は彼等と共に其影を徹したり天下孰れの處にか墳墓なる者あらんや世界は墳墓に赴くにあらず頭を擧げて蛇行するが如き此世界は遂に生命に達すべき者なり記憶渠唯だ記憶のみ過去渠唯だ過去ののみ未來には權あり希望には命あり

過去現在未來は全宇宙の所有物にして人間の私有にあらず時間と空間は人間を或る立場に繋げども人間は過現未の中心に立つて動く者にあらず然りと雖宇宙の人間に對するは蛇の蛙に於けるが如くなるにあらず人間も亦た宇宙の一部なり人間も亦た遠心求心の二引力の持主なり又た二引力の臣僕なり魚市に喧囂せる小民彼も亦た宇

宙に對する運命に洩れざるなり彼も亦た彼の部分を以て宇宙を支配しつゝあるものなりこの觀を以てすれば王侯將相と彼との間に何の徑庭あらんや

宇宙に精神あるが如く人間にも亦た精神あるなり而して人間個々の希望は宇宙の精神に合するにあり人間世界の最後の希望は全く宇宙の精神に合躰するにあり唯理論唯心論もしくは又た唯物論彼等何ものぞもしくは又た凡神教彼等何ものぞ彼等の一を假ることなくんば彼等の一に僻することなくんば遂に人間の希望を達すること能はずとするか何が故に唯心論を惡しとするか何が故に凡神論を惡しとするか何が故に唯物論を惡しとするか又た何が故に彼等を善しとするか空々漠々たる辯論家よ民友子大喝して曰くべベルの高塔を築かんとするは誰ぞと

彼の唯物論彼の唯心論彼の凡神論彼等は各々其使命を帯びて來れり而して彼等は各其使命の幾分を遂げたり而して彼等は各々其誤謬を残したり看よ人間の歴史は恒に善き事をなして恒に惡しき事を爲すにあらざるや恒に眞理に近づき恒に眞理に遠かるにあらざるや恒に進歩して恒に退歩するにあらざるや然れども記憶せよ宇宙の精神と人間の精神とは恒に進歩にして恒に退歩なる中にありて相接近しつゝあるにわらずや唯心論を以て唯物論を罵るは誰ぞ唯物論を以て唯心論を罵るは誰ぞ彼にも粹あり此にも粹あり彼にも糠あり此にも糠あり妄に此の粹を以て彼の粹を撃たんとするは誰ぞ縦に此の糠を以て彼の糠を排せんとするは誰ぞ民友子大喝して曰く砂丘の上にべベルの高塔を築かんとするは誰ぞと

「造化は終古依然たり而して終古鮮新なり」とは善く言はれたるかな。

宇宙は實に其中心に於て一定の方向あるのみ其外面に於ける進歩と退歩とは常久に鮮新なる状態を呈するなり預言者英雄詩人彼等何すれど宇宙以外の新物を貪らんや彼等も亦た自からの墳墓を造るものなり百年千年萬年あやしきはTimeなり怖るべきはTimeなり墳墓も亦たTimeの爲に他の墳墓に投げらるゝなり墳墓すら其迹を留めず曷んど預言者英雄詩人を留めんや營々たる街頭の商兒役々たるレボレットリーの化學者紛々たる新聞屋の小僧彼等も亦た彼の預言者と彼の英雄と彼の詩人と其歸着する運命を同ふするなり腐朽わが右にあり「死淵」わが左にあり劍を揮ふもの誰ぞ筆を弄するもの誰ぞ天を談ずるもの誰ぞ地を説くもの誰ぞ何れに進歩あらむ何れに退歩あらむ然れども讀者よ請ふ汝の謹嚴なる眼を開けよ宇宙の大精神は一定の場所に安住せず造化は終古依然たり然れども讀者よ請ふ汝の靈活なる心

を醒せよ、造化は其中心に於て、宇宙は其中心に於て、必らず何程かの動あるなり。造化彼れ何物ぞ、宇宙の一表現に過ぎざるなり。宇宙既に動あり、造化豈動なからんや。地球の表面は終始依然たり、然れども其の形状は常に變はりつゝあるなり、要は千年の眼を以て、天文臺の觀測をなすにあり、これ其の外形に就きて言ふのみ、宇宙果して死物なるか、將た、又「生躰なるか、吾人が地球と名くる此の一惑星の中に於て此の變動あり、死躰にもせよ、生躰にもせよ、既にこの變動あるなり、何ぞ知らん、人間と稱する此二足動物の上に、激雷の驟かに震ふが如く、諸天群がり落ちて、火焰忽ち起りて、一指を投ずるの暇に於て、この終古依然たる天地は、默示録の約翰が「われ新らしき天と新らしき地を見たり、先の天と先の地は既に過たり、海も亦たあることなし」と言ひたる言葉の空の空にあらざることを實證するの時あらんを。

「信仰個條彼れ何物ぞ、繩墨彼れ何物ぞ、否な彼等も亦た宇宙の精神の大進歩の道程に於て、何等かの必要に需求せられて出でたるものなり、彼等も彼の唯心論の如く、彼の唯物論の如く、彼の凡神論の如く、相當の敬禮を要求するの權利あるものなり、然れども彼等を崇拜し、彼等を保持し、彼等を以て唯一の標準とせんとするは何物ぞ、聖書を把つて、屑籠の中より古布と古紙とを分つが如く、或は彼を取り、或は此を取り、而して我が取る所の者は宇宙の大真理に適へりと妄信し、他の取る所の者は一理の存するなきが如くに誣ゆる者誰ぞ、唯思想界に於ける病毒の本源は存して爰にあるなり、己れの取る所を奉信するは善し、己れの取る所を以て、他の取る所を妄排す、是を思想界の藪醫術と言はずして、何ぞや、夫れ藪醫術とは外科の醫術を言ふなり、而して其の外科たるは、人間の病原を探りて後に其治術を講究するにあらずして、外部に表はれ

たる病象の一部分を見て、直に膏藥を塗するに留まるなり。咄咄醫術は
いかほどに進歩するとも、人世に於て何の功益するところあらんや。信
仰個條彼れ自身は、藪醫術にあらす、繩墨彼自身は藪醫術にあらす、唯心
論も亦た然り、唯物論も亦た然り、然れども個の信仰個條を擁し、個の繩
墨を擁し、個の善惡論を擁し、個の唯心論を擁し、個の唯物論を擁し、之を
以て宇宙を法規する唯一の眞理と迷信する輩の手に於て藪醫術の本
源は存するなり。

内部生命論

人間は到底枯燥したるものにあらす。宇宙は到底無味の者にあらす。
一輪の花も詳に之を察すれば、萬古の思あるべし。造化は常久不變なれ
ども、之に對する人間の心は千々に異なるなり。

造化の不變なり、然れども之に對する人間の心の異なるに因つて造
化も亦た其趣を變ゆるなり。佛教的厭世詩家の觀たる造化は悉く無常
的厭世的なり。基督教的樂天詩家の觀たる造化は悉く有望的樂天的な
り。彼を非とし、此を是とするは余が今日の題目にあらす。夫れ斯の如く
變化なき造化を斯の如く變化ある者とするもの、果して人間の心なり
とせば、吾人豈人間の心を研究することを苟且にして可ならんや。

造化は人間を支配す、然れども人間も亦た造化を支配す、人間の中に
存する自由の精神の造化に默從するを肯せざるなり。造化の權は大なり、
然れども人間の自由も亦た大なり。人間豈に造化に歸合するのみを
以て満足するを得べけんや。然れども造化も亦た宇宙の精神の一發
表なり、神の形の象顯なり、その中に至大至粹の美を籠むることあるは
疑ふべからざる事實なり、之に對して人間の心が自からに畏敬の念を

發し、自からに精神的の經驗を生ずるは豈不當なることならんや、此場合に於て、吾人と雖も聊か萬有的趣味を持たざるにあらず。

人間果して生命を持てる者なりや、生命といふは、この五十年の人生を指して言ふにあらざるなり、謂ふ所の生命の泉源なるものは、果して吾人々類の享有する者なりや、この疑問は人の常に思ひ至るところにして而して人の常に輕んずる所なり、五十年の事を經綸するは到底五十年の事を經綸せざるに若かざるなり、明日あるを知らずして今日の事を計るは到底眞に今日の事を計るものにあらざるなり、五十年の人生の爲に五十年の計を爲すは、如何に其計の大に密に妙に精にあるとも到底其計なきに若かざるなり、二十五年を勞作に費し他の二十五年を逸樂に費やすとせば極めて面白き方寸なるべし、人間の多數は斯の如き夢を見て消光するなり、然れども實際世界は決して斯の如き夢想

を容るゝの餘地を備へず、我が心われに告ぐるに、五十年の人生の外にすべて夢なりといふを以てせば、我は寧ろ勤勞を廢し、事業を廢し、逸樂晏眠を以て殘生を送るべきのみ。

吾人は人間に生命ある事を信する者なり、今日の思想界は佛教思想と耶教思想との間に於ける競争なりと云ふより、寧ろ生命思想と不生命思想との戦争なりと云ふを可とす、吾人が思想界に向つて微力を獻せんと欲することは、耶蘇教の用語を以て佛教の用語を奪はんとするにあらず、耶蘇教の文明(外部)を以て佛教の文明を仆さんとするにあらず、耶蘇教の智識を以て佛教の智識を破らんとするにあらず、吾人は生命思想を以て不生命思想を滅せんとするものなり、彼の用語の如き、彼の文明の如き、彼の學藝の如き、是等外部の物は、自然の淘汰を以て自然の進化を經べきなり、吾人の關する所爰にあらず、生命と不生命之れ即ち

東西思想の大衝突なり。

つらく、明治世界の思想界に於て、新領地を開拓したる耶蘇一派の先輩の事業の跡を尋ねるに、宗教上の言葉にて、謂ふ所の生命の木なるものを人間の心の中に植へ付けたる外に、彼等は何の事業をか成さんや。洋服を着用し高帽子を冠することは思想界の人を勞せずして、自然に之を爲すなり。凡そ外部の文明を補益することは、何ぞ思想界の達士を煩はすことを要せんや。外部の文明は内部の文明の反影なり、而して東西二大文明の要素は、生命を教ふるの宗教あると、生命を教ふる宗教なきとの差異あるのみ。優勝劣敗に由つて起るところ、茲に存せずんばあらざるなり。平民的道德の率先者も、社會改良の先覺者も、政治的自由の唱道者も、誰か斯民に生命を教ふる者ならざらんや。誰れか斯民に明日あるを知らしむる者にあらざらんや。誰か斯民に數々感々として今日

にのみ之れ拘束せらるゝを警醒するものにあらざらんや。宗教として、の宗教彼れ何物ぞや。哲學としての哲學彼れ何物ぞや。宗教を説かざるも、生命を説かば既に立派なる宗教にあらずや。哲學を説せざるも、生命を説せば既に立派なる哲學にあらずや。生命を知らずして信仰を知る者ありや。信仰を知らずして道德を知る者ありや。生命を教ふるの外に、道德なるもの、源泉ありや。凡そ生命を教ふる者は既に功利派にあらざるなり。凡そ生命を傳ふる者は既に曖昧派にあらざるなり。凡そ生命を知るものは既に高蹈派にあらざるなり。詭言流行の今日、世人自から惑ふこと勿らんことを願ふなり。

吾人をして去て文藝上に於ける生命の動機を論せしめよ。

文藝は宗教若くは哲學の如く正面より生命を説くを要せざるなり、又た能はざるなり。文藝は思想と美術とを抱合したる者にして、思想あ

りとも美術なくんば既に文藝にあらず、美術ありとも思想なくんば既に文藝にあらず。華文妙辭のみにては文藝の上乗に達し難く、去りて思想のみにては決して文藝といふこと能はざるなり。此點に於て吾人は非文學黨の非文學見に同意すること能はず。先覺者は知らず、末派のポジチビズムに於て、文學をポジチーブの事業とするの餘りに清教徒の誤謬を繰返さんとするに至らんことを恐るゝなり。

戯文世界の文學は、價值ある思想を含有せし者にあらざると、吾人と雖之を視ざるにあらず、然れども戯文は戯文なり、何を特更に之を以て今の文學を責むるの要あらんや。吾人を以て之を見れば、過去の戯文が華文妙辭にのみ失したるは、華文妙辭の罪にあらずして、文學の中に生命を説くの途を備へざりしが故なり。請ふ少しく徳川氏の美文學に就きて之を言はしめよ。

すべての倫理道德は必らず多少、人間の生命に關係ある者なり。人間の生命に關係多きものは人間を益する事多き者にして、人間の生命に關係少なき者は人間を益する事少なき者なり。徳川氏の時代にあつて、最も人間の生命に近かりしものは儒教道德なりしこと何人も之を疑はざるべし。然れども儒教道德は實際的道德にして、未だ以て全く人間の生命を教へ盡したるものとは言ふべからず。繁雜なる禮法を設け種々なる儀式を備ふるも到底 Formality に陥るを免かれざりしなり。到底貴族的に流るゝを免かれざりしなり。之を要するに其の教ふる處が人間の根本の生命の絃に觸れざりければなり。其時代に於ける所謂美文學なるものを觀察するに至りては、吾人更に其の甚しきを見る。人間の生命の根本を愚弄すること。彼等の如くなるは吾人の常に痛惜する處なり。彼等は儀式的に流れたる儒教道德をさへ備へたるもの稀なり。彼

等の多くは卑下なる人情の寫實家なり。人間の生命なるものは彼等に於ては、諧謔を逞ふすべき目的物たるに過ぎざりしなり。彼等は愛情を描けり。然れども彼等は愛情を盡さざりしなり。彼等の筆に上りたる愛情は肉情的愛情のみなりしなり。肉情よりして戀愛に入るより外には愛情を説くの道なかりしなり。プラトリーの愛情もマンテの愛情もパイルンの愛情も彼等には夢想だもすること能はざりしなり。彼等は忠孝を説けり。然れども彼等の忠孝は寧ろ忠孝の教理あるが故に忠孝あるを説きしのみ、今日の僻論家が救語あるが故に忠孝を説かんとすること大差なきなり。彼等は人間の根本の生命よりして忠孝を説くこと能はざりしなり。彼等は節義を説けり。善惡を説けり。然れども彼等の節義も彼等の善惡も寧ろ人形を并べたるものにして、人間の根本の生命の絃に觸れたる者にあらざるなり。謂ふ所の勸善懲惡なるものも、斯る者が

善なり、斯るものが惡なりと定て、之に對する勸懲を加へんとしたる者にして未だ以て眞正の勸懲なりと云ふ可からず。眞正の勸懲は心の經驗の上に立たざるべからず、即ち内部の生命の上に立たざるべからず。故に内部の生命を認めざる勸懲主義は到底眞正の勸懲なりと云ふべからざるなり。彼等は世道人心を説けり。爲すあるが爲めに文を草すべきを説けり。世を益するが爲めに文を草すべきを説けり。然れども彼等の世道人心主義も到底偏狹なるポッチャピズムの誤謬を免かれざりしなり。未だ根本の生命を知らずして世道人心を益するの正鵠を得るものあらず。要するに彼等の誤謬は人間の根本の生命を認めざりしに因するものなり。讀者よ吾人が五十年の人生に重きを置かずして人間の根本の生命を尋ぬるを責むる勿れ。讀者よ吾人が眼に見ゆる所の事業に心を注がずして人間の根本の生命を暗索するものを重んぜんとす

るを責むる勿れ、讀者よ吾人の中に或は唯心的に傾き或は萬有的に傾むくものあるを責むる勿れ、吾人は人間の根本の生命に重きを置かんとするものなり、而して吾人が不肖を顧みずして、明治文學に微力を獻せんとするは此範圍の中にあることを記憶せられよ。

明治の思想は大革命を経ざるべからず、貴族的思想を打破して、平民的思想を創興せざるべからず、吾人が敬愛する先輩思想家にして既に大に此般の事業に鐵腕を振ひたるものあり、吾人が若少の身分を以て是より進まんとするもの豈に彼等の既に進みたる途に外れんや、吾人豈に人情以外に出でべべの towers を築かんとする者ならんや、若し夫れ人間の根本の生命を尋ねて或は平民的道德を教へ、或は社會的改良を圖る者をしも、べべの towers を砂丘に築くものなりと言ふを得ば、吾人も亦たべべの towers を築かんとする人足の一人たるを甘んせん

のみ。

文藝は論議にあらざること幾度言ふとも同じ事なり、論議の範圍に於て根本の生命を傳へんとするは論議の筆を握れる者の任なり、文藝（純文學と言ふも宜し）の範圍に於て根本の生命を傳へんとするは文藝に従事するものゝ任なり、純文學は論議をせず、故に純文學なるもの無し、と言はゞ誰か其の極端なるを笑はざらんや、論議の範圍に於て、善惡を説くは正面に之を談ずるなり、文藝の範圍に於て善惡を説くは裡面より之を談ずるなり。

人性に上下なく、人情に古今なし、とは觀察論の著者の名言なり、實にや詩人哲學者の言ふところは、人情が自ら筆を執つて萬人の心に描きたるものに外ならざるなり、善と言ひ、惡と言ふも元より道德學上の製作物にあらざると明らかなり、究竟するに善惡正邪の區別は人間の内

部の生命を離れて立つこと能はず、内部の自覺と言ひ内部の經驗と言ひ、一々其名を異にすと雖、要するに根本の生命を指して言ふに外ならざるなり。詩人哲學者の高尙なる事業は、實に此の内部の生命を語るより、外に出づること能はざるなり。内部の生命は千古一様にして、神の外は之を動かすこと能はざるなり。詩人哲學者の爲すところ、豈に神の業を奪ふものならんや、彼等は内部の生命を觀察する者にあらずして、何ぞや、國民之友觀察論參照、然れども彼等が内部の生命を觀察するは沈靜不動なる内部の生命を觀察するにあらざるなり、内部の生命の百般の表顯を觀察の外に彼等が觀察すべき事は之なきなり、即ち人性人情の Various Manifestations を觀察の外には觀察すべき事は之なきなり。觀は何處までも觀なり、然れども此の場合に於ては觀の中に知の意味あるなり、即ち觀の終は知に落つるなり、而して觀の始も亦た知に出るなり、人間の内部の生命を觀察するは、其の百般の表顯を觀察する所以にして、靈知靈覺と觀察との相離れざるは之を以てなり。靈知靈覺なきの觀察が眞正の觀察にあらざること之を以てなり。

夫れヒューマニチー(人性、人情)とは人間の特有性の義なり。詩人哲學者は無論ヒューマニチーの觀察者ならずんばあらず、然れども吾人は恐る、民友子の觀察論の讀者には、或は詩人哲學者を以て單に人性人情の觀察者なりと誤解する者あらんとを、民友子の觀察論を讀みたる人は必らず又た民友子の「インスピレーション」を讀まざるべからず。然らずんば吾人民友子に對する誤解の生せんことを危ぶむなり。詩人哲學者は到底人間の内部の生命を解釋するものたるに外ならざるなり、而して人間の内部の生命なるものは吾人之れを如何に考ふるども、人間の自造的のものあらざること、を信ぜずんばあらずるなり、人間のヒュー

一マニター即ち人性人情なるものが他の動物の固有性と異なる所以の源は即ち爰に存するものなるを信せずんばあらざるなり。生命！此語の中にいかにばかり深奥なる意味を含むよ。宗教の源泉は爰にあり。之なくして教あるはなし。之なくして道あるはなし。之なくして法あるはなし。真理！世上所謂真理なるもの果して何事をか意味する。ソクラテスも靈魂不朽を説かざれば一個の功利論家を出る能はざるなり。孔子も道は邇きにありと説かざれば一個の藪醫者たるに過ぎざりしなり。道は邇きにありと言ひたるもの即ち人間の秘奥の心宮を認めたるものなり。靈魂不朽を説きたるもの即ち生命の源泉は人間の自造的よあらざるを認めたるものなり。内部の生命あらずして天下豈人性人情なる者あらんや。インスピレーションを信するものにあらずして真正の人性人情を知るものあらんや。五十年の人生を以て人性人情を解釋す

べき唯一の舞臺とする論者の誤謬は多言を須ひずして明白なるべし。文藝上にて之を論ずれば所謂寫實派なるものは客觀的に内部の生命を觀察すべきものなり。客觀的に内部の生命の百般の顯象を觀察する者なり。此目的の外に嘉賛すべき寫實派の目的はあらざるなり。世道人心を益するといふ一派の寫實論も此目的を外れたらば何等の功益もあらざるなり。勸善懲惡を目的とする寫實派も此目的を外れたらば何の勸懲もあらざるなり。爲すあるが爲と言ひ世を益するが爲と言ふも真正に此の目的に適はするより外なきなり。所謂理想派なるものは、主觀的に内部の生命を觀察すべきものなり。主觀的に内部の生命の百般の顯象を觀察すべき者なり。いかに高大なる極致を唱ふることもいかに美妙なる理想を歌ふこともこの目的の外に理想の嘉賛すべき目的はあらざるなり。

理想とは何ぞや。理想派とは何ぞや。吾人は此小論文に於て、理想とは何ぞやを説かざるべし。然れども爰に一言せざるべからざること、文藝上に言ふところのアイデアなる者は、形而上學に於て言ふところのアイデアとは、名を同ふして物を異にする者なること之なり。形而上學にてアイデアリスト(唯心論者)といふものは、文藝上に於てアイデアリスト(理想家)といふところの者とは全く別物なり。

文藝上に於て理想派と謂ふところのものは、人間の内部の生命を觀察するの途に於て、極致を事實の上に具躰の形となすものなり。絶對的にアイデアなるものを研究するは形而上學の唯心派なれども、そのアイデアを事實の上に加ふるものは文藝上の理想派なり。ゆゑに文藝上にては殆どアイデアと稱すべきものはあらざるなり。其の之あるは理想家が暫らく人生と人生の事實的顯象を離れて、何物にか冥契する時に

於てあるなり。然れども其は瞬間の冥契なり。若しこの瞬間にして連續したる瞬間ならしめば、詩人は既に詩人たらざるなり。必らず組織的學問を以て研究する哲學者になるなり。詩人豈に斯の如き者ならんや。

瞬間の冥契とは何ぞ、インスピレーション是あり、この瞬間の冥契ある者をインスパイアドされたる詩人とは、ふなり、而して吾人は、眞正なる理想家なる者はこのインスパイアドされたる詩人の外には之なきを信せんとする者なり。インスピレーションを知らざる理想家もあらん。宗教の何たるを確認せざる理想家もあらん。然れども吾人は各種の理想家の中に就きて、斯の如きインスピレーションを受けたる者、以て最醇最粹のもの、と信せんとするなり。インスピレーションとは何ぞ、必らずしも宗教上の意味にて之を言ふにあらざるなり、一の宗教組織としてあらざるもインスピレーションは之あるなり。一の哲學なき

もインスピレーションは之あるあり、必竟するにインスピレーション
とは宇宙の精神即ち神あるものよりして、人間の精神即ち内部の生命
あるものに對する一種の感應に過ぎざるなり、吾人の之を感じるは電
氣の感應を感じるが如きなり、斯の感應あらずして、曷んど純聖なる理
想家あらんや。

この感應は人間の内部の生命を再造する者なり、この感應は人間の
内部の經驗と内部の自覺とを再造する者なり、この感應によりて瞬時
の間、人間の眼光はセンシユアル、ワールドを離るゝなり、吾人が肉を離
れ實を忘れ、言ひたるもの之に外ならざるなり、然れども夜遊病患者
の如く「我」を忘れて立出るものにはあらざるなり、何處までも生命の眼
を以て、超自然のものを観るなり、再造せられたる生命の眼を以て、
再造せられたる、生命の眼を以て、觀る時に、造化萬物何れか極致なき

ものあらんや、然れども其極致は絶対的のアイデアにあらざるなり、何
物にか具體的の形を顯はしたるもの即ち其極致なり、萬有的眼光には
萬有の中に其極致を見るなり、心理的的眼光には人心の上に其極致を見
るなり。

人生に相渉るは何の謂ぞ

織巧細弱なる文學は端なく江湖の嫌厭を招きて異しきまでに反動
の勢力を現はし來りぬ、愛山生が徳川時代の文豪の遺風を襲ひて、史論
と名くる鐵槌を揮ふことになりたるも其の一現象と見るべし、民友社
をして愛山生を起たしめたるも江湖をして愛山生を迎へしめたるも
この反動の勢力の鬱勃したる餘りなるべし、
反動は愛山生を載せて走れり、而して今や愛山生は反動を載せて走

らんとす。彼は史論と名くる鐵槌を以て擊碎すべき目的を擴めて、頻りに純文學の領地を襲はんとす。反動をして反動の勢を縦にせしむるは余も異存なし、唯だ反動を載せて、他の反動を起さしむるまで遠く走らんとするを見る時に、反動より反動に漂ふの運命を我が文學に與ふるを悲しまざる能はず。愛山生は文章即ち事業なる事を認めて頼襄論の冒頭に宣言せり。何が故に事業なりや。愛山生は之を解いて曰く、第一爲す所あるが爲なり。第二世を益するが故なり。第三人世に相渉るが故なりと。

而して彼は又た文章の事業たるを得ざる條件を擧げて曰く、第一空を撃つ劍の如きもの。第二空の空なるもの。第三華辭妙文の人生に相渉らざるもの。而して彼は此冒頭を結ひて曰く、文章は事業なるが故に崇むべし、吾人が頼襄を論ずる即ち渠の事業を論ずるなりと。

大丈夫の一世に立つや必らず一の抱く所なくんばあらず、然れども抱く所のもの必らずしも見るべきの功蹟を建立するにはあらず。建築家の役々として其業に従ふや幾多の歲月を費して後確かに巍乎たる樓閣を起すの算あり。然れども人間の靈魂を建築せんとするの技師に至りては、其費やすどころの勞力は直ちに有形の樓閣となりて、ニコライの高塔の如く衆目を引くべきにあらず。衆目衆耳の聳動することなき事業にして或は大に世界を震ふことあるなり。天下に極めて無言なる者あり、山嶽之なり、然れども彼は絶大の雄辯家なり。若し言の有無を以て辯の有無を争は、凡ての自然は極て惘れむべき啞兒なるべし。然れども常に無言にして常に雄辯なるは自然に加ふるものなきなり。人間に若し自然の如く無言なるものあらば、愛山生一派の論士は其の傍に來りて、爾何ぞ能く言はざると嘲らんか。

人間の爲すところも亦斯の如し。極めて拙劣なる生涯の中に尤も高大なる事業を含むことあり。極めて高大なる事業の中に尤も拙劣なる生涯を抱くことあり。見ることを得る外部は見ることを得ざる内部を語り難し。盲目なる世眼を盲目なる儘に睨ましめて眞摯なる靈劍を空際に撃つ雄士は人間が感謝を拂はずして恩澤を蒙むる神の如し。天下斯の如き英雄あり、爲す所なくして終り、事業らしき事業を遺すことなくして去り、而して自ら能く甘んじ自ら能く信じて、他界に遷るもの、吾人が尤も能く同情を表せざるを得ざるところなり。

吾人は記憶す、人間は戦ふ爲に生れたるを、戦ふは戦ふ爲に戦ふにあらずして戦ふべきものがあるが故に戦ふものなるを、戦ふに劍を以てするあり、筆を以てするあり、戦ふ時は必らず敵を認めて戦ふなり、筆を以てすると劍を以てすると戦ふに於ては相異なるところなし、然れども

敵とするものゝ種類によつて戦ふものゝ戦を異にするは其當なり。戦ふものゝ戦の異なるによつて勝利の趣きも亦た異ならざるを得ず。戦士陣に臨みて敵に勝ち凱歌を唱へて家に歸る時、朋友は祝して勝利と言ひ、批評家は評して事業といふ、事業は尊ぶべし、勝利は尊ぶべし、然れども、高大なる戦士は斯の如く、勝利を携へて歸らざることあり、彼の一生は勝利を目的として戦はず、別に大に企圖するところあり、空を撃ち、虚を狙ひ、空の空なる事業をなして、戦争の中途に何れへか去ることを常とするものあるなり。

斯の如き戦は、文士の好んで戦ふところのものなり。斯の如き文士は斯の如き戦に運命を委ねてあるなり。文士の前にある戦場は、一局部の原野にあらず、廣大なる原野なり。彼は事業を齎らし歸らんとして戦場に赴かず、必死を期し原頭の露となるを覺悟して家を出るなり。斯の如

き戰場に出で斯の如き戦争を爲すは文士をして兵馬の英雄に異ならしむる所以にして、事業の結果に於て大に相異なりたる現象を表はすも之を以てなり。

愛山生が文章即ち事業なりと宣言したるは善し、然れども文章と事業とを都會の家屋の如く相接近したるものゝ如く言ひたるは不可なり。敢て不可といふ、何となれば、聖淨にして犯すべからざる文學の威嚴は、事業といふ俗界の神に近づけられたるを以て損すべければなり、八百萬づの神々の中に、事業といふ神の位地は甚だ高からず、文學といふ女神は或は老嬢オールドミスにて世を送ることあるも、卑野なる神に配することを肯んせざるべければなり。

京山、種彦、馬琴の三文士を論ひて、京山を賞揚せられたるは愛山生なり。其故いかにといふに、馬琴は己れの理想を歌ひて、馬琴の文學を街ひ

たるに過ぎず、種彦は人品商尙にして俗情に疎きところあり、馬琴によりては當時の社會を知るには役に立たず、種彦は平民に縁遠きが故に不可なり、獨り京山に到りては、番頭小僧までも寫實して、残すところなきが故に重んずべきなりと、斯く愛山生は説けり。天下の衆生をして悉く愛山生の如き史論家ならしめば、當時の社會を知るの要を重んじて、京山をも、西鶴をも、最上乘の作家として畏敬するなるべし。天下の衆生をして悉く愛山生の如き平民論者ならしめば、山東家の小説は凡ての他の小説を凌ぐことを得べきこと必せり。

然れども文學は事業を目的とせざるなり、文學は人生に相渉ること、京山の寫實主義は是になるを必須とせざるなり、文學は敵を目掛けて撃ちかゝること、山陽の勤王論の如くなるを必須とせざるなり、最後に文學は必らずしも一人若しくは數百人の敵、見るべきの敵を目掛けて

撃つを要せざるなり、撃といふ字は山陽一流の文士にこそ用われ、愛山の所謂空の空を目掛けて大に撃つ文士に何の用かあらむ。山陽も撃てり、山陽の撃ちたる戦は今日に於て人に記憶せらるゝなり、然れども其の撃ちたるところは愛山生の言ふ如く直接に人生に相渉れり、人生に相渉るが故に人生を離るゝ事も亦た速ならん。源頼朝は能く撃てり、然れども其の撃ちたるところは速かに去れり、彼は一個の大戦士なれども、彼の戦場は實に限ある戦場にありし、西行も能く撃てり、シェクスピアも能く撃てり、ウオーヅォルスも能く撃てり、曲亭馬琴も能く撃てり、是等の諸輩も大戦士なり、而して前者と相異なる所以は前者の如く直接の敵を目掛けて限ある戦場に戦はず、換言すれば天地の限なきミステリーを目掛けて撃ちたるが故に、愛山生には空の空を撃ちたりと言はれんも、空の空の空を撃ちて星にまで達せんとせしにある。

のみ行いて頼朝の墓を鎌倉山に開きて見よ、彼が言はんを欲するところ何事ぞ、來りて西行の姿を山家集の上に見よ、孰れか能く言ひ孰れか能く言はざる。

然れども、文士は世を益せざるべからず、西行馬琴の徒が益したるところ何物ぞと斯く愛山生は問はむか。

文學のユナリチー論今日に始まりたるにあらす、吾等の先祖に勸善懲惡説あり、吾等の同時代に平民的批評家としての活用論者を愛山生に得たるも故なきにあらす、硝子は水晶に比して活用の便あり、以て窓戸を装ふべし、以て洋燈のホヤとなすべし、天下普く其の活用の便を認むるを得るなり、然れども天下の愚人が水晶といふ活用の便に乏しきものに向つて高價を拂ふは何ぞや、水晶を買ふものをして、數十金を出して露店の硝子玉を買はしめんとする神學を創見するものあらば、亦

は疑はず水天宮に參詣する衆生は争ひ來りて其說法を聽聞するなるべし。京山をして、山陽をして學をテンプラの偶像たらしめば、カーライルをして英雄崇拜論に一題を缺きたりしを地下に後悔せしむることあるべし。

吉野山に遊覽して、歎息するものあり、曰く何ぞ櫻樹を伐りて梅樹を植へざる、花王樹は何の活用に適するところあらむ、梅樹の以て千金の利を果實によつて得るに如かんやと、一人ありて傍より容喙して曰へらく、梅樹は作るどころの利に於て甘藷を作るに如かず、他の一人は又た曰く甘藷は市場に出ての相場極めて廉なり、亞米利加種の林檎を植ゆるに如かずと、われは是等の論者が利を算するの速なるを喜び、眞理を認むるの確なるを謝するに吝ならざらんと欲す、然れども吉野山を以て活用論者の手に委ぬるは福澤先生を同志社の總理に推すことを

好まざると同じく好まざるなり。

肉の力は肉の力を撃つに足るべし、死したるものゝ死したるものを葬むるを得るといふ眞理はナザレの人の子も之れを説けり、然れども死したるものゝ葬むることを得ざるものあるは、肉の力の擊碎することを得ざるものあると共に他の一側に横はれる眞理なり、一人の敵を學ぶの非なるは萬人の敵を學びても猶ほ失敗したる項羽すら之を發見せり、萬人の敵を學ぶは百萬人の敵を學ぶに如かざればならむ、百萬人の敵を學びたる(假定して)漢王も亦た「死朽」といふ敵に對して、吾人は吾人の刀劍を揮は無言にして仆れたり、「死朽」といふ敵に對して、吾人は吾人の刀劍を揮ふこと愛山生の所謂英雄劍を揮ふ如くするも、成敗の數は始めより定まりてある如く、吾人は自然力としてのの前に立ちて脆弱なる勇士にてあるなり。

「力」としての自然は、眼に見へざる、他の言葉にて言へば空の空なる銃鎗を以て時々刻々「肉」としての人間に迫り来るなり。草薙の劔は能く見ゆる野火を薙ぎ盡したりと雖見へざる銃鎗は、よもや薙ぎ盡せまじ。英雄をして劔を揮はしむるは見る可き敵に當ればなり、文章をして京山もしくは山陽の如く世を益するが爲めと、人世に相渉らしむるが爲に戦はしむるは、見るべき實（即ち敵）に當らしむるが爲なり。然れども空の空なる銃鎗を迎へて戦ふには空の空なる銃鎗を以てせざるべからず、茲に於て靈の劔を鑄るの必要あるなり。

自然は吾人に服従を命ずるものなり、「力」としての自然は吾人を暴壓することを憚らざるものなり、「誘惑」を向け、「慾情」を向け、「空想」を向け、吾人をして殆ど孤城落日の地位に立たしむるを好むものなり、而して吾人は或る度までは必らず服従せざるべからざる「運命」然り、悲しき「運命」に

包まれてあるなり。項羽は能く虞美人に別るゝことを得たれども、吾人は此の悲しき「運命」と一刻も相別るゝを得ざるものなり。然れども自然は吾人をして「失望落膽」の極途に甘んじて自然の力に服従し了するまでに吾人を困窘せしめざるなり。爰に活路あり、活路は必らずしも活用と趣を一にせず、吾人をして空虚なる英雄を氣取りて、「力」としての自然の前に、大言壯語せしむるものは我が言ふ活路にあらず、吾人は吾人の靈魂をして、肉として吾人の失ひたる自由を、他の大自在の靈世界に向つて縦に握らしむる事を得るなり。自然は暴虐を専一とする兵馬の英雄の如きにあらず、一方に於て風雨雷電を驅つて吾人を困ましむると同時に、他方に於ては、美妙なる絶對的のものをあらはして吾人を樂しましむるなり。風に對しては戸を造り、雨に對しては屋根を葺き、雷に對しては避雷柱を造る。斯くして人間は出來得る丈は物質的の權を以て

自然の力に當るべしと雖、かくするは限ある權をもて限なき力を撃つ
の業にして、到底限ある權を投げやりて自然といふもの、懷裡に躍り
入るの妙なるには如かざるなり。爰は於て吉野山は、活用論者の賭易か
らざる活機を吾人に教ふるなり。願はくは花の下にて春死なむそのき
さらぎの望月のころ」と歌ひたる詩人が活用論者の知ること能はざる
大活機を看破したるは即ち爰にあるなり、

宗教なし、サブライムなしと嘲けられたる芭蕉は振り向きて嘲りた
る者を見もせまじ、然れども斯く嘲りたる平民的短歌の史論家(同じく
愛山生)と時を同ふして立つの悲しさは無言勤行の芭蕉より其詞句の
一を假り來つて、わが論陣を固むるの非禮を行はざるを得ず。古池の句
は世に定説ありと聞けば之を引かず、一層簡明なる一句余が淺學に該
當するものあれば暫らく之を論せんと欲す。其は

明月や池をめぐりてよもすがら

の一句なり。

池の岸に立ちたる一個人は肉をもて成りたる人間なることを記憶
せよ。彼はすべての愛縛すべての執着すべての官能的感觉に圍まれて
あることを記憶せよ。彼は眼ある物質的の權をもて争ひ得る。丈は是等
無形の仇敵と搏闘したりといふことを記憶せよ。彼は功名と利達とに手
を出すべき多くの機會ありたることを記憶せよ。彼は人世に相渉るの
事業に何事をも難しとすることゝなかりしことを記憶せよ。然るに彼
は自ら満足することを得ざりしなり。自ら勝利を占めたりと信ずること
を得ざりしなり。淺薄なる眼光を以てすれば勝利なりと見るべきも
のをも彼は勝利と見る能はざりしなり。爰に於て彼は實を撃つの手を
息めて空を撃たんと悶きはじめたるなり。彼は池の側に立ちて池の

一。小。部。分。を。睨。む。に。甘。ん。せ。ず。徐。々。と。し。て。歩。み。は。じ。め。た。り。池。の。周。邊。を。一。め。ぐ。り。せ。り。一。め。ぐ。り。に。て。は。池。の。全。面。を。睨。む。に。足。ら。ざ。る。を。知。り。て。再。回。せ。り。再。回。は。池。の。全。面。を。眺。む。に。足。り。し。か。ど。池。の。底。ま。で。を。睨。ら。む。こ。と。を。得。ざ。り。し。が。故。に。更。に。三。回。め。ぐ。り。た。り。四。回。め。ぐ。り。た。り。而。し。て。終。に。よ。も。す。が。ら。め。ぐ。り。た。り。池。は。即。ち。實。な。り。而。し。て。彼。が。池。を。睨。み。た。る。は。暗。中。に。水。を。打。つ。小。兒。の。業。に。同。じ。か。ら。ず。し。て。何。物。を。か。池。に。寫。し。て。睨。み。た。る。な。り。何。物。を。か。池。に。打。ち。入。れ。て。睨。み。た。る。な。り。何。物。に。か。池。を。照。さ。し。め。て。睨。み。た。る。な。り。睨。み。た。り。と。は。視。る。仕。方。の。當。初。を。指。し。て。言。ひ。得。る。言。葉。な。り。視。る。仕。方。の。後。を。言。ふ。言。葉。は。Annihilation の。外。な。か。る。べ。し。彼。は。實。を。忘。れ。た。る。な。り。彼。は。人。間。を。離。れ。た。る。な。り。彼。は。肉。を。脱。し。た。る。な。り。實。を。忘。れ。肉。を。脱。し。人。間。を。離。れ。て。何。處。に。か。去。れる。杜。鵑。の。行。衛。は。問。ふ。こ。と。を。止。め。よ。天。涯。高。く。飛。び。去。り。て。絶。對。的。の。物。即。ち。Idea に。ま。で。達。し。た。る。な。り。

彼は事實の世界を忘れたるにあらず、池をめぐりて兩三回するは實を見貫く心ありてなり、實は自然の側なり而して實を照らすものも亦た自然の他の側なり、實は吾人の敵となりて吾人に迫ることを爲せども、他の一個なる虚は吾人の好友となりて吾人を導きて天涯にまで上らしむるなり、池面にうつり出たる團々たる明月は彼をして力どしての自然を後へに見て一躍して美妙なる自然に進み入らしめたり。

サプライムとは形の判断にあらずして想の領分なり、即ち前に云ひたる池をめぐりてよもすがらせる如き人の一躍して自然の懷裡に入りたる後に、彼處にて見出すべき朋友を言ふなり、この至真至誠なる朋友を得て而して後夜を徹するまで池をめぐるの味あるなり、池をめぐるは Nothingness をめぐるにあらず、この世ならぬ朋友と共に逍遙遊するを樂しむ爲にするなり。

造化主は吾人に許すに意志の自由を以てす現象世界に於て煩悶苦
戦する間に吾人は造化主の吾人に與へたる大活機を利用して猛虎の
牙を弱め倒崖の根を堅ふするを得るなり現象以外に超立して最後
の理想に到着するの道吾人の前に開けてあり大自在の風雅を傳道す
るは此の大活機を傳道するなり何ぞ英雄劍を揮ふと言はむ何ぞ爲す
とこあるが爲めと言はむ何ぞ人世に相渉らざる可からずと言はむ
空の空の空を撃つて星にまで達することを期すべし俗世をして俗世
の笑ふまゝに笑はしむべし俗世を濟度するは俗世に喜ばるゝが爲な
らす肉の劍はいかほどに鋭くもあれ肉を以て肉を撃たんは文士が最
後の戰場にあらず眼を擧げて大、大の虚界を視よ彼處に登攀して清
涼宮を捕握せよ清涼宮を捕握したらば携へ歸りて俗界の衆生に其一
滴の水を飲ましめよ彼等は活きむ嗚呼彼等庶幾くは活きんか。

自然の力をして縦に吾人の脛脚を控縛せしめよ然れども吾人の頭
部は大勇猛の權を以て現象以外の別乾坤にまで挺立せしめて其處に
大自在の風雅と逍遙せしむべし彼物質的論家の如きは世界を狭少な
る家屋となして其家屋の内部を整頓せるの外には一世の能事なしと
し甘じて爰に起臥せんとす而して風雨の外より犯す時雷電の上より
襲ふ時慄然として恐怖するを以て自らの運命とあきらめんとす靈性
的の道念に逍遙するものは世界を世界大の物と認むることを知る而
して世界大の世界を以て甘心自足すべき住宅とは認めざるなり世界
大の世界を離れて大、大の實在を現象世界以外に求むるにあらずん
ば止まざるなり物質的英雄が明晃々たる利劍を揮つて狭少なる家屋
の中に仇敵と接戦する間に彼は大自在の妙機を懐にして無言坐する
なり。

悲しとLimitは人間の四面に鐵壁を設けて、人間をして、或る卑野る生涯を脱すること能はざらしむ。鵬の大を以てして、或る小を以てして、或る同じくこの限を破ること能はざるなり。而して、蜩の小を以てして、或る小を知らず、鵬の大を以て自ら其の大を知らず、同じく限に縛せらるゝを知らず、欣然として、自足するは、憫れむべき自足なり。この憫れむべき自足を以て現象世界に處して、快樂と幸福とに缺然たるどころなし。自信するものは、淺薄なる樂天家なり。彼は狹少なる家屋の中に物質的論客と共に坐を同くして、泰平を歌はんとす。歌へ汝が泰平の歌を得、然れども斯の如き狭屋の中には、味もなき、義務、双翼を張りて、極めて得意になるなり。剛健なる意志、其の脚を失ひて、幽靈に化するなり。譯もなき、利他主義は、莊嚴なる黄金佛となりて、禮拜せらるゝなり。事業といふ、匠工は、唯一の甚五郎になるなり。快樂といふ、食卓は、最良の哲學者に

なるなり、ベタントリといふ巨人は、屋根裡に、突き上るは、この英雄になるなり。凡ての靈性的生命は、此處を辭して去るべし。人間を悉く、木石の偶像とならしむるに、屈竟の社殿はこの狭屋なるべし。この狭屋の内には、菅公は、失敗せる經世家、桃青は、意氣地なき遁世家、馬琴は、些々たる非寫實文人、西行は無慾の閑人となりて、白石の如き、山陽の如き、足利尊氏の如き、仰向すべきは、是等の事業家の外なきに至らんこと必せり。頭をもたげよ、而して、視よ、而して、求めよ、高遠なる虚想を以て、眞に廣濶なる家屋眞に、快美なる境地眞に、雄大なる事業を視よ、而して、求めよ、爾の Longing を空際に投げよ、空際より、爾が人間に爲すべきの天職を捉り來れ、嗚呼、文士、何すれぞ、局促として、人生に相渉るを之れ求めむ。

満 足

われ今此處に立てり、而してわが今立つところの「此處」はわれ得て之を知る能はず、ひとり我が知るところは、我は「彼」と「此」との中間に立てるものなることなり、「彼」とは何處ぞ、此とは何處ぞ、われは直覺によつて其一端を窺ひ得るのみ。唯だ我が中に「經驗」なるもの存するありて、我は或處より旅をはじめ、或處まで到着せんとする一旅人なることを我に囁くあるのみ。我が出立したる「或處」は我が知り得るところにあらず、我が到着せんとする「或處」は我が知り得るところにあらず、然れども我は必らず「或處」にまで到着せんとするものなり、觀念この心を我に傳へ、希望この願を我にたしかむ。

人の一代に暗黒なる時代あり。物欲の尤も熾焰したる時、功名心の尤も猛烈なる時、自我の尤も強盛なる時、人は自然に暗黒なる隧道を通過せざるを得ず。人間は風物を賞覽する旅客よあらず、商賈をなしながら渡り行く旅人なり。渠の肩には重荷あり、渠の懷中には帳簿あり、渠の財布には資本あり、渠は高樓に登つて酒肉を縦にし、枕を高ふして華胥に遊ぶべきものならず。渠は生れながらにして重荷の意味を知れるならず、渠は始より帳簿の眞理を知れるならず、渠は當初より財布の取締を知れるならず、渠の初めて家庭を出づるは恰も世間見ずの旅商が始めし千里の遠行に上るが如きなり。渠の前には成功の幻像あり、渠の後には嘲弄の鬼隠れたり、渠は己れを知らざるなり、爰に於て暗黒の時代は必らず一度渠を其幕中に巻き去らんとす。

此時に當りて、渠は端なくも「經驗」といふ白頭翁に遭會す。翁は天より來るものにわらず、地より遣はされたるものにあらず、人生の自造的なる教師にして、號令の威なく懲罰の權なく、然も極めて親切に、人生を誘導するものなり。重荷の爲に疲れて眠れる時に、彼はひそひそと其耳に

來りて重荷を負ふ可き秘訣を教ゆ。帳簿の錯誤の爲に、大なる苦痛を惱む時に彼は懇ろに其手を把りて、帳簿を整理する。道を教ゆ。財布の空乏の爲に、限なき悲恨を招く時に、彼は暖き口を以ていかに處置すべきかを教ゆ。經驗は常識の世界に於ける常識の大導師なり。人は己れを卑くしてこの導師に従ひ行くに、暗黒なる隧道は忽ち光明なる白日となるなり。

人は知ることを得ざる「或處」より、知ることを得ざる「或處」まで旅しつゝある心細きものなり、然れども「經驗」といふ白頭翁の、旅と共に旅して、今日の旅には今日の旅を教へ、明日の旅には明日の旅を教ゆ、人間は之を以て今日の旅に満足し、又た明日の旅に満足するとを得るなり、爰に於て吾人は、常識の世界に於て、吾人が満足すべき方法の一端を學び得たり。其術如何、曰く、宜しく常識の「經驗」に聞かば、今日を以て今日に満足せよ、明日を以て明日に満足せよ。

然りと雖人間は商買をなすが爲のみの動物にあらず、理性と感情と

意志とは、人間を驅つて、自ら覺らざる境に投るものなり。黙思黙想は彼をして物我の界に迷はしむるものなり。人世は遠き古より遙かなる未來まで、眞個に之れ幻奇を極めたる一大ドラマたり。昨日の人は此ドラマの舞臺を過ぎて去れり、今日の人の此ドラマの舞臺の上に働らきつゝあるなり、而して明日の人は衣装を整へて頓て此舞臺に登場すべき用意をなしつゝあるなり、千年萬年斯の如くにして地球の廻轉の停まらざる限り、太陽系の引力絶えざるかぎり、此大ドラマを撤去するものなきなり。

悲劇と喜劇とは、この大ドラマの二大真相なり、然れども悲劇にして喜劇を兼ねるものなきにあらず、喜劇にして悲劇を兼ねるものなきに

あらず、悲にして喜喜にして悲、人世の變幻得て察すべからず、甘美なる
宗教は泣けるもの、涙を拂ひ笑へるもの、聲を低からしむ、嚴肅なる
哲學は、前と後とを苟且にするものを誠しむ、老實なる經驗は無識無學
を警醒す、而して人世は是等の尊重すべき教師の引續きて教養するも
のあるにも拘らず、一大ドラマたるに於ては萬古不變なり、泣かんとす
るものは泣き笑はんとするものは笑ひ、善惡正邪の種は盡くる曉なく、
迷悟の機は綿々として斷ゆる時なし、墳墓は虚にして且つ廣く人を吞
み、時を吞み、世を吞み、吞みては吐き吐きては吞むこと、行きては返へり、
返へりては行く、江河の水の如くなれど、人世は終古一大ドラマにして、
生滅も之を奪ふ能はず、輪轉も之を撤する能はず、この變幻に對し、この
永續に對し、人智能く何をか加へん、人方能く何をか成さむ、人理能く何
をか議せむ、クリードを携へて是に迫るものあり、知識を提げて之を犯

すものあり、美術を手にして之に近よるものあり、彼等は何事をか成す
なり、彼等は何物をか撃つなり、彼等は或成功を遂ぐるなり、然れども彼
等が撃ちたりと思ふは千丈の壁の寸分に過ぎず、彼等が成したりと思
ふは萬尋の淵より一滴の水を掬し得たるに過ぎず、歴史をして之を自
證せしめよ。

「満足」といふ社殿に達するには、二條の徑路あり、其一は徹頭徹尾常識
界の王なる經驗に従ふこと之なり、然れども人間は常識のみの動物に
あらざるが故に、疑といふ妖婦の爲に常識界より迷出づるの止を得ざ
る人なきにあらず、何ぞや、といふ疑問先づ襲ひ來りて知識なるものを
得、知識なるものを得て然る後再び他の何ぞやに入る、斯の如く何ぞや、
といふ一の迷霧の中に彷徨して、而して更に又た他の迷霧に進み行く
ものあり、一たび何ぞやを出る時、遙かに満足、といふ社殿を朦朧たる烟

震の中に認めて、再び何ぞやに没入し、更に又た満足といふ社殿を遠見す。何ぞやによりて進むべき満足に通ずる路は、常識の経験に誘はれて「満足」に通ずる路とは相異なれり。彼の路によれば、其歩武は甚だ平らかなり、其行程は甚だ邇し、然れども何ぞやによりて進むべき種類の人間は到底常識の「経験」に誘はれて進むべき人間とは同一なる能はず。廣漠たる原を過ぎ、峭嶮たる山を越へ、茫茫漠々たる沙漠にさへ迷ひ入り、^{ヒチユル}立^テ的^ニの^レ經驗^ヲを^シ積^ムみ、自^立的^ニの^レ希望^ヲを^シ蓄^ヘ、自^立的^ニの^レ方向^ヲを^シ畫^シ、最後^ニに^シ主^觀的^ニの^レ觀念^ヲを^シ得^テ、其^ノの^レ觀念^ノの^レ直覺^ニに^シ憑^リて^ハ、^シじ^メて^ハ、雪霧^ヲを^シ破^リて^ハ、皎々たる白殿^ニに^シ到^リて^ハ、其^ノの^レ得^ルものなり。

すべてのクリードも、すべての知識も、すべての美術も、若し直覺といふものを缺く時には何等の効用もなかるべし、唯理論の旺盛なる時代にありては、主觀的觀念を観るものなく、直覺なるものは眞正の意味に

於て了解せらるゝ事なく、論理は知識の惟一の標率となり、經驗といふ導師のみは世に時めきて在せしかど、神を知り、人を知り、世を知る、完全なる方法としては斯の如き學派の勢力遂に長久なること能はざりし。然りと雖單に満足といふ問題の下に觀察する時は、吾人は前者を以て福なるものとし、後者を以て不幸なるものと認むるを躊躇せず。常識に默從するものは容易く無心になることを得るものなり。智慧の木の實を食ひたるものは、バイロンの所謂わが眠は眠にあらず的の苦痛を味ふの悲みあり。第二種のものには、危道を踏まざるべからざるものあり、第一種のものには坦路を歩むの便あり。但し彼等が到着したる「満足」の種類を云ふ時は、自ら相異なるものあるなり。最後に満足は天命を知るによつて生ずるものなり。人間五十始めより天命を知るものにあらず、本より主觀のみにて天命を知悉すべきよ

あ○ら○す○本○よ○り○客○觀○の○み○に○て○天○命○を○明○知○す○べ○き○に○あ○ら○す○本○よ○り○經○驗○の○
み○に○し○り○て○天○命○を○認○む○る○も○の○に○あ○ら○す○眞○に○天○命○を○知○る○は○己○れ○を○知○り
た○る○後○に○あ○り○己○れ○を○知○り○天○命○を○知○る○が○爲○に○は○造○化○萬○物○情○を○秘○す○る○こ
と○な○く○吾○人○を○し○て○縦○に○觀○察○し○縦○に○學○究○し○縦○に○冥○契○す○る○を○得○せ○し○む○造
化○を○觀○じ○人○間○を○觀○じ○然○る○後○に○天○を○觀○す○詩○人○哲○學○者○宗○教○家○一○々○其○軌○を
異○に○す○る○が○如○し○と○雖○歸○す○る○所○は○即○ち○一○な○り○或○は○主○觀○に○偏○し○或○は○客○觀
に○流○る○が○如○し○と○雖○要○す○る○に○智○識○の○進○步○の○道○程○に○於○て○盆○水○の○時○に○一
方○に○傾○く○が○如○き○の○み○。

カ○ー○ラ○イ○ル○の○連○り○た○る○或○宴○席○に○於○て○人○の○ギ○ョ○ー○テ○を○評○す○る○も○の○あ
り○曰○く○ギ○ョ○ー○テ○に○は○宗○教○な○し○と○矯○激○な○る○カ○ー○ラ○イ○ル○は○直○ち○に○遮○り○て
評○者○に○向○つ○て○曰○く○評○者○よ○汝○は○汝○の○卷○煙○草○に○火○を○點○す○る○こ○能○は○さ○る

大○戲○曲○家○を○嘲○る○を○戒○め○た○る○な○り○吾○人○は○不○幸○に○し○て○今○日○の○時○代○に○ギ○ョ
ー○テ○の○如○き○大○家○を○有○せ○ず○然○れ○ど○も○吾○人○は○ギ○ョ○ー○テ○の○如○き○大○家○を○出○さ
ん○が○爲○に○妄○り○に○宗○教○と○哲○學○と○を○ポ○エ○ト○リ○ー○よ○り○分○離○し○去○ら○ん○ど○す○る
の○僻○見○を○排○せ○さ○る○可○か○ら○す○吾○人○は○大○ド○ラ○マ○の○中○に○蠢○動○し○つ○も○あ○る○者
な○り○天○を○知○り○人○を○知○り○世○を○知○る○の○第○一○着○は○こ○の○ド○ラ○マ○の○存○在○す○る○事
實○之○な○り○こ○の○事○實○を○離○れ○た○る○滿○足○は○眞○正○の○滿○足○と○い○ふ○べ○か○ら○す○徒○に
天○を○仰○い○で○空○を○望○む○べ○か○ら○す○空○し○く○地○に○俯○し○て○事○實○に○頑○執○す○べ○か○ら
ず○天○を○仰○げ○ば○次○第○を○な○し○て○翔○け○る○鴻○に○學○ぶ○こ○ろ○あ○る○べ○し○地○に○俯○せ
ば○生○活○の○實○態○に○醒○む○る○こ○ろ○あ○る○べ○し○滿○足○を○得○る○は○難○か○ら○す○圓○滿○な
る○滿○足○を○得○る○は○夫○れ○難○い○か○な○論○旨○盡○さ○す○常○に○讀○者○に○罪○を○得○る○を○悲○し
む○)

快樂と實用

明治の文學
管見の一

明治文學も既に二十六年の壯年となれり、此歲月の間に如何なる進歩ありしか、如何なる退歩ありしか、如何なる原素と如何なる精神が此文學の中に蟠りて而して如何ある現象を外面に呈出したるか、是等の事を研究するは緊要なるものなり、而して今日まで未だ此範圍に於て史家の技倆を試みたるものはあらず、唯だ國民新聞の愛山ありて、其の銳利なる觀察を此範圍に向けたるあるのみ、余は彼の評論に就きて満足すること能はざるところあるにも係らず、其氣鋭く膽大にして幾多の先輩を瞠若せしむる技倆に驚ろくものなり、余や短才淺學にして、敢て此般の評論に立入るべきものにあらねども、従來白表女學雜誌々上にて評論の業に従事したる由來を以て聊か見るところを述べて明治文學の梗概を研究せんと欲するの志あり、余が曩に愛山生の文章を評論したる事あるを以て、此題目に於て再び戦を挑まんの野心ありなむ

思はゞ此上なき辭事なるべし、之れ余が日本文學史骨を著はすに當りて豫め讀者に注意を請ふ一なり、余は之れより日本文學史の一學生たらんを期するものにて、素よりこの文學史を以て獨占の舞臺なせんとせん心掛あるにはあらず、斯く斷りするは曾つて或人に誤まられたることあればなり、余は學生として、誠實に研究すべきことを研究せんとするものなれば、縦令如何なることありて他人の攻撃に遭ふことありとも之に向つて答辯するものと必せず、又容易に他人の所論を難する等の事なかるべし、且つ美學及び純哲學に於て極めて初學なる身を以て文學を論ずることなれば、其不都合なる事多かるべきは、吳々も豫め斷り置きたる事なり、加ふるに閑少なく事實の便なく事實の蒐集思ふに任せぬことのみなるべければ、獨斷的の評論をなす方に自然傾むき易きことも亦た豫め諒承あらんこ

とを請ふになむ。

特に山路愛山先生に對して一言すべきとあり。爰て是を言ふは奇しと思ふ人あらんかなれど、余は元來余が爲したる評論に就きて親切なる教示を望みたるものなるに、愛山君は余が所論以外の事に向て攻撃の位地に立たれ少しも満足なる教示と見るべきはあらず、余は自ら受けたる攻撃に就きて云々するの必要を見ざれば其儘に看過したり。本より文學の事業なることは釋義といふ利刀を假り來らずとも分明なることにして、文學が人生に渉るものなるとは何人といへ共之を疑はぬなるべし。愛山先生若しこの二件を以て自らの新發見なりと思はゞ、余輩其の可なるを知らず、余は右の二件を難じたるものにあらず、余が今日の文學の爲に聊か眞理を愛するの心より、知交を辱ふする愛山君の所説を難じたるは豈に虚空なる自負自傲の念よりするものなら

んや、これを以て余は愛山君の反駁に答ふるとをせざりし。然るに豈圖らんや、其他にも余が所論を難せんとしてか、或は他に爲にする所ありてか、人性に相渉らざるべからずといふ論旨の分明に解得せらるゝ論文の、然も大家先生等の手に成りて出でしを見るに至らんとは、若し此事にして余が所説に對して、或は余が所説に動かされて出でたるものなりとするを得ば、余は至幸至榮なるを謝するに吝ならざるべし。然れども極めて不幸なりと思ふは、余は是等の文章に對して返報するの權利なきこと是なり。文學が人生に相渉るものなるとは、余も是を信ずるなり、恐らく天地間に文學は人生に相渉るべからずと揚言する愚人は無かるべし、但し余が難じたるは(1)世を益するの目的を以て(2)英雄の劍を揮ふが如くに(3)空の空を突かんとせずして、或的を見て華文妙辭を退けて、而して人生に相渉らざるべからずと論斷したるは難じたる

なり。故に余は以上の條件を備へざる人生相渉論ならば、奈何なる大家先生の所説なりとも是に對して答辨するの權利なきなり。然ども余自ら山庵雜記に言ひし如く、是非眞僞は容易に皮相眼を以て判別すべき者ならざるに余が文章の踈雜なりしが爲め、或は意氣昂揚して筆したりしが爲か、斯も誤讀せらるゝに至りたるは極て殘念の事と思ふが故に、余は不肖を顧みず淺膚を厭はず、是より評論紙上に於て出來得る丈誤讀を免かるゝ様に、明治文學の性質を論ずるの榮を得んとす。之を爲すは本より愛山君の所説を再評するが爲にはあらざるも若し余が信ずる所に於て君の教示を促すべきとあらば請ふ自ら寛ふして之を垂れよ。

余は先づ明治文學の性質を以て始めんとす。而して、明治文學の性質を知らんが爲には、如何なる主義が其中に存するかを見ざるべからず。

純文學にも批評界にも、或は時事界にも濟々たる名士羅列するを見る。然れども余は存生中の人を評論するに於て二箇のおもしろからぬ事あるを慮るなり、其一は、もし賞揚する時に諛言と誤まれんか、若し非難する時に訶評と思はれんか、の恐れあり。其二は、自らの主義、人間は *Parasite* の動物なれば少くとも自家の私見、善く言ひて主義なるものに拘泥することなき能はず、故に若し一の私見と他の私見と撞着したる時、近頃流行の罵詈評論に陥ることなきにしもあらず。之を以て余は敢て現存の大家に向つて直接の批評を加へざるべしと雖、もし余が觀察し行く原實の道程に於て相衝當する事あらば避くべからざる場合として之を爲すことあるべし。

余は明治文學管見の第一として「快樂」と「實用」を論ずべし。

「快樂」と「實用」とは疑もなく「美」の要素なり、必らずしもプレトリーを引くに

は及ばず。

マシユール、アーノルドは、人生の批評としての詩に於ては、詩の理、詩の美の定法に應ふかぎりには、人生を慰め人生を保つことを得るなりと云へり。

文學が一方に於て、人生を批評するものなることは余も之を疑はず。然れども、アーノルドの言ふ如く、人生の批評として、詩は又た詩の理と詩の美とを兼ねざるべからず。吾人文學を研究せるものは、單に人生の批評のみを事とせずして、詩の理と詩の美とをも究むるにあらざれば不可なるべし。

人生を慰むるといふ事より、Pleasureなるものが、詩の美に於て、缺くべからざる要素なる事を知るを得べし。人生を保つといふ事より、Utilityなるものが、詩の理に於て、缺くべからざる要素なる事を知るべし。眞

に人生を慰め、眞に人生を保つには、眞に人生を観察し、人生を批評するの外に、眞に人生を通譯するとなかるべからず。人生を通譯するには、人生を知覺せざるべからず。故に天賦の詩才ある人は、人間の性質を明らかに認識するの要あるなり。然らざれば、マニヤスは眞個の狂人のみ、靴屋にもおれず、秘書官にもなれぬ、白痴のみ。

人生(Life)といふ事は、人間始まつてよりの難問なり、哲學者の夢にも此難問は到底解き盡くす可らずとは古人も之を言へり。若し夫れ、社会的的人生などの事に至りては、或は銳利なる觀察家の眼睛にて看破し得るともあるべけれど、人生の Vitality に至りては、全能の神の外は全く知るものなかるべし。故に詩人の一生は、默示の度に從ひて、人生を研究するものにして、感應の度に從ひて、人生を慰保するものなるべし。

快樂と實用とは、主觀に於ては美の要素なりと雖、客觀に於ては美の

結果なり、内部にありては、美を構成するものなりと雖、外部の現象に於ては美の成果なり。この二要素を論ずるに先ちて吾人は

人生何か故に美を要するか

に就きて一言せざるべからず。

音楽何の爲に人生に要ある。繪畫何が故に人生に要ある。極めて些末なる裝飾品までも何が故に人生に要ある。何が故に歌ある。何が故に詩ある。何が故に溫柔なる女性の美ある。何が故に花の美ある。何が故に山水の美ある。是等の者はすべて遊惰放逸なる人間の悪習を満足せしむるが爲に存するものなるか。もし然らんには人生は是等の凡ての美なくして成存することを得べし。然るに古往今來、尤も蠻野なる種族に、尤も劣等なる美の觀念を有し、尤も進歩せる種族に尤も優等なる美の觀念を有するは何が故ぞ。尤も野蠻なる種族にも必らず何につけてか

美を求むるの念ある事は明白なる社界學上の事實なり、或は鳥吟を模擬し、或は美花を粗末なる仕方にて模寫するなどの事は、極めて拙劣の人種にも是あるなり。又た尤も幼稚なる嬰兒にても、美しくしき玩具品を見ては能く笑ひ、音樂の響には耳を澄ます事は普通なる事實なり。之を以て見れば文明といふ怪物が、人間を遊惰放逸に驅りたるよりして、始めて美の要を生じたりと見るの僻見なることは多言せずして明らかなるべし。美は實に人生の本能に於て、本性に於て、自然に願欲するものなることは認め得べきことなり。斯の如く美を願欲するには、人生の本能、人性の本性に於て、然り、といふ事を知り得たらば吾人は、一步を進めて

人生は快樂を要するものなりや否や

の一間を解かざるべからず。

快樂は何の爲に、人生に要ある。人生は快樂なくして、生活し得べきものなるべきや。ピユリタニズムの極端にまで攀ぢ登りて見ても、唯利論の絶頂にまで登臨して見ても、人生は何事か快樂といふものなくては、月日を送ること能はざるは常識といふ活眼先生に問ふまでもなく明白なる事實なり。

快樂は即ち慰藉 (Consolation) なり。詳に人間生活の状態を觀よ、蠢々喁々として何のおもしろみもなく、何のおかしみもなきに似たれど、其實は個々特種の快樂を有し、人々異様の慰藉を領するなり。放蕩なる快樂は飲宴好色なり。着實なる快樂は宴居閑樂なり。熱性ある快樂は忠孝仁義等の目的及び希望なり。誠實なる快樂は家を齊へ生を理するにあり。然れども是等は、特性の快樂を擧げたるのみ、若し通性の快樂をいふ時は、美しくしきものによりて、耳目 (Sight and Hearing) を樂しますことにより。

耳には音を聞き、目には物を睹る、之れ快樂を願欲するの最始なり。然れどもマインド (智情意) の發達するに従ひてこの簡單なる快樂にては満足すること能はざるか故、更に道義の生命に於て、快樂を願欲するに至るなり。道義の生命に於て、快樂を願欲するに至る時は、單に自然の摸倣を事とする美術を以て、真正の満足を得ること能はざるは必然の結果なるが故に、創造的天才の手に成りたる美を愛好するに至ること亦た當然の成行なり。美は始めより同じものにして、輕重増減あるものにあらざれど、美術の上、於ては、進歩すべきものなること、是を以てなり。而して其觀察點より推究する時は、尤も進歩したるモラル、ライフ (道義の生命) を有つものは、尤も健全にして、尤も圓滿なる美を願欲するものなることは、判断するに難からじ。而して、社界進歩の大法を以て之を論ずる時は、尤も完全なる道義の生命を有する國民が尤も進歩した

る有様ある事は明白なる事實なれば従つて又た尤も圓滿なる快樂を有し尤も完全なる美を願欲する人種が尤も進歩したる國家を成すことは容易に見得べき事なり吾人は更に、

道義的生命(ライフといふ字は人)が快樂に相渉る關係

に就きて一言せざる可からず。

道義モラルといふ字を用ふるには、宗教及哲學に訴へて、其字義を釋說すること大切なるべし、然れども吾人は序言に於て斷りしたる如く、成る可く平民的に(平民的といふ言葉は用)雜誌評論らしき普通の諒解にうちまかせてこの字を用ふるなり。

人生フィジカルに於て進歩すると同時に、モラルにも進歩するものなり、Physical worldの擴まり行くと共に、Moral worldも擴まり行くものなり、故に其必要とする快樂も於ても亦た單に耳目を喜ばすとい

ふのみにては足らぬ様になるなり、加ふるに智情意の發達と共に、各種各様の思想を生ずるが故に、其の必要とする快樂も彼等の發達したる智情意を満足せしむる程の者たらざるべからず、かるが故に道義的人生に相渉るべき適當の快樂なくしては、道義自身も、橋トビれ、人生自身も、味なきに至らん事必せり、爰に於て、道義の生命の中心なる靈魂を以て、美の表現の中心なる宇宙の眞美を味ふの必要起るなり、宇宙の眞美は、或はサプライムといひ、或はビューチフルと言ひ、審美學家の孜孜として討究しつゝある問題にして容易に論入すべきものにあらず、但し余は「人生に相渉るとは、何の謂ぞや」と題する一文の中に其一端を論じたる事、あれは就いて讀まれん事を請ふになむ、是より

「快樂」と「實用」との雙關

に就きて一言せむ。

「快樂」と「實用」とは特種の者にして、極めて密接なる關係あるものなり。實用を離れたる快樂は、絶對的には全然之なしと斷言するも不可なるべし。快樂の他の意味は、慰藉コンソレーションなる事は前にも言ひたり。慰藉といふ事は、孤立したる立脚點スタンディングポイントの上に立つものにあらずして、何物にか雙對するものなり。エデンの園に住みたる始祖には、慰藉といふものゝ必要は無かりし。之あるは人間に苦痛ありてよりの事なり。故に、

人生何が故に苦痛あるか

の一間を解くの止むべからざるを知る。

曰く、欲バツションなる魔物が、人生の中に存すればなり。凡ての罪、凡ての惡、凡ての過失は欲あるが故にこそあるなれ。而して、罪惡過失等の形を呈せざる内部の人生に於て、欲と正義と相戦ひつゝある事は、苟くも人生を觀察するに缺くべからざる要點なり。この戦争が人生の靈魂に與ふる傷

痕は即ち吾人が道義の生命に於て感ずる苦痛なり。この血痕この紅涙こそい古昔より人間の特性を染むるものならずんばあらず。かるが故に、必要上より、慰藉といふもの生じ來りて、美しきものを以て欲を柔らかにし、其毒刃を鈍くするの止むなきを致すなり。然れどもすでに必要といふ以上は、慰藉も亦た多少實用の物ならざるにあらず。試に一例を擧て之を説かん。

梅花と櫻花との比較

梅花と櫻花とは、東洋詩人の尤も愛好するものなり。梅花は、其の華ハナよ於ては、單に慰藉の用ヨウジノヨウに當つべきのみ、然れども、その果ミに於ては、實用のものとなるなり。斯の如く固有性に於て慰藉物なるもの、附屬性フツクセウに於て實用品たることあり。之と反對の例をも見よ。櫻花は、果を結ばざるが故に、單に慰藉の用に供すべきのみなるかと問ふに、貴人の園庭に於て必

らず無くしてならぬものとなり居るところよりすれば、幾分かは實用の性質をも備へてあるなり。梅櫻と東洋文學との關係に就きては他日詳論するとあるべし。これと同じく家具家材の實用品と共に或種類の裝飾品も亦た多少實用の性質あるなり。屏風は實用品なり。然れども、白紙の屏風といふものを見たる事なきは何ぞや。裝飾と實用との相密接するは之を以て見るべし。之より

實用の起原

に就きて一言すべし。

この問題は至難なるものなり。然れども極めて難駁に、極めて獨斷的に之を解けば、前に「快樂」の起原に就きて曰ひたる如く、人間は欲の動物なるが故にその欲と調和したる度に於て、自家の満足を得る爲に、意と肉とを適宜に満足せしむるか爲に、必要とする器物もしくは無形物を

願求せるの性あること、之れ實用の起原なり。而して人文進歩の度に應じて「實用」も亦進歩するものなる事は前に言ひたると同じ理法にて明白なり。人文進歩とは物質的^{マテリアル}の人生と道義的^{モラル}の人生との兩像に於て進歩したるものなるが故に、實用も其の最始に於ては、單に物質的需用を充たすに足りし者が追々に道義的需用を充たすに至るべき事は當然の順序なり。他の側面より見る時は野蠻人と開化人との區別は道義性の發達したりしと否とにありといふも不可なかるべし。爰に於て道義的の人生に相渉るべき文學なるものは、人間の道義性を満足せしむるほどのものならざるべからざる事は認め得べし。之より

道義的の人生の實用

とは何ぞやの疑問よりつるべし。

人間を正當なる知識に進ましむるもの(學理)其一なり、人間を正當な

る道念に進ましむるもの(倫理其二なり、人間を正當なる位地に進ましむるもの(美其三なり。

斯の如く概説し來りたることを以て、吾人は快樂と實用との上に於て吾人が詩と稱するものゝ地位を瞥見する事を得たり。快樂即ち慰藉は、道義的の人生に缺くべからざるものたると共に、實用も亦た道義的の人生に缺くべからざるものなる事を見たり。但し慰藉は主として道義的の人生に涉る性を有し、實用は客觀に於ては物質的の人生に涉ると雖、前にも言ひし如く、到底主觀に於ては道義的の人生にまで達せざるべからざるものなり(此事に就きては恐らく詳論を要するなるべし)

余は「快樂」と「實用」の性質に就き及び此二者が人生と相渉れる關係に就きて粗畧なる解釋を成就したり。是より

「快樂」と「實用」とが文學に關係するところ如何

に進むべし。

快樂と實用とは、文學の兩翼なり、雙輪なり、之なくては鳥飛ぶ能はず、車走る能はず、然れども快樂と實用とは文學の本躰[○]よ[○]あら[○]ざる[○]なり[○]。快樂と實用とは美的(Aim)なり、美の結果(Effect)なり、美の功用(Use)なり。美の本躰は快樂と實用とに[○]あら[○]ず[○]。これと共に、詩の廣き範圍[○]よ[○]於[○]ても[○]、快樂と實用とは其的、其結果、其功用に[○]過[○]ぎ[○]ず[○]して[○]他[○]に[○]詩[○]の[○]本[○]能[○]ある[○]事は疑ふ可からざる事實なるべしと思はる。

若し事物の眞價を論ずるに其的、其結果、其功用のみを標準とする時は、種々なる誤謬を生ずるに至るべし、本能本性を合せて、其結果、其功用的、を觀察するに[○]あら[○]ざ[○]れば[○]、余輩其の可なるを知らず、故に文學を評論するには、少くとも其本能本性に立ち入りて、然る後に[○]功[○]用[○]、[○]結[○]果[○]、[○]目[○]的[○]等の陪審官に諮はざるべからず。

快樂と實用とは詩が兼ね備へざるべからざる二大要素なることは疑ふまでもなし。然れども詩が必らずこの二大要素に對して隷屬すべき地位に立たざるべからずとするは大なる誤謬なり。

吾人が日本文學史を研究するに當りて第一に觀察せざる可からざる事は、如何なる主義、如何なる批評眼、如何なる理論が主要の地位を占有しつゝありしかにあり。而して吾人は不幸にも、世益主義、世道人心を益せざるべからずといふ論、勸懲主義、善を勧め惡を懲らすべしといふ論及び目的主義、何か目的を置きて之に對して云々すべしといふ論等が古來より尤も多く主要の地位に立てるを見出すなり。斯の如くにして、神聖なる文學を以て、實用と快樂と隷屬せしめつゝありたり、宜なるかな我邦の文運今日まで憐れむべき地位にありたりしや。

余は次章に於て、徳川時代の文學に、快樂と實用との二大區分ある事、

平民文學貴族文學の區別ある事、倫理と實用との關係等の事を論じて追々に明治文學の真相を窺はん事を期す。

精神の自由

明治文學
管見之二

造化萬物を支配する法則の中に、生と死は必らず動かすべからざる大法なり。凡そ生あれば必らず死あり、死は必らず生を躡ふて來る。人間は「生」といふ流れに浮びて死といふ海に漂着する者にして其行程も甚だ長からず、然に人間の一生は「生」より「死」にまで旅するを以て最後の運命と定むべからざるものある又似たり。人間の一生は旅なり、然れども「生」といふ驛は「死」といふ驛に隣せるものとして、この小時間の旅によりて萬事休する事能はざるなり。生の前は夢あり、生の後も亦た夢なり、吾人は生の前を知る能はず又死の後を知る能はず、然れども僅かに現

在の「生」を視ひ知ることを得るあり、現在の「生」は夢にして、生の後が寤な
るべきや否や、吾人は之をも知る能はず。

吾人が明らかに知り得る一事あり、其は他ならず、現在の「生」は有限な
ること。是れなり。然れども其の有限なるは人間の精神にあらす人間の
物質なり。世界は意味なくして成立するものにあらす、必らず何事かの
希望を蓄へて進みつゝあるなり。然らざれば凡ての文明も、凡ての化育
も虚偽のものなるべし。世界の希望は人間の希望なり、何をか人間の希
望といふ、曰く此の有限の中にありて彼の無限の目的に應はせんこと
是なり。有限は圏環の内において其中心に注ぎ、無限は方以外に自由な
り。有限は引力によりて相結び、無限は自在を以て孤立するを得るな
り。而して人間は實に有限と無限との中間に彷徨するもの、肉によりて
は限られ、靈に於ては放たるゝ者にいて、人間に善惡正邪あるは必竟す

るに内界に於て有限と無限との戦争あればなり、歸一を求むるものは
物質なり、調和を需むるものは物質なり、而して精神に至りては始めよ
り自由なるものなり、始めより獨存するものなり。

人間は活動す、而して活動なるものは「我」を繞りて歩むものにして、「我」
を離るゝ時は萬籟靜止するものなり、自己の「我」は生存を競ふものなり
法の「我」の眞理に趣くものなり、然れども人間の種族は生存を競ふの外
に活動を起すこと稀なり、愛國若くは犠牲等の高尚なる名の下も、究
極するところ生存を競ふの意味あり、人は何事をか求むるものなり、人
は必らず情を離れざるものなり、人は自己を愛するものなり、倫理道德
を守る前に人間は必らず自己の意欲に僕婢たるものなり、斯の如く意
の世界に於て人間は禁囚せられたる位地に立つものなり。

人生は斯の如く多恨なり、多方なり、然れども世界と共に存在し、世界

と共に進歩する思想なるものは、羅針盤なくして航行するものにあらずと見わたる。吾人は夢を疑ふ。然れども吾なるもの全く人間を離れたるものにあらず。吾人は想像力を訝る。然れども想像力なるもの全く虚妄なるものにあらず。吾人は理想を怪しむ。然れども理想なるもの全く人間と関係なきものにあらず。夢や想像力や理想や、是れ等のものはスピリチュアルに属する妖術の種類にあらずして、何事かを吾人に教へ、何物かを吾人に黙示し、吾人をして水上の浮萍の如く浪のまにまに漂流するものにあらざるを示すに似たり。且つ吾人は自ら顧みて己れを観る時に、何の希望もなく、何の目的もなく、在來の倫理に唯諾し、在來の道徳を墨守し、何事かの事業にはまりて一生を竟るを以て自ら甘んずること能はざるものあるに似たり。怪しむべきは此事なり。

倫理道徳は人間を羈縛する墨繩に過ぎざるか。真人至人の高大なる

事業は境遇と周邊と場所とによりて生ずるに止まるか。人間の窮通消長は機會なるものい横行に一任するものなるか。吾人は諾する能はず。別に精神なるものあり。人間の覺醒は即ち精神の覺醒にして、人間の睡眠は即ち精神の睡眠なり。倫理道徳は人間を盲目ならしむるものにあらずして、人間の精神に翹ふるものならずんば、あらず。高大なる事業は境遇等により(絶對的に)生ずるものにあらずして、精神の靈動に基くものならざるべからず。人間の窮通は機會の獨斷すべきものにあらずして、精神の動靜に因するものならざるべからず。精神は自ら存するものなり。精神は自ら知るものなり。精神は自ら動くものなり。然れども精神の自存、自知、自動は、人間の内にのみ限るべきにあらず。之と相照應するものは他界にあり、他界の精神は人間の精神を動かすことを得べし。然れども是は人間の精神の覺醒の度に應ずるものなるべし。かるが故に

人間を記録する歴史は精神の動靜を記録するものならざるべからず、物質の變遷は精神に次ぎて來るものなるが故に、之を苟且にすべしと云にはあらねど、眞正の歴史の目的は人間の精神を研究するにあるべし。人生實に無邊なり、然も意味なき無邊にあらず、必竟するに精神の自由の爲に砂漠を旅するものなり、希望爰に存し、進歩爰に萌すなり、之なくんば凡ての事皆な虚偽なり。

文學は人間と無限とを研究する一種の事業なり、事業としては然り、而して其起因するところは、現在の「生」に於て人間が自らの満足を充さんとする欲望を填ぐ爲にあるべし。文學は快樂を人生に與ふるものなり、文學は保全を人生に補ふものなり、然れども歴史上にて文學を研究するには、それを人生の鏡とし、それを人生の欲望と満足の像影として見ざるべからず、人生は文學史の中に、其骸骨を留むるものなり、その宗教も、

その哲學も文學史の中に散漫たる形にて殘るもの也、その欲望も其満足も文學史の上には蔽ふべからざる事實となるなり、而して吾人は、その欲望よりも、其満足よりも、其状態よりも、第一に人生の精神を知らざるべからず、吾人は觀察なるもの、甚だ重んずべきを認む、然れども狂態を觀察するに先ち赤裸々の精神を視ざるべからず、認識せざるべからず、然かる後にその精神の活動を觀察せざる可からず。

精神は終古一なり、然れども人生は有限なり、有限なるものの中にありて無限なるもの、趣きを變ゆ、東洋の最大不幸は始めより今に至るまで精神の自由を知らざりし事なり、然れども是は東洋の政治的組織の上に言ふのみ、其宗教の上に於ては、大なる差別あり、始めより全く精神の自由を知らず、且つ求めざるの國は、必らず退歩すべきの國なり、必らず歴史の外に消ゆべきの國なり、政治と懸絶したる宗教に向つて精

神の自由を求むるは國民が政治を離るゝの徴なり。宗教にして若し政治と相渉ることなくんば、其邦の思想は必らず一方には極端なる虚想派を起し、一方には極端なる實際派を起さざるべからず。吾人は他日日本文學と國體との關係を言ふ時に於て此事を評論すべし、今は唯だ日本の政治的組織は、一人の自由を許すと雖衆人の自由を認めず、而して日本の宗教的組織は主觀的に精神の自由を許すと雖社界とは關係なき人生に於て此自由を享有するを得るのみにして、公共の自由なるものは此上に成立することなかりしといふ事を斷り置くのみ。

爰に於て、吾人は讀者を促して前號の題目に反らんことを請ふの要あり、人間は精神を以て生命の原素とするものなり、然れども人間生活の需要は慰藉と保全とに過ぐるなし、文學も其直接の目的は此二者を外にすること能はず、文學の種類は多々ありともこの直接の目的は外

れたるものは文學にあらざるなり、而して何をか尤もこの目的に適ひたるものとすべきかは此本題の外あり。

徳川時代文學の真相は、其時代を論ずるに當りて詳かに研究すべし、然れども余は既に逆路より余の研究を始めたり、極めて粗雑に明治文學の大脈を知らんこと余が今日の題目なり、父を知らずして能く兒を知るは稀れり、之を以て余は今日に於て、甚だ亂雜なる研究法を以て徳川文學が明治文學に傳へたる性質の一二を觀察せんと欲す。

文學の最初は自然の發生なり、人に聲あり、人に目あると同時に文學を發生すべきものなり、然れども其發達は人生の機運に伴ふが故に長育するものなり、能く人生を樂ましめ能く人生に功あるものは、人間に連れて進歩すべき文學なり、之を以て一國民の文學は其時代を出ることを能はざるなり、時代の精神は文學を蔽ふものなり、人は周圍によりて

生活す、其聲も其目も周圍を離るゝことは斷じて之なしと云ふも不可なかるべし。

徳川氏の前又は文學は佛門の手に屬したり、而して佛門の人間を離れたりしは當時の文學の人間を離れたる大原因となりて居たりき。徳川氏の覇業を建つるや、恰も漢土に於て儒教哲學の勃興せし時の事として文學の權を僧侶の手より奪ひ取る。同時は儒教の趣味を滿潮の如く注ぎ込みたり。然るに徳川氏の覇業は性質の革命にあらざりて形骸の革命に止まりしが故に、從つて起りたる文學の革命も、侶の手より儒者の手より渡りたるのみにして、其性質に於ては依然として國民の一半に充つべきものにてありたり。疑もなく文學は此時代より復興したり。然も其復興は佛と儒との入れ代りに、過ぎずして、要するに高等民種に應用さすべきものたるを過ぎざりし。之に加ふるに徳川氏は文學

を其政治の補益となすことに潜心したるが故に、儒教も亦た一種の徳川の儒教と化し了し、風化を補ひ世道を益し、徳川氏の時代に適ふべきものにあらざれば文學として世に尙ばるべからざるが如き觀をなせり。これ即ち徳川氏の時代にありて、高等民種武士の文學は甚だ倫理の圏圍に縛せられて、其圏圍内に生長したる主因なり。

然れども倫理といふ實用を以て文學の運命を縮むるは詩神の許さざるどころなり。爰に於て俳諧の頓かに成熟するあり、更に又た戯曲小説等の發生するあり、戦亂罷んで泰平の來る時、文運は必らず暢達すべき理由あり、然れども其理由を外にして徳川時代の初期を視る時は、一方に於て實用の文學大に奨勵せらるゝ間に、他方に於ては單に快樂の目的に應じたる文學の勃として興起したるを視るべし。武士は倫理に捕はれたり、而して平民は自由の意志に誘はれて、放縱なる文學を形成

せり。爰に至りて平民的思想なるもの、始めて文學といふ明鏡の上に照り出づるものあり。これ日本文學史に特書すべき文學上の大革命なるべし。

吾人は此處に於て平民的思想の變遷を詳論せず、唯だ讀者の記憶を請んとするとは斯の如く發達し來りたる平民的思想は人間の精神が自由を追求する一表象にして、その歸着する處は倫理と言はず、放縱と言はず、實用と言はず、快樂と言はず、最後の目的なる精神の自由を望んで馳せ出たる最始の思想の自由にして遂に思想界の大革命を起すに至らざれば止まざるなり。

維新の革命は政治の現象界に於て舊習を打破したると萬目の公認するところなり。然れども吾人は寧ろ思想の内界に於て遙かに偉大な革命を成し遂げたるものなることを信せんと欲す。武士と平民とを一團の國民となしたるもの實は此革命なり。長く東洋の社界組織に附帶せし階級の繩を切りたる者此革命なり。而して思想の歴史を攻究する順序より言はゞ吾人はこの大革命を以て單に政治上の活動より生じたるものと認むる能はず。自然の理法は最大の勢力なり。平民は自ら生長して思想上に於ては最早舊組織の下に默從することを得ざる程に進みてありたり。明治の革命は武士の劍鎗にて成りたるが如く見ゆれども、其實は思想の自動多きに居りたるなり。

明治文學は斯の如き大革命に伴ひて起れり。其變化は著るし。其希望や大なり。神神の自由を欲求するは人性の大法にして、最後は到着すべき所は、各個人の自由であるのみ。政治上の組織に於ては、今日未だ此目的の半を得たるのみ。然れども思想界には抑制なし。之より日本人民の往かんと欲する希望いづれにかある愚なるかな。今日に於て舊組織

の遺物なる忠君愛國などの岐路に迷ふ學者請ふ刮目して百年の後を見ん。

變遷の時代

明治文學
管見之三

殘燈もろくも消えて徳川氏の幕政空しく三百年の業を遺し、天皇親政の曙光漸く昇りて、大勢頓かに一變し、事々物々其相を改めざるはなし加ふるに物質的文明の輸入堤を決するが如く、上は政治の機關より、下萬民の生活の状態に至るまで千枝万葉悉く其色を變へたり。

舊世界の預言嘗なる山陽、星巖、益軒、息軒等の巨人は或は既に墳墓の中に眠り、或は時勢の狂濤に排されて、曉明星光薄く、而して、横井、佐久間、藤田、吉田等の改革的偉人も亦た相襲ぎて歴史の卷中に没し去り、長劍を横へて天下を跋渉せし昨日の浪人のみ時運の歡迎するところとなり。

りて、政治の樞機を握り、既に大小の列藩を解綬し、續いて武士の帶刀を禁じ、士族と平民との名義上の區別は置けども普天率土同一なる義務と同一なる權利とを享有し、均しく王化の下に沐浴することとはなれり。

文學は泰平の賜物なり、戦亂の時代にありては文學は必らず活動世界を離れたる場所に潜逸するものなり、足利氏の末世に於て即ち然り。然れども維新の戦亂は甚だ長からず、足利氏の末路に於て文學の庇護者たりし佛教は此時に至りては既にその活力を失ひて再び文學の庇護者たる名譽を荷ふ能はず、文學は却つて活動世界の從僕となりて、勤王家、慷慨家等の名士をして其政治上の事業に附帶せしむるに至りぬ。此處にて一言すべきことあり、吾人は文學なる者をして何時の時代に於ても必らず政治と離隔せしめざるべからずと論ずるものにあら

す。文學は時代の鏡なり、國民の精神の反響なり、故に天下の蒼生が朝夕を安すること能はざる曉に當りて、超然身を脱して心を虚界に注ぐべしとするにあらず、必竟するに詩文人は其原素に於ては兵馬の人と異なるなきなり、之を詩人に形り、之を兵士に形るものは時代の國民は常に活動を欲するものなり、國民は常にその巨人を造るなり、國民は常にその巨人によつて其精神を吐くものなり、國民は常に其精神を吐きて盛衰の運を迎ふるものなり、精神の枯るゝ時、巨人の隠るゝ時、活動の消ゆる時、國民は既に衰滅の徴を呈するものなり、之を以て、巨人は必ず國民の被造者にして、而して更に復た國民の造物者たらずんばあらず、國家事多ければ必ず能く天下を理する人起るなり、國家徳乏しければ必ず聖浄なる君子世に立つなり、國家安逸ならば必ず彼の一國の公卿も云はるべき詩文の人起るなり、若し此事なくは國家は半ば死せるなり、人心は半ば眠りたるなり、希望全く無き有様に近きなり、讀者よ誤解する勿れ、吾人は偏狹なる理論を頑守するものにあらず、吾人は國民をして出來得る丈自由に其精神を發揮せしめんことを希望するものなり、宗教に哲學に、將た文學に、國民は常に其耳を傾けてあるなり、而して時代なる第二の造化翁は國民を率ひてその被造物なる巨人の説教を聞かしむるなり。

明治初期の思想は實に第二の混沌たりしなり、何が故に混沌といふ、看よ從來の紀綱は全く弛みたりしに、あらずや、看よ天下の人心はすべて、の舊世界の指導者を失ひて、就いて聽くべきものを有たざりしにあらずや、看よ儒教道德の大半は泰西の新空氣に出會ひて玉露のはかなく、朝暉に消ゆるが如かりしに、あらずや、然れども此混沌は原始の混沌の如くならず、速に他の組織を孕まんとする混沌なり、速に他の時代に

入らんとする混沌なり、而して此混沌の中にありて、外には格別の異状を奏せざるも、内には明らかに二箇の大潮流が逆巻き上りて、一は東より、一は西より必らず或處にて衝當るべき方向を指して進行しつゝあるを見るなり。

吾人をして此相敵視せる二大潮流を観察せしめよ。

極めて解り易き名稱にて之を言へば其一は東洋思想なり、其二は西洋思想なり、然れども此二思想の内部精神を討ぬれば、其一は公的の自由を経験と學理とによりて確認し且握取せる共和思想なり、而して其二は長上者の個人的自由のみを承認して國家公共の獨立自由を知らず、經驗上にも學理上にも國家には中心となりて立つべきものあるを識れども、各個人の自己に各自の中心あるとを認めざる族長制度

明治の革命は既に貴族と平民との堅壁を打破したり、政治上既に斯の如くなれば國民内部の生命なる思想も亦迅速に政治革命の跡を追躡したり、此時に當つて横合より國民の思想を刺撃し、頭を擧げて前面を眺めしめたるものこそあれ、何を何ぞと云ふに、西洋思想に伴ひて來れる寧ろ西洋思想を抱きて來れる物質的文明之なり。

福澤諭吉氏が「西洋事情」は寒村僻地まで行き渡りたりと聞けり然れども泰西の文物を説教するものは泰西の機械用具の聲にてありき、一般の驚異は自からに崇敬の念を起さしめたり、文武の官省は洋人を聘して改革の道を講じたり、留學生の多數は重く用ひられて一國の要路に登ることとなれり、而して政府は積年閉鎖の夢を破りて外交の事漸く緒に就くに至れり、各國の商賈は各開港場に來りて珍奇實用の器物をひさげり、チヨンマゲは頑固といふ新熟語の愚弄するところとなれ

り洋服は名譽ある官人の着用するところとなれり。天下を擧て物質的文明の輸入に狂奔せしめ、すべての主觀的思想は舊きは混沌の中に長夜の眠を貪り、新らしきは春草未だ萌ゆるに及はずしてせしむるなきイヌラエル人は荒原の中にさすらへて靜に命運の一轉するを俟てり。斯の如き變遷の時代にありては、國民の多數はすべての預言者に聽かざるなり。而して思想の世界に於ける大小の預言者も亦た國民を動かすに足るべき主義の上に立つこと能はざるなり。之を以て思想界に、若し勢力の尤も大なるものあらば其は國民に向つて極めて平易なる教理を説く預言者なるべし。再言すれば敢て國民を率ひて或處にまで達せんとする預言者は斯かる時代に希ふ可からず。巧に國民の意向に投じ、詳かに其の傾くところに從ひ、或意味より言はば國民の機嫌

吾人は小説戲文界に於て、假名垣魯文翁の姓名を没する能はず、更に高品なる戲文家としては成鳥柳北翁を推さざるべからず。蓋し魯文翁の如きは徳川時代の戲作者の後を襲ぎ、而して此の混沌時代にありて放縱を極めたるもののみ、柳北翁に至つては純乎たる混沌時代の産物にして、天下の道義を嘲弄し、世道人心を抛擲して、うろたへたる風流に身をもちくづしたるものなり。吾人は敢て魯文柳北二翁を詰責するものにあらず、唯だ斯かる混沌時代にありて、指揮者をもたざる國民の思想に投合すべきものは悲しくも斯る種類の文學なることを明言するのみ。眼を一方に轉すれば、彼三田翁が着々として思想界に於ける領地を擴げ行くを見るなり。文人としての彼は孳々として物質的知識の進達を助けたり。彼は泰西の文物に心酔したるものにあらずとするも、泰西の外觀的文明を確かに傳道すべきものと信じたりしと覺ゆ。教師とし

ての彼は實用經濟の道を開きて人材の泉源を造り社會各般の機務に
應ずべき用意を嚴にせり故に泰西文明の思想界に於ける密雲は一た
び彼の上に簇まりて而して後八方に散じたり彼は實に平民に對する
預言者の張本人なり前にも言ひし如く維新の革命は前古未曾有の革
命にして精神の自由を公共的に振分けんとする革命にてあれば此際
に於て尤も多く時代に需めらるべきは此目的に適ひたるものなるが
故に其第一着として三田翁は皇天の召に應じたるものなり然れども
吾人を以て福澤翁を崇拜するものと誤解すること勿れ吾人は公平に
歴史を研究せんとするものなり感情は吾人の此場合に於て友とする
ものにあらず吾人は福澤翁を以て明治に於て始めて平民間に傳道し
たる預言者なりと認む彼を以て完全なる預言者なりと言ふにはあら

福澤翁には吾人純然たる時代の驕兒なる名稱を呈するを憚らず彼
は舊世界に生れながら徹頭徹尾舊世界を抛げたる人なり彼は新世界
に於て擴大なる領地を有すると雖その指の一本すらも舊世界の中に
置かざりしなり彼は平穩なる大改革家なり然れども彼の改革は寧ろ
外部の改革にして國民の理想を嚮導したるものにあらず此時に當つ
て福澤氏と相對して一方の思想界を占領したるものを敬宇先生とす
敬宇先生は改革家にあらず適用家なり靜和なる保守家にして然も
泰西の文物を注入するに力を效せし人なり彼の中には東西の文明が
狭き意味に於て相調和しつゝあるなり彼は儒教道教を其の末路に救
ひたると共に一方に於ては泰西の化育を適用したり彼は其の儒教的
支那思想を以てスマイルの自助論を崇敬したり彼に於ては正直なる
採擇あり熱心なる事業はなし温和なる崇敬はあり執着なる崇拜はな

し彼をして明治の革命の迷兒とならしめざるものは此適用此採擇此崇敬あればなり。多數の漢學思想を主意とする學者の中に挺立して能く革命の氣運に馴致し、明治の思想の建設に與つて大功ありしものは實に斯る特性あればなり。改革家として敬宇先生は無論偉大なる人物にあらざるも、保守家としての敬宇先生は、少くも思想界の一偉人なり。舊世界と新世界とは彼の中にありて、稀有なる調和を保つことを得たり。

福澤翁と敬宇先生とは新舊二大潮流の尤も視易き標本なり、吾人は極めて疎畧なる評論を以て此二偉人を去らんとす。爰に至つて吾人は眼を轉して政治界の變遷を觀察せざるべからず。

政治上の變遷

明治文學
卷四

族長制度の真相は蜘蛛網なり。その中心に於てその制度は適するすべの精神を蒐むるなり。而して數百數千の細流は其中心より出で、金環を周綴し、而して又た再び其の金環より中心に歸注するものなり。斯の如き真相は吾人之を我が封建制度の上にも同じく認むるなり。歐洲各國の歴史が一度經過したる封建制度と我が封建制度との根本の相違は蓋し此點に於て存するなり。然れども尤も多く、族長制度的封建を完成したるは、之を徳川氏に見るのみ。足利氏は終始事多くして制度としては何の見るべきところもなし、北條氏は實權は之を保有せしにせよ、其状態は恰も番頭の主家を攝理するが如くなりしなり。源家に至りては極めて規模なく、極めて經綸なきものにして、藤原氏の如きは暫らく主家を横領したる手代のみ、藤原氏の時代には政權の一部分は猶皇室に屬したり。藤原北條氏の時代に於ては政權は既に大方武門に

歸したりと雖、なほ文學宗教等は王室の周邊にあつたり降つて徳川氏に至りては雄大なる規模を以て政治をも宗教をも文學をも悉くその統一權の下に集めたり。徳川氏は封建制度を完成したり、その完成とは即ち悉皆日本社會に當て嵌めたるものにして、再言すれば日本種族の精神が其制度に於て満足を見出すほどに完備したるなり。

徳川氏は封建としては、斯の如く完備したる制度を建設したり。故に徳川氏の衰亡は即ち封建制度の衰亡ならざるべからず。日本民權は徳川氏に於てすべての封建制度の經驗を積みたり、而して徳川氏の失敗に於てすべての封建政府の失敗を見たり、天皇御親政は即ち其の結果なり。

徳川氏の失敗は封建制度の墜落となれり。明治の革命は二側面を有す、其の一は御親政にして其二は聯合統治の治者なり。更に論説すれば、

方に於ては武將の統御に打勝ちたる王室の權力あり、他方に於ては、一團の統治亂れて聯合したる勢力の勝利あり、制伏者として天下を治めたる武斷的政府は徳川氏を以て終りを告げ、廣き意味に於て國民の輿論の第一の勝利を見たり、而して之を促したるものは外交問題なりしことを忘るべからず。

凡そ外交問題は國民の元氣を煥發するものはあらざる也、之なければ放縱懶惰安逸虚禮等に流れて覺束なき運命に陥るものなり。徳川氏の天下に臨むや法制嚴密にして注意極めて精到、之を以て三百年の政權は殆ど王室の尊嚴をさへ奪はんとするばかりなりし、然るに彼の如くもろく仆れたる者は、好し腐敗の大に中に生じたるものあるにもせよ、吾人は主として之を外交の事に歸せざるを得ず、而して外交の事に就きて、蓋し國民の元氣の之に對して勃として興起したることを

以て徳川氏の根柢を抜きたる第一因とせざるべからず。

國民の精神は外交の事によつて覺醒したり。其結果として尊王攘夷論を天下に瀾漫せしめたり。多數の浪人をして孤劍三尺東西に漂遊せしめたり。幕府衰亡の顛末は櫻痴居士の精細なる叙事にて其實況を知悉するに足れり。吾人は之を詳論するの暇なし。唯だ吾人が讀者に確かめ置きたき事は、斯の如く覺醒したる國民の精神は、嘗に徳川氏を仆したるのみならず、從來の組織を碎折し、從來の制度を擊破し、盡くすにあらざれば満足すること能はざること之なり。

明治政府は國民の精神の相手として立てり。國民の精神は明治政府に於て其の満足を遂げたり。爰に至つて外交の問題も一ト先づ其の局を結びたり。明治六七年迄は聯合したる勢力の結托鞏固にして、専ら破壊的の事業に力を注ぎたり。然れども明治政府の最初の聯合體は、建設的の聯合組織にして、破壊すべき目的の狭まくなりゆくと共に、建設すべき事業に於て相撞着するところなき能はず。爰に於て征韓論の大破綻あり、佐賀の變、十年の役等は蓋し其の結果なるべし。之よりして政府部内にあるすべての競争は聯合體より單一體に趣かんとする傾向に基けり。凡ての専制政體に於て此事あり、吾人は獨り明治政府を怪しまざるなり。

吾人の眼球を一轉して、吾國の歴史に於て空前絶後なる一主義の萌芽を觀察せしめよ。

即ち民權といふ名を以て起りたる個人的精神是なり。この精神を尋ぬる時は、吾人奇くも其發源を革命の主因たりし精神の發動に歸せざるべからざる數多の理由を見出すなり。渠は革命の成功と共に一たびは沈靜したり。然れども此は沈靜にあらずして潜伏なり。革命の成る

までは、皇室に對し國家に對して起りたる精神の動作なりき。既に此目的を達したる後は、如何なる形にて、其動作をあらはすべきや。

國民は既に政治上に於ては舊制を打破して萬民俱に國民たるの權利と義務を擔へり。この「權利」と「義務」は自からに發達し來れり。權義の發達は即ち個人的精神の發達なり。材能あるものは登用して政府の機務を處理することゝなれり。而して材能なきものと雖も一村一邑に獨立したる權義の舞臺となりて、個人的の自由を享有するものとなれり。富の勢力は臆かに上騰したり。アピリチャーの榮光漸くあらはれ來れり。必要は政府を促がして法律の輸入をなさしめたり。之を要するに個人的精神は長大足の進歩を以て狭き意味に於ける國家的の精神の領地を掠め去れり。國民の自由を保護すべき武器として、言論集會出版等の勢力漸くにして世に顯はれたり。政府未だ如何にして是等の新傾向に當

るべきかを知らざりしなり。明治政府はひたすら聯合より單一に趣かんこと、意を鋭くしたり。十年の役は聊か其目的を達したりと雖、なほ各種の異分子の相疾惡するもの政府部内に蟠據するあれば、表面は堅固なる組織の如くなれど其實極めて不安心なる國躰なりと云はざるを得ず。

他界に對する觀念

悲劇必らずしも悲を以て旨とせず、厭世必らずしも厭を以て趣とせず、別に一種の抜くべからざる他界に對する自然の觀念の存するものあり、この觀念は以て悲劇を人心の情世界に愬へしめ、厭世を高遠なる思想家に迎へしむ、人間ありてよりこの觀念なきはあらず、或は遠く或は近く、大なるものあり、小なるものあり、宗教この觀念の上に立ち、詩想

この觀念の糧に活く。

この觀念は世界の普通性なり、而してこの觀念あると共に離る可からざるものは、この觀念に二元性^{デュアルイズム}ある事なり、或は善惡と云ひ、或は陰陽と言ひ、或は光暗と云ふが如き、ベルシヤのむかしに、アームズトの神アハメルの神ありし如く、イスラエルのむかしに、エホバ神と惡魔とを對比せし如く、顯著なると顯著ならざると、一神と多神との區別あるとあらざるとに拘らず、彼の元を二にするの性は此觀念に離れざるなり。凡そ詩歌あるの國に於て鬼といふ字のあらざるはなかるべく、神といふ字のあらざるはなかるべし。コメデイ、或は鬼神なきの國にも發達するを得ん、トラゼナイに至りては必らず鬼神なきの國に興るべからず、シユレーゲルも論じて古神學は希臘悲劇の要素なりとは言へり、げにや

物にてはあらざりしならむ。

フエーリイあり、エンゼルあり、セイレンあり、スヒンクスあり、或は空中に棲めるものとし、或は地上の或奥遠なるところに住めりとなす、其に他界に對する觀念なり、遠近は世界の廣狹によりて差ありしのみ、或は聖美なるもの、或は毒惡なるもの、或は慈仁なるもの、或は犍猛なるもの、宗教の變遷、思想の進達に従ひて其形を異にするが如し、雖、要するに二岐に分れたる同根の觀念なり。

ゲーテのメヒストフエリスを捕捉して其曲中に入らしむるや、必ずしも斯の如き他界の靈物實存せりと信せしにもあらざるべし、余が他界に對する觀念を論じて詩歌の世界に鬼神を用ふる事を言ふも、強いて他界の鬼神を感信するにはあらず、詩歌の世界は想像の世界にして、靈あらざるものに靈ありとし、人ならざるものに人の如くならしめ、

實ならざるものを實なるが如くし、見るべからざるものを見るべきものとするは、此世界の常なり、萬有教あらざる前に此世界には既に萬有教の趣味あり、形而上の哲學あらざる前に此世界には既に形而上の觀念あり、想像は必らずしもダニエルの夢の如くに未來を曉らしむるものにあらざるも、朝に暮に眼前の事に醒醒たる實世界の動物が冷嘲する如く無用のものにはあらざるなり、漠々茫々たる天地、英國の大詩人をして、

There are more things in heaven and earth,

Than are dreamed of in your philosophy.

Horatio.

と畏れしめたるもの豈偶然ならんや。

裡に産れたり、其來るや極めて嚴肅に極めて凄愴なり、恰も來らざるべからざる時に來るが如く、其去るや極めて靜寂なり、極めて端整なり、恰も去らざる可からざる時に去るが如し、來るや他界より歩み來りたる跡を隠さず、去るや他界に去るの意を蔽はず、極めて熱熾なる悲劇の真中に、極めて幽玄なる光景を描き出す、茲に於て平生幽靈を笑ふ者と雖、悚然として人界以外に畏るべきものあるを識り、惡の秘し遂ぐべからざるを悟る、彼一篇より幽靈の作意を除き去らば、いかに、恐らくはシエキスピニア遂に今日のシエキスピニアにあらざりしなるべし。

長足の進歩をなせる近世の理學は、詩歌の想像を殺したりといふものあれど、バイロンのマンフレッド、ギョーテのフォウストなどは、實に理學の外に超絶したるものにあらずや、毒鬼を假來り自由自在にテグイシヨンの毒藥を働かせ、風雷の如き自然力を縦にする鬼神を使役し

て、アルプス山に玄妙なる想像を構へたるもの、何ぞ理學の盛ならざりし時代の詩人に異ならむ。その異なるどころを尋ねれば、古代鬼神と近世鬼神との別あるのみ、詩の世界は人間界の實象のみの占領すべきものにあらず、晝を前にし夜を後にし、天を上にし地を下にする無邊無量無方の娑婆は即ち詩の世界なり、その中に遍滿するものを日月星辰の見るべきものしみにあらずとするは自然の憶度なり、生死は人の疑ふどころ、靈魂は人の惑ふどころ、この疑惑を以て三千世界に對する憶度に加ふれば、自からにして他界を觀念せずんばあらず、地獄を説き天堂を談ずるは小乘的宗教家の癡夢とのみ思ふなかれ、詩想の上に於て地獄と天堂に對する觀念はと緊要なるものはあらざるなり。

新教勃興後の基督教國は一般に新活氣を文學に加へたり、其然る所以のものは基督のみ是を致せしにあらず、惡魔も興りて力あるなり。

を換へて云へば、聖善なる天力に對する觀念も、邪惡なる魔力も共に人間の觀念の區域を擴開したるものにして、一あつて他なかるべからず、基督の神性は東洋の唯心的思想が達せしむる能はざるところに觀念を及さしむると共に、サタンの魔性は東洋の惡鬼思想の到らざるところまで觀念を達せしむ。一神教の裡面は一魔教なり、多神教の裡面は即ち多鬼教なり、一神教には中心の權あるが故に中心の善美あり、是と同時に一魔教にも中心の統御あるが故に中心の毒惡あり、一のポジチーフに對して一のネガチーフあり、多のポジチーフに對して多のネガチーフあるは當然の理なり、斯の如くなるが故に、歐洲諸國に行はるゝ詩想は日本に求むべからず、善美なるものに對する觀念も醜惡なるものに對する觀念も、中心を有せず焦點を有せざるが故に、遠大高深なる鬼神を詩想中に産み出す事を得ざるなり。

漫然語を爲すものあり、曰く、我國にも幽玄高妙なる想詩を構ふるに
足るべき古神學あるにあらずやと。余を以て是を見れば我國の古神學
は或は俗を喜ばすべき奇異譚を編むには好材料たるべきも到底所謂
幽玄を本とする想詩を構ふるに適するものならず。其第一の理由は到
底今日を以て往古の古神學を用ふる事能はざること是なり、即ち古神
の詩歌に入るは少くも古神に對する信仰ある時代にあらざれば不可
なり、フオウストを構へたるギョオテは近世の鬼神を中古の物語に應
用したるなり、古代の鬼神を近代の物語に倣めて玄妙なる識想を翹へ
んとするは到底爲すべからざる事なり、再言すれば我國の古神は既に
文學上に於て死神なり、いかなるシニヤスの力を以ても復活せしむべ
からざればなり、其第二の理由は我國の古神は靈軀にあらずして人間
なること、是なり、出世自在の神通力あるにあらず、宇宙萬物を統制する

ものにあらず、報罰の全權を掌握するものにあらず、其天界に領有する
ところ多からず、シニヤスの力ありとも是を假用するに道なからむ、第
三の理由は、其複數なること、是なり、前に言ひたる事あれば重ねて説か
ず、斯の如く我邦の文學は古神學に惠まるゝところ極めて少なし。

佛教侵來以後の日本は、他界に對する觀念の發達大に著るしきを示
せり、然れども想像的鬼神の輸入あると共に一方に於ては、萬葉時代に
行はれたる單純なる、自然力に對する恐怖を其心外無法の斧を以て破
碎したり、精靈の思想は以て幽靈の新題目を文學に加ふるところあり
しと雖、一方に於ては輪轉あり、無常あり、寂滅あり、以て人間の思慕を截
斷し、幽奥なる觀念を遮るに足りしなり、佛教文學の精粹と呼ばれたる
謠曲の中に極めて普通なる幽靈の思想は人間の喜怒哀樂等の情意に
動かされて浮き出るものにして、人間を其儘なり、彼の Be it the host of

Heavenと冒頭に書出して、幽霊と他界の悪霊と協合したるものゝ如くに見はす者に比す可きにあらず、況んや狂公子のみには見へて其母には見へざる如き妙味に至りては到底わが東洋思想の企及する所にあらざるなり。母にのみ見へて公子に見へざる一事は我が戯曲の中にも其例を得るに難からず、然れども怨恨する目的物に見へずして狂公子にのみ見ゆるは其倫を我文學に求むるを得ず。天界と地界と所を異にするが故に、容易に其形を現すること能はざるは幽霊なり、其現するは主觀的願欲を以て現するにあらず、客觀的壓抑によつて現す、自由の意志を以て現するにあらず、自然の傾として現せしなり、ハムレットの幽霊はソニアスの力のみにて然るにあらず、その東洋の幽霊と相異なるどころ、自から其他界に對する觀念の遙に我と違ふところあればなり。

物語時代の竹取、謡曲時代の羽衣、この二篇に勝りて我邦文學の他界

に對する美妙の觀念を代表する者はあらず、而してこの二篇の結構を檢し、その仙女の性質を察するに、兩者共に月宮に對する人間の思慕を化躰せしに過ぐるなし。竹取の仙女は人界に生れて人界を離れ、羽衣の仙女は暫らく人界に止まりて人界を去れり、共に歸るところは月宮なり。蓋し人界の汚濁を厭ふの念はいかなる時代にも、いかなる人種にも抽くべからざるものなるが故に、他界を冥想し美妙を思欲するの結果として心を月宮に寄するは自然の理なれども、この冥想この觀念の月宮にのみ凝注したるは我文學の不幸なり。月宮は有形の物なり、月宮は宇宙の一小部分なり、人界に近き一塊物なり、その中には自在力あらず、その中には大魔力あらず、無邊無涯の美妙を支給すべきにあらざるなり。故に月宮を美妙の觀念の中心としたる我文學は、前述二篇に就きて曰ふ一神教國に於ける宇宙萬有の上に臨める聖善なるものを中心と

して萬有趣味の觀念を加へしめたるものに及ぶ能はず。竹、羽、二篇は實に固有の古神思想と佛教思想とを併せ備へたるものなるに、その結果斯の如くなりとせば我邦理想詩人の前途豈惜然ならざらんや。嗟峨のやの夢幻境をも参考あらん事を請ふ。

我風流吟客を迷はせたるもの雪、月、花の外はあらず。此一事も亦た以て我文學の他界に對する美妙の觀念に乏しきを證するに足るべし。我文學を繊細巧妙にならしめて崇高壯大にならしむる能はざりしもの必竟するに他界の觀念なくして接近せる物にのみ寄頼したればなり。

我文學に、變愛なるもの、甚だ野鄙にして熱着ならざりしも、亦他界に對する觀念の缺乏せるに因するところ多し。もろくの星くづを君の姿にしてなどやうなる詞は到底我詩界に求むること能はじ。實際にのみ馳求する思想は高遠なる思慕を産まず。我戀愛道の肉情を先に

して眞正の愛情を後にする所以茲に起因するところ少しとせす。

少時劇に誘はれて大江山の鬼を觀たりし事あり、三尺の童子たりし時にすら畏怖の念よりも寧ろ嘲笑の念を抱きたりしを記憶す、而して大江山の鬼は土蜘蛛等と共に中古の鬼物なり、是を彼のバツグヒーア、ウィツナなどに比較せばいかに、その妖魅力の差違いかに遠きかは一見して知るべし。妖魅力を鬼物自らに屬するものとするは我鬼神の思想なり、妖魅力をセタンより授けられたるものとするは一魔教の思想なり、一魔教(假に此語を作りて)の魔業は天地を包める事前にも言ひたり、我國の妖魅力は一勇者渡邊綱にも頼光にも制伏せらるゝ程の微力なり、九尾狐の妖力を以ても那須與一の一箭に斃れたり、要するに我國文學上の妖魅力は人威に勝つこと能はざるものなり、是れも亦た我邦に他界に對する觀念の乏しきを證するに足れり。

「死てふ眠の中にいかなる夢をや見るらむ」と歌ひたる詩家は泰西に
あれども、死んで仕舞へば真くらやみ」と説いたる小説家は日本にあり、
死は眠なりと言ふと、終りなりと言ふと、思想の上に莫大の差違あり、一
はエターニタイの基督教的思想より來り、一は無常迅速の佛教思想よ
り來れり。

But that dread Of something after death,

The undiscovered land from whose bottom

No traveller returns, Puzzles the will.

の如きに至りては、到底彼國の觀念に見るを得べくして、我想界に求む
る事を得ず。是も亦た我文學に他界に對する觀念の缺乏せるを告ぐる
ものなり。

忍月居士嘗て外來物を論じて、詩人が外來物の補助を借り、方便にす

べき事を言ひたる事ありしが、他界に對する觀念は補助又は方便にす
と言ふが如き卑下なる者にあらず。恰も潜者の水底に沈みて眞珠を拾
ふが如く自然界の奥に闖入し、冥想を以て他界の物を攫取し來るを以
て詩人の尊む可きところはするなり。居士が外來物を方便にする一
例として、篁村氏の「良夜」を引きたるが如きは尤も我心を得ず。さはあれ
是も亦た我國文學に他界に對する觀念の乏しきを證するに足るなり。
禪學は北條氏以後の思想を支配し、儒學は徳川氏以後の思想を支配
したる事は史家の承諾する事實なるが、この二者も亦た他界に對する
の觀念の大敵なり。禪は心を法として想像を閉ぢ、儒は實際的思想を尊
んで他界の美醜を想せず。この二者日本文學に於ける關係は一朝一夕
に論ずべきものにあらず。雖もその他界に對する觀念に不利なりし
事は明瞭なる事實なり。

我文學の他界に對する觀念に乏しきことは概前述の如し。寫實派と理想派との區別漸く立たんとする今日の文壇に、理想詩人の萬人に願求せられながら出現することの晩さも、強ち怪しむに足らじと思はるゝなり。ギョオテの想兒、フォウストと共に

Oh! if indeed spirits be in the air,

Moving twixt heaven and earth with Lord y wings,

Come from your golden " incense breathing " spheres,

Walt me to new and varied life away.

と絶叫する理想詩人遂に我文壇に待つべきや否や、疑はしと言ふべし。

處女の純潔を論ず

(富山洞伏姫の一例の觀察)

天地愛好すべき者多し、而して尤も愛好すべきは處女の純潔なるかな。もし黄金瑠璃眞珠を尊としとせば、處女の純潔は人界に於ける黄金瑠璃眞珠なり、もし人生を汚濁穢染の土とせば、處女の純潔は燈明の暗牢又向ふが如しと言はむ、もし世路を荆棘の埋むところとせば、處女の純潔は無害無痰にして、荆中又點する百合花とや言はむ、われ語を極めて我が愛好するものを嘉賞せんとすれども、人間の言語恐らくは此至寶を形容し盡くすこと能はざるべし。噫、人生を厭惡するも厭惡せざるも誰か處女の純潔に遇ふて欣樂せざるものあらむ。

然れども我はわが文學の爲又苦しむこと久し。悲しくも我が文學の祖先は處女の純潔を尊とむことを知らず。徳川氏時代の戯作家は言へば更なり、古への歌人もまた彼の靈妙なる厭世思想家等も遂に處女の純潔を尊むに至らず、千載の孤客をして批評の筆硯に對して先づ血涙

一滴たらしむ、嗚呼處女の純潔に對して端然として襟を正しふする作家、遂に我が文界に望むべからざるか。

夫れ高尚なる戀愛は其源を無染無汚の純潔に置くなり。純潔より戀愛は進む時に至道に叶へる順序あり然れども始めより純潔なきの戀愛は飄漾として浪に浮かるも肉愛なり、何の價值なく何の美觀なし。

わが國の文學史中に偉大なる理想家なしとは十指の指すところなり。近世のローマンサーなる曲亭馬琴に至りては批評家の月旦甚だ區々たり、われも今卒かに彼を論評する事を欲せず。細論は後日を期し、試みに彼が一代の傑作たる富山の奥の伏姫を觀察して見む。ロマンスツク、アイデアリストとしての馬琴の一端は之を以て窺ひ知るを得んか。

わが美文學は宗教との縁甚だ深からず、別して徳川氏の美文學を以

て然りとなす。俳道の達士桃青翁を除くの外、玄奥なる宗教の趣味を知りたる者あらず。是あるは恐らく馬琴なるべし。然ども桃青と馬琴とは其方向を異にして、佛教の玄奥に入れり、もし桃青の佛教を一言の下に評するを得ば、入道したるなり、もし馬琴の佛教を一言の下に表はすことを得ば、彼は知道なり、桃青は履踐し、馬琴は觀念せり、桃青は宗教家の如くに、佛道をその風流修行に應用したり、馬琴は哲學者の如くに、佛道を其理想中、適用したり、桃青の佛道は不立文字、そして馬琴の佛道は寧ろ小乘的なるべし。われは桃青を俳道の偉人として尊敬すると共に、馬琴を文界の巨人として畏敬せざるを得ず。

輕浮剽逸なる戯作者流を壓倒して屹然思想界に聳立したる彼の偉功の如きは文學史家の大に注目すべきところなるべし。然れども是等の事、凡てわが論題外なり、いで富山の洞に寂座し、玉ふ伏姫を觀察せむ。

八犬傳一篇を縮めて、馬琴の作意を立還らば、彼はこの大著作を二本の角の上より置けり。其一是シバルリイと儒道との混合躰にして、他の一は彼の確信より成れる因果の理法なり。全篇の大骨子を彼の仁義八行の珠數を示したるは、極めて美しく、儒道と佛道とを錯綜せしめたるものなり。その結構より言ふ時は第一輯は序卷なり、而して第二輯の第一卷は全篇の大發端にして、其實は八犬傳一部の腦髓なり。伏姫の中に因果あり、伏姫の中に業報あり、伏姫の中に八犬傳あるなり。伏姫の後の諸卷は俗を喜ばすべき俠勇談あるのみ。

伏姫に對する八房は馬琴の創作にあらずと難するものもあれど、余はむしろ此を馬琴の功に歸するものなり。試みに八房を把りて檢察して見む。伏姫を觀るの順序に於て斯くするを至當と思へばなり。

形勢をつくりと見給ひて、此犬誠に得度せり、怨むるものも後身なりとも既に佛果を得たらんには云々。

又た義實が自白の言に、かくてかの玉梓が、うらみはこゝに曝らす八房の犬と生かはりて伏姫を將て深山邊へ隠れて親も物を思はせ云々。

然れば、馬琴の八房は玉梓の後身たること、佛説に據つて因果の理を示すものなること明瞭なり。然して、この八房をして伏姫を背ひ去るに至らしめたる原因は何ぞと問ふに、事成る時は伏姫の婿にせんと言ひたる義實の一言なり。伏姫が父を諫めて賞罰は政の樞機なることを説き、一言は以て苟且にすべからざるを言ひ、身を捐て父の義を立てんとするに至りては、宛然たるシバルリイの美玉なり。爰に至りて伏姫の運命を形くりしもの二段階あり、その一は根本の因果にして佛説をそ

の儘なり、而して其二は一種のコンメンテーションにして、一言の失言より起れるものとす。其二の者は、蓋し哲學的觀念より來れるものなるべし。

馬琴を論ずるもの徒らに勸善懲惡を以て彼を責むるを知つて、彼の哲學的觀念の酬報説に論入せざる、評家の爲に惜まざるを得ず。勸善懲惡主義は支那思想より入り來りたる小説の大本の主義なれば馬琴と雖是に感染せざるを得ざるは勢の然らしむる所なるが、馬琴の中には別に勸懲主義排斥論をして侵犯するを得ざらしむるものも存するあるなり。父義實の一言を誤らざらんとて、一身の破滅を甘んずるは、シバルリの極めて美はしき玉なり、而して其の是を實行するに至りては海潮の干満整然として、理法の圓滿を描くに似たり。

伏姫の運命を形りしもの右の二者あるの外に驚くべき配合の美と

言ふべきは、八房の他の一側なり。彼は玉梓の惡靈を代表するど共に、佛説の所謂煩惱なるものを代表せり。この煩惱の人間に纏着するの實象を縮めて之を伏姫と呼べる清淨無垢の女姫に加へたり。煩惱を見ること他の多くの作家が爲す如く惑溺癡迷の人物に加ふる事をせず。極めて無邪氣にして極めて清潔なる一處女に付き纏はしむ。惡魔の魅力を假用して高潔なる舞臺を濁穢する泰西作家の妙腕は即ち馬琴が八房の中にあり。始めは伏姫徐々として八房の後に從へり、後には八房伏姫を背にして飛鳥の如くに走れり。煩惱の人間を魅するの狀を寫す。何ぞ一に斯の如く靈なる輝武健馬に鞭ちて逐へども遂に及ばず。煩惱の魔力何んぞ人間の及ぶどころならんや。雲霧深く籠めて、山洞又た人力を以て達すべき道なし。輝武の眼には川一條なり。然れども靈界の幻想を以て曰へば川一條は人界と幻界との隔てなり。横ざまに推倒れて以下

の文章深く味ふべし。

役行者は蓋し天命の使者なるべし。是に就きて言ふべき事あれど本題を離るゝ事遠ければ茲には言はず唯だ讀者と共に記憶すべきは伏姫が幼少の時に行者より得たる珠數の事なり。馬琴の深く因果の理法を信するや、普通の作家の如く行の奇跡を以て伏姫の業因を斷たしむることなく、却つて彼八行の珠玉を與へて伏姫の運命の豫言者とならしめ指導者とならしめたるもの、支那小説の古套とは言へ馬琴の妙筆にあらざれば斯の如き照應を得ること能はざらむ。

次に観察すべきは富山洞なり。富山洞はいかなる種類の幻界なるべきや。

人間世界を因果轉輪の車の上に立つものこそせば富山は馬琴の想像にあらざれば斯の如き照應を得ること能はざらむ。

富山洞のトラサエヤイにして富山はこの理法をあらはしたる舞臺なり。伏姫は世を捨てつ世に捨てられて此山に入れり。この山の真相を言へば、一方に經文あり。一方に煩惱あり。一方に仙縁あり。一方に毒業あり。一方に無染あり。一方に無慾あり。一方に菩提あり。一方に畜生あり。表面を佛界なりとせば裏面は魔界なり。表面を魔界なりとすれば裏面は佛界なり。佛が魔か、魔が佛か、一なるが如く他なるが如く、紛錯亂綜いづれをいづれと定め難し。斯くの如くにして業因果の全く盈滿するまでは、一箭の飛んで勢の盡くるまでは落ちざるが如きを示せり。これ幻界なり。權者の大方便と題するものは即ち所謂コンベンションの大法なるにあらずや。故に富山の洞を言ふ時は、馬琴の想像中に於て、因果の理法をついめたる一幻界に外ならじ。

この幻界にかの妖犬に伴はれて入りぬる伏姫はいかに。

山峽に伴はるし時の決心は身を妖犬に許せしなり。許せしとは雖も肉膚を許せしにはあらず。誠心を許せしなり。この誠心は抛げて八房の首にかしれり。渠もしこの誠心を會得すれば好し。然らざれば渠を一刃に刺殺さんとの覺悟あり。彼の感得せし水晶の珠數は掛て今なは襟にあり。護身刀の袋の緒は常に解て右手に引着けたり。法華經八軸は暫らくも身邊を離れず。而して大煩惱大業獸に向ふこと莫逆の朋友に對するが如し。誠心は非類にも許すべし。とすれど肉膚は堅く純潔を守りて畜生に許さず。一方には穢土穢物を嫌ひたまはざる佛の慈悲に似たるものあり。他方には餓鬼畜生の慾情と戰へる靈妙なる人類としての純潔あり。これ伏姫が洞に入りたる時の有様なり。

又ある時は父母の御爲に、經の偈文を謄寫して、前なる河におし流し、

あり。といふに至りては伏姫の心中既に大方の悲苦を擺脫して、澄清洗ふが如くになりたり。八房も亦た時に至りては、讀經の聲に耳を傾け、心を澄し欲を離れて、只管姫上を戀慕するの情を斷ちぬ。更に進んで、仄歩山嶮しけれども、蕨を首陽に折るの怨なく、岩窓も梅遅けれども、嫁ぎて胡語を學ぶの悲しみなし。といふに至りては伏姫の心既に平滑なり。りて苦痛全く瘥へ、眞如鏡面又た一物の存するなし。

然れども亦た煩惱の夢も驚かざる事全く無きまわらず。或一日伏姫は硯も水を滴がんとて出て、石湧を掬ひ給ふも、横走せし止水も、映る我影を見給へば、その體は人にして頭は正しく犬なり。云々。

とありて、之より月水の絶たることを説けり。

こゝも亦た因果の道法を隱微の中も示顯して至妙に達せり。月水の絶たるは、仙童に訊ふまでもなく、懷胎の徵なり。而してこの懷胎は八

犬子を生む爲にあらすして、その實宿因の満潮を示したるものなり。これよりして強く張りたる弦は弛みはしめたるなり。その體は人にして其頭は犬なりと云ふは、即ち是れ宿因の絶頂に登りたるを指すにやあらむ。

更に進みて仙童に言はせたる豫言の中に、今こそ八つの子を遣せり、八は即ち八房の八を象り又法華經の卷の數なりとあるに至りては、明らかに業と法との兩者の對峙して伏姫に臨めるを示し、遂に其宿因よりして却つて八英雄を得るに至らしめたる禍福の理法益明らかなり。同じ筆意よて成れる文字この後も見えたり、曰く、こは不思議やと取なほして、とさまかうさま見給ふと數取りの珠と顯はれたる如是畜生發菩提心の八の文字は跡もなく、いつの程よか仁義禮智忠信孝悌となりかはりていと鮮に讀まれたり。

更に又た

「やよ八房よ、わが言ふ事を能く聞けかしよに、幸なきもの二つあり又幸あるものふたつあり。則ちわなみと汝なり。己れは國主の娘なれども義を重しとする故に畜生に伴はる、この身の不幸なりしかれども穢し犯されずゆくりなくも世を遯れて自得の門と三寶の引接を希ひしかばけふ往生の素懷を遂げん。……又只汝は畜生なれども國と大功あるをもて國主の息女を獲たり。人畜の道異にしてその欲を得遂げざれども耳と妙法の尊を聴く。……おなじ流れよ身を投て共よ彼岸よ到れかし。」

といふよ到ては、平等無差別遙かよ人間を離れて菩薩の心備はれり。誠心は隠すところなく八房よ與へたり而して、不穢不犯玲瓏たるチャステイの處女、禍福の外よ卓立し、運命の鐵柵を物ともせざるは實よ

この馬琴の想兒なり。

最後に護身刀を引抜て眞一文字に掻切たる時に、一朶の白氣閃めき出で空に舞ひ上りたる八珠粲然として光明をはなつに及びて、歡ばしやわが腹に物がましきはなかりけり、神の結びし腹帯も、疑ひも稍解けたれば心にかゝる雲もなし。云々と云ふに至りては明らかに因果の結局をあらはして八房と伏姫との關係を閉ぢたり。

要するに伏姫は因果の運命にその生涯を献じたる者なり。因果は萬人を纏ひて悲苦を與ふるものなるも、萬人は其繩羅を脱すること能はずして生死の巷を彷徨す。伏姫は自ら進んでこの大運命に一身を託ねたるものなり。義は彼をこの大運命の囚獄に連れ行きたる囚吏なり。宿因は八房に代表せられて、彼を破滅に導きたるなり。破滅は又た幸福を里見の家を臨ませたるなり。凡て是等の錯綜せる哲理の外は、見々とし

てこの大作を輝かすものこそあれ、何を何ぞと曰ふに、伏姫の純潔なり。始めより終りまでの純潔なり。その純潔の誠實は通じて非類の八房を成佛せしめしは尊ぶとしと言ふも愚ろかなり。

徳川時代平民的理想

徳川氏の時代に於て其遊戯其會話其趣味を探らんもの文士の著作に如くはなし。而して文士の著作を翫味するもの武士と平民との間に、凡ての現象を通じて顯著なる相違あるとを研究せざるべからず。琴の音を知り琵琶の調を知るものは之を三絃の調に比較せよ。一方はいかに莊重にいかにか高韻なるに引きかへて他はいかに輕韻卑調なるに注意するなるべし。斯の如きは武士と平民との趣味の相違なり。謠曲を聴きたる人は淨璃理を聴かん時にこの兩者に相容れざる特性ある事に

注意するならむ。かくの如く、其能樂に於て河原演劇に於て、又は其遊藝に於て、もしくは其會話の語調に於て極めて明晰なる區別あることを知らむ。

蓋し我邦は極めて完成せる族制々度を今日まで持ち續けたるものなるからに、吾人の思想も亦た自から單純なりし事は争ふ可からざる事實なり。而して其單純なる思想は階級に應じて武士は武士の思想を繼ぎ、平民は平民の思想を受けて甲乙相共に異色をもつて生長し來りぬ。今日の我が語學に志ざすところのものが我が言語に甚だしき階級語に富めるとを言ふも元より此原因あるによればなり。ソノソッパヒツ(敬禮語)に富めるも亦たこの族制々度の完熟せるに因れること多し、是れ我國言語の特色にして、この特色は以て我邦に於ける貴族(徳川時代)にありては武士をも含ひ、平民の區界を判するに足るべし。

貴族、平民の兩階級は徳川氏の時代に入りし時大に亂れたり、徳川氏は三河武士を以て天下を制したるものなれば從來の階級は概ね壞裂したり、加るに長年の亂世に人民の位地も大に前とは異なりて從來貴族たりし者の落ちて平民の籍に投せし者の、從來平民たりし者の登りて貴族の位地を占めし者少數にてはあらざりしならむ。斯して徳川氏初代の平民は従前の平民よりは多少の活氣を帯びたりし事疑ひなし。故に彼等の思想も自から一種の特色を具備し得て、隱然武門の思想と對峙せんとするが如き傾きを生じたり。宜なるかな、我邦に於て始めて平民社界の胸奥より自然的育生の聲をこの時代に於て聞きたるや。人は元祿文學を卑下して日本文學の耻辱是より甚しきはなしと言ふもの多し。われも亦元祿文學に對して常に遺憾を抱く者なれど、彼をもつて始めて我邦に擧げられたる平民の聲なりと觀する時に、余は無量

の悦喜をもつて彼等に對するの情あり。然り俳諧の尤も熟したるもこの時代にて戯曲の行はれしも戯作の出でしも實に此時代にして而して彼等の物皆な平民社會の心骨より出でたるものなるを知らば、余は寧ろ我邦の如き貴族的制度の國に於て平民社會の初聲としては彼等を厚遇するの至當なるを認むるなり。

我國平民の歴史は始めより終りまで極めて悽惻暗淡たる現象を録せり。而して徳川氏以前にありては彼等の思想として世に存するもの甚だ微々たり、徳川氏以後世運の漸く熟し來りたるを以て爰に漸く多數の預言者を得て孚化したる彼等の思想は漸く一種の趣味を發育し來れり、然れども彼等の境遇は功名心も冒險心も想像も希望も或る線までは許されて其線を越ゆること叶はず、何事にも遮斷せらるゝ武權の屏藩ありて彼等は聲こそは擧げたれ、憫れむべき卑調の趣味に甘んせざるを得ざりしは亦た是非もなき事共なり。

幕府は學藝の士を網羅するに油斷なかりき、幕府のみ然るにあらず、その高等種族(武士)は文藝を容れて大に品性を發揚したり、當時非凡なる學士の彼等の社會に厚遇せられたる事實は少く徳川時代を知るものゝ共に認むるところなり。然るに是等學藝の士は平民に對して些の同情ありしにあらず、平民の爲に吟哦せし事ある者もあらず、平民の爲に嚮導せし事ある者もあらず、かゝるが故に既し初聲を擧るの時機は達したる平民の思想は別し大に俳道に於て其氣焰を吐けり、幕府は盛に能樂と謠曲とを奮興して代々の世主厚く能樂の大夫を遇し、而して諸藩の君主も彼等を養て、武門の士の能く謠曲を謳ふと能はざるは恥辱の如き隆運に向へり、學藝に習れず奥妙なる宗教を養はれざる平民の趣味は謠曲は底到應するを得ざるなり、故に彼等の中より自から新

戯曲の發生熟爛するありて、巢林子の時代、於て其盛運を極めたり。物語の類例へば太平記平家物語等は高等民種の中に歓迎せられたりと雖平民社界に迎へらるべき様なしかるが故に彼等の内には自ら彼等の思想に相應なる物語小説の類生れ出でたり加ふるに三絃の發明ありてより凡ての趣味の調ふに於て大に平民社會を翼け種々の俗曲なるもの發達し來れり斯くの如く諸般の差別より觀察し來れば平民は實に徳川氏の時代に於て大に其思想を煥發したるものにして族制の大隔離の餘を受けて或意味に於ては高等民種に對して競争の傾きを成し來れるなり。

まことや平民と雖も素より劣等の種類なるに、あらず。社界の大傾向なる共和的思想は斯かる抑壓の間にも自然に發達し來りて彼等の思

を具有し、一轉しては虚無的の放縱なるものとなりて以て暗に武門の威權を嘲笑せり。故に彼等は自然に政權を輕視して、幕府の紀律に繋かれざる豪放の素性を養ひ、社界全躰より視る時は一種の破壞的原素を其中に發生せしめて大に幕府を苦しめたり。制禁に遭ひたる戯作の類、遠島に處せられたる畫家の事、是が現象の一として擧ぐるに足るべし、漸く閭巷の俠客なるもの起り來りて幕政を輕侮し、平民社界の保護者となり。壓抑者に對する破壞的手腕(天知子の語を借用す)となりたるも是が一現象なりけり。

自然の傾向は人力の争ふこと能はざるものなり、從來文學なるものは獨り高等民種の境内に止まりて平民は一切思想上の自由を持たざりし如くなりしものが、臙かに元祿以降の盛運に際會して其思想界に多數の預言者を生みて自から一貫の理想を形くりたれば其理想する

紳士も其理想する美人も其理想する英雄も有り、と文學上に映現し出でたり。

こゝに注意を逃がすべからざる一大現象は遊廓なるものゝ大にこの時代に榮へたるとなり。難波或は西京には古るくよりこの組織ありしと雖江戸にてこの現象の大にあらはれたるは慶長の頃かぞを聞く(慶長見聞記に據る)蓋し亂世の後人心漸く泰平の樂娛を翹へ、彼の芒々たる葦原(今日の吉原)に歌舞妓見世物等各種の遊觀の供給起り、これに次いで遊女の歴史に一大進歩を成し高厦巨屋を并べて此の葦原に築かれ、都には月花共に此里にあらねばならね様になれり。凡そ女性の及ぼす勢力はいづの時代にも侮るべからざるものなり、別して所謂紳士風なる者を形成するには偉大なる勢力ある事疑べからず。故に、平民の中にかかし紳士の理想は、この遊廓の勢力に、よかりて、變化

を經たり讀者もし難波及び京都に出でし著作に就きて彼等の紳士なるものを尋ね見れば思ひ半ばに過ぐるこゝあらむ。必らずしも巢林子以下の諸輩を引照するに及ばざるべし。遊廓は一個の別天地にして其特有の粹美をもつて其境内に特種の理想を發達し來れり、而して煩惱の衆生が歸依するに躊躇せざるはこの別天地内の理想にして一度脚を此境に投じたるものは必らずこの特種の忌はしき理想の奴隸となるなり。斯の理想は世上に滿布したり、この理想は平民社會に擴がれり、むしろ高等民種の過半をも呑みたり、或時は通と言ひ或時は粹といふもの此理想に外ならざるなり、而して此理想なるものは即ち平民社會の紳士を作りし潜勢力にして平民紳士の服裝舉動會話趣味この理想に基づかざる事甚だ稀なり。

眼を轉じて巢林子に次ぎて起れる戯曲界の相續者を見れば題目と

して取るところ、平民社會の或一種の要求を充たすものあるを見るべし。之を聞く河原乞兒の尤も幼稚なりし時に其趣好は戰國的の勇壯なるローマンス風のものにて、例せば盜賊を取りて主人公となし、之れに慈憐の志を深うせしめ、疆を捍しぎ弱を助くる義氣に富ましめ、以て戰國に遠からぬ時代の人心に翹へたる如き概して言へば不自然^{アンナチュアリズム}と過激^{エキズム}とはこの時代の演劇に缺く可からざる要素なりしとぞ。後に發達したる劇曲巢林子以後の(に)到りてもこの不自然と過激とは抜くべからざる特性となりて菅原手習傳授鑑に於て、蝶花形に於て、其他幾多の戯曲に於て八九歳の少童が割腹したり孝死するなぞの事、戯曲に特有なるエンサシアズムにてもあるまじき程の過激に流れたり。こゝに一言すべきは、平民に特種^{スペシャル}の思想生じたりとはいへど、思想は時代の兒に於ける事勿論なれば、彼等の思想も自ら封建的武勇^{フェイダル}の^{スピリット}を武士の影より掬養し得たりし事を思はざるべからず。故に彼等の中より起りし預言者も一は彼等の趣味を投じ、一は己れの所見を従ひて自から忠孝即ち武士の理想をもつて平民に及ぼす事なき能はず。これ即ち封建制度の普通なる現象にてあるなり。尙ほ言を換へて曰へば、封建制度は獨り武士のみ、其精華なるシバリを備へたるよあらず、平民も亦た之を摸擬せり、然り平民の内にもシバリは具はりたり、少なくとも俠勇の理想彼等の中より浸潤して武士の間より降りし雨は平民までも濕ほしたること疑ふべからざるの事實とす。

かく説き來らば平民社會は「粹」といふものゝ外に強大なる活氣、むしろ平民の俠勇と號するものあることを知らむ。而して我徳川時代に於ける平民の位地を観察すること前陳の如くなりとせば、彼等は「其粹」をも、其「俠」をも偏固なる、矮少なる、むしろ卑下なる理想となしたること

も亦明らかならむ。

英國のチョーサーは同國に於て始めてシバルリーの光芒を放ちたる詩人なり、然して其吟詠より上りたるシバルリーは武門の内なるシバルリーにして平民の内より其筆鋒を向けざりし、蓋し彼の歴史は我歴史よりあらず、彼の貴族は我の貴族の如く、平民と離れたるにあらず、彼の平民は我平民の如くに貴族に遠き者にあらず、加ふるに彼には平民と貴族とを繋げる宗教の威靈ありて、教堂に集まる時に貴族平民の區別を無みしたり、而して我にはこの大勢力あらず、宗教にも自からなる階級ありて、印度の古時をうつし出しければ、これも我が平民を貴族より遠ざくるの助けをなせし、事明らかなり、彼シバルリーは朝廷との關係淺からずして、其華奢麗澤も自からに王氣を含みたり、而して平民社界には之に反して、政權に抗し、威武に敵する氣稟あるシバルリーを成

せり、彼のシバルリーには戀愛の價值高められて、俠は愛と其轍を雙べつゝ、自から優美高讚なる趣致を呈せり、我が平民社會に起りしシバルリーは其セントルマンシップに於て既に、女姓を遊戯的玩弄物になし、了りたれば、戀愛なるもの甚だ價直なく、女姓のレディシップをセントルマンシップの裡面より涵養するよりは、却つて女姓をして男姓の爲すところを學ばしめて、一種の女俠なるものを重んずるに至れり、この點より於て我がシバルリーは彼のシバルリーの如く、重味あると能はず、我が紳士風は彼の紳士風の如く、優美の氣韻を稟くると能はず、女姓の天真を殺して、自らの天真をも自損せり、彼のシバルリーは我を重んじて、輕々しく死し、輕々しく生きず、我がシバルリーは生命を先づ献じて、然る後よりシバルリーを成さんとするものゝ如かりし、己れの品性は磨ぐこと多からずして、他の儀式禮法多き武門と對敵して、反動的に放縱

素朴も走りたり、宗教及び道德は彼のシバルリイは缺くべからざる要
素なりし、我が平民のシバルリイは寧ろ當時の道德組織を斥ぞけ、宗
教には縁薄きものにてありし、要するにチヨルサーとシバルリイは即
ち英國の我がシバルリイの如く暗愴たる時代に産れたるにあらず、我
がシバルリイのこゝく壓抑の反動として兇暴に對する非常的手腕と
して發したるものにはあらで、燦然たる光輝を放ち英國今日の氣風、英
國今日の紳士淑女を彼の如くになしたるも實にこのシバルリイの餘
光にてありしとを知るべし。

俠といふ文字英語にては甚だ譯し難かるべし、譯し難き程に我が歴
史上の俠は歐洲諸國のシバルリイとは異なれるところあるなり、尙し
強いてシバルリイを我が平民界の理想に應用せんとせば、粹、俠、客
の戀愛に限りてとを合せ合らしめざる可からず、俠客の妻を取りて研

究せば得るところあらむ。

我が平民界の俠客をうつして文章に録せしもの甚だ多し、われは一
々之を参照する能はず、こゝに馬琴が其俠客傳に序して曰ひし數句を
舉て其意見を窺ひ見む曰く、近世有大鳥居逸平、關東小幡隨長、兵衛皆
是閭巷俠而其所爲或未必合於義、雷立氣齊爲威福、結私交以立儷於世者
也、較諸古者道德之士不動聲色、消宇內之大變者、相去非唯霄壤而已、然氣
豪、以此至捍當世之兇暴、此戰國餘習未改其私義、廉潔以有然也、使當時無
此人、則士風自是衰、俠客之義曷可少哉……余有感焉、而無所激憤、不激不
憤、猶且傳俠客云々。

支那の大歴史家同じく遊俠傳なる一小篇をのこして曰へることあり、
今者游俠其行雖不軌於正義、然其言必信、其行必果、已諾必誠、不愛其軀、
赴士之阨、困既已存亡死生矣、而不矜其能、羞伐其德、盖亦有足多者焉。

韓非子の俠を論ずるの語に曰く、儒以文亂法、俠以武犯禁。老子は俠を談じて、大道廢、有仁義、仁義者、道之異稱也。而有似而非者、と曰ふに對して、馬琴は夫、俠之爲言、僵也、持也、輕生、高氣、排難、解孔子所謂殺身成仁者、是也、と言へり。

われは俠を上下する論を立つるにあらず、天知子及び愛山生の所論に對して、余はむしろ平民界の俠氣に同情を投ぐるの念起りたれば、聊か匆卒の説を爲し、我が平民界の「俠及び粹」の由つて來るところを穿鑿したるに過ぎず。若夫れ俠なるものを愛好するや、と問はるゝ人あらば、我は是を愛好するなりと答ふるに躊躇せざるべし。然れども、我に俠を重んずるや、と問ふ者あらば、我は答ふるところを知らず、われは實に徳川時代に平民の理想となりて、異色の光彩を放ちしこの「俠」を、其時代の平民の爲に憐れむなり、かつて、藩院長兵衛の劇を見たる時、われは

實に長兵衛の衷情を悲しめり、然れども、我は長兵衛の爲に悲しむより、寧ろ當時の平民の爲に悲しむなり。彼等平民は自ら重んずる故を知らず、自から俠客なるものをして、擅横縦暴の徒とならしめたり。俠客の俠客たる所以甚だ重しとせず、平民界に入て一種の理想となりたる跡、眞に痛むべし。

徳川時代平民的虛無思想

馬馬、三馬、源内、一九等の著書を読む時に、われは必らず彼等の中に潜める一種の平民的虛無思想の絃に觸るゝ思あり。就中一九の著書、膝栗毛に對して、しかく感ずるなり。戯文、戲墨の毒弊は、世俗の衆目を顛墮せしのみか、は作者自身等をも顛墮し去んぬ。然れども、其罪は之を獨り作者に歸すべきにあらず、當時の時代、豈作者の筆頭を借りて、其陋醜を遺

存○せ○し○も○の○に○あ○ら○ず○と○せ○ん○や○。

徳川氏の封建制度は世界に於て完全なるものゝ一と稱せらる、然れども武門の榮華は平民に取りて幸福を剝脱する秋霜なり、盆水一方に高ければ他方に低からざるを得ず、權力の積疊せし武門に自からなる腐爛生じ、而して平民社界も亦た敗壞し終れり、一方は盛榮の餘に廢れ、他方は失望の極に陥落せしなり、自然の結果はど恐るべきものはあらじ。

道德の府なる儒學も平民の門を叩くことは稀なりし、高等民種の中にすら局促たる繩墨の羈絆を脱するに足るべき活氣ある儒學に入ること許さざりしなり、精神的修養の道一として平民を崇むるに適するものあらず、偶○俳○道○の○普○及○は○以○て○彼○等○を○死○地○に○救○濟○せ○ん○と○し○け○る○も○彼○等○は○自○ら○其○粹○美○を○抛○棄○し○たり○。

禪味飄逸なる佛教は屈曲して彼等の内に入れり、彼等は神道家の如くに皇室を敬崇することを得ず、孔教を奉じて徳性を育助することも能はず、左ればとて幽玄なる佛界の菩薩に近づく事も彼等の爲し得るところにあらざり、悲しいかな佛教の中にも卑近なる教派のみ彼等の友となり、迷信は彼等を禁籠する囚牢となり、弱志弱意は彼等を枯死せしむる荒野となり、彼等をして人間の靈性を放擲して自ら甘んじて眼前の權勢に屈從せしむるに至りぬ。

自由は人間天賦の靈性の一なり、極めて自然なる願欲の一なり、然るに彼等は呱呱の聲の中より既にこの靈性を喪へるを自識せざる可らざる運命に抱かれてありたり、自然なる願欲は抑へて不自然なる屈從を學ばざる可からざるタイムの籠に投げられてありたり、人誰れか全くタイムの籠に控縛せらるゝを心地よしとするものあらむ、人誰れか

天賦の靈性を自殺せしむべき運命を幸福なりとするものあらん。沙翁
人間に斯般の一種の煩悶の抜く可からざるものあるを見て通解して
謂へらく

*For Who Would Bear the Whips and scorns of time
The Oppressor Wrong, the Proud man's contemnelly Etc.*

まことに人間は自由を享有すべき者なるよ。今日までの歴史を細閱
すれば自由を買はんとて流せし血の價と煩悶せし苦痛の量とはいか
ばかりぞや。

*Thus the native line of resolution is smilled
over the pale cast of thought Etc.*

徳川氏末世の平民實にこの煩悶を有つこと少なからざりしなり。こ
の煩悶の苦痛に堪へがたかりしなり。こゝに於てか權勢家の剛愎にし
て暴慢なる制抑を離れて別に一種の思想境を造り以て自ら縦にする
と云ふなきを得ず。この思想は余が所謂一種の平民的虛無思想の發端

したるところなり。而して十返舎一流の戲墨は實にこの種^の思想境よ
り外に鳴り出でたる平民者流の自然の聲にあらずして何ぞや。

民友子先つ頃俗間の歌謠と題する一文を作りて平民社界に行はる
ゝ音樂の調子の低くして險なるを説きぬ。民友子は時勢を洞察して歎
概の餘りに此語を吐けり、われは日本の文學史に對してこの一種の虛
無思想の領地の廣きを見て痛惻に勝へざるなり。彼等は高妙なる趣致
ある道德を其門に辭み、韻調の整嚴なる管絃を謝して容れず、卑野なる
樂調を以て飲宴の興を補ひ、放縱なる諧謔を以て人生を醜殺す。三絃の
流行は彼等の中に證をなせり、義太夫常磐津より以下短歌長歌こことく
く立ちて之れが見證者たるなるべし。われは彼等の無政府主義なり
しや極端なる共和主義なりしや否やを知らず、然れども政治上に於て
無政府主義ならずとも共和主義ならずとも思想上に於ては彼等は純

然○た○る○虚○無○思○想○を○胎○生○し○た○り○し○と○を○疑○は○す○感○む○べ○し○人○生○の○靈○存
を頭より尾まで茶にしてかゝりたる十返舎も一個の傲骨男兒なりし
にあらずや、青山を抱いて自由の氣を賦せしシルレルと我好傲骨男子
と其搖籠の中にありし時の距離幾許ぞや。

女學子は時勢に激するところありて膝栗毛の版を火かんと言へり。
我は女學子の社會改良の熱情に一方ならぬ同情を有つものなり、然れ
ども我は寧ろ十返舎の爲に泣かざるを得ざる悲痛あり、彼の如き豪逸
なる資情を以て、彼の如きセウインのウィットを以て面して彼の如く
に無○無○無○の○陋○巷○に○迷○ひ○無○無○無○の○奇○語○を○吐○き○無○無○無○の○文○字○を○弄○し○て○遂
に無○無○無○の○代○表○者○と○な○つ○て○終○ら○し○め○た○る○も○の○抑○も○時○代○の○罪○に○あ○ら○ず
し○て○何○ぞ○や。」

老人は古へを戀ひ、少年は己の時に傲る、戀ふるもの、傲るべき理の照々
たるが故に傲るにあらず、彼は「時」に欺かれ盡くして古へを思ひ、これは
「時」に弄せらるゝを知らずして空望を懸く、氣盈ち骨剛きものすら多く
は「時」の潮流に卷かれて五十年の星霜急箭の飛ぶが如くに過ぐ。

然れども社會の裡面には常に愀々の聲あり、不遇の不平となり、薄命
の歎聲となり、憤懣心の慨辭となりて、噴火口端の地底より異様の響の
聞ゆる如くに吾人の耳朵を襲ふを聽く。まことや人間社會ありてより
以來、デスコンテンションと呼べる黒雲の天の一方にかゝらぬ時はあ
らざるなり。

凡そ社會の組織封建制度はど不權衡なるものはあらず、而して徳川
氏の封建制度極めて完成したるものなりし事を知らば社會の一方に
デスコンテンションの黒雲も亦た彼の如くに廣大なりしものあらざ

りしを見るべし。その不平の黒雲の尤も多く宿るところは尤も深く人間の靈性を備へたる高尚なる平民の上にあり。訶諛佞辨をもて長上に拜服するは小人の極めて爲し易きところにして高潔なる性格ある者に取りて極めて難しとするところなり。もし今よりして當時の平民の心裡の實情を描けば、あはれ彼等は蠅蟄の苦を甘んずるにあらざれば放縱豪蕩にして以て一生を韜晦し去るより外はなかりしなり。一種の虚無思想彼等の心性上に廣大なる城郭を造りて彼等をして己れの靈活なる高尚の趣味を自殺せしめ、希望なく生命なき理想境に陥歿し入らしめたり。

天知子其の平生深く自信する精神的義侠の靈骨を其銳利なる筆尖に迸らしめて曰く、社會の不均を整ふる非常的手段として俠客なきものは俠客の性なりと。天知君の俠客論精緻を極めたれば我が爲めに其の性質を論評すべき餘地を餘さず、我は唯だ我が分る甘んじて文學的、徳川氏時代、平民者流の理想となりし侠と粹とが如何なる者なるべきやを觀察するの榮を得む。

わが徳川時代平民の理想を査察せんとするは我邦の生命を知らんどの切望あればなり。山澤を漫渉して溪澗の炎暑の候にも涸れざるを見る時に我は地底の水脈の苟且にすべからざるを思ふ。社會の外面に顯はれたる思想上の現象、注ぐ眼光は須らく地下に鑿下して幾多の土層以下に流るゝ大江を徹視せん事を要す。徳川氏の興亡は甚しく留意すべきにあらず。然も徳川氏三百年を流るゝ地底の大江我が眼前に横たはる時我は是を觀察するを樂しむ。誰か知らむ、徳川氏時代に流れたる地下の大江は、明治の政治的革新にてしがらみ留むべきものにあ

らざるを。

我が観察せんと欲する大江は其上流に於ては一線なりしかども末に至りて二派を爲せり而して其濕ほすところはナイル河の埃及に於けるが如くは我邦の平民社會を覆へり。

われ常々惟へらく至粹は極致の翼よして天地に充滿する一種の精氣なり。唯だ至粹を嚮へて之を或境地に籍むるは人間の業よして時代なる者は常々其の擇取したる至粹を歴史の明鏡に寫し出すなり。至粹は自ら落つるところを撰まず、三保の松原に羽衣を脱ぎたる天人は漁郎の爲に天衣を惜みたりしもなほ駿河遊びの舞の曲を世に傳へけり。彼は撰まず然れども彼降りて世に入るや塵芥の堆積するところを好まざるなり、否塵芥は至粹を駐むるの權なきなり、漁郎天人の至美を悟らざるは至粹の降るところに臨むとて己が理想の中心となす、自由を熱望する時代又は至粹は自由の氣となりて、ウイリヤム、テルの如き代表者の上は不朽なる氣稟をあらはし、忠節を凝れる時代又は楠公の如き、はた岳飛張巡の徒の如き、忠義の精氣を盈ちたる歴史的の人物を生ずるに至るなり。ピユリタンの興らんとする時又は至粹は彼等朴直なる田舎漢の上は望みて千載歴史上の奇觀をなし、獨逸に起りたる宗教改革の氣運の漸くルーテルが硬直誠實なる大思想に熟せんとするや至粹は直ちに入つてルーテルの聲に一種の靈妙なる威力を備へたり。

至粹は時代を作る者にあらず、時代こそ至粹を招きて自ら助くるものなれ。豪傑英雄は特に至粹のインスピレーションを享る者にてあれど、シイザルはシイザルにて拿翁は拿翁たるが如く至粹を享くる量は

同じくとも其英雄たるの質は本然に一任するのみ。時代も亦た斯の如し、時代には繼承したる本然の性質あり、之に臨める至粹の入つて理想となるは其本然の質を變ふるものにあらず。族制々度の國又は族制々度の理想あり、立憲政躰の國又は立憲政躰の理想あり、若し支那の如き族制より起りたる國に自由の精氣を求め、英米の如き立憲國に忠孝の精氣を求めなば人は唯だ其愚を笑はんのみ。

シドニイ、スペンサーの輩は好んで其理想する所に從ひてシバルリイ(俠勇)を謳へり然れどもウオーツォルス、バイロン輩の時に至りては是を爲さず、時代既に異なれば至粹も亦た異なれり、同じく理想を旨とするものにして其詩眼の及ぶところ其詩骨の成るところ各自趣向を異にす。頃者我文學界は俠勇を好愛する戯曲的詩人の起るありて、世は

るか、抑も他の理想未だ渾沌たる創造前にありて、未だ何の形をも成さざるの故か、借問す没却理想の論陣を布きながら理想詩人ドラマチストに先ちて出でんと預言し給ひし逍遙子は如何なる理想の活如來をや待つらむ。

徳川氏の時代に平民の上に臨みし至粹は如何なる理想となりてあらはれしや。我は前に言へりし如く二個の潮流あるを認むるなり。その源頭に立ちて見る時には一大江なり、其末流の岸に立ちて望めば二流に分れたり。普通の用語に從ひ我は其一を俠と呼び他を粹と呼ばむ。

何れの時代にも預言者あり、大預言者あり、小預言者あり、其宗教に其思想に彼等は代表者となり、嚮導者となるなり、彼等は己の「時」を代表すると共に己れの「時」を繼ぐべき他の「時」を嚮導するなり。イザヤは其慷慨凜冽なる舌を其「時」によりて得たり、而して其義奮猛烈なる精神をもて

次ぎの時の民を率ひたり、カアライルの批評的眼光を以て視へば、預言者は其精神を死骨と共に棺中に埋めず、巍然として他の時に靈活し、無聲無言の舌を以て一世を號令するものなり。古昔の預言者は近世に望むべからず、近世の預言者は文字の人なりと言へる、己れ自ら一預言者なるカアライルの言を信ずるを得ば、我は徳川氏時代に於ける預言者を其思想界の文士に求めざるを得ず。然り何れの時代にも或一種の預言者あるを疑はざれば、我は文士を以て最も勢力ある預言者と見るの外なきなり。巢林子戯曲ありてより、浮世を難波の渦に、心中するもの數多くなり、西鶴一流の浮世好色小説の流布してより、社會の風儀は大に紊亂せる事識者の共に認むる所なり。いざ是等平民社會の預言者に就て、その至粹を招て時代となしたる跡を尋ねて見む。

今代の難波文學は僅かに吾妻の花に反應する仇なる面影に過ぎざる

れども徳川氏の初代に於て大に氣焰を吐きたるものは彼にてありし。江戸に芭蕉起りて幽玄なる禪道の妙機を闡きて主として平民を濟度しつゝありし間に、難波には近松巢林子出でて、艶麗なる情筆を揮ひて一世の趣味を風靡したり、次いで西鶴其碩の一流立ちて、艶道の魔風限なく四方に吹き廻れり。茲に至りて難波の思想と江戸の思想と其文學上に現はれたるところを以て斷ずれば、各自特種の氣稟を備へて容易に踪跡し得べき痕を印せり。後に難波に起れる文士の多數と、後に江戸に起れる文士の多數とを取りて檢するに、同じく混和すべからざる異色を帯びしと一點の疑を挿むべからず。不知庵主人が評して不朽の戯曲家と言ひたる巢林子をもて假に江戸に生れしめばいかならむ、深く儒家の道德に觀得するところありて加ふるに己れの自家の理想を以てしたる馬琴をして難波に生れしめばいかならむ。われは兩家其位地

を顛倒すべしとは信せざれども必らず其産出の上に奇異の現象を生じたりしとを疑はず。難波にては豊公の餘威全く民衆の腦髓を離れずして徳川氏の武威深く其精神に貫かず、従つて當時の難波の渦に湧きたる潮の迹を問へば、寧ろ武勇の精神を遺却して、他に柔弱なる一種の精氣の漸く成熟し來れるを見るべし。ひとり一時の境遇にてしかくなりしにあらで關西の氣質と關東の氣質とは自ら異るところなり、宜なるかな、俠勇を好みし京傳馬琴の徒の關西に出でずして關東に起り門左西鶴等の關東に生れずして大坂に現れたるや、奇なるかな、一は俠勇を尊び、一は艶美を尙びて、各自特異の旗幟を樹てたるや、その始めは共に至粹の宿れるなり。嘗だ一は之を俠勇に形成し、一は之を艶美(所謂粹)に形成したるの別あるのみ。

右は難波と江戸との理想の異色を觀察したるのみ、元より俠と言へば江戸に限り粹と言へば難波に限るにあらず、われは爰に預言者の聲を吟味しその代表する時を言ひたるに過ぎず。

厭世詩家と女性

戀愛は人世の秘鑰なり、戀愛ありて後人世あり、戀愛を抽き去りたらむには人生何の色味かあらむ。然るに尤も多く人世を觀じ、尤も多く人世の秘奥を究むるといふ詩人なる怪物の尤も多く戀愛に罪業を作るは抑も如何なる理ぞ。古往今來詩家の戀愛に失する者擧げて數ふ可からず、遂に女性をして嫁して詩家の妻となるを戒しむるに至らしめたり、詩家豈無情の動物ならむ。否、其濃情なる事常人に幾倍する事著るし、然るに綢繆終りを全ふせざる者多きは何故ぞ、ギョオテの鬼才を以て後人をして彼の頭は黄金彼の心は是れ鉛なりと言はしめしも、其戀愛

に對する節操全からざりければなり。パイロンの嵩峻を以ても彼の貞淑寡言の良妻をして狂人と疑はしめ、去つて以太利に飄泊するに及んで妻ある者女ある者をしてパイロンの出入を嚴にせしめしが如き、或はシユレイの合歡未だ久しからざるに妻は去つて自ら殺し、郎も亦た天命を全ふせざりしが如き、彼の高嚴莊重なるミルトンまでも一度は此轍を履んとし、嶮峭豪逸なるカーライルさへ死後に遺筆を梓するに至りて合歡團欒ならざりし醜を發見せられぬ。其他マルロー、ベン、ジョンソン以下を數へなば誰か詩人の妻たるを怖れぬ者のあるべき。

思想と戀愛とは仇讐なるか、安んぞ知らむ、戀愛は思想を高潔ならしむる慈母なるを、エマルソン言へるとあり、尤も冷淡なる哲學者と雖も戀愛の猛勢に驅られて逍遙徘徊せし少壯なりし時の靈魂が負ふたる

可からざるも終生抹する事能はざる者となすの奇跡なり。然れども戀愛は一見して卑陋暗黒なるが如くに其實性の卑陋暗黒なる者にあらず。戀愛を有せざる者は春來ぬ間の樹立の如く何となく物寂しき位地に立つ者なり、而して各人各個に人生の奧義の一端に入るを得るは戀愛の時期を通過しての後なるべし。夫れ戀愛は透明にして美の眞を貫ぬく。戀愛あらざる内は社會は一個の他人なるが如くに頓着あらず。戀愛ある後は物のあはれ風物の光景何となく假を去つて實に就き隣家より我家に移るが如く覺ゆるなれ。

蓋し人は生れながらにして理性を有し希望を蓄へ現在に甘んせざる性質あるなり。社會の蚤縁に苦しめられず眞直に伸びたる小兒は本來の想世界に生長し實世界を知らざるものなり。然れども生活の一代に實世界と密接し抱合せられざる者はなけむ、必ずや其想界即ち無邪

氣の世界と實世界即ち浮世又は娑婆と稱する者と相争ひ相睨む時期に達するを免れず、實世界は強大なる勢力なり、想世界は社會の不調子を知らざる中にこそ成立すべけれ既に浮世の刺衝に當りたる上は好しや苦戰搏闘するとても遂には弓折れ箭盡くるの非運を招くに至るこそ理の數なれ、此時、想世界の敗將氣沮み心疲れて何物をか得て満足を求めんとす、努力義務等は實世界の遊軍にして常に想世界を視ふ者、其他百般の事物彼に迫つて劍鎗相接爾す、彼を援くる者彼を満足せしむる者果して何物とかなす、曰く戀愛なり、美人を天の一方に思求し展轉反側する者實に此際に起るなり、生理上にて男性なるが故に女性を慕ひ女性なるが故に男性を慕ふのみとするは人間の價格を禽獸の地位に遷す者なり、春心の勃發すると同時に戀愛を生ずると言ふは古來似非小説家の人生を卑しみて己れの卑陋なる理想の中に縮小したる

毒弊なり、戀愛豈單純なる思慕ならんや、想世界と實世界との戦争より想世界の敗將をして立籠らしむる牙城となるは即ち戀愛なり、此戀愛あればこそ理性ある人間は悉く惱死せざるなれ、此戀愛あればこそ實世界に乗入る慾望を惹起するなれ、コレリツヂがロメオ、エンド、ソリエットを評する中にロメオの戀愛を以て彼自身の意匠を戀愛せし者となし、第一の愛婦なる「ロザリン」は自身の意匠の假物なりと論せるは蓋し多くの戀情を獸慾視して實性を見究めざる作家を誠しむるに足る可し。

戀愛は剛腹なるバイロンを泣かせしと言ふ微妙なる音樂の境を越へて廣がれり、戀愛は細微なる美術家と稱へられたるギョオテが企る事能はざる純潔なる寶玉なり、彼の雄邁にして軟優を兼ねたるメンテをして昊天高上に絶叫せしめたるも其最大誘因は戀愛なり、彼の痛烈

悲酸なる生涯を終りたるスウィットも戀愛に數度の敗れを取りたればこそ彼の如くにはなりたれ。嗚呼戀愛よ汝は斯くも權勢ある者ながら爾の哺養し爾の切に需めらるゝ詩家の爲に虐遇する所となる事多きは如何に慨歎すべき事ならずや。

女性を冷罵する事東西厭世家の常なり。釋氏も力を籠めて女人を罵り沙翁も往々女人に關して慊らぬ語氣を吐けり。我露伴子の一口劍を草するや巧に阿蘭を作りて作家の哲學思想を發揮し更に風流悟に於て其解脱を説きたる所余の尤も服する所なり。蓋し女性は感情的の動物なり、詩家も亦た男性中の女姓と言ふ可き程に感情に富める者なり。深夜火器を弄して閨中の人を愕かせしパイロン必らずしも狂人たりしにあらざる可し。蓋し女性は或意味に於て甚だ偏狹頑迷なる者なり、而して詩家も亦た或點より觀れば之に似たる所あるを免れず。

性は優美繊細なる者なり、而して詩家も亦た其思想に於ては優美繊細を常とする者なり、豪逸雄壯なる詩句を迸出する時に於ても詩家は優美を旨とするものなるを以て自ら女性に似たるところあるを免れず。其他生理學上に於て詳に詩家の性情を檢察すれば神經質なるところ執着なるところ等類同の個條蓋し數ふるに違わらざる可し。是等の類同なる諸點あるが故に同性相忌むところよりして詩家は遂に綢繆を全ふする事能はざる者なるか。夫れ或は然らむ、然れども余は別に説あり請ふ識者に問はむ。

合歡綢繆を全ふせざるもの詩家の常ながら特に厭世詩家に多きを見て思ふ所なり。抑も人間の生涯に思想なる者の發萌し來るより善美を希ふて醜惡を忌むは自然の理なり、而して世に熟せず世の奥に貫かぬ心には人世の不調子不都合を見初むる時に初理想の甚だ齟齬せる

を感じ實世界の風物何となく人をして慘惻たらしむ。智識と經驗とが相敵視し妄想と實想とが相争戰する少年の頃に浮世を怪訝し厭嫌するの情起り易きは至當の者なりと言ふ可し。人生れながらにして義務を知る者ならず、人生れながらに徳義を知るものならず、義務も徳義も雙對的の者にして、社會を透視したる後、己れを明見したるの後に始めて知り得可き者にして、義務徳義を辨せざる純樸なる少年の思想が始めて複雑解し難き社會の秘奥に接する時に誰れか能く厭世思想を胎生せざるを得んや。誠信は以て厭世思想にかつ事を得べし然れども誠信なる者は眞に難事にして、ポロの如き大聖すら嗚呼われ罪人なるかなど嘆じたる事ある程なれば、厭世の真相を知りたる人にしてこれに勝つは豈の誠信あらん人は凡俗ならざる可し。ポロの樂天主義の如きは蓋し所謂解脱したる樂天にして其會のて唱ひし詞句に於ての

自然は妙術なれば汝の能く解する所ならず、凡ての偶事は指呼に従ふものにして汝の關する所ならず、凡ての不和は遂に調和なる事も汝が會し得る所ならず、一部に惡と思はるゝ所のものは全部に善、傲慢に訊ふ勿れ誤理に惑はさるゝ勿れ、凡そ一眞理の透明なるあらば其の如何なる者なるを問はず必らず善なるを疑ふ勿れと云ふ一節あり。蓋し斯の如きは人世の壓威を自力を以て排斥したりと思惟する者にして抑も經驗の結果なり、凡そ經驗なきの思想には斯の如き解脱思ひも寄りぬ事なり。

偕て誠信の以て厭世に勝つところなく、經驗の以て厭世を破るところなき純一なる理想を有てる少壯者流の眼中には實世界の現象悉く假偽なるが如くに見ゆ可きか、曰く否、中に一物の假偽ならず見ゆる者あり、誠實忠信死も奪ふ可らずと見ゆる者あり、何ぞや曰く戀愛なり、情

は、鬪争すべき質を以て生れたる元素なれども其戀愛の域に進む時は全然平和調美の者となり知らず知らず一女性の中に圓滿を畫かしむ情人相對する時は天地に強敵なく不平も不融和も悉く其席を開きて眞美の天使をして代て坐せしむ少き思想の實世界の蹂躪する所となる事多し特に所謂詩家なる者の想像的腦髓の盛壯なるときに實世界の攻撃に堪へざるが如き觀あるは止むを得ざるの事實なり況んや沈痛凄惻人生を穢土なりとのみ觀する厭世家の境界に於てをや曷んぞ戀愛なる牙城に據る事の多からざるを得んや曷んぞ戀愛なる者を其實物よりも重大して見る事なきを得んや戀愛は現在のみならずして一分は希望に屬する者なり即ち身方となり慰勞者となり半身となるの希望を生せしむる者なり夫れ厭世家は此世に屬する者とし言はば名譽にもあれ利得にもあれ王者の玉冠にもあれ鐵道王の富榮にもあ

れ一の希望を置くところあらざるなり故にこの世の希望と厭世家とは氷炭相容れざるの中なる可し然るに戀愛なる一物のみは能く彼の厭世家の呻吟する胸奥に忍び入る秘訣を有し奇しくも彼をして多少の希望を起さしむる者なり情の性は沈靜なるを得ざる者なり其の一反び入るや人の心を攪亂するを以て常とす況してや平生激昂しやすき厭世家の想像はこの誠實なる社會に遭ひて脆くも咄嗟の間に奇異なる魔力に打ち勝たれ根もなき希望を醸し來り全心を擧げて情の奴とすることは見易き道理なり

世界は一たび我を犠牲にすると同時に我れなる己れを寫し出す明鏡なり男女相愛して後始めて社會の眞相を知る細小なる昆蟲も全く孤立して己が自由に働かず人間の相集つて社會を爲すや相倚托し相抱擁するによりて始めて社會なる者を建成し維持する事を得るの理

も相愛なる第一階を登つて始めて之を知るを得るなれ。獨り棲む中は社會の一分子なる要素全く成立せず、雙個相合して始めて社會の一分子となり、社會に對する己れをば明らかに見る事を得るなり。

男女既に合して一となりたる曉には空行く雲にも顔あるが如く森に鳴く鳥の聲にも悉く調子あるが如く、昨日といふ過去は幾十年を経たる昔日の如く今日といふ現在は幾代にも亘るべき實存の如くに感じ、今迄は縁遠かりし社會は急に間近に迫り來り、今迄は深く念頭に掛けざりし儀式も義務も急速に推しかけ來り、俄然其境界を代へしめて無形より有形に入らしめ、無頓着より細心に移らしめ、社會組織の網繩に繋がれて不規則規則にかわり、換言すれば想世界より實世界の擒となり、想世界の不羈を失ふて實世界の束縛となる。風流家の語を以て之を一言すれば、婚姻は人を俗化したる者なり、然れども俗化する人は

をして正當の位地に立たしむる所以にして、上帝に對する義務も、人間に對する義務も、古へ人が爛熳たる花に譬へたる徳義も、人の正當なる地位に立つよりして始めて生ずる者なる可けれ、故に婚姻の人を俗化する人は眞面目ならしむる所以にして、妄想滅し、實想殖ゆるは人生の正午期に入るの用意を怠らしめざる基ひなる可けむ。

厭世家が戀愛に對すること常人よりも激切なるの理由前に既に述べたり。怪しきかな戀愛の厭世家を眩せしむるの容易なるが如くに婚姻は厭世家を失望せしむる事甚だ容易なりとも、厭世家なるものは社會の規律に遵ふこと能はざる者なり、社會を以て家となさざる者なり、世に愛せられず世をも愛せざる者なり。 (I love not the world, nor the world me) 繩墨の規矩に掣肘せらるること能はざる者なり、普通の快樂は以て快樂と認められざる者なり。 (My Pleasure is not that of the world)

etc.) 一言すれば彼等が穢土と罵るこの娑婆に於て社會といふ組織を爲す可き資格を缺ける者なり故に多くの希望を以て多くの想像を以て入りたる婚姻の結合は彼等をして敵地に踏入らしめたるが如きのみ彼等が明鏡の裡に我が眞影の寫るを見て益厭世の度を高ふすべきも婚姻の歡樂は彼等を誠信と樂天に導くには力足らぬなり。

彼等は人世を厭離するの思想こそあれ人世に羈束せられんことは思ひも寄らぬところなり婚姻が彼等をして一層社會を嫌厭せしめ一層義務に背かしめ一層不滿を多からしむる者は是を以てなりかるが故に始に過重なる希望を以て入りたる婚姻は後に比較的の失望を招かしめ慘として夫婦相對するが如き事起るなり。

女性は感情の動物なれば愛するよりも愛せらるゝが故に愛するこゝ多きなり愛を仕向けるよりも愛に酬ゆるこそ其の正當の地位なれ。

葛蘿となりて幹に纏ひ蚤はるが如く男性に倚るものなり男性の一舉一動を以て喜憂となす者なり男性の愛情の爲に左右せらるゝ者なり。然るに不幸にして男性の素振に己れを嫌忌するの状あるを見れば嫉妬も萌すなり廻り氣も起るなり恨み苦みも生ずるなり男性の自ら繰戻すにあらざれば眞誠の愛情或は外れて意外の事あるに至る可し而して既に社會を厭へるもの破壊的思想に充ちたるもの世俗の義務及び徳義に重きを置かざるもの即ち彼の厭世詩家に至りては果して能く女性に對する調和を全ふし得可きや。

夫れ詩人は頑物なり世路を濶歩することを好まずして我が自ら造れる天地の中に逍遙する者なり厭世主義を奉ずる者に至りては其造れる天地の實世界と懸絶すること甚だ遠しと云ふ可く婚姻によりて實世界に擒せられたるが爲にわが理想の小天地は益狹窄なるが如き

を覺へて、最初には理想の牙城として戀愛したる者が、後には忌はしき愛縛となりて、我身を抑制するが如く感ずるなり。此に至つて釋氏をして惑哉、肉眼吾今觀之、從頭至足無一好也と罵り、又た其内甚臭穢外爲嚴飾容加、又含毒蟄劇如蛇與龍と叫び、更に又た婦人非常友如燈焰不停、彼則是常怨猶如畫石文云々等の語を發せしめ、東洋の厭世教をして長く女性を冷遇するの積弊を起さしめたり。

婚姻と死とは僅に邦語を談するを得るの稚兒より墳墓に近づく迄人間の常に口にする所なりとは、エマルソンの至言なり。讀本を懷にして校堂に上るの小兒が他の少女に對して互に面を赧ふすることも、假名を便りに草紙讀む幼な心に既に戀愛の何物なるかを想像するとも、皆亦是人生の順序にして、正當に戀愛するは正當に世を辭し去ると同一の大法なる可けれ。戀愛によりて人は理想の聚合を得、婚姻によりて

想界より實界に擒せられ、死によりて實界と物質界とを脱離す。抑も戀愛の始めは自らの意匠を愛する者にして、對手ある女性は假物なれば好しや、其愛情益發達するとも、遂には狂愛より靜愛に移るの時期ある可し。此靜愛ある者は厭世詩家に取りて一の重荷あるが如くにありて、合歡の情或は中折するに至るは豈惜む可きあまりあらずや。バイロンが英國を去る時の咏歌の中に「誰れか情婦又は正妻のかこちごとや空涙を眞事とし受くる愚を學ばむ」と言出けむも、實に厭世家の心事を暴露せるものなる可し。同作家の婦人に寄語すと題する一篇を讀まば英國の如き兩性の間柄嚴格なる國に於てすら斯の如き放言を吐きし詩家の胸奥を覗ふに足る可けむ。

嗚呼不幸あるは女性か、厭世詩家の前に優美高妙を代表すると同時に醜穢ある俗界の通辨とありて、其嘲罵する所とあり、其冷遇する所

と。ち。り。終。生。涙。を。飲。で。寝。ね。て。の。夢。覺。め。て。の。夢。に。郎。を。思。ひ。郎。を。恨。ん。で。遂。
に。其。愁。殺。す。る。と。こ。ろ。と。あ。る。ぞ。う。た。て。け。れ。う。た。て。け。れ。戀。人。の。破。綻。し。て。
相。別。れ。た。る。は。双。方。に。永。久。の。冬。夜。を。賦。興。し。た。る。が。如。し。と。パ。イ。ロ。ン。は。自。
自。せ。り。

桂川(吊歌)を評して情死に及ぶ

まづ祝すべきは市谷の詩人が俗嘲を顧みずしてこの新らしき題目
を歌ひたることなり。

殘花道人嘗つて桂川を渡る期は夜なり風は少しく雨を交ゆ昨日も
今日も五月雨にふりくらしたる頃なれどとあるを見れば梅雨の頃か
とぞ思ふ霧たちこめし水の面に二ツの光りてらすなり友におくれし
燈火かばた亡き魂かあはれしと一面惨絶の光景を書きて先づ幽魂

の迷執をうつすそれより情死の事由を列ね更に一轉してその苦痛と
應報とを陳ぶあやかき闇に凄まじや閻羅と見ゆる夏木立之より一回
轉して虚實の中に出没し視るところのものゝ心裡を寫出する一節絶
筆なり。

こゝは處も桂川最前の起句を再用して造化の筆はいまもかは悲惨
の景色うつしいで我はた冥府の人なりきといふ末句の如き千鈞の重
ありと云ふべしこれより急調に眼を過ぐるものを言ひ三ツ四ツおち
し村雨はつゝみたる誰が涙かなにて結び更に玉銚の道は小暗したど
りゆく繩手はほそし松風の簞の音も身にしみていどうらかなしと巧
麗婉艶の筆を以て行路の詩人の沈痛なる同情を醒起すこれより漸く
佳境に進みて影なる人の語るを言ひ或は平瀉或は急奔遂にわれらが
罪をゆるせかし犠牲となりしは愛のためにて全篇を結び余は殘花

氏の巧妙と幽思この篇にて盡くるを見る、明治の韻文壇、斯かる佳品を出すもの果して幾個かあらむ。

試に余をして簡約に情死に就きて余が見るところを言はしめよ。

人の世に生るや、一の約束を抱きて來れり、人に愛せらるゝ事と、人を愛する事之なり、造化は生物を理するに一の法を設けたり、禽獸鱗介に至るまで、自からこの法に洩るゝ事なし、之ありて萬物活情あり、之ありて世界變化あり、他ならず、心性上に於ける引力之なり、人はこの引力の持主にして、彼の約束の捺印者なり。

余今ま村舎に宿して一面の好書を見たり、雄鶏は外に出でゝ食をも

どめ、雌鶏は巢に留りて雛を温む、孵りて後僅かに半月、或は母鶏の背に升り、或は羽をくゞりて自から隠る、この間言ふ可からざるの妙趣あり、て余を驚かせり、細かに萬物を見れば情なきものあり、造化の精靈

るくべきものあり。

或は劣情と呼び、或は聖情と稱ふ、何を以て劣と聖との別をなす、何が故に一は劣にして一は聖なる、若し人間の細小なる眼界を離れて、造化の廣濶なる妙機を窺はば、孰を聖と呼び、孰を劣と稱ふを容るさむ、濫りに道法を劃出して、この境を出づれば劣あり、この界に入れば聖なり、と言ふは何事ぞ。

情の素たるや、一なり、之を運ぶ器と機の異なるに因つて聖劣を分たんとす、世間の道義は之に對して聲を勵まして正邪を論ず、何ぞ迂なるの甚しき、文化は人に被らすに數葉の皮を以てす、之を着ざれば即ち曰く破徳なりと、むしろ蕃野の眞朴にして、情を包むに色を以てせざるに如かんや。

人の中に二種の相背反せる性あり、一は研磨したるもの、一は蕃野な

るもの、徳と云ひ、善と云ひ、潔と云ひ、聖といふ是等のものは研磨の後に
來る、而して別に「情」の如き、慾の如き、是等のものは常に裸躰ならんこと
を慕ひて、縦に繫禁を脱せんことを願ふ、この二性は人間の心の野にあ
りて常に相戦ふなり。

電火は人を戮ろすと謂ふ、然り渠は魔物なり、然れども少しく造化の
理を探れ、自からに電火の起らざるべからざるものあるを悟れ、天の氣
と地の氣と、相會せざる可からざるものあるを察せよ、自然界に於て猶
此事あり、人間の心界何ぞ常に靜謐なるものあらんや、風雨遽かに到り、
迅雷忽ち轟ろく、光景は心界の奇幻之を見て、直ちに繩墨の則を當て、是
非の判別を下さんとするは、豈達士の爲すところあらんや。
人は常に或度ふ於て何物かの犠牲たり、能く何物をも犠牲たらしむる

が故に犠牲たるを甘んずるを得るや、美いかな、人間の情、好むべきかな、
人間の心、友の爲に身を苦しめ、親の爲めに心を痛め、而して自ら甘心し
眞實何の悔恨なきを得るは、豈に讃むべき事よ、あらずや、自己といふ柱
よ、憑りかゝりて、われ安し、われ樂しと喜悅するもの、心は常よ枯木な
り、花は茲よ咲かず、實は茲よ熟せず、情は一種の電氣なり、之あるが故よ
人は能く活動す、時よ或は愁雲恨雨の中よ、暴然鳴吼をなし、霹靂一聲、人
耳を愕ろかすことあるも、亦た止むべからず、花なき、花は之、實なき
實は是、情死、輕んずべからず。

世の中よ、絶えて、心中、あかりせば、二世のちぎりも、あからまじ……と
冥土の飛脚よ、言はせたる、巢林子、われその濃情を愛す、人の誠意は情よ
よりて、始めて見るべし、沈靜は元より沈靜の味あり、然れども、熱意も亦
た熱意の味あるよ、あらずや、熱意は人を誠實よ、驅り、誠實は往々よして

人○を○破○却○よ○逐○ふ○破○却○素○より○惡○む○べ○し○然○れ○ど○も○破○却○の○中○に○誠○實○あ○り○人○
死○し○て○誠○實○殘○る○愛○の○妙○相○は○之○あ○り○眞○玉○白○玉○種○類○あ○れ○ど○愛○よ○易○ふ○べ○き○
も○の○は○あ○し○ど○市○谷○の○詩○人○大○よ○若○く○あ○れ○り○

よ○し○や○幻○想○又○欺○か○る○事○あ○り○と○も○二○人○が○問○ふ○は○一○點○の○詐○偽○な○く○一○
粒○の○疑○念○な○し○二○よ○し○て○一○一○よ○し○て○二○斯○の○如○く○相○抱○て○水○に○投○ず○死○す○る○
時○樂○境○あ○る○が○如○く○濁○水○も○亦○た○甘○露○を○味○ふ○に○似○た○り○萬○事○斯○く○し○て○了○
れ○ば○殘○る○も○の○は○は○し○た○な○き○世○の○浮○名○の○み○浮○名○も○何○ぞ○や○嗚○呼○罪○な○り○然○
り○罪○な○り○然○れ○ど○も○凡○そ○世○間○の○罪○み○し○て○斯○の○如○く○純○聖○な○る○罪○あ○り○や○死○
は○罰○な○り○然○り○罰○さ○り○然○れ○ど○も○世○間○の○罰○み○し○て○斯○の○如○く○甘○義○あ○る○罰○あ○
り○や○嗚○呼○狂○お○り○然○り○狂○お○り○然○れ○ど○も○世○間○の○狂○み○し○て○斯○の○如○く○眞○面○目○
あ○る○狂○お○り○や○幻○と○呼○び○夢○と○呼○ぶ○も○理○あ○れ○ど○斯○の○如○く○眞○實○あ○る○幻○と○夢○

切あり。

義理人情を感ずること多きもの、情死の主人とあること多きは巢林
子の戯曲之を證せり。捉ふるものは義理人情逃ぐるに怯ならず、避くる
に卑しからず、死を以て之を償ふ、滅を以て之を補ふ、情死は勇氣ある卑
怯者の處爲あり、是を大膽ある無情漢に比すれば如何ぞや。
そも愛といひ戀といふ、ふかき意を世の人は、さらくくます氷より、
霜より冷ぬし、そのこゝろ、ど殘花氏の妙句味ひ多しと言ふべし。請ふ去
つて再び桂川の一篇を讀め、巢林子以後圖らずも、情死は友人を法界の
人に得たりけり。

「罪と罰」の殺人罪

不知庵主人の譯に成りし「罪と罰」に對する批評仲々に盛なりとは聞

けるが、病氣其他の事ありて余が今日までに見たるは僅に四五種のみ、而して其中も學海先生が國民の友に掲げられし評文は特に見目立ちて見ぬ。余は平生學海居士が儒家らしき文氣と馬琴を承けたる健筆に欽羨するものあるが、罪と罰に對する居士の評文の餘りに居士を代表する事の多き又は聊か當惑するところなき能はざりし。

居士は人命犯は必らず萬已むを得ざる原因ある事を言ひ、財主の老婆が、貪慾を憤ふるのみの一事にして忽ち殺意を生ずるは殺人犯の原因として甚だ淺薄なりと言ひ、而して自ら辨じて言はるゝは、作者の趣意は、殺人犯を犯したる人物は其犯後いかなる思想を抱くやらんと心を用ひて推測り精微の情を寫して己が才力を著はさんとするのみ。再び曰くその原因の如きはもとより心を置くやあらす。末段更に財主の妹を殺したる一條を詳述してその氣質はかねて附たる正直

様のもつたるに、これをも殺したるはいかにぞや……さてはのち我にかへりて大にこれを痛み悔ゆべきに、云々と言はれたり。

余は學海居士の批評を對して無用の辨を費やさんとするものよあらず、右に引きたるは居士の批評法の如何に儒教的あるやいかに勸善懲惡的なるやを示さんとしたるのみ、居士には居士の定見あり、をを評論せんは一朝一夕の業にあらじ。

余は「罪と罰」第一巻を通讀すること前後二回せしが、その通讀の際極めて面白しと思ひたるは、殺人罪の原因のいかにも綿密に精微に畫出せられたる事なり、もし或兇漢ありて或貞婦を殺し而して後、或義士の一撃を斃れたりと言ふ書かば事理分明として面白かるべしと雖、罪と罰の殺人罪は、この規矩には外れながら、なほ幾倍の面白味を備へてあるなり。

一醉漢ありて酒毒の爲に神経を錯亂せられ、これが爲に自殺するに至りたる事ある時は、彼は酒故に自殺したりと言ふを躊躇せざるべし、酒は即ち自殺の原因なり、一頑漢ありて社會の制裁と運命の自然ある威力に従順なる事能はず、これが爲に人には擯けられ、世には捨てられ、事業を愚弄し、人間をくだらぬものとし、階級秩序の如きをうるさきものとし、誠愛誠實を無益のものと思ひ、無暗に人を疑ひ、矢鱈に天を恨み、その極遂に精神の和を破りて行ふべからざる事を行ひ自ら知らざる程の悪事を爲すぐる事あらば、其悪事例へば殺人罪の如き悪事は意味もなく、原因も無きものと云ふを得べきや、之を心理的に解剖して仔細に其罪惡の成立に至るまでの道程を描きたる一書を淺薄なりとして斥くる事を得べきや。

殺人罪は必らずしも或見ゆべき原因によりて成立のものにあらず

るなり、必らずしも報酬の理論若くは勸善懲惡の算法より割出し得るものにあらずるなり、我が罪と罰二巻に見るところのもの全篇悉く慘憺たる血くさき殺戮の跡を印するを認むるなり、見よ、飲酒は彼非職官吏を殺しつゝあるにあらずや、非職官吏の放蕩懶惰は其愛らしき妻を殺しつゝあるにあらずや、其無邪氣の娘を殺しつゝあるにあらずや、姪賣と名け肺病と名け、惰慢と名づくるもの、これ實に精神的に死してあるなり、殺してあるなり、悲哀懊惱の幽暗なる事は、死の幽暗をより多きなり、讀者余が言を信せずは、罪と罰に就きて、更に其他の記事を精讀せられよ、思ひ蓋し半は過ぎんか。

余が前號の批評も云ひし如く、罪と罰とは最暗黒の露國を寫したるものにてあるから、馬琴の想像的勇俠談もある如く、或復讐を忠孝等の故を以て殺人罪を犯さしめたるものにあらずること分明なり、最

暗黒の社會いかにおそろしき魔力の潜むありて、學問はあり分別ある腦髓の中に、學問なく分別なきものすら企つることを躊躇ふべきほどの悪事をたくらましめたるかを現はすは蓋しこの書の主眼なり。而して斯の如く偶然の機會よりして偶然の殺戮を見得るが故に、一見して淺薄よして原因もなきものゝ種なる、この書の眞價は實に右に述べたる魔力の所業を描寫したるに於て存するのみ、もしこの評眼をもちて財主の妹を財主と共に虐殺したる一節を讀まば、作者の用意の如何も非凡なるかを見るゝ惑はぬなるべし、

作者は何が故にラスコーリックが氣鬱病に罹りたるやを語らず、開卷第一に其下宿住居を點出せり、これらをも原因ある病氣と言て斥けたらんよはこの書の妙所は終まいづれにか存せんや、何が故に私宅教授の口があらざりても殺人道を考へ、下宿屋の奥に何を爲て居ると問

はれて考へる事を爲て居ると驚かしたるや、何が故に、娼賣女を愛を行ふ資本と知りながら、香水料の慈惠を爲せしや、何が故に少娘を困厄せしめし悪漢をうちひしぐなどの正義ありて、而して己れ自ら人を殺すほどの悪事を爲せしや、何が故に極て正直なる心を以て極めて愛情よひかざるべき性情を以て而して母と妹の愛情を冷笑するゝ至りしや、何が故に一人の益なきものを殺して多人數を益する事を得ば悪しき事なしといふ立派なる理論をもちながら流用する事覺束なき裝飾品數個を奪ひしのみにして立去るに至りしか、何が故にこの裝飾品を奪ふは單に斬取強盜の所爲よして苟くも理論を構へたる大學生の爲すべからざるところなるを忘れしか、是等の凡ての撞着、是等の凡ての調子は、是等の凡ての錯亂、即ち作者が精神を籠めて脚色したるもの而して其殺人罪を犯すに至りたるも、實に是れこの錯亂、この調子は

づれ、この撞着より起りしにあらずんばあらず、而して斯くこの書の主人公を働かせしものは即ち無形の社會而已なること云を須たす。運命人間の形を刻めり、境遇人間の姿を作れり、不可見の苦繩人間の手足を縛せり、不可聞の魔語人間の耳朵を穿てり、信仰なきの人、自立なきの人、寛裕なきの人、往々にして極めて感れむべき悲觀に陥ることあるなり、之を加ふるに頑愚の迷信あり、誤謬の理論あり、惑溺の癡心あり、無憑の恐怖あり、盲目の驕慢あり、涯なき天と底なき地の間よ。

What a poor wretched creature as I am,

Creeping between heaven and earth.

と絶叫するもの、豈ハムレットのみならんや。

來鳥某、津田某等のいかに憐れむべき最後を爲したるやを知るものは罪と罰の殺人の原因と後遺なりと笑ひて斥くるやうの事なかるべし。

し。利慾よりならず、名譽よりならず、迷信よりならず、而して別々或誤謬の存するあるにもあらずして、この殺人の罪を犯す世に普通なるよあらずして、しかも普通ある理由よよりてなり、これを寫す極めて難し、これを讀むものも亦た其心して讀ざる可らず、涙香子探偵小説の如く俗を喜ばすものもてなき由を承知して一讀せば自ら妙味を發見すべきなり、余はこの書を讀者又推薦するを憚らず、學海居士の評文の目に付きたるも之を以てなり、

歌念佛を讀みて

巢林子の世話戯曲十中の八九は主人公を遊廓内よ取れり、其清潔なる境地より取り來りたる者は甚だ少數なる中にお夏清十郎歌念佛は傑作として知られたり、余は歌念佛を愛讀するの餘、其女主人公に就き

て感じたるどころを有の儘に筆をせんとするのみ。若し巢林子著作の細評を聴かんとする者あらば逍遙先生又は篁村翁が許へ行かるべし、余豈巢林子を評すと言はんや、

中の卷の發端に「かゝる親には似ぬ娘お夏は深き濡ゆるに菩提心と意地ばかりで嫁入も背ものびくの……」と書出してお夏も既も戀ある事を示せり、然れども背ものびの……といふところにて親々の眼は極めて處女らしく見ゆる事を知らせたり。清十郎（即ちお夏の情人）が大坂より戻り來りたる事を次に出して「目と目を合する二人が中、無事な顔見て嬉しいと心も心を言せたり」と有處にて更に兩人の情愛の秘密を示せり。

然に清十郎が沓脱に腰をかけて奥の方の嫁入支度を見て平氣にて「ハア余所には嫁入が有るやうな云々」と言ひしときにお夏が「又ぬすり言

ばつかり、おんなし口で可愛やと云ふ事がならぬか意地のわるい」と言ふ言葉を聞けば、お夏は既も處女であらずして莫連者か蓮葉ものしいたづらあがりの語氣を吐けり。讀んでお夏が「我も室で育ちし故母方が悪いの、傾城の風があるのとて何處の嫁にも嫌はるゝこれぞ宜い事幸いと猶女郎の風を似せ」と云ひ出るゝ至りては、お夏が無邪氣なる意氣地と伶俐なる戀の智慧を見るに足るべし、あの立野の阿呆顔敷銀に目が眩みて、嫁に取ふといやらしい」と云一段に至りては彼の戀愛の一徹にして處女らしきところを蔽ふ能はず。

二人の情透露見したる時に朋輩勘十郎の奸策同時に落ち來りて清十郎が布子一枚にて追拂はるゝ段よりお夏の愛情は一種の神韻を帯び來れり。清十郎の胸の中は戀の因果といふ猛火燃しきりて主従の縁さるゝ神の咎めを浩歎して七苦八苦の地獄に顛墮したるを、お夏の

方にては唯だ熾熱せる愛情と堪ゆべからざる同情あるのみ。ひそかに
部屋の戸を開きて外に出れば、悽惻として情人未だ去らず、泣いて遠國
に連よとくどく時に清十郎は親方の情よしがらまれて得應へず、然る
を女の狂愛の甚しきと惹かされて遂に其の誘惑に從はんと決心する
までに至りし頃、中より人の騒ぎ出たるに驚かされて止ぬ。美術の上
て言ふ時はお夏のこの時の底から根からの戀慾は巧み穿ち得たる
ころあるべし。

清十郎の追拂れたりし時又は未だ分別の闇又は迷はざりしものを、
このお夏の狂愛と魅せられし後の彼は早や氣は轉亂し、仕損ふたら浮
世は闇跡先見へぬ出来心にて勘十郎と思ひ誤りて他の朋輩なる源十
郎を刺殺したるも戀故の闇と迷へばこそ、清十郎既人殺して勘十
郎の見出すところとなり家の内外も大騒擾となりたる時、お夏は狂

亂したり、其狂亂は次の如き靈妙の筆と描出せらる。

あれお夏と呼ぶわいの、おふく、其所よかどこよどいやくいやく待
て暫しあれは我家に父の聲我を尋ねて我を呼ぶ、親も懐しや夫も戀し
や、父は子をよぶ夜の鶴我は夫よぶ野邊の雉子又下の巻入りて宵さ
こひと云ふ字を金紗で縫はせより以下向ひ通るは清十郎じやないか、
笠がよく似た菅笠がよく似た笠が笠がよく似た菅笠が笠を案内の
物狂ひの一節なふく、あれなる御僧我殿御かへしてたべ、何處へつれ
て行く事ぞ男返してたべなふ、いや御僧とは空目かやの一節尋ぬる夫
の容形姿は詞と語るども心は筆も及びなきぼんじやりととしてきつど
して花橋の袖の香も以下の一節等はいかよもヲフェリヤが狂ひも狂
ひし歌も比べて多く愧ず、ラオーストのマーガレットが其夫の去りた
るあとよ心狂はしく歌ひ出でたる、我が心は重し我平和は失せたり、の

靈妙なる歌よくらべても左まで劣るべしとは思はれず。

疑ひもなく「お夏」は巢林子の想中より生み出せる女主人公中よて尤も自然よ近き者なり、又尤も美妙なる靈韻よ富める者なり。梅川の如き、小春の如き、お房の如き、小万の如き、皆是れ或一種の屈曲を経て凝りたる戀よあらざるはなし、男の情を釣りたる上よて釣られたる者よあらざるはなし、或事情と境遇の壓迫よ遭て心中する迄深く契りたるよあらざるはなし、然に此篇のお夏は主人の娘として下僕よ情を寄せ其情は初よ肉情よ起りたるよせよ後よ至て立派なる愛情アッフェクツィオンようつり、果は極めて神聖なる戀愛よ迄進みぬ。

著者は元よりオプティストの如き哲學的生産の男主人公を作る可き戯曲家よはあらざりし、然れども清十郎の品格を檢し來れば忠兵衛、平兵衛、治兵衛其他の如き解迷の賢性とは趣を異よするところ多し、お夏

の口よて言はせたる「姿は詞よ語ることも心は筆も及びなき」よて既よその高品の心なる事を示し、追ひ拂はれたる後よ後悔の言葉または末段の「虚言を云ふまじと毎朝天道氏神を祈りしかども、若き者の悲しさは只今非業よ死んごは思ひも寄らず」よて以下句々妙味あり述懐よ於て其人品の非凡なる事を示せり。左ればお夏が愛情の自からよ靈韻を含む様よなるも自然の結果よて作者の用意淺しと云ふ可からず。

余は此篇を以て巢林子が戀愛よ對する理想の極高なるものと言はんよ欲す、世よ戀愛なるものよ全く抽き去るを得て凡て神聖なる宗教的思想の統御よ歸する事あらば戀愛の事を談せざるもよし、苟くも戀愛が人生の一大秘鑰たる以上は其素性の高潔なるところより出で其の成行の自然に近かるべきは文學上よ於て希望せざるを得ざる一大要件なり。

抑も戀愛は凡ての愛情の初めなり。親子の愛より朋友の愛に至るまで凡そ愛情の名を荷ふべき者にして戀愛の根基より起らざるものはなし。進で上天に達すべき浄愛までもこの戀愛と關聯すること多く人間の運命の主要なる部分までもこの男女の戀愛と因縁すること少なからず。左れば文人の戀愛と對するや須らく嚴肅なる思想を以て其美妙を發揮するを力むべく苟くも卑野なる輕佻なる浮薄なる心情を以て描寫することなかるべし。

高尚なる意あるものは戀愛の必要特多し。そは其心と打ち消す可からざる弱性と不満足と常と宿り居ればなり。戀愛なるものはこの弱性を療しこの不満足を愈さんが爲す天より賜はりたる至大の恩恵にして男女が互に劣情を縱とする禽獸的慾情とは品異れり。プラトールの言へりし如く戀愛は地下のものにはあらざるなり。天上より地下に

降りたる神使の如きものなることを記憶せよ。野外に逍遙して芬香たる花香をかぐとき其花の在るところに至らんと願ふは自然の情なり。其花に達する時に之を摘み取りて胸に挿まんとするも亦た自然の情なり。この情は底なき湖の如くに一種の自然界の元素と呼ぶよりはなかるべし。之を打つとも破るべからず。之を鑄るとも形すべからず。之を抜き去らんとするも能くすべからず。宇宙の存すると共に存する一種の靈界の原素にあらずして何ぞや。

戀愛は詩人の一生の重荷なり。之を説明せんが爲に五十年の生涯は不足なり。然れども詩人の名の付きたる人は必らずこの戀愛の幾部分かを解得したるものなり。而して戀愛の本性を審にするは古今の大詩人中にても少數の人能く之を爲せり。美は到底説明し盡くすべからざるものにして戀愛の中に含める美も到底説明し得るまでには到るこ

と能はず然れども詩人の職は説明にのみ限るにあらずして説明すべからざる者をその儘に寫し出るも亦た詩人の職なれば詩の神に入りたる詩人の爲すところは説明に力を籠めずして却つて寫實に精を凝らすにありき。

寫實とは云へども世の所謂實際派の爲すごとく人間の獸慾を唯一の目的として描出するの謂にあらず人間に不完全の認識あるよりして何物かを得て之を贖はんとの慾望は天地間自然の理なれば此慾望の一轉して他の美妙なる位地に思慕を生ずる實情を描寫するを詩人の本領とは云ふなり。バイロンがうたひし如く己の冷々たる胸に温熱を生じ己れの頑剛なる質を和らげて優柔なる性情を興ふるもの即ちこの不完全が多少完全になされし微なりこれを爲すもの戀愛の妙力にありしして何ぞ。

ロメオ、エンリコ、ジュリエットの著者は何が故にロメオが鬱樹叢中に彷徨したりしやを記せず、彼は唯だロメオに自然なる一種の思慕ある事を顯はすに甘んじたり、一種の思慕とは即ち前に言ひし一種の原素なり、彼は此原素を説明せずしてこの原素を寫實したり。ハムレットの著者は明らかに人々をしてハムレットの戀愛に狂へる者なることを言はしめ、其ヲフェリヤとの問答に就きて之を確かめんとはせしめたり。これもロメオを書きし戀愛と對する極致と趣を一にして唯だ是にては他に大なる不完全不調子の實現を備へたる點に於て異なるのみ。オーストの著者が其主人公をしてマーガレットに近づかしめ一瞬時に愛情を湧出せしめて従前の不完全なる觀想の大結局を戀愛の中に總べたるなど戀愛の不可拔なる大原素なることを認むるにあらずんば能はざるところとす。

日本文學史を觀じ來れば戀愛に對する理想余をして痛歎せしむるもの多し。別して巢林子の著作の中に戀愛の戀愛らしきもの甚だ尠なきを悲しむざるを得ず。蓋し其の爰に到らしめしもの諸種の原因あるべし。萬有教の教理寂滅の宗教思想より來れる關係、支那文學史との關係、氣候風土より發生せる色情の惡風、其他區々あるべしと思はるれど、兔に角事實として肉情より愛情に入り、愛情より戀愛に移ることを記する著作の多きこと疑ふ可からず。生命あり希望あり永遠あるの戀愛は到底萬有教國に求むることを得ざるか、そもくいつかは之を得るに至るべきか、我邦文學の爲に杞憂なき能はず。

歌念佛は巢林子の著作中戀愛を自然なる境地に倣めて寫實したるもの上々なる事は余の竊かに自から信ずるところなるが、自然は即ち自然にてあれど何の生命もなく何の希望もなく、其初めは肉情に起し、其終りを愛情の埋没に切りてよし、是も夢の戯れと清十郎に悟らせしめたるを見ては佛教を恨むより外なきなり。文學の極衰極盛を言ふもの今に之れありと聞く、余は極衰論者に其極衰のいはれを聞かんことを願ひ極盛論者に其極盛の理をきかん事を望む、我邦未來の文學をいかにせばや。

油地獄を讀む

刑鞭を揮ふ獄吏として、自著自評の抗難者として、義捐小説の冷罵者として、正産正太夫の名を聞くこと久し。是等の冷罵抗難は正太夫を重からしめしや將た輕からしめしや、そは茲に言ふ可きところならず、余は油地獄と題する一種異様の小説を得たるを喜び、世評既に定まれりと告ぐる者あるにも拘らず、敢て一言を挿まんとす。

油地獄は小説評註と犬蓼とを合はせ綴ちて附録の如くす。小説評註は純然たる諷刺にして、當時の文豪を罵殺せんとする毒舌紙上に躍如たり。然れども其諷刺の原料として取る所の、重に文躰にありしを以て見れば、善く罵りしのみにして未だ敵を塵滅するの力あらざりしを知るに足らむ。

油地獄と犬蓼とは結構を異にして想隨一なり。駒之助と貞之進其地位を代へ、其境遇を代ふれば貞之進は駒之助たるを得可く駒之助は貞之進たるを得べし。然り、駒、貞、兩主人公は微かに相異なるを認るのみ、然れども此暗合を以て著者の想像を狭しと難するは大早計なり、何となれば著者の全心は、廣く想像を構へ、複雑なる社會の諸現象を映寫し出でんとにはあらで、或一種の不調子或一種の弱性を目懸けて一散に疾驅したるは、なほ一種の不調子とは何ぞ曰く現社會の抱有する魔毒是なり、一種の弱性とは何ぞ、過去現在未來を通する人間の戀愛に對する弱點なり。

綠雨は巧に現社界の魔毒を寫出せり。世々良伯は少しく不自然の傾きを示すと雖今日の社會を距る事甚だ遠しとは言ふ可らず。栗原健介は極めて的實なり、市兵衛の如き阿貞の如き個々皆な生動す。而して美禰子と駒之助に至れば照應甚だ格好、深く今日の社會を學び、其奥底に潜める毒龍を捉らへ來つて、之を公衆の眼前に斬伐せんと志が正太夫。

何れの社會にも魔毒あり。流星怪しく西に飛ばぬ世の來らば、淺間の嶽の火烟全く絶ゆる世どもならば社會の魔毒全く其蒂を絶つ事もあべしや。雲黒く氣重く、身蒸され心塞がれ、迷想頻に蝟集し來る、これ奇なり怪なり、然れども人間遂にこれを免かると難し。黒雲果して魔か大

氣果して毒か、肉眼の明を以て之を争ふは詩人にあらざるなり。黒雲悉く魔なるに非ず、大氣悉く毒なるにあらず、雷黒雲に魔あり、大氣に毒ある事を難せんとするは實際世界を見るも實世界以外を見ること能はざる非詩性論者の業として放任して可なり。

吾人は非精無心の草木と共に生活する者にあらず、慾に荒さび情に溺れ癡に狂する人類の中に棲息する者なり、己れの身邊に春水の優々たるを以て樂天の本義を得たりとする詩人は知らず、齊しく情を解し同じく癡に驅られ而して己れのみは身を挺して免れたる者の他に對する憐憫と同情は遂に彼をして世を厭ひ、もしくは世を罵るに至らしめざるを得んや。世を厭ふものを以て世を厭ふとするは非なり、世を罵る者を以て世を罵るとするは非なり、世を厭ふ者は世を厭ふに先ちて己れを罵るに先ちて己れを罵るなり。己れを遺れて世を遺るを知る已を空うして世を空うするを知る誰れか、己れを厭ふ事を知らずして眞の厭世家となり、己れを罵ることを知らずして眞の罵世家となるを得んや。

われは非凡なる緑雨の筆勢を察して、彼が人類の心宮を觀するの法は先づ其魔毒よりするを認めたり。彼は人類を一種の軟骨動物と思倣し、全く誠信なく、全く忠誠なく、心宮中よ横威を奮ふ一種の怪魔が自由よ人類を支配しつゝありて、咄々奇怪至極の此社會かなと觀念し來りて、之を好猶なる健介よ寓し之を窺窺たる美形美禰子に箝め、之を權勢者なる世々良伯に寄す。之を小歌よ擬し下宿屋の女主に倂す。著者の眼中社會の腐濁を透視し、人類の運命が是等の魔毒に接觸する時に如何なる可きや迄甚深に透徹す。是點より觀察すれば著者は一個の諷刺家なり。然れども著者の諷刺は諷刺家としての諷刺なる事を記憶せざる

可からず、自然詩人の諷刺は諷刺するの止むを得ざるに至りて始めて諷刺す。始めより諷刺の念ありて諷刺するにあらざるなり。始めより諷刺せんとの念を以て諷刺する者は自ら卑野の形あり、宜なるかな諷刺大王(スウィット)を除くの外に絶大の諷刺を出す者なきや。

スウィットの諷刺せし如く、スウィットの嘲罵したる如くに沙翁も亦諷刺の舌を有し、嘲罵の喉を持しなり。然れども沙翁の諷刺嘲罵は平々坦々たる冷語の中よ存し、スウィットは熾熱せる痛語の中よあり。ハムレットよ吐露せし沙翁が満腔の大嘲罵は自ら冒犯す可からざる威容を備ふるを見れどスウィットの痛烈なる嘲罵は炎々たる火簇には似れど未だ陽日の赫耀たるよは及ばず。

諷刺にも二種ありと見るは非か。一は假時的なり、他は永遠にして三世に亘るなり。假時的なる者は一時の現象を對手とし、永遠なる者は人

世の秘奥を以て對手とす。政治を刺し社會を諷する者等は第一種よし。て、人生の不可避なる傷痕を痛刺して自らも涙底よ倒れんとするが如き者は第二種なり。第一種は第二種よりも多く直接の視察より暴發し、第二種は第一種よりも多く哲學的觀察よよりて湧生す。

第二種のもものは戯曲其他の部門に隠て、第一種の者のみ諷刺の名を縦よする者の如し。一時の現象を罵り、政治若くは社會の汚濁を痛罵するを以て諷刺家の業は卒れる者と思は非よし。一時の現象を透観するの眼光は、萬古の現象よも透観すべき筈なり。一現象は他の現象と脈絡相通するをも徹視すべき筈なり。故に諷刺家は假時的なりとして賤しむ可きよあらず、一現象の中に他の永遠の現象を映影せしむるを得べければなり。エゴイズムを外みし、狂熱を冷散するとも別な諷刺の元質、世に充盈せりと見るは非か。

緑雨は果して渾身是諷刺なるや否やを知らず。譬諭も乏しく構想のゆかしからぬ所より言へば未だ以て諷刺家と稱するよりは勝へざるべし。然れども油、犬、雨篇を取つて精讀すれば溢るゝばかり又冷罵の口調あるを見ざらんと欲するも得べからず。而して疑ふ彼の冷罵は如何なる對手に向ふて投ぐる礫なるや。對手なくして冷罵すと言はゞ彼は冷罵せんが爲又冷罵し、諷刺せんが爲又諷刺する者又して世は彼を重んずると能はざるべし。對手ありて冷罵すとせば如何なる對手よてやあらむ。對手は能く冷罵者を軽重す可ければ、この吟味も亦た苟且よす可からず。

曰く社會なり。彼は能く現社會を洞察す。特に或る一部分の妖魔を捕捉するの怪力を有す。此點より見れば彼は一個の寫實家なり。油、地獄、實生の墮落を描くところなどは宛然たる寫實家なり。然れども彼に寫

實家の稱を與ふるは非なり。彼は寫實の點より筆を著せず諷刺の點より筆を著したればなり。唯だ譬諭なきが故に諷刺よりも寫實に近からんとしたるなり。彼は寫實家が社會の實相を描出せんとするが如くあらで、諷刺家が世を罵倒せんとして筆を染るが如くす。彼が胸中を往來する者は人間界の魔窟なり。人間界の怪魅なり。心宮内の妖婆なり。彼れ能く是等の者を實存界に活け來つて冷罵輕妙の筆を揮ひ能く人生の實態を描ける者豈凡筆あらんや。彼は諷刺家と言はるゝと能はず。寫實家と稱へらるゝと能はず。諷刺家と寫實家を兼有せる小説家と名けなばいかに。

抱一庵の曇天想高く氣秀いで、一世を驚かすに足るべき小説ありしも世は遂に左程に歡迎する事なかりし。其故如何となれば、彼は暗々裡に佛國想を擔ひ入れて奇抜は以て人を驚かすに足りしかども、遂に純

然たる日本想の一口劔に及ばざるを、奈何せむ。辻淨瑠璃巧緻を極めたりしも、遂に風流佛に較す可き様もなし。外國想が日本想の純全なるに、加かず、一片相が少くとも、圓滿相に如かざるを、是なりと認め得ば、余は、綠雨が社會の諸共に認めて、妖魔とし、魅窟とするの處、一片相を取り、來つて、以て社會全體を刺すの材料とせるを惜まずんば、ある可からず。奇想却つて平凡の如く、又見む妙刺却つて痴言の如くに聞へ、快罵却つて不平の如くに感せらる、斯の如きもの、綠雨が撰みたる材料の、不自然にして、顯著に過ぎたるものなりしことより起るなり。何が故に不自然なりと云ふ、曰く社會の魔毒は、綠雨が撰みたる材料の上には、商標の如くに見はるれば、之を罵倒するは、鴉の黒きを笑ひ、鶯の白きを罵るが如く、感せらるればなり。罵倒する材料すでに如此なれば、其痛罵も、的を外れ、諷刺も神に入らざることを、道理なれ、又た惜しむべし。

惜む、惜む、この諷刺の盈々たる氣を以て、譬喩の面を被らず、素面に、いで出たるを、惜しむ、惜しむ、この寫實の妙腕を以て、徒らに書生の墮落といへる、狭き觀察に偏したることを、君に寫實の能なしとは言はず、天下君を指目するに、皮肉家を以てす、右何んすれぞ、一蹶して一世を罵倒するの大譬喩を、搆へざる。小説評註は、些技なり、小説家幾人ありとも、未だ罵倒すべき巨幹とは、ならざるを、知らずや、罵倒すべき者あり、爆發彈を、行る、虛無黨が敵を倒す時に、自らも共に倒れて、同じく硝煙の中に、露と消ゆるの趣味を、能く解せば、いざ語らむ、現社界とは、言はず、幾千年の過去より、幾千年の未來に亘る、可き人間の、大不調子是なり。

この評を草する時、傍らに人あり、余に告げて曰く、駒之助と云ひ、貞之進と云ひ、餘りに、軟弱なる人物を、主人公に取りしには、あらずやと。余笑つて曰く、是れ、即ち、綠雨が冷罵に、長ずる所以なり、綠雨は、寫實家の如く、

に細心なれども寫實家の如く又自然を獵ること能はず、彼は眞之進を鑄る時既に八萬の書生を罵らんとを思ひ、駒之助を作る時に既に唐様を學得せる若旦那を痛罵せんとするのみにて、自然不自然は彼に取りて第二の問題なればなりと。

不自然は即ち不自然ながら綠雨も亦た全く不哲學的なるにはあらず、駒之助の愛情とその物狂ひを寫せるところ眞に迫りて、露伴が悟り過たる戀愛よりも面白し、諷刺を離れ冷罵を離れたるところ斯般の妙趣あり、戯曲的なる犬蓼寫實的なる油地獄、われはあつばれ明治二十四年の出色文字と信ず、われは此書を評すとは言はず、只だ奥州より歸りて二日、机上の一冊子を取つて讀みしもの即ち此書にてありければ、讀過する數時間に余が腦中に浮び出たる感念を其儘筆に任せて書き了り、思量する暇もあらず、冷罵の事諷刺の事當らざるの説多からむ、讀者

の是正を待つ。

伽羅枕及び新葉末集

一は實を主とし一は想を旨とする紅葉と露伴、一は客觀的實相を尙び一は主觀的心想を重んずる當代の兩名家、紅葉は伽羅枕を、露伴は辻淨瑠璃を、時を同ふして作り出たり、此二書に就き世評既に定まれるにも拘らず余は聊余が讀來り讀去る間に念頭に浮びし感を記する事となしぬ。

余は二作を讀み了りける後奇しくも實想相分るゝ二大家の作に同致アチイの跡瞭然見る可き者あるを認めぬ、從來の諸作は分明に紅葉をして細微なる人情の觀察者たらしめ露伴をして逸調の奇想を吐く者たらしめたるに、不思議にも伽羅枕及新葉末集に至りて兩家の意匠の其

外部の形式の如何に拘らず陰然相似たる所あるが如し。

紅葉の佐太夫は女性にして露伴の道也は男性なり然れども兩著者の意匠中に入りて其奥を窺へば佐太夫も道也も男女の境を脱して混沌として唯た兩主人公の元素同一なるを認むべきのみ佐太夫とは歴々武士の落胤道也とは名家釜師のなれの果て其生立を聞けば彼も母一人此も母一人彼は娼家又養はれ此は遊蕩と呼ぶ嫗母又養はる彼は賣色場裡に人と成り此も好色修行に身を抛ち彼も華奢豪逸を以て心事となし此も銀むくの煙管を路傍の狗又與へて去るの傲遊を以て快事となす此等の同致を列記すれば際限あらじ然れ雖余が此二作意匠相似たりと言ふは此等外部の同致のみにあらず作家着想の根本又入りて理想の同致あるを認めなければなり。

若し推して言ふ事を得せしめば紅葉は露伴の長所に少くとも乗入

らんとせしなり而して露伴も亦た對獨體奇男兒等の銳利なる奇想を廻り遠しと思ひけむ紅葉獨得の寫實界にまぐれ込まむとの野心を抱きしなり故に伽羅枕は紅葉從來の作に見る可からざる奇氣を吐けり而して新葉末は露伴が登壇以來見せし事なき人情の微妙を細察したり然れども余は兩作家の位地全然轉倒したりと言ふにはあらず唯だ紅葉は露伴に近づき露伴も亦た紅葉又近寄り而して紅葉は紅葉の本躰を備へ露伴は露伴の實色をあらはすと云ふのみ某評者の言へりし如く佐太夫の生涯は江戸の苦海又沈みし後前半部とは全く異なる人物となれり又た同評者の言はれし如く所々に時代違ひの如き者あり要するに彼が其實姉又會ひて後の心想は全く變じて前半部若し紅葉獨得の寫實筆法なりせば後半部はむしろ理想——遊廓内の女豪傑を寫す筆法を變じ來りて往々にして有り得べからざるが如き事實を

寫し出す事他の諸作に比して不似合なるを覺へしむ。究竟するに紅葉は實を寫す特有の天才より移つて佐太夫なる或意味に於ての理想的傳記を書き出たるを以て、平常の細微巧麗なる紅葉の作を讀み慣れたる眼には何となく琴曲を欲ふ時に薩摩琵琶を聞くが如きの感あるなれ。余は佐太夫を以て紅葉の理想なりとは斷せず、唯だ其性質の天晴傾城の神とも言はる可き程なるを見て、紅葉は寫實の點より墨を染めたりと言はんより、寧ろ理想上の一紅唇、兩刀を横へていかめし作りの胸毛男を、いくたりとなく隨伴に連れたる娣が身を眼下に見下さんほどの粹の粹、廓内にての女豪傑になつたる佐太夫を、主觀的に畫き出たりと見るは非か。

去つて新葉末集を讀め、風流佛、一口劍等に幽妙なる小天地想を謳ひ、
の妖物なる道也の影も復せさらばひぬ、道也は實も一妖物なり奇物なり。露伴にあらずんば誰か能く斯般の妖物奇物を擒にせん。平凡無癖を以て愚物なりとし一癖あるにあらざれば談するに足らずとする露伴に道也あるは無理ならぬ事なり。蓋し理想詩人の性として必らず人生を其或る一面相より觀察する者なる故に、道也が奇男兒を作りたる詩人の懷裡に宿りたるは無理ならぬ事なり。然れども道也は理想上の人物として、佐太夫と共に心機靈活の妖物として、遊廓内の豪傑として、粹の粹として、遂に佐太夫程に妙ならず、理想家としての露伴が寫實家なる紅葉のこの種の理想に於て少しく席を譲りたるを惜しむ。然れども元よりこの種の理想に於て優劣を較するの愚を、われ學ぶ者ならず、若し夫れ明治の想實兩大家が遊廓内の理想上の豪傑を畫くに汲々し、我が文學をして再び元録の昔に返らしむる事あらば吾人の遺憾いかば

かりぞや。

この兩著書に於て二大家相邂逅したりとは前に述べたる所なるが、
偕て兩著書の相邂逅したる中心點は何處に存するや。言を換へて云へ
ば兩著書が小極致とするところは何れにありや、何れにありて同致を
見はすや。曰く兩書共に元祿文學の心髓を穿ち、之に思ひくゝの裝束を
着けて出たるどころにあり。或人は此書に於て露伴の文章漸く西鶴を
離れて獨創の躰を出せりと言ひしが、文章に於ては或は然あらんかな
れども、其想に至りては却て元録を學ぶこと前の著述よりも多きに似
たるを怪しむ伽羅枕が紅葉の一代女にして公けに元録を代表する事批
評家既に言へり。われ二大家を以て元録作家の摸擬者と貶する者なら
ず、別に天真の詩才ありて存すること我が深く二大家に信する所なる
が、可惜此二書の世に出たるより余をしてかねて元祿文學に面白から

ずと思ひしところを、此二書を通じて訴へ出づるの止むを得ざるに至
らしめぬ。

その元祿文學の輕佻なるは、其章句の不羈放逸なるが故のみならず
して、其想髓の輕佻なるが故なり。謠曲時代の幽玄なる思想を見ざるの
みならず、優美高妙なる精神を失ひたるのみならず、遊廓内に生長した
るのみならず、是等の者を外にしても元祿文學が大に我邦文學に罪を
造りたる者あり、其を如何にと言ふに戀愛を其自然なる地位より退け
たる事即ち是なり。戀愛なる者は人生の秘機を説明すべき妖女にして、
戀愛を除きたる曉には恐らく美術も文學も價なき珠となり果つべけ
ん。彼の輕佻なる元祿文學は遊廓内の理想家とも言つべき魔道文學者、
好し其始祖には何か抜く可からざる一貫の見識ありたりとせんも、
其相續者摸擬者等の文學上の位地を看れば、恐らく遊廓を以て彼等の

天園と見做し、正路を歩むの人を愚物視し、人生の大不調子、大不都合を見るよりも寧ろ小頑小癖、小不調子、小不都合の眼を具するを尙び、偏曲、軟弱なる意氣より朴直なる野暮の中に隠れたる美を嘲り、至善至惡に對する妙念は残らず擺脱し去りて、只だ慾火炎上の曲りくねりたる一時のすいしさを此上なき者と珍重す。夫れ戀愛は花なり造化の花なり、之を碧玉瓶中に見るよりも墨陀境上に見るに美の價あり然れども去て吉野の物さびたる造化の深き峯のあたりに見るに其美其妙塵垢に近き墨陀の外に勝る事幾倍なるを知るべし。何となれば花は元と造化の天使なるが故に尊きにて造化の威嚴と妙契とが深ければ深き程其花の妙は尊きなれ、戀愛も亦た斯くの如く造化の妙契と威嚴に遠ざかるどころには如何に豪逸奢美を粧ふとも其美其妙は枯瘦して、濱の砂地に生へたる小草のおはれ氣に咲く花の如けんかし、遊廓は即ち砂地

なり、其中に生へたる花は即ち遊廓的戀愛なり、美の眞ならず自然ならぬ事多言を用ひずして明瞭なる可し。さりとて元祿文學が遊廓内の事のみを主としたりと言ふにはあらず、然れども元祿文學者の戀愛に對する思想は好し純然たる遊廓外の素人を寫す場合にも宛然として遊廓的戀愛即ち世に所謂好色的戀愛を主としたる事實は一點の辨折を容るゝの餘地なかるべし。思へ、好色と戀愛と文學上に幾許の懸隔あるを、好色は人類の最下等の獸性を縦にしたるもの、戀愛は人類の靈生の美妙を發揚すべき者なる事を、好色を寫す、即ち人類を自墮落の獸界に追ふ者にして眞の戀愛を寫す、即ち人間をして美を備へ靈を具する者となす事を、好色教導者となり、通辨官となり、つる女士は即ち人類を驅つて下等動物とならしめ、且つ文學上に至妙至美なる戀愛を殘害する者なる事を。

粹を論して伽羅枕に及ぶ

心して我文學史を讀む者必らず徳川氏文學中に粹なる者の勢力を
ろそかならざりしを見む。巢林子以前に多く此語を見ず、其尤も盛なる
は八文字屋以後にありと云ふべし。彼の所謂洒落本こんにやく本及び
草双紙類の作家が惟一の理想とし、武道の士の八幡摩利支天に於ける
が如く此粹様を仰ぎ尊みたるの跡滅す可からず。

粹様の系統を討ぬれば平安朝の風雅之れが遠祖なり、證を換へて言
へば日本固有の美術心より自然的屈曲を経て、茲に至りしなり、而して
其尤も近き親は戯曲と遊廓とにてありしなり。戯曲の事は他日論す可
ければ此には省きつ、遊廓と粹様の關係に就きては一言するも無益な
らざるべし。抑も當時武門の權勢漸く内に衰へて華美を競ひ遊惰を事

とするに及びて、風教を維持す可き者としては僅に朱子學を宗とする儒
教ありしのみ、而して儒教の風教を支配する事能はざるは往時以太利
に羅馬教の勢力地と墮ちて教會は唯だ集會所たるが如き觀ありしと
同様の事實なり。然るに各藩の執政者にして杞憂ある者は法を嚴よし
戒を布きて以て風俗の狂瀾を遮ぎり止めんと試みけれども、遂も如何
ともする能はず外又は嚴格を装ひたる武士道の勇者も、内は言ひ甲斐
なき遊冶郎とありし。泰平と安逸とは人心を驅つて遊蕩と導くは古
今歴史上の通弊なり、徳川氏三百年の治世の下は遊廓の勢力甚だ蔓延
したりしも亦た止を得ざる事實なり。

勇武の士氣漸く衰へ、儒道は僅も一流の人心を抑へ滔々たる遊蕩の
氣風世を流るゝと當つて粹様なる文學上の理想世も出てたり、而して
先明を遊廓内と放てり、武士も紳士も此粹様を仰ぎ尊みたり、遊冶社會

の本尊佛として、色道修行者の最後の勝利として、此粹様は歸依する者甚だ多かりき。然れども粹様と相照應して共に威光を輝かしたる者こそあれ、何を何と言ふも其頃盛なりし俠客道なり。蓋し粹は愛情の公然ならぬより其障子外は發生せしもの、俠は武士道の軟弱ななりしより其屏風外は發達せしもの、此二者物異なれども其原因は同様にして姉と弟との關係あり。然るが故に粹は俠を待つて益々粹は俠は粹を頼みて益々、この二者、隱然宗教及び道教以外、一教門を形成したるが如し。

粹と俠とは遊蕩の敗風より生じ、遊廓を以てテンブルとなしたる事前より言へるが如し。然れども當時の文學中の最大部分たる洒落本戯作の類の大よ之と與りて力ありし事を思はざる可からず。當時の作家は概ね遊廓内の理想家として且つ遊廓場裡の寫實家なりしなり。愛情を高潔なる自然の意義より解釋せず、遊廓内の腐敗せる血涙中より之を

面白氣い書き出でたる者よて、遊廓内の理想を世に紹介し世に教導したる者實は彼等の罪なり。

粹と俠とは遊廓内より生長したり、而して作家は之を世に教へたり。西鶴其積より下つて近世の春水谷峨の一流に至るまで、多くは全心を注いで此粹と俠とを寫さんことをつとめたり。抑も粹は人の好むところ、俠も人の愛するところ、然れども粹をして必らずしも身を食ふ蟲とならしめ、俠をして必らずしも身を傷ふものとならしめしは先代の作家大に其罪を負はざる可からず。

左りながら余は粹と俠とを我が文學史より抽き去らん事を願ふ者よあらず。先にも言へる如く嚴格なる封建制度の下にありて、淫靡を制する權とては儒教の外になく、宗教の勢力は全く此點に及ぼすところなく、唯だ覺束なき禮教の以て萬法自然なる戀愛を抑制しつゝありし

のみなる世、斯かる變体の佛出現せしめて以て戀愛の衆生を濟度したるは自然の勢なるべし。粹様と俠様とが相聯つて當時の文士の理想となりしも怪む可き事にはあらず。

紅葉は當今の歐化主義に逆つて起りし文人なり。純粹の日本思想を以て文壇に重きを持する者なり。われ之を彼が從來の著書に徴して知り、而して伽羅枕に對して初めて其説を堅ふを得たり。粹と俠とは從來の諸文士の理想なりしに今日の紅葉にして鞭を擧げて此問題に進まんとは余の期せざりしところなり。されば紅葉は徳川時代の所謂好色文士とは品異れり、一篇の想隨好色を畫くよりも寧ろ粹と俠とを狭き意味の理想に凝らし出でたりと見るに非か。既に紅葉は廓内の理想家にあらず、而して粹と俠とを寫す必らずしも之を崇拜しての著述

にあらずとするも正しく粹と俠とを以て主眼となしたるは疑ふ可からざるが如し。余は此書の價直を論ずるよりも寧ろ此著の精神を覗ふを主とするなり。即ち紅葉が粹と俠とを集めて一美人を作り、其一代記を書きたる中に如何なる美があるを探らんとするなり。

われ曾て粹と戀愛との關係を想ひて惑ひし事あり。そは舊作家の畫き出せる粹なる者眞の戀愛とは異なる節多ければなり。粹と戀愛とは何處かの點に於て相撞着するかに思はるゝは非か。試に少しく之を言はむ。

戀愛の性は元と白晝の如くなり得る者にあらず。若し戀愛の性をしめて白晝の如くならしめば古來大作名篇なる者得難かるべし。戀愛が盲目なればこそ痛苦もあり悲哀もあるなれ、また非常の歡樂希望想像等もあるなれ。戀と哀は種一つと巢林子が歌ひけるも戀愛が白晝の如く

ならざるよりの事なり。故に戀愛が人を盲目にし、人を癡愚にし、人を燥狂にし、人を迷亂さすればこそ古今の名作あるなれ。而して古今の名作は爰を以て造化自然の神に貫ぬくを得て名作たるを得る所以なり。然るに彼の粹なる者は幾分か是の理に背きて自畫の如くなるを旨とするに似たり。盲目ならざるを尊ぶに似たり。戀愛に溺れ惑ふ者を見て粹は之を笑ふ。總じて迷はざるを以て粹の本旨となすが如し。粹は智に近し、即ち迷道に智を用ゆる者。粹は徳に近し、即ち不道に道を立つる者。粹は仁に邇し、即ち魔境に他を慈しむ者。粹は義に近し、粹は信に邇し、假偽界に信義を守る者。乃ち迷へる内に迷はぬを重んじ、不徳界に君子たる可きことを以て粹道の極意とはするならし。之れ即ち戀愛の本性と相反する第一點なり。凡て戀愛は斯の如き者ならず。粹道は戀愛道に對する隕石ならんかし。近く人口に膾炙する文里の談はなしの如き尤も此説を固

からしむるに足る可し。

次に粹道と戀愛と相撞着すべき點は粹の雙愛的ならざる事なり。抑も粹は迷はずして戀するを旨とする者なり。故に他を迷はすとも自ら迷はぬを法となすやに覺ゆ。若し自ら迷はば粹の價直既に一步を退くやの感あり。迷へば癡なるべし。癡なれば如何にして粹を立抜く事を得べき。粹の智は迷によりて已に失ひ去られ不粹の戀愛に墮つるをこそ粹の落第と言はめ。故に苟くも粹を立抜かんとせば文里が靡かぬ者を遂に靡かす迄に心を隠かに用ひて而して靡きたる後に身を引くを以て最好の粹想とすべし。我も迷はず彼も迷はざる戀も粹なり。彼迷ひ我迷はざる間も或は粹なり。然れども我も迷ひ彼も迷ふ時既に眞の粹よあらず。

今伽羅枕を讀むに粹の粹を寫さんとせし跡歷々として見受けらる。

佐太夫なる一美形の生涯に想像したるところを悉く此粹に歸す可きにはあらねど、其境界より見れば、即ち世の俗粹をたらし盡し、世の金銀を砂礫と見做し、世の榮華を色道の中に收め盡さんとせし心意氣を見れば、彼れの出家前の日々の生涯の半ば、粹道の極意を貫ぬくにありし事知る可し。讀者若し詳に伽羅枕の後半部を讀まば、彼の義氣彼の俠氣彼の毒氣とを兼ね合せて、一條の粹抜く可からざるあるを見む。其の田島に對するを見よ、其幼兒に對するを見よ、其幸三に嫁して後に正助の囁みに應じて富四郎を難なく説き伏せたる後、又た正助にも股を喰はせし粹氣を見よ、而して最後に猛然悔悟して横死せしめし三十有餘の癡漢の冥福を祈るに至りしを見よ、之れ即ち粹の本性にはあらずや。

佐太夫始めより眞の戀を味はさるに似たり。對手とするところ多

くは霜頭の老爺にして自らを盲目とすべきものに會はざりし。否な會はざるにあらざるべし、作者の彼を寫して粹癖を見はすや、己に戀愛と呼べる不粹者を度外視してかゝれるを知らざる可からず。粹癖なる者の堅固なる戀愛の敵にして凡てのフレールチャーと相伴はざるを表はすを知らざる可からず。粹の凝りたる者には如何なる者も矢を向くる事能はざるを示せし著者の粹道の理想高しと言はざる可からず。義理と情には脆くして人一倍の泣蟲と八十五頁佐太夫には言はせられど、この義理と情にも我が粹癖はうち勝つ者ある事は讀者の酌み取る餘情に任せたり。佐太夫居常寛濶にして云々八十頁と著者は言ひたれども其寛濶も粹癖と相戦ひて恐ろしき毒氣を吐くことあるをも讀者の見るまゝに任せたり。人生榮枯の大理も讀むまゝに讀ませたり。好色本として粹を畫かず、粹の理想を元として粹を畫きたるどころ、余が此篇

に向つて感ずるところなり。余は此著の價直を論せんと試みしにあら
ず、此著を讀み去る間に余が念頭に浮びたる丈の粹の理を摘んで斯く
は筆になしたるのみ、若し粹の本體に至りては他日更に詳論するところ
あるべし。

一夕觀

其一

ある宵われ牕にあたりて横はる。ところは海の郷、秋高く天朗らかに
して、よろづの象、よろづの物、凜乎として我に迫る。恰も我が眞率ならざ
るを笑ふに似たり。恰も我が偏促たるを嘲るに似たり。恰も我が力なく
能なく辨なく氣なきを罵るに似たり。渠は斯の如く我に徹透す、而して
我は地上の一微物、渠に悟達することの甚だ難きは如何とや。

月は晚くして未だ上るに及ばず。仰いで蒼穹を觀れば、無數の星宿紛
糾して我が頭にあり。顧みて我が五尺を視更に又内觀して我が内なる
ものを察するに、彼と我との距離甚だ遠きに驚ろく。不死不朽彼と與に
あり。衰老病死我と與にあり。鮮美透涼なる彼に對して、撓み易く折れ易
き我れ如何に赧然たるべきぞ。爰に於て、我は一種の悲慨に撃たれたる
が如き心地す。聖にして熱ある悲慨我が心頭に入れり。罵者の聲耳邊に
あるが如し、我が爲すなきと、我が言ふなきと、我が行くなきとを責む、わ
れ起つて茅舎を出で、且つ仰ぎ且つ俯して罵者に答ふるところあらん
と欲す。胸中の苦悶未だ全く解けず。行く行く秋草の深き所に到れば、忽
ち聽く蟲聲縷の如く耳朶を穿つを。之を聽いて我心は一轉せり、再び之
を聽いて悶心更に明かなり。曩に苦悶と思ひしは苦悶にあらざりけり。
看よ唧々として秋を悲しむが如きもの、彼に於て何の悲しみかあらむ。

彼を悲しむと看取せんか。我も亦た悲しめるなり。彼を吟哦すと思はんか。我も亦た吟哦してあるなり。心境一轉すれば彼も無く、我も無し、邈焉たる大空の百千の提燈を掲げ出せるあるのみ。

其二

われは歩して水際に下れり。浪白ろく萬古の響を傳へ、水蒼々として永遠の色を宿せり。手を拱ぬきて蒼穹を察すれば、我れ「我」を遺れて飄然として、襤褸の如き「時」を脱するに似たり。

茫々乎たる空際は歴史の醇の醇なるもの、ホーマーありし時、プレートありし時、彼の北斗は今と同じき光芒を放てり。同じく彼を燭らせり、同じく我れを光らせり。然り、人間の歴史は多くの夢想家を載せたりと雖、天涯の歴史は太初より今日に至るまで大なる現實として残れり。人間は之を幽奥として見るも、大なる現實は始めより終りまで現實

として残れり。人間は或は現實を唱へ、或は夢想を稱へて、之を以て調和す可からざる原素の如く諍へる間に天地の幽奥は依然として大なる現實として残れり。

其三

われは自から答へて安らかなる心を以て蓬窓に反れり。わが視たる群星は未だ念頭を去らず、靜かに燈を剪つて書を讀まんとするに、我が心は亦ほ彼にあり。我が讀まんとする書は彼にあり。漠々たる大空は思想の廣ろき歴史の紙に似たり。彼處はホーマーあり、シエークスピアあり、彗星の天系を亂して行くは、バイロン、ホルテアの徒、流星の飛び且つ消ゆるは、泛々たる文壇の小星、呼、悠々たる天地、限なく窮りなき天地、大なる歴史の一枚、是に對して暫らく茫然たり。

哀詞序

歡樂は長く留り難く盡くる時を知らず。よろこびは春の華の如く時
よ順つて散れどもかなしみは永久の鼓吹をなして人の胸をこゝろか
す。會ふ時のよろこび別るゝ時のかなしみを償ふべからず。はたまた會
ふ時の心は別るゝ時の心の萬分の一にだも長からず。生を享け人間に
出でゝ心を勞して荆棘を過る。或は故なきに敵となり、或は故なきに味
方となり。恩怨兩つながら暴雨の前の蛛網に似て、徒らに雷だ毛髮の細
き縁を結ぶ。夕に笑ひしに因て朝に泣く。果を見つ朝に泣きしに因つ
て更に又た夕に笑はんとす。斯の如きは憫れむべし、斯の如きは悲しむ
べし。斯の如きは厭ふべし、我れつらく世相を觀するに、誰か亦た斯の
如くならざらむ。娼婦の涕は紅涙と賞ぬられ、狼心の偽捨は慈悲と稱へ
らる。友と呼び愛人といふもはしたなきもつれに脆くも水と冷ゆるは
世の習ひなり、鷲を白しと云ひ、鵲を黒しといふも唯だ目よみゆること

るを言ふのみ、人の心を尋ねればよしなきことを争ひては、瞋悲の焰を
懷にもやし、露ほどの恨みも長しへに解くることなく人を毀はんと思
ふ。右に行くものゝ袂は左に行くものゝ手に把られ、左に行くものも亦
た右に行くものに支へらる。鶴の面をもてる者に蛇の心あり、美はしき
果實に怖ろしき毒を含めることあり、洞に近けば虻蛇蟄し、林に入れば
猛獸遊ぶ。二世といふ縁に二世あるは、少なく三世といふに三世あるも
亦尠なし、まことの心にて契る誓は稀にして、唯だ目前の情と慾とに動
くも亦たはかなき至りなり。讐と思とに於て亦た斯の如し。必らず酬ふ
べしと思ふ程ならば、酬はずして自から酬ゆるものを、必らず忘れじと
いふ恩ならば、忘るゝとも自から忘るまじきを、讐には手をもて酬ひん
と思ふと多く、恩には口をもて報すること多し。敵と味方に於いて亦た
斯の如し。一時の利の爲めに味方となるものは、又た一時の害の爲めに

離るゝを易しとす。一時の害の爲めに敵となるもの、又た一時の利の爲めに味方となるを易しとす。西風には東に飛び、東風には西に揚がるは紙鳶なり、人の心も大方は斯くの如し。風の西に吹くを能く見るものは達識者と呼び、風の東に轉ずるを看破するものあれば卓見家と稱なへんとす。勇者はその風に御して高く飛び、智者はその風を袋に蓄はへて後の用を爲す。運よくして思ふこと圖に當りなば傲然として人を凌ぎ、運あしくして躬窮りなば憂悶して天を恨む。凌がるゝ人は凌ぐ人よりも眞に愚かなりや、恨まるゝ天は恨む人の心を測り得べきや。斯の如きは世なり。斯の如きは人間なり。深く心を人世に置くもの安くんぞ憂なきを得ん。安くんぞ悲なきを得ん。甘露を雨らす法の道も世を霑ほすこと遅く、仁義の教も人の心をいかにせむ。天地の間に我が心を寄するものを求めて得ざれば我が心は潤れなむ。

我はあからさまに我が心を目ふ、物に感ずると深くして悲に沈むこと常ならざるを。我は明かに我が情を目ふ、美しくしきものに意を傾くると人に過ぎて多きを。然はあれども、わが美しくしと思ふは人の美しくしと思ふものにあらず、わが物に感ずるは世間の衆生が感ずる如きにあらず。物を通じて心に徹せざれば自ら休むとを知らず、形を鑿ちて精に入らざれば自ら甘んずること難し。人われを呼びて萬有的趣味の賊となせど、われは既に萬有造化の美に感ずるの時を失へり。多くの繪畫は我を欺けり、名匠の手に成るものと雖多く我を感せしむる能はず。繪畫既に然り、この不思議なる造化も然り。造化も唯だ自然に成りたる。繪畫のみ。われは世の俗韻俗調の詩人が徒らに天地の美を玩弄するを惡むこと甚だし。然れども自ら顧みる時は何が故に我のみ天地の美に動かさるゝこと少なきかを怪しまずんばあらず。動かさるゝこと少なきに

あらず、多く動かされて多く自ら欺きたればなり。我は再び言ふ、われは美くしきものに意を傾くること人に過ぎて多きを。花のあしたを山に迷ひ、月のゆうべを野にくらすなど、人には狂へりと言はるゝも自から悟るとを知らず、人には愚なりと言はるゝも自から賢からんとを冀はず。或時は蝶の夢の覺め易きを恨み、またある時は蟲の音の夜を長ふするを悲しむ。この恨みこの悲しみを何が故の恨み、何か故の悲しみぞと問ふも、蝶の夢は夢なればこそ覺め、蟲の音は秋なればこそ悲しきなれと答ふるの外に答なきに同じ。嗚呼天地味ひなきこと久し、花にあらざるもの誰ぞ、月又嘯くもの誰ぞ、人世の冉冉として滅毀するを嗟し、恨として命運の私しがたきを慨す。

身は學舎にあり、中宵枕を排して、燈を剪りて亡友の爲に哀詞を綴る。筆動くこと極めて遅く、涕零すること甚だ多し、相距ること二十餘日、天地の間に於てこの距離は幾何ぞ。

(哀詞本文は未だ稿を完ふせず)

山庵雜記

其一

夢見まほしやと思ふ時あやにくに夢の無き事あり、夢なかれと思ふ時うとましき夢のもつれ入ることあり。寤むる時亦た斯の如し、意はざらんと思ふに意ひ、意はんと思ふに意はず。去りて意の如くならぬをば意の如くせまじと思ふにもあらず、靜に傾き盡きなんとする月を見れば、よろづ意の儘ならぬものぞなき。徐ろよ咲き出らん花を待つに、よろづ心に任せぬものぞなき。如意却つて不如意、不如意却つて如意、悲しむも何かせむ、歡ぶも何かせむ。無心を備ひ來つて、悲みをも歡びをも

同じ境界を放ちやりてこそ、まことの樂は來るなれ。

其二

早曉臥床を出でし心は寤寐の間を醒め、意ひは意無意の際にある時、一鳥の弄聲を聴けば、忽として我れ天涯に遊び忽として我塵界に落るの感あり、我に返りて後其聲を味へば、凡常の野雀のみ、然るも我が得たる幽趣は地に就けるものならず、爰に於て私に思ふは、感應我を主として他を主とせざるを。

其三

人間の心中に大文章あり、筆を把り机に對する時に於てよりも、靜默冥坐する時に於て、燦爛たる光明ある事多し。心中の文章より心外の文章を綴るは善し、心外の文章を以て心中の文章を装はんとするは文字の賊なるべし。古へより卓犖不羈の士往々よして文章を事とするを喜

ばす文字の賊とならんより、心中の文章に甘んじたればならむ。

其四

身心を放ちて冥然として天造に任せんか、身心を收めて凝然として寂定に歸せんか、或は猖狂或は枯寂、猖狂は猖狂の苦味あり、枯寂は枯寂の悲寥あり、魚躍り鳶舞ふを見れば、聊か心を無心の境に驅ることを得、雨そぼち風吹きさそうにあひては、忽ち現身の心に還る、自然は我を弄するに似て弄せざるを感得すれば、虚も無く實もなし。

其五

世にありがたき至寶は涙なるべし。涙なくては情もなかるらむ。涙なくしては誠もなかるらむ。狂ひに狂ひし、パイロンには涙も細繩程の役にも立ざりしなるべけれど、世間おほかたのものを繋ぎ止むるはこの寶なるべし。遠く行く情人の足を踏み止まらすもの、猛く勇む雄士の心を

弱くするもの、情差ひ歡薄らぎたる間柄を緊め固ふするもの、涙の外には求めがたし。人世涙あるは原頭に水あるが如し。世間もし涙を神聖に守るの技に長けたる人を舉げて主宰とすることあらば、甚く悲しきことは跡を絶つに幾からんか。

其六

「危く研られたる石にも神の定めたる運あり。」とは沙翁の悟道なり。靜かに物象を觀すれば物として定運なきにあらす。誰か恨むべき神を知りそめたる。誰か啣つべき佛を識りそめたる。心を物外に抽かんとするは未だし、物外物内何すれど悟達の別を畫かむ。運命に默從し、神意に一任して、始めて眞悟の域に達せんか。

其七

孤雲野鶴を見て別天地に逍遙するは詩人の至快なり。然れども苦海

塵境を脱離して一身を挺出せんとする人間の道にあらす。苦海塵境に清涼の氣を輸入するにあらざれば詩人は一の天職を帯びざる放蕩漢にして終らんのみ。

其八

他を議せんとする時尤も多く已れの非を悟る、頃者激する所ありて生來甚だ好まざる駁撃の文を草す。草し終りて靜に内省するに、人を難するの筆は同じく已れを難せんとするに似たり。是非曲直輕しく判し難し。如かず修練鍛磨して明りに他人の非を測らざることをつとむるに。

其九

大なる「悔改」は又た一個の大信仰なり。罪の罪たるを知らざるより大なる罪はなし。とはカーライルに聞くところなり。昨日の非を知りて明

日の是を期するは信仰に入るの要絨にして、罪人の必らず自殺すべしとせざるは之をもてなり。罪の重荷は忘れざるによつて忘るゝを得べし、忘れたる重荷はいつまでも重荷なり。悔改の生涯は即ち信仰の生涯なるか。

富嶽の詩神を思ふ

空を望んで駿驅する日陽、虚に循て警立する侯節、天地の運流いつを以て極みどはするならん。

朝に平氏あり夕に源氏あり、飄忽として去り飄忽として來る、一潮山を噬んで一世紀没し、一潮退き盡きて他世紀來る、歴史の載するところ一潮毎に葉數を減じ、古苔蒸し盡して英雄遺魂日に月に寒し。
嗟呼人生の短期なる、昨日の紅顏今日の白頭、忙々促々として眼前の



事に營々たるもの、悠々綽々として千載の事を慮るもの、同じく之れ大暮の同寐。霜は香菊を厭はず、風は幽蘭を容さず、忽ち逝き忽ち消ぬ。選冥として踪ぬべからざるを致す。

墳墓何の權かある。宇内を睥睨し、日月を叱咤せし古來の英雄何すれど墳墓の前に弱兔の如くなる。誰か不朽といふ字を字書の中に置きて、而して世の俗眼者流をして縦に流用せしめたる。嗚呼墳墓汝の冷々たる舌、汝の常に餓へたる口、何者をか噬まざらん何物をか呑まざらん。而して墳墓よ、汝も亦た遂に空々漠々たり。水流滔々として洋海に趣けど洋海は終に溢れて大地を包まず、再々として行暮する人世遂に新なるを知らず、又故なるを知らず。

花には花に弄せられざるもの誰ぞ、月には月に翫ばれざるもの誰ぞ、風狂も亦た一種の變調子、風狂も亦た一種の變調子なりとせば、人間い

かにして變調子ならざる事を得む。暗冥なる「死」の淵に、相及び相襲ぎて沈淪するもの、果して之れ人間の運命なるか。舌能く幾年の久しきに辯せん。手能く幾年の長きに支へん。辯するところ何物ぞ支ふるところ何物ぞ。わが筆も亦た何物ぞ。言ふ勿れ。蓋鬱たる森林幾百年も亘りて巨鷲を宿らすと。言ふ勿れ。豐公の武威幾百世を蓋ふと。嗟何物か終に盡きざらむ。何物か終に滅せざらむ。寤めざるもの誰ぞ。悟らざるもの誰ぞ。損喪せざるもの。竟に何處にか求めむ。

寤果して寤か。寐果して寐か。我是を疑ふ。深山夜に入りて。籟あり。人間の晝に於て聲なき事多し。寤むる時人眞に寤めず。寐る時往々にして至樂の境にあり。身軀四肢必らずしも人間の運命を示すにあらす。別は人間大に施爲する所あり。潜に思ふ。終に寤ざるもの眞の寤か。終に寐せるもの眞の寐か。此境に達するは人間の容易く企つる能はざる所なり。

愛すべきものは夫れ故郷なるか。故郷又は名狀すべからざるチャームの存するあり。風流雅客を嘲るもの。邦家を知らざるの故を以て彼等を貶せんとする事多し。故郷は之れ邦家なり。多情多思の人の尤も邦家を愛するは何人か之を疑はむ。孤劔提げ來りて以太利の義軍又投じ一命を惡疫に委したるパイロン我れ之を愛す。請ふ見よ羅馬死して羅馬の遺骨を幾千万も傳へ。死して猶ほ死せざる詩祖ホーマーを。邦家の事曷んど長舌辨士のみ能く知るところならんや。別に滿腔の悲慨を涵へて生死悟明の淵に一生を憂ふるものなからすとせんや。

俗物の尤も喜ぶところは憂國家の稱號なり。而して自稱憂國家の作するところ多くは自儘なり。彼等は僻見多し。彼等は頑曲多し。彼等は復讐心を以て事を成す。彼等は盲目の執着を以て業を急ぐ。彼等は夢幻中の虚想を以て唯一の理想となす。彼等の慷慨彼等の憂國多くは彼等の

自○ら○期○せ○ざる○渦○流○に○卷○き○去○ら○れ○て○終○る○こ○と○あ○る○も○の○ぞ○

朽ちざるものいづくよある、死せざるものいづくにある。われ答を俟ちて躊躇せり、而して答遂に來らず。朽ちざるに近きものいづくよある、死せざるに近きものいづくよある。われこの答へを聞かんが爲よ過去の半生を逍遙默思よ費やせり、而して遂よその一部分を聞けりと思ふは非か非ならざるか。

天地の分れし時ゆ、神さびて高く貴き駿河なる富士の高嶺を、天の原振りさけ見れば渡る日の影も隠るひ、照る月の光も見ぬ。白雲もい行憚り時じくぞ雪は降りける、語り継ぎ云ひ継ぎ行かん富士の高嶺は、(赤人)

白雲黒雲、積雪、潰雪、閃電、猛雷、是等のものを用役し、是等のものを使僕し、是等のものを制御して、而して恒久不變に威靈を保つもの、富嶽よ、夫れ

汝か渡る日の影も隠るひ、照る月の光も見ぬ。晝は晝の威を示し、夜は夜の威を示す。富嶽よ、汝こそ不朽不死に邇きものか、汝が山上の浮雲よりも早く消ぬ、汝が山腹の電影よりも速に滅する。浮世の英雄何の戯れぞ、いさましや汝の山麓を西に馳する風、こゝろよや汝の山嶺を東に飛ぶ風。流轉の力、汝に迫らず、無常の權、汝を襲はず。自由、汝と共にあり、國家、汝と與に樹てり、何をか畏れとせむ。

遠く望めば美人の如し、近く眺れば威嚴ある男子なり。アルプス山の、大歐文學に於けるわが富嶽の大和民族の文學よ、於ける淵源するところ、關聯するところ、豈寡しとせんや、遠く望んで美人の如く、近く眺めて男子の如きは、そも我文學史の證しするところの姿に、あらずや。アルプスの崇巖、或は之を缺かん、然れども富嶽の優美、何ぞ大に譲るところあらん。われはこの觀念を以て、我文學を愛す。富嶽を以て、女姓の山とせば

我文學も恐らく女姓文學なるべし。雪の衣を被ぎ白雪の頭巾を冠りたる恒久の佳人、われはその玉容をたのしむ。

盡きす朽ちざる詩神風に乗り雲に御して東西を飄遊し玉へり。富嶽駿河の國に崛起せしといふ朝、彼は幾億萬里の天峯よりその山嶺に急げり、而して富嶽の威容を愛するが故に、その殿居に駐まり棲みて遂に復た去らず。是より風流の道大に開け人磨赤人より降つて、西行芭蕉の徒、この詩神と逍遙するが爲に、富嶽の周邊を往返して、形なく像なき紀念碑を空中に構設しはじめたり。詩神去らず、この國は愛すべし。詩神去らず人間なほ味あり。

鬼心非鬼心

悲しき事の、さても世には多きものかな、われは今讀者と共に、しばらく

く空想と虚榮の幻影を離れて、まこととありし一悲劇を語るを聞かむ。語るものはわがこの夏雲時の假の宿とたのみし家の隣と住みし按摩男なり。ありし事がらは、そがまうへなる禪寺の墓地よして頃は去歳の初秋とか言へり

二本榎に朝夕の烟も細き一かまどあり、主人は八百屋よしてかつぎうりを以て營とす、そが妻との間も三五ばかりなる娘ひとり、六歳もなりたる小兒とあり。夫は實直なる性なれば、家業も怠ることなく、妻も日頃謹慎の質よして物多く言はぬほど糸針の道よは心掛ありしこのうはさなり。かゝればかまどの烟細しとは言ひながら其日其日を送るよ太き息吐く程よはあらず、折よは小金貸し出す勢ひさへもありきと言ふものもありけり。

妻の何某はいつの頃よりか何となく氣鬱の様子見へ始めたれども

家内のものは更なり、近所合壁のやからも左したる事とは心付かず唯だ年長けたる娘のみはさすが母の氣むすかしげなるを面白からず思ひしとぞ。世のありさま三四年このかた金融の逼迫より、種々の轉變を見しが、別して其日かせぎの商人の上には輕からぬ不幸を生せしも多かり。正直をもて商賣する者に不正の損失を蒙らせ、眞面目に道を歩むものに突當りて荷を損ずるやうの事漸く多くなれりと覺ゆ。かの夫妻未だ左したる困厄又は陥らねど、思はしからぬが苦情の元なれば時として夫婦顔を赤めるなどの事もありしとぞ。裏家風情の例として、其日又得たる錢をもて明日の米を買ふ事なれば、米一粒の尊さは餘人の能く知るところ又ならず。或日の事とて妻は娘を家々残しつ、小兒を携へて出で行きしが、米買ふ錢を算へつゝ、ふと其口を洩れたる言葉は、もし此小兒なかりせば日々二錢を省くとを得べきまなりし。之を開きたる小娘は左まで又怪しみもせざりし。その容貌も殊更と思はるゝところはあらざりしとぞなむ。

このあたりの名寺なる東禪寺は境廣く樹古く陰鬱として深山又入るの思あらしむ。この境内又一條の山徑あり、高輪より二本榎に通ず、近きを擇むもの、こゝを往還することとなれり。累々たる墳墓の地苔滑らかに草深し、もゝちの人の魂魄無明の夢又入るところ。わがかしこに棲みし時又は朝夕杖を携へて幽思を養ひしところ。又た無邪氣の友と共よ山いちごの實を拾ひて樂みしところなり。

家を出でし程久しきよ、母も弟も還ること遅し、鴉は杜を急げども歸らぬ人の影は破れし簷の夕陽の照光よりうつらす。幾度か立出でし、出で行きし方を眺むれば沈み勝なる母の面は更なり、此頃とんぼ追ひの仲間に入りて楽しく遊びはじめたる弟の形も見へず。日は全く暮れぬれ

ども未だ歸らず。案じわびて待つうち、雨戸の外、人の音しければ急ぎ戸を開くに、母ひとり忙然として立てり。その様子怪しげに見へはせしもの、いかゞ悲しき事のありけんとは思ひもよらず。弟はと問へば、しばし黙然たりしが、何かは知らず太息と共、あれは殺して來たよと答へぬ。

始めは戯れならむと思ひしが、その容貌の青ざめたるさへあるに、夜の事とて共、歸らぬ弟の身の不思議さ、何處までと問ひければ、東禪寺裡までと答ふ。驚ろき呆れて、半ば疑ひながらも母の言ひたるころ、走り行きて見れば、こはいかゞ無残や一人の弟は倒れ、墓の門なる石桶より沈められてあり。其傍にまぐさき血の迸りかゝれる痕を見たりと言へば、水にて殺せしにあらで、石に撃つけてのちに水を入たると覺たり。氣も絶へ入んはせに響き、或ひしが、走り還りて泣き叫びつ

く、近隣の人を呼びければ、漸く其筋の人も來りて死骸の始末は終りしが、殺せし人の繼しき中、もあらぬ母の身にありながら、鬼にもあらぬ鬼心をそしらぬものもなかりけり。

東禪寺寺内より高輪の町に出でんとする細徑、又覆ひかゝれる一老松あり。晝は近傍の頑童等こゝに來りて松下の細流に小魚を網する事もあれど、夜に入りては蛙のみ雨を誘ひて鳴き騒げども、その濁れる音調を驚ろき休まず足音とては稀に聞くのみなり。寺内に棲みける彼の按摩、その業の爲、よはかゝる寂寥も慣れたれば、夜出でし夜歸るよこわさといふもの未だ覺ぬ知らず、五月雨の細々たる陰雨の中、一二度は彼燐火をも見たれど、左して怖るゝ心も起らじと言へり。

雨少しくそぼちて桐の青葉の重げに垂るゝ一夜、暮すぎて未だ程もあらせず、例の如く家を出でし彼の老松の下に來掛りし時、突然片影よ

り顯はれ出るものありと見る間に、わが身にひたとかじりつき、逃げんとするも逃げられず、膽潰れながらも、其人を見れば、髪は亂れて肩よからみ、色は夜目にも青白ろく、鬼にやあらむ人にやあらむと思ふばかり、身はわな／＼と顫ひて、振り離さん程の力もなくなれり。やうやく氣を沈めて、其人の態をつく／＼打ち眺むれば、まがう方なき狂女なり。さては鬼よもあらずと心稍々安堵したれば、何故にわれを留むるやと問ひしに、唯ださめ／＼と泣くのみなり。再三再四問ひたる後に、答へて曰ふやう、妾は今宵この山のうしろまで行かねばならずと。何用あつて行くやと問ひければ、そこに兒を殺したる事あれば、こよひは我も共に死なむと思ひてなり。この言を聞きて、さては前日の兒殺よなど心付きたれば、更な氣味あしく、いかにもして振離して逃げんとすれど、狂女の力常の女の腕にあらざれば、しばしばは敵は難しの或はなだめり、得意客

は待ちあぐみてあらむに、いかにせばやと案じわづらふばかりなり。いか言ふとも一向に聞き入れず、死なねば濟まずとのみ言ひ募りて、捕へし袖を挽きて、吾を彼の山中に連れ行んとす。もし愈々死なむとならば、獨り行きても宜からずやと言へば、ひとりにては寂しき路を通ひがたしと言ふ。幸にも、この時角燈の光微かにかなたに見へければ、聲を擧げて巡行の査官を呼び、茲に始めて蘇生の思ひを爲せり。

始は査官言を盡して説き諭しけれど、一向に聞入れねば止むとを得ずして他の査官を備ひ來りつ、遂に警察署へ送り入れぬ。

彼女は是より精神病院へ送られしが、數月の後に、病全く癒へてその夫の家へ歸りけれど、夫妻とも、元の家へは住ますいづれへか移りて、噂のみはこのあたりのにのこりけるとぞ。以上は我が自から聞きしところなり。但し聞きたるは、この夏の事、筆にものして世の人の同情を請はん

と思ひたちしは、今日土曜日の夜秋雨紅葉を染むるの時なり。

殺さんと思ひたちしは偶然の狂亂よりなりし、されども斯の如き悲劇の斯くの如き徒爾の狂亂より成りしことを思へば、まがつみの魔力いかに迅且大ならずや。親として子を殺し、子として親を殺す、大逆不道此の上もあらず、然るに斯般の惡逆の往々にして世間に行はるゝを見れば、誰か悽惻として人間の運命のはかなきを思はざらむ、狂女心底より狂ならず、醒め來りて一夜悲悼に堪へず、兒の血を濺ぎしところに行きて己れを殺さんとす、己れを殺さん爲にその悲しき場所に獨り行くことを得ず、却つて路傍の人を連れ立てんことを請ふ、狂にして狂ならず、狂ならずして猶ほ狂なり、あわれや子を思ふ親の情の、狂亂の中に隱在すればなるらむ、その狂亂の原はいかに渠が出でがけに、目ひし一言、深

昨夜は淵明が食を乞ふの詩を讀みて其清節の高きに服し、今夜は慘憺たる實聞をものして、思はず袖を濡らしけり。知らぬうちとて、默思逍遙の好地と思ひしところ、この物語を聞きてよりは自からに足をそのあたりに向けずなりにき。かの地に住みし時この文を作らず、却つて今の巷にうつりて之を書くは、わが悲悼の念のかしこにては餘りに強かりければなり、思へば不思議なるほどに酸鼻のこともあるものかな。

秋窓雜記

第一

かなしきものは秋なれど、また心地好きものも秋なるべし。春は俗を狂せしむるに宜れど、秋の士を高うするに加かず。花の人を酔はしむると月の人を清ましむるとは、自から味を異にするものあり。喜樂の中に

人〇〇の五〇〇情〇〇を〇〇没〇〇了〇〇す〇〇る〇〇は〇〇世〇〇俗〇〇の〇〇免〇〇か〇〇る〇〇、〇〇能〇〇は〇〇ざ〇〇る〇〇と〇〇こ〇〇ろ〇〇な〇〇が〇〇ら〇〇わ〇〇れ
は萬木凋落の期に當り靜かに物象を察するの快なるを撰ぶなり

第二

希望は人を欺き易きものぞ。今年の盛夏鎌倉に遊びて居ること僅かに二日、思へらく此秋こそは爰に來りてよろづの秋の悲しきを味ひ得んと。圖らざりき身事忙促として空しく中秋の好時節を紅塵萬丈の裡に過さんとは。然れども秋は鎌倉に限るにあらず、人間到るところに詩界の秋あり。欺き易き希望を駕御するの道は斯にこそあれ。

第三

我庵も亦た秋の光景には洩されける。咽なきやぶるばかりのひよどりの聲々、高き梢に聞ゆるに、窓開きてそこかこゝかとうち見れば、そこ鳥の聲ぞと聞けば、鳥の聲なり、秋の聲ぞと聞けば、おもしろさ讀書の類にあらず。

第四

病みて他郷にある人の身の上を氣遣ふは人も我もかわらじ、左れど我は常に健全なる人のたま〜床に臥すを祝せんとはするなり。病なき人の道に入ることの難きは富めるものゝ道に入り難きに等しからむ。世には躰健かなるが爲に心健かならざるもの多ければ常に健やかなるものゝ十日二十日病床に臥すは左まで恨むべき事にあらず。況してこの秋の物色に對して命運を學ぶにこよなき使あるをや。斯く我は眞意を以て微恙ある友に書き遣れり。

第五

萩薄我が庭に生ふれど我は在來の詩人の如く是等の草花を珍重す

ること能はず。我は荒漠たる原野に名も知れぬ花を愛づるの心あれども、園藝の些技にて造詣したる矮少なる自然の美を左程にうれしと思ふ情なし、左は言へど敢て在來の詩人を責むるにもあらず、又た自己の愛するところを言はんとにもあらず、唯だ我が秋に對する感の一として記するのみ。

第六

鴉こそをかしきものなれ。わが山庵の窓近く下り立ちて、我をながし目に見やりたるのち、追へども去らず、叱すれども驚かず、やうともすれば脚を立て首を揚げて飛去らんとする景色は見すれど、わが害心なきを知ればにや、たいちよろしくと歩むのみ。浮世は廣ければ、斯る曲物を置きたりして何の障りにもなるまじけれど、その芥ある處に集り穢物ある處に群がるの性あるを見ては、人間の性々之に類するもの多きを想ひ至りて聊か心悪くなりたれば、物を抛ぐる真似しけるに、忽ちに飛去りぬ。飛去る時かあ、かあ、と鳴く聲は我が局量を嘲る者の如し。實に皮肉家と云ふもの文界のみにはあらざりけり。

第七

夜更けて枕の未だ安まらぬ時、蟋蟀の聲を聞くは眞の秋の情なりけむ。その聲を聞く時に、希望もなく失望もなく、恐怖もなく欣樂もなし。世の心全く失せて秋のみ胸に充つるなり。松虫、鈴虫のみ秋を語るにあらず。古書古文のみ物の理を我に教ふるにあらず。一蟋蟀の爲に我は眠を惜まれて、物思ひなき心に思を宿しけり。

第八

芭蕉の葉色、秋風を笑ひて籬を蓋へる微かなる住家より、ゆかしき音の洩れきこゆるは、仇心浮きて其が中を覗ひ見れば、年老ひたる盲女の

琵琶を彈する面影凜乎として俗世の物ならず。その律調の端正なること今の世の浮華なる音樂に較ぶべからず。うれしき事に思ひぬ。

第九

紅葉館は我庵の後にあり。古風の茶亭とは名のみにて、今の世の浮世才子が高く笑ひ低く語るの場所なり。三絃の音耳を離れず、蹈舞の響森を穿ちて來る。その音の卑しく其響の險なるは幾多世上の趣味家を泣かすに足る者あるべし。紳士の風儀久しく落て之を救濟するの道未だ開けず。悲いかな。

第十

わが幻住のはどりに情しらぬもの多く住むにやあらむわがうつりてより未だ月の數も多からぬに三度までも猫を捨てたるものあり。一たびは朝早く我机邊に泣くを見出し、二度目には雨ふりしきるは、の外より投入れられぬ。三度目は我が居らざりし時の事なれば知らず。浮世の辛らきは人の上のみならずと覺わたり。

第十一

今の世の俳諧士は憐れむべきものなるかな。我庵を隔つると杜ひとつ、名宗匠其角堂永機住めり、一日人に誘はれて訪ひ行きつ閑談久しき後彼の導くまゝに家の中あちこちと見物しけるが、華美を盡すといふ程にはあらねど、よろづ數奇を備へて粹士の住家とは何人も見誤らぬべし。間數も不足なき程にあれば何をか啣つべきと思ふなるに、俳翁頻りに其狹陋なるをつぶやきて止まず。一向に心得ねば、笑つて翁に言ひけるやう、御先祖其角の住家より狭しと思すにやと。俳士をして俗に媚ぶとの止むを得ざるに至らしめたるものあるは余と雖之を知らぬにあらねど、高達の士の俗世に立つことの難きに思ひ至りて默然たるこ

と稍しばしなりし。

三日幻境 (上)

人生何すれど常に忙促たる、半生の過夢算ふるに遑なし、悲しいかな我も亦た浮萍を追ひ迷雲を尋ねてこの夕徒らに往事を追懐するの身となれり。

常○に○惟○ふ○志○を○行○は○ん○ど○す○る○も○の○は○必○ら○ず○し○も○終○生○を○勞○役○す○る○に○及○ば○す○。詩壇の正直男ゴールドスミスこの情を賦して言へることあり。

I still had hopes, my long vexation past

Hee to return—and die at home at last.

浮世は背き微志を蓄へてより世路酷だ峭曉、烈々たる炎暑凄々たる

故郷なつかしく袖を涙よひぢしことあり。

われは函嶺の東山水の威靈少なからぬところよ産れたれば、我が故郷はと問はゞそこ答ふるよ躊躇はせねども、往時の産業は破れ、知己親縁の風流雲散せざるはなく、快く疇昔を語るべき古老の存するなし。山水もはた昔時又異なりて豪族の擅横をつらよくしと思はずなむを垂るゝは流石よ名山大川の威靈も半死せしやと覺て面白からず、追懐のみ又其地を我故郷とうなづけど、希望は我々他の故郷を強ゆる如し。

回顧すれば七歳のむかし我が早稻田ありし頃我を迷はせし一幻境ありけり。軽々しくも夙に少くして政海の知己を得つ、交りを當年の健兒と結びて鬱勃沈憂のあまり月を弄し花を折り、遂は書を抛げ筆を投じて、一二の同盟と共に世塵を避けて一切物外の人とならんと企て

き。今よして思へば政海の波浪は自から高く自から卑く虚名を貪り俗情又躑はるゝの人よは棹を役ひ橈を用ゆるのおもしろみあるべきも、わが如く一片の頑骨よ動止を制し能はざるものゝ漂ふべきところならず、然れども我は實よこの波浪よ漂蕩して悲憤慷慨の壯士と共よ我が血涙を絞りたりしなり。醜惡なる社會を罵蹴して一蹶青山よ入り怪しげなる草廬を結びて、空しく俗骨をして嗜人の名よ敬して心よは遠けしめたるなり。この時よ我が爲めよこの幻境を備へ、わが爲よこの幻境の同住をなせしものは相州の一孤客大矢蒼海なり。

はじめてこの幻境よ入りし時蒼海は一田家よ寄寓せり、再び往きし時よ彼は一畸人の家よ寓せり、我を駐めて共よ居らしめ、我を酔はしむるよ濁酒あり、我を歌はしむるよ破琴あり、縦よ我を泣かしめ、縦よ我を笑はしめ、我素性を枉げしめず我をして、我疎狂を知るは獨り彼のひと

の歎を發せしめぬ。おもむろよ庭樹を瞰めて奇句を吐かんとするものは此家の老畸人、劔を撫し時事を慨するものは蒼海天を仰ぎ流星を數ふるものは我れ、この三箇一室よ同臥、同起して玉兔幾度か罅け幾度か満ちし。

三たび我が行きし時よ蒼海は幾多の少年壯士を率ひて朝鮮の擧よ與らんとし、老畸人も亦た各國の點取よ雷名を轟かしたる秀逸の吟咏を廢して自村の興廢よ關るべき大事よ眉をひそむるを見たり。この時よ至りて我は既に政界の醜狀を惡くむの念漸く専らよして利劔を把つて義友と事を共よするの志よりも、靜かよ白雲を趁ふて千峰万峰を攀づるの談興に耽るの思望大なりければ、義友を失ふの悲しみは胸に餘りしかども私かよ我が去就を紛々たる政界の外よ置かんとは定めぬ。この第三回の行はわれ髪を剃り箆を曳きて古人の跡を踏まんと、自

から意向を定めてありしかば義友も遂に我に迫らず、遂に大坂の義獄
と與らざりしも我が懷疑の所見朋友を失ひしによりて大に増進し、こ
の後幾多の苦獄を経歴したるは又た是非もなし。

狂ひは狂ひし頑癖も稍静まりて茲年人間生涯の五合目の中阪にた
ゆたひつゝ、そゝろに舊事を追想し、歸心矢の如しと言ひたげなるこの
幻境に再遊の心はこの春松島に遊びし時より衷裡を離れず。幸にして
大坂の事ありてより消息絶へて久しき蒼海も獄を出で、近里に棲め
ば書を飛ばして三個同遊せんを憊むるに來月まで待つべしとの來
書なり。我は一日を千秋と數へて今日まで待ちつるものを今更に閑暇
を得ながら行くべきをころに行かぬはあさはかな心の虫の焦つを抑
へかねて、一書を急飛し飄然家を出で、彼幻境に向ひたるは去月二十
七日。

この境都を距ること遠からず、むかし行きたる時には幾度か鞋の紐
をゆひはどきしけるが今は氣笛一聲新宿を發して名にしあふ玉川の
砧の音も耳には入らで、旅人の行きなやむてふ小佛の峠に近きところ
より右に折れて、數里の山徑もむかしにあらで腕車のかけ聲すままし
く、月のなき桑野原、七年の夢を現にくりかへして幻境に着きたる頃は
夜も既に十時と聞きて驚ろきたり。この幻境の名は川口村字森下。訪ふ
人あらば俳號龍子と尋ねて我が老崎人を音づれよかし。

龍子は當年六十五歳、元と豪族に生れしが少うして各地に飄遊し、好
むところに従ひて義太夫語りとなり、江都に數多き太夫の中にも寄席
に出で、は常に二枚目を語りしとぞ。然れども彼は元來一個の俠骨男
子、藝人の卑下なる根性を有たぬが自慢なればあたらしき才藝を自ら
埋没して中年家に歸り父祖の産を繼ぎたりしかど、生得の奇骨は鋤犁

に用ゆべきにあらず、再三再四家を出で、豪俠を以て自から任じ、業は學ばずして頭領株の一人となり、墨つば取つては其道の達人を驚かしめ、風流の遊場に立ちては幾多の佳人を惱殺して今に懺悔の種を残し、或時は劔を挺して武人の暴横に當り、危道を踏み死地に陥りしこと數を知らず。然れども我が知りてよりの彼は沈靜なる硬漢、風流なる田人、園藝をわきまへ、俳道に明らかに、義太夫の節に巧みに、刀劔の鑑定にぬきんで、村内の葛藤を調理するに威權ある二十貫男、むかし三段目の角力を惱ませし腕力たしかに見へたり。

わが幻境は彼あるによりて幻境なりしなり。わが再遊を試みたるも寔に彼を見んが爲なりしなり。我性尤も俠骨を愛す而して今日の社會まことの俠骨を容るゝの地なくして剽輕なる壯士のみ時を得顔に跳躍せり。昨日の一壯士奇運に遭會し代議士の榮譽を荷ひて議場に登るや、

酒肉足りて脾下見苦しく肥ゆるもの多し、われは此輩に會ふ毎に嘔吐を催ふすの感あり。世に知られず人に重んぜられざるも胸中に萬里の風月を蓄へ、綽々餘生を養ふ、この老俠骨に會はんとする我が得意はいかばかりなりしぞ。

車を下り閉せし雨戸を叩かんとするに、むかしながらの老婆の聲はしはぶきと共に耳朵をうちぬ。次いで少婦の高聲を聞きぬ。わが手は戸に觸れて音なふ聲と共に、中には早や珍客の來遊におどろける言葉を洩らせるものあり。わが音むかしに變らぬか、なつかしきものは往日の知音なり。戸は開かれて我は迎へ入れられしが、老疇人の面を見ず、之を問へば八王子にありと言ふ、八王子ならば車を驅つて過ぎり來しものを、この時われは呆然として爲すところを知らず。

埋火をかき起して爐邊再びにぎはしく少婦は我と車夫との爲に新飯

を炊ぎ、老婆は寢衣のまゝに我が傍にありて、一枚の澁團扇に清風をあほりつゝ我が七年の浮沈を問へり。ふところに收めたる當世風の花簪、一世一代の見立にて安物ながらも江戸の土産と、汗を拭きふき銀座の店にて購ひたるものを取出して昔日の少娘のその時五六歳なりしものゝ名を呼べば早や寢床よ入れりと言ふ、枉げてその顔見せてよと乞へばやがて出で來りて一禮す。驚かるゝまでよ變りてその名よしれし年の數もかさなりて今は十三歳と聞けばなつかしき山百合の、いま幾年たゝば人目よかゝらむなど戯れける中よ老婆は他の小娘の、むかし小娘のとしばへなるものを抱き來りて我を驚ろかせぬ。その名をぬひと呼ぶと聞きて行先人の妻となりてたちぬひの業よ家を修むる吉瑞ありと打ち笑ひぬ。時も移りて我は老婆と小娘との紙帳よ入りて一宵を過としぬ。この夜は七年刺多き浮世の旅路を忘却し安らかなる眠

りよ入りて樂しかりけり。

明くれば早曉老鶯の聲を尋ねて鬱叢たる藪林に分け入り舊日の「我」に歸りて夢幻境中の詩人となり、既往と將來を思ひめぐらして神氣甚た爽快なり。老婆は後園に植へたる百合數株惜氣もなく掘りとりて我が朝餉の膳に供し、その花をば古びたる花瓶に活けて我が前に置据へぬ。人を市に遣りて老畸人に我が來遊を告げしめ、われに許して彼が秘藏の文庫に入りて其終生の秘書なる義太夫本を雜抽せしめたり。午になれど老人未だ歸らず、我は人を待つ身のつらさを好まねば少娘と其が兄なる少年とを携へて網代と呼べる仙境に踏入れり。網代は山間の一温泉場なり、むかし蒼海と手を携へて爰に遊びし事あり、巖に滴る涓水に鑛氣ありければこれを浴室にうつし薪火をもて暖めつゝ近郷近里の老若男女春冬の閑時候に來り遊ぶの便に供せり。一條の山徑草

深くして昨夕の露なほ葉上にのこり攀ぐる裳も濡れがちに、峽々を越へて行けば昔遊の跡歴々として尋ねべし。老鶯に送迎せられ、溪水に耳奪はれ、やがて砧の音と欺かれて、とある一軒の後ろに出づれば、仙界の老田爺が棒打とか呼べることをなすにてありけり。こゝは網代の村端にて、これより溪澗に沿ひ山一つ登れば昔し遊びし浴亭森肅たる叢竹の間にあらはれて、この行甚た樂しからず、蒼海約して未だ來らず、老俠客の面未だ見ず、加るに魚なく肉なく徒らに浴室内は老女の喧囂を聞くのみ、肱を曲けて一睡を貪ぼると思ふ間に夕陽己に西山に傾むきたれば、晚蟬の聲に別れてこの桃源を出で元の山路に據らで他の草徑をたどり我幻境にかへりけり、この時弦月漸く明らかに妙想胸に躍り歩々天外に入るかと覺へたり。

樓上には我を待の時人あり、樓下には晚餐の用意にいそがしき老母

あり、弦月は我幻境を照らして朦朧たる好風景得も言はれず、階を登れば老俠客莞爾として我を迎へ相見て未だ一語を交はさざるに滿堂一種の清氣盈てり。相見ざる事七年相見る時に驟かに口を開き難し、斯般の趣味人に語り易からず、始めは問答多からず、相對して相笑ふのみなりしが漸く談じ漸く語りて、我は別後の苦戦を説き起しぬ。

この過去の七年我が爲には一種の牢獄にてありしなり。我は友を持つと多からざりしに、その友は國事の罪をもつて我を離れ、我も亦た孤犖爲すところを失ひて、浮世の迷巷に蹈み迷ひけり。大俗の大雅に雙ふべきや否やは知らねど、我は憤慨のあまりに書を賣り筆を折りて大俗をもつて一生を送らんと思ひ定めたりし事あり、一轉して再び大雅を修めんとしたる時に産破れ家廢れて我が瘦腕をもて活計の道に奔走するの止むを得ざるに至りし事もあり、わが頑骨を愛して我が犠牲と

なりし者の爲に半知己の友人を過ちたりし事もあり、修道の一念甚だ危ふくあはや餓鬼道に迷ひ入らんとせし事もあり、天地の間に生れたるこの身を訝かりて自殺を企てし事も幾回なりしが、是等の事今や我が口頃無口の唇頭を洩れてこの老知己に對する懺悔となり、刻のうつるも知らず語りき。

しばらくありて老婆は酒を暖め來りて飲まずと言ふ我に一杯を強ひ、これより談話一轉して我幻境の往時に入れり、淡泊洗ふが如き孤劍の快男子(蒼海)この席の談笑を共にせざるこそ終生の恨なり。少婦も出で來り、當時の主人なる無口男も席に進みて、或は舊時の田花の今は已ま寡婦になりしを語り或は近家の興廢浮沈を説き及び、或は我が棲むところを問ひなせしつこの夜の興味は抹すべからざる我生涯の幻夢なるべし。就中老母は我が元來の虛弱にて學道に底なき潮を渡るを危

ふみて涙を浮べて我が健全を祈るなど、都に多き知己にも増して我が上を思ふの真情ありがたしとも尊ぶとしとも言はん方なし。

この夜の紙帳は廣くして我と老俠客と枕を並べて臥せり、屋外の流水夜の沈むに従ひて音高く、わが遊魂を巻きてなほ深きいづれかの幻境に流し行きて、われをして睡魔の奴とならしめず、翁も亦ねがへりの數に夢幾度かどぎれけむ、ひくく〜と起きて我を呼びこれより談話俳道の事戯曲の事に關にしていつ眠るべしとも知られず、われは眠りの成らぬを水の罪に歸して

七年を夢に入れどや水の音

と吟みけるに翁はこれを何とか讀み變へて見たり、翁未だ壯年の勇氣を喪はざれど生年限りあればかねて存命に石碑を建つるの志あり、我が來るを待ちて文を屬せしめんとこの意を陳ければ我は快よく之を諾

しぬ、又た彼の多年苦心して集めし義太夫本我を得て沈滅の憂ひなきを喜び、其没後には悉皆我に贈らんと言ひければ我は其好意に感泣しぬ。翁の秀逸一二を擧ぐれば。

夢いくつさまして來しどほとゞぎす。

こゝに寝む花の吹雪に埋むまで。

なほ名吟の數多くあり、我他日翁の爲に輯集の勞を取らんとを期す。この夜翁の請に應じて即吟白扇に題したる老句は

越へて來て又一峯や月のあと。

曉天の白むまで眠り得ず、翌朝日開けて起き出でたるはいつの間にか明方の熟睡に入りたりしと覺ゆ。蒼海遂に來らねば老俠と我と車を雙べて我幻境の門を出づ。この時老婆は吳々も我再遊の前の如く長か

山。同伴はおもしろし、別して月も宵にはあるべし、この夜の清興を思へば涼風盈ちて車上よあり。

(下)

むかしわれ蒼海と同よ彼幻境は隠れしころ山に入りて炭焼薪木樵の業を助くるをこよなき漫興となせしが又た或時は彼家の老婆は破衣を借りて身をやつして炭賣車の後尾きてこの市は出づるをも樂しむき。

斯る無邪氣の勞力をもて我はわが胸中よ蟠りたる不平を抑へつ、疲れて歸る夜の麥飯の味今も忘れず。老疇人わが往事を説きて大に笑ふ時われは頭を垂れて冥想す。昔日わが不平幽鬼の如く、わが背後も立ちて阿々どうち笑ふ。遮莫われルーソー、ポルタイアの輩に欺かれたらず、又た新聞紙々面大の小天地に翱翔して局促たる政治界の齷齪子と

なり畢ることもなく己が夙昔の不平は轉じて限なき満足となり此満足したる眼を以て蛙飛ぶ古池を眺る身となりしこそ幸ひなれ。

余は八王子に一泊するを好まざりしと雖老人の意見枉げ難く止むことを得ずして俗氣都にも増せる市塵の中に一夜を過せり。明くれば早曉羈亭を出で馬車に投じて高雄山に向ふ、この時のわが口占は

すい風や高雄まふでの朝まだち

路に梭の音の高く聞ゆる家ありければ眼を轉じて見るに花の如き少女ありて杼を用ゆること甚だ忙はし、わが蓬萊曲の露姫が事を思ひ出でしなつかしければ能く其面を見んとするに馬車は行き過ぎてその事かなはず、彼少女が窓の外におもしろき花の咲けるに心づきて其名を問へば鋸草なりと言ふに、少女の風流思ひやられて句一の讀みたる

琵琶瀧より流れ落つる水のはどりの茶亭にて馬車に別れ、これより登り三十八丁といふも靈山の路は遠からず、道すがら巢林子の曲を評しあひ、治兵衛梅川などわが老崎人の得意の節おもしろく間拍子とるに歩行も苦しからず、蛇の瀧も一見せばやと思しが、そこへも下りず巖角に憩て清々冷々の玄風を迎へ、體靜に心閑にして冥思を自然の絶奥に馳せて聊か平生の煩羅を洗ふ。幽山に登るの興は登りつきたる時にあらず、荒榛を抜き峭嶒を陟る間にあるなり、榮達は羨むべきにあらず、榮達を得るに至るまでの盤紆こそまことに欽すべきものなるべし。

頂上にのぼり盡きたるは眞午の頃かぞ覺ゆし、憩所の涼臺を借り得て老崎人と共に縦まゝに睡魔を飽かせ、山鶯の聲に驚かざるゝまでは天狗と羽を并べて象外に遊ぶの夢に餘年なかりき。

この山に鶯の春いつまでぞ

とはわがねぼけながらの句なり。老畸人も亦たむかしの豪遊の夢をや繰り返しけむくさめ一つして起き上たれば冷水に喉を濕るほし眺めあかぬ玄境にいとま乞して山を降れり。

琵琶瀧を過ぎかねて聞く狂人の様を一見し、かつは己も平生の風狂を療治せばやの願ありければ折れて其處に下るに、聞きしに違はず男女の狂人の態見るもなか／＼に凄くあはれなり。そが中には家を理するの良妻もあるべく、業に勵むの良工もあるべし、戀のもつれに亂れ髪の少女もあらむ、逆想到凝て世を忘れたる小ハムレットもあらむ。われを見ていづれより來ませしぞと問ひかけたる少年こそは狂ひて未だ日淺き秀才と覺へたり、世間眞面目の人眞面目の言を吐かず、却つてこの狂秀才の言語尤も眞意を吐露すらし。われは極めて狂人に同情を有するものなり、かつて狂者それがしの枕頭にあること三冊己れも之に

感染するばかりになりて堪へがたかりし事ありしが、今も我は狂人と共に長く留まる事能はず。琵琶瀧はさすがに靈瀑なり、神々しきこと比類多からず、高巖三面を圍んで晝なは暗らく、深々として鬼洞に入るの思ひあり、いかなる神人ぞこの上に盤桓してこの琵琶の音をなすや。こゝに來てこの瀑にうたれて世に立ち歸る人の多さも理とこそ覺ゆるなれ、われは迷信とのみ言ひて笑ふこと能はず。

こゝを立ち去りてなほ降るに、ひぐらしの聲涼しく聞わたれば。

日ぐらしの聲の底から岩清水

この夜は山麓の羈亭に一泊し、あくる朝連立て蒼海を其居村に訪ひ、三個再び百草園を遊びたることあれど記行文書きて己れの遊興を得意顔と書き立つること平生好まぬところなればこゝよて筆を擱きぬ。

星
夜

晝もし長からば物を思ふひまなくて好かるらむ、否夜もし長からば
樂しき夢を結ぶ事もありて好かるらむ。晝にはわれ晝の思ひあり、夜に
はわれ夜の思ひあり、いづれを安き時と定めん由はなけれど、もし晝と
夜との境なる薄暗の慘憺たる時の苦がさを思へばわれは事務繁き晝
か夢長き夜かの一を樂しまんとするなり。

始めて彼女を見たるは厚生館に音樂會のありし時、その時彼女は七
草を散らしたる裾模様を着て皎々たる素手を伸べ金石の音を唇頭に
轉ばしてアルトの獨誦をなしたり、喝采の聲湧くが如く又起りて動搖
めきわたる中に一曲を唱し終りて坐に就きしが、やがて友らしき令嬢
と共に見へずなりぬ。次に彼女を見たるは我友人なる某新聞の記者が
松の三日に歌留多會を催ふして少年男女を招きける時、その時の一座
にも彼女は加はり居りて小笠の糸の縁の端同じ組に膝を并べていた

口三口言葉を交はすも不思議なるかな迷ひの始め。

其後同じ記者を訪ひたる時、彼女が姓名をそれとなく問ひ試みた
るよ、記者は何心なく彼が在りたる學校、彼の家の性質までも問はず
語り、これを始めとして折々彼女の噂をする我言葉、流石こもれる
ものありしを見てとりし我友は或夜の閑談、我爲よ周旋の勞を辭せ
ざるべしと言ひ出でぬ。鬼も角もして玉へと應へて別れたるが此時よ
り我夜は長くなりぬ。

頃は春の初めなり、我友は満面よ香はしき笑を湛へて根岸近き我閑
宅を音づれ來ぬ履脱より上ると齊しく我肩を一二撃して、「これより君
の家よ永久の春は宿らむ、うぐひすの鳴音を家内よて聞くは樂しから
ずや」我友は彼女の父に縁故あるを以て明白よ我が今日の位地を語り
我將來の希望を告げ、世よ頼母しき男なりと言ひて其愛女を嫁すべき

機會至れるを促がしたるなり、彼女の父は始終默聽し居たりしが我が從來の品行などを我友の説き終りたる後、漸く兎も角も娘の心中もあればと言ひて其日の我友の勞力は濟みしが幾日か經し後、娘も他意なければと言ひおこしたれば、車を飛ばして吉報を齎らし來りしなり。斯くして約は結びたれど、彼女は未だ修むべき學業のあれば、尙ほ一年程は合歡の禮を擧げぬ事となりぬ。

もし我が彼女に會はぬ前の事を思へば、わびしげなる野中の松、風の當り易きが如く、世の事物に感觸する事多かりし、彼女の情を得たる後は、物として春の色を帶びぬはなく、自ら怪しみて霞の中に入りたると思はるゝ程に、苦く辛らく面白からぬ物に隔たりて、甘く美しく優しき物のみ近づきぬ。

肥へ太りたる駒にうち乗りて春の野に遠乗したる時菜の花の朝日

に照りかゝりやきたる畦を過ぎて、緩々と流るゝ小河の岸に優々と駒を立てたる心地は、此は此戀の眞味なり。

彼女が學校の歸り途などに我家を過ぎりて安否を問ひ、呉るゝ時、我はまことの友を得たるうれしさに、後は斯くよ、斯くして、斯くよなど、將來の事業を打ち開けて語りなどしつゝ、彼女の嗜める音樂の道に就きて談話する事もありて、その楽しさは、その甘さは、言もて得盡くすべくもあらず。

翻々と蝶の花上に舞ふ頃となれば、我も浮かるゝ戀の羽なきを恨み、彼女が許に使ひして郊外に策を曳くべきに伴になりて、よと甘たれたる文を届けて呼び寄せたる事もあり、緑新らしく添ひたる松の樹影に小憩して、清く甘まき物語の盡くべき時もなし、自らも怪しむ程に多辨になりて、聽く人あらばおかしと思はんなど、うち笑ひし事もあり、その

人の現前^{プレゼンス}は我に取りて、光の如く、暗夜を照らす、月の如く、よるづの曇れる思想は、妖魅の日光に會ひて消ゆるが如くに我を離れ去りて、一面の玲瓏たる玉路我前に開きて、我行住に世ならぬ自由を供すと觀せしは、僞言ならず、鳥の聲も昨日に異なる妙韻を吟するやうに覺へ、花の色も昨日とは異種なる天然の靈妙をあらはすと見へ、歩々人境の外に出で語々天外の香を薰じ、景狀すべからざる樂寂の境地に長き春の日を暮らして、黄昏の家路の旅は、疲れ果てたる夢の中にあり。

斯かるもの我が迷ひ入りし春にてあるなり、我は迷ふと云ふ字を好まず、然れども過ぎ去りたる今日より昨日の事を思ひかへせば、迷はざりしと辨するも要なし、明らかに我は春といふ魔に翫弄せられてありしなり、いかにとなれば、月は五度はと圓くなりてまた缺けたる後、彼女の母なる人より、我に一書を送りて、其の愛女を我靈魂より引き裂けり。

その文言を見れば、唯だ彼のごとき者を差上ては御爲にならずと存する故にとあるのみ。

彼女よりは一言の音信もあらず、母に同意したるか、又は母の同意を促したるなるか、かつて我が事業を打明て語りたる時に、樂しそなる面して我が肩に憑りたりし時の躑躅園の歡意は、彼の遊女の賣色の笑にも似たる一時の假造より出でしものなりしか、否、左程の下品の女子とは誰が目にも見ゆべき道理なし、我が戀に盲したる目の咎にもあらじ、そも何者か我が外に彼女の情を釣りたる人のあるか、左る悪性の男に容易く靡くべき無智のものとは思はれず。

何か言ひおこすならむと待ちに待ちたる日の數も三日を過ぎて、礫の音もなし、腹立だしさよその人の寫眞を取出で眼を閉ぢながら引裂きてうち捨てんとするよあやよくに閉ぢたる眼の自然に開らけて其

人を見れば會ひし日の笑顔よて我前よ立ちけり。笑顔かと思へば涙あり、涙あるかと思へば浮き浮きしたる無邪氣の顔となりてうつれり。はては楊弓塲あたりに見る紅粉に腐りたる面の色をうち倣して我を尻目に見るかどうつりて思はず持ちたる手を離れハタと机に音すれば忽ち元の戀人なり。信じつ疑ひつ、迷ひつ晴れつ、夜一夜燈火の油の燃へつくるまで取り出しては仕舞ひ、仕舞ひてはまた取出しつ自らも怪しむほどに狂はしく意志の弱き男となりぬ。

明くる朝早曉に家僕を呼醒して彼人の家に最後の使者とならせぬ。咲き残りたる山吹の花を揉み散らして彼人の寫真と幾通の彼人の手書とを封じこみて送りかへしたり。そのかへりに我が寫真と我が書狀とを送りこしぬ、その書狀の中は月と共に醒めて夜越よ書きたるものありけり。

我は婦人の情の斯くも變はり易きものなる事を信せんと欲して信する能はず、男心を夏の空に譬ふるは男に情なしと云ふ意味にや、男に情なしと言ふ意味を夏の空に寓する事をなせば女に情なき事をいかなる言葉もて言ひ盡さんや、否々我は彼女に忘れられたりとは知れども彼女を以て我を欺きたるものなりと言ふとはなすまじ、我を欺きたるもの彼女の如くにして彼女にあらず、彼女を圍みたる春の色こそ我を迷はしたるものにてありけれ。彼女の雙眸の内にわれは我が情思を投げ入れて其反酬を求むるに切なりし時を回顧すれば惘然として我が現在の境界を知る能はず。

再たの夜は來れり、古今の雜書を亂抽して眼を紙上に注げども心は遠く枯野を馳せめぐれり、今朝散らしたる山吹の花片の落ちて坐上にあるを拾ひあげ、鉛刀を右手に持ちて細々に切斷し、斷又斷、針の頭ほど

に細断して窓の外に投げやりぬ、どこへ散りどこへ落ちしか花の行方は。

この夜はいつになく蒸し苦くして寝られず、上野の鐘の響近う聞ゆれど數ふるもうるさし、我が書齋は荒れはてたる廣野の如く、我が枕は冷へ凍りたる野中の巖にも似たり、輾轉又輾轉、幾度か夢に入らんとして現にかへり、くるくると一つの思ひをめぐり來て復た同じ思ひにかへる、うるさやくと拂ひかける瞬時のみ妄想は消れどあそこは再び悲しき戀といふもおぞましや、忘れはてん、忘れん、會はぬ昔時よと胸の中に聲を勵まして流石に表には出し兼ね、やがてすやくと眠りたりしと覺ゆしが自からの鼻息に驚きて飛び起てば胸のあたりを毒蛇に固く緊められしと見しは是も夢なりき。

も眺めて眼はともあれ心丈にても安ませばやと障子を静かに推し開らき雨戸をひらきて空を見れば月は西へ西へと落ちゆきて慕ひしもの影はなく茫々たる虚空に無數の星屑の炳々たるあるのみ。

脱蟬子に與へて其「星夜」を評す

「星夜」の主人公となりし男

「星夜」面白く拜見仕候彼の事ありてよりはや小半年前契の歡愁悲喜も既に忘れ居候ひしに思ひもかけず御作によりて復一種の感情を味ひ且つかけても思はぬ小説中の主人公と相成終り芽出度からぬ艷名を流し候事如何なる歳のまはりあはせかど一笑仕候

御文章は寔に暢達にして、意の到る所筆亦之に従ひ候御手際只管

感佩の外無之候厚生館の音樂會にて小弟が始めて彼女を見彼女は音樂者なりとし玉ふと往時を憶ひ起して賢契の覆案の妙は敬服仕候松の三日の歌留多會にて戀ひ初めたりとの事思はず失笑いたし彼の友人の某は讀ませ度存じ候併しこれは文の結構上姿勢を取る所より小弟に宛を蒙らせ玉ひしなるべくいつものながら文士の狡猾手段と御仲間同志の事故御恕るし可申上候

一篇の結構上媒酌者なる新聞記者が最初の口をキ、シのみにて雲がくれいたし破談の書狀直接に彼女の母なる人より來れりとなされ候事おかしく存じ候こゝは矢張母なる人が父を前に出したれば此度は母を使ふがよろしかるべし記者殿を通じて小弟迄彼の如き者を差上げては……の意を達せしめたるやう御書き被遊しなれば記者殿も前に照應し母なる人が直接に書狀を送く

るといふ事實有間敷ともなくなり申候べし如何御文章上の事は暫らく措き主人公として少々憾みを申上度個條有之即ち小弟の愛を御寫し被下候事甚だ卑しく失望を御描き遊ばさるゝ處いと深き事に御坐候甘たれたる文を届けて郊遊に連れ出したる多辯になりたるなど眞偽打まじりたる小説なれば咎むる程の事にも無之るべけれど去りては主人公となりし小弟甚遺憾に存じ候また躑躅園にて彼女が小弟の肩に憑りて小弟の志望を喜び聽きたりとなされ候は小弟を以てをんななんぞに嫚れらるゝやうの人物と見て下され候ひしか平生知己のやうにてもなしと御憾み申候

兎に角賢契の御寫し被下れし小弟の愛は世間普通たはれをの愛にして堂々たる士君子の愛にては無之少くとも小弟の愛にては

無之候

寫眞をながめて夜一夜明かしたると山吹の花片を細断したると
小弟成程一時彼等の無禮を怒り失望も致したれどかやうなる女
々しき失望は致し候はざりき知り候はぬ人々には主人公は誰や
ら分らねば愛も失望も何と御書きなされ候ても苦るしからず候
へども知友多き小弟故小弟の關係を知つて此御作を讀まれ候て
は計らぬ冤名を受ねばならず候故愚痴をこぼし申候結末の一句
畫龍點睛此一句先づ御胸中に出來てのち此御文章の御結構に相
成りし事と愚察仕候いづれ拜眉の上萬縷可申述候妄許多罪

脱蟬子の答へ

文を草する荷くも眞情より出でたるにあらざればかねて御叱り

の如く俗心俗腸の文士になりはてむ生が「星夜」一篇端なくも其附
記によりて知友を弄して小説の主人公となして戯れたるものゝ
如くに御疑ひを蒙りぬ生が知己を辱うする畏友に對して斯る不
敬を加ふる男と御覽ありしは生の方にも憾みあり彼の附記なる
ものは適ま小生を動かして「星夜」一篇を草せしむるに至りたる因
縁を言ひたるものにして友人の事を記するの意味も友人の平生
を現はする意味も之なかりしなり倘し強いて生が「星夜」を草した
る時の腹の中を割つて見たしと仰せあらばまこと頃日は知己の
中に破契といふ不吉事多くして忌々しきこと流行するを悲し
き事に思ひて深きまことの情をもて男に思はれながら輕々しき
心もて男を疎んずる女子の薄情に激するところありて聊か其人
々の猛省を請はんとの野心を抱きて筆を執りし義に有之候故に

全篇の主要とするところは男に情こころある事を示し其情に對して女は深く酬たまひざるべからざる旨を寓するにあり。左ればこそ御批評にもありし如く女の母なる人より直ちに破約の書を男に送らしめて以て破約といふ事の原因は多く女の母より起るものなることを暗に示したる譯に御座候。女子が薄情なりや否やは自から別問題に屬すれば此に辨ずるも徒なし、唯だ今日の女流は虚名虚榮を慕ふこと多くして男子の心膽に戀することの少なきは事實にて生を激せしめたる一原因となり居り候。從一位の殿様ならばいかなる腐腸男子にても戀婿にせんと願ふは當今の人情にて淺間敷かざりと存じ、いでこの薄弱なる婦人原に男子の戀はいかなるものなるかを教へ呉れんどの大望も此の小篇の中に籠り居り候。戀愛の卑しげに描かれて主人公にせられし己れまで卑しきもの

になりたりとの御叱りはたることながら戀愛を執着なるものと認むるは小生一家の主義にて山吹を細斷することも婦人に慢らるゝ事も小生は信じて戀愛の實質と考へ申候。生が星夜の主人公をして己れの爲さんとする事實の順序を其愛人又語らしめたるも世間普通の情思又照さば決して卑下なるものとのみ言ふべからずと確信致し候。すべて戀愛を世間普通の理に應じて描きたるは生が堂々たる士君子を寫さんとの野心なきを辨するに足るべしと存じ候。知交を辱ふしてより幾載小生いか鈍なりとも賢兄の品性を知らざるものと思はれしは残念な候。賢兄の事ありし時又人の賢兄と向つて失望は一層賢兄を大ますべしと言ひし時又賢兄は怒つて婦人の故を以て品性を大まするものと見做すやと言ひ玉ひし御様子今又我が眼前にあり。生も亦た世の硬骨男兒が

往々よして戀愛の事よ冷淡なるを知る、何すれど賢兄をうつして
戀愛と失望と星夜の主人公の如くよする愚をなさむ。又た賢兄の
如き人物は小説家の禁物とするところよてもしまこと賢兄を主
人公よ取る心なれば生は一部のロマンスを作りしかた宜かりし
ならむ。然れども戯れよも知友を以て主人公よ取りしと思ひたま
ふは冤罪よ有之候。春駒の翻案成らざりしが故よ星夜を得たるは
事實ながら春駒の趣意をもて星夜をうつしたりとはゆめ思ひ玉
ひぞ。篇中の戀愛も失望も我が想中の愛兒にてごこまでも手離す
事は出来申さず、小説は世間普通の實象を描くを本旨とすれば星
夜の主人公不出來なりと雖も小生の愛兒に有之候但し理想的よ
一個の硬骨男兒を寫し出せよとあらば小生は或は其模型を賢兄
に偷むやも圖られず候。世の眼もし賢兄の憂ひ玉よ如く星夜一篇
に由て賢兄を見誤らん事あらばご小生の罪のはごをも恐れて作
意を陳すること斯の如し餘は拜眉の上にて萬縷可申上候

某 殿

透 谷 拜具

又脱蟬子へ

「星夜の主人公ならざりし男

御作意拜聽此上かごごがましく申すも餘りはめたごよも無之故
何も不申上候

陸奥にありといふなる名取川

なき名取りてはくるしかりけり

我牢獄

もし我にいかなる罪あるかを問はば、我は答ふる事を得ざるなり、然れども我は牢獄の中にあり、もし我を拘縛する者の誰なるを問はば、我は是を知らずと答ふるの外なかるべし。我は天性怯懦にして強盜殺人の罪を犯すべき猛勇なし、豆大の昆蟲を害ふても我心には重き傷痕を受けたらんと思ふなるに法律の手をして我を縛せしむる如きはいかでか我が爲し得るところならんや。政治上の罪は世人の羨むところと聞けど、我は之を喜ばず、一瞬時の利害に拘々として空しく抗する事は余の爲す能はざるところなればなり。我は識らず、我は悟らず如何なる罪によりて繫縛の身となりしかを。

然れども事實として我は牢獄の中にあるなり。今更又歳の數を算ふるもうるさし、兎に角に我は數尺の牢室に禁籠せられつゝあるなり。我が投せられたる獄室は世の常の獄室とは異なりて、全く我を孤寂に委せり。古代の獄吏も近世の看守も我が獄室を守るものにあらず。我獄室の構造も大に世の監獄とは差へり、先づ我が坐する、否坐せしめらるゝ所といへば天然の巖石にして、余を圍むには堅固なる鐵塀あり、余を繋ぐには鋼鐵の連鎖あり、之に加ふるに東側の巖端には危ふく懸れる倒石ありて我を脅かし、西方の鐵窓には巨大なる惡蛇を住ませて我を怖れしめ、前面には猛虎の檻ありて我室内に向けて戸を開きあり、後面には彼の印度あたりによりといふ毒蝮の尾の鈴、斷間なく我が耳に響きたり。

我は生れながらにして此獄室にありしにあらず。もしこの獄室を我生涯の第二期とするを得ば、我は慥かに其一期を持ちしなり。その第一期に於ては我も有りど有らゆる自由を有ち、行かんと欲するところよ行き、住まらんと欲する所に住まりしなり。われはこの第一期と第二期

どの甚だ相懸絶する者なる事を知る即ち一は自由の世にして他は牢
囚の世なればなり然れども斯くも懸絶したるうつりゆきを我は識ら
ざりしなり我を囚へたるものゝ誰なりしやを知らざりしなり今にし
て思へば夢と夢とが相接續する如く我生涯の一期と二期とは憎々た
る中にうつりかはりたるなるべし我は今この獄室にありて想ひを現
在に寄すると能はずもし之を爲すことあらば我は絶望の淵に臨める
嬰兒なり然れども我は先きに在りし世を記憶するが故に希望あり第
一期といふ名稱は面白からず是を故郷と呼ばまし然り故郷なり我が
想思の注ぐところ我が希望の湧くところ我が最後をかくるところこ
の故郷こそ我に對して我が今日の牢獄を厭はしむる者なれもしわれ
に故郷なかりせばもしわれにこの希望なかりせば我は此獄室をもて
金殿玉樓と思ひ了しつゝ樂き娑婆世界と歡呼しつゝ五十年の生涯誠

に安逸に過ぐるなるべし。

我は我天地を數尺の大きと看做すなり然れども數尺と算するも人
間の業に外ならず之を數萬尺と算ふるも同じく人間の業なり要する
に天地の廣狹は心の廣狹にありて存するなり然るに怪しくも我は天
地を數尺の廣さとして己れが坐するところを牢獄と認む然り牢獄な
り人間の形せる獄吏は來らずとも折々に見舞ひ來るもの是れ一種の
獄吏に他ならず名譽是なり權勢是なり富貴是なり榮達是なり是等の
もの我に對する異様の獄吏にてあるなり。

彼等は我に對しては獄吏と見ゆれども或一部の人には天使の如く
にあるなり彼等が人々を折檻する時に人々は無上の快樂を感ずるな
り我眼曇れるか彼等の眼盲ひたる乎之を斷ずる者は誰ぞ。

ペンマルクの狂公子を通じて沙翁の歌ひたる如くに我は天と地と

の間を這ひめぐる一痴漢なり、崇重なる儀容をなし、威嚴ある容貌を備へ、能く談じ、能く解し、能く泣き、能く笑ふも人間は遂に何のたはれことなるべきやを疑へり、然り我が五十年の生涯に萬物の靈長として傲るべき日は幾日あるべき、我は我を卑うするにあらず、我自ら我を高うせんとするにもあらず、唯だ我が本我のいかに莊嚴を飾らしむるも遂に自らを欺くに忍びざるなり。

我は如何に禪僧の如くに悟つてのけんを試むるとも我が心宮を觀ずること甚深なればなるほど我は到底悟つてのけること能はざるを知る、風流の道も我を誘惑する事こそあれ我をして心魂を委ねて趣味と稱する魔力に妖魅せらるゝに甘んせしめず、常に謂へらく人間はいかよいかなる高尙の度に達するとも必竟するに或種類の偶像に翫弄せらるゝに過ぎず、悟るといふも悟ること能はざるが故に悟るなり、も

し悟るといふことを全然悟らざるといふ事に比ぶれば多少は靜平にして澹乎たる妙味ありと雖是も一種の階級のみに人間は遂に多く辨せざれば多く黙し、多く泣かざれば多く笑ひ、一の偶像に就かざれば他の偶像を禮す、一の獄吏に答責せられざれば他の獄吏の答責に遭ふ、これも是非なし獄吏と天使とを識別すること能はざる盲眼をいかにせむ。

奇しきかな我は吾天地を牢獄と觀すると共に我が靈魂の半塊を牢獄の外に置くが如き心地するとあり、牢獄の外に三千乃至三萬の世界ありども我には差等なし、我は我牢獄以外を我が故郷と呼ぶが故に我が想思の趣くところは廣濶なる一大世界あるのみ、而して此大世界にわれは吾が悲戀を湊中すべき者を有せり、捕はれてこの牢室に入りしより凡ての記憶は霧散し去り、己れの生年をさへ忘じ果てたるにも拘はらず我は一個の忘すること能はざる者を有せり、嘗に忘すること能

はざるのみならず數學的乘數を以て追々に廣がり行くとも消ゆることばあらず、木葉は年々歳々新まり行くべきも我が悲戀は新たまりたることはなくしていや茂るのみ江水は時々刻々に流れ去れども我が悲戀はよどみよどみて漫々たる洋海をなすのみ、不思議といふべきは我戀なり。

もし我が想中に立入りて我戀ふ人の姿を尋ねれば我は誤りたる報道を爲すべきにより、言はぬ事なり言はぬ事なり、雷音洞主が言へりし如く我は彼女の三百幾つと數ふる何の骨を愛づると云ふにあらず、何の皮を好しと云ふにあらず、おもしろしと云ふにあらず、樂しと云ふにあらず、我は白狀す我が彼女と相見し第一回の會合に於て我靈魂は其半部を失ひて彼女の中に入り、彼女の靈魂の半部は斷れて我中に入り、我は彼女の半部と我が半部とを有し、彼女も我が半部と彼女の半部と

を有することとなりしなり、然れども彼女は彼女の半部と我の半部とを以て彼女の靈魂となすと能はず、我も亦た我が半部と彼女の半部とを以て我靈魂と爲すと能はず、この半裁したる二靈魂が合して一になるにあらざれば彼女も我も圓成せる靈魂を有するとは言ひ難かるべし。然るに我はゆくりなくも何物かの手又捕はれて窄々たる囚牢の中もあり、もし彼女をして我と共にこの囚牢の中であらしめばこの囚牢も囚牢にあらずなるべし否な彼女とは言はず、前も言へりし如く我が彼女を愛するは其骨又あらず其皮又あらず、其魂にてあれば我は其魂をこの囚牢の中を得なむと欲ふのみ。

日光を遮斷する鐵塀は比しく彼女をも我より離隔して雁の通ふべき空もなし、夢てふもの世にたのむべきものならば我は彼女と相談る時なきにあらず、然れどもその夢もはかなや始めて我をたばかりて後

にはおそろしき悪蛇の我を巻きしむるに終る事多し。眠りを甘きものと昔しの人と言ひければ我は眠りの中に熱汗に浴することあり。或時は我手して露の玉に濕ふ花の頭をうち破る夢を見、又た或時は春に後れて孤飛する雌蝶の羽がひを我が杖の先にて打ち落す事もあり、かつて暴らかりしものを彼女に會ひてより和らげられし我が心も度々の夢に虎伏す野に迷ひ獅子吼ゆる洞に投げられしより再び暴れて暴れて我ながらあさましき心となれり。眠りはしかく我に頼みなき者となりしかど、もし現の味氣なきに較ぶれば欺かるゝ丈も慰めらるゝひまあるなり。

現に於ける我が悲戀は雪風凜々たる冬の野に葉落ち枝折れたる枯木のひとり立つよりき激しかるべし。然り、我は已でに冬の寒さに慣れたり慣れしと云ふにはあらぬと我はこれに怖るゝ心を失ひたり。夏の

熱さにも我は我が胸を沸かす如きことは無くなれり。唯だ我九腸を裂きて又た裂くものは我が戀なり。戀ゆゑに悶ゆるにあらす牢獄の爲に悶ゆるなり、我は籠中にあるを苦しむよりも我が牢獄の行術の爲に血涙を絞るなり。雷音洞主の風流は愛戀を以て牢獄を造り、己れ是に入りて然る後に是を出でたり。然れども我が不風流は牢獄の中に捕繋せられて然る後に戀愛の爲に苦しむ。我が牢獄は我を殺す爲に設けられたり、我も亦た我牢獄にありて死するを憂ひとはせざれども我をして死す能はざらしむるもの則ち戀愛なり、而して彼は我を生かしむるをもせず、空しく我をして彼のデンマルクの狂公子の如く、我母が我を生まざりしならばと打ち啣たしむるのみ。

春や來しと覺ゆるなるに我牢室を距ること數歩の地に黄鳥の來り鳴くとありて我耳を奪ひ我魂を奪ひ、我をしてしばらく故郷に歸り戀

人の家に到る思ひあらしむその聲を我が戀人の聲と思ふて聴く時に
戀人の姿は我前にあり一笑して我を惱殺する昔日の色香は見ぬす愁
涙の蒼頬に流れて紅ひ欄干たるを見るのみ。

軒端數分の間隙よりくゞり入るは世の人の嫦娥とかあだなすなる
天女なれども我が意中人の音信を傳へ入るゝとをなさねば我は振り
かへり見るともせずいづこの庭にうへたる花にやあらむ折にふれて
は妙なるかほりを風がもて來るともあれど我が戀人の魂をこゝに
呼び出すべき香にてもなければ要もなし氣まぐれものゝ蝙蝠風勢が
我が寂寥の調を破らんとでもぐり入ることゝあれど捉へんには竿な
し、好し捉ふることも我が自由は彼の自由を奪ふことゝよりて回復すべ
きゝあらず況して我戀人の姿をこの見昔しき半獸半鳥よりうつし出
づるとの望むべからざるをや。

是の如きもの我牢獄なり、是の如きもの我戀愛なり、世は我と對して
害を加へず、我も世と對して害を加へざるゝ我は斯く籠囚の身となれ
り、我は今無言なり、膝を折りて柱と憑れ齒を咬み眼を瞑しつゝあり、知
覺我を離れんとす、死の刺は我が後と來りて機を視へり、死は近づけり、
然れどもこの時の死は生よりもたのしきなり、我が生ける間の「明」より
も今ま死する際の「薄闇」は我と取りてありがたし、暗黒！暗黒！我が行
くところは關り知らず、死も亦た眠りの一種なるかも、「眠り」ならば夢
の一つも見ざる眠りよてあれよ、をさらばなり、をさらばなり。

蓮華草

咲くも迅し散るも迅し春の花、たのしみも速しかなしみも速し
人の戀、定まりなき世と定まりあるものを求め心なきものゝ心あらん

とを願ふ人の迷ひのはかなさよ。

村雨は空も宿なきものかなど人の袂を犯すこと多きぬるしとをたのしむ燕ならば雨の中をいとはまじ美しくしく濁りなき優しの魂もその雨のかくりがちなるは何たる事ぞ訝ければ訝かるべし世のならひ、何の譬ぞ美と醜とは。

友と連立ちて廣尾も遊びたるは一村雨を讀みたる同じ日なり野面を見渡すかぎり美しくしきむしろを布きつめたる花の心はさていかみ誰が爲めよ？造化は汝もありて至美をあらはすに汝は虚心もて野もかゝやくか、または摘む人の手を招き寄て自ら散るを早むるか、摘む人も罪ありと言はれ摘まする者も罪はあるべし、兎角野の奥の人の浮かれ來ぬあたりも咲ける花やめでたかるべし、
摘むものも真心おれかし摘まるともものもせことおれよと祈るな

花は散るべしいつかでか戀の影も人は迷はむ春の戀力長かれ願ふは愚なり、花は散るべき時を惜しむべからず、花は散るとも人のまことば常よのこるべし。造化の美を宿す汝は幸なるかな、然はあれども汝が美は汝の皮膚もありと思ふな、かれ皮膚の全く腐爛して後よ汝のこるべきものあり、これぞ我が慕ふ美なるぞかし、われは汝が靈の涙をもてひとつゝの珠と爲すものにあらす、吾は汝が聲をもて悉く天女の樂なりとする者もあらす、惟だ折々も汝の中懐より溢れ出る造化の美を見る時よ、汝を天界のものと思ひわが戀は即ち是なり。

村雨の汝が袂も降り易きは是非もなし、降らば降らせよ心なき世も心ありとは思ひたがへど、恨みは人もあり、天よは何をか唧つべき、この世は譬もあらす、まことなり、譬の中もまことを見るが、智なるべし、摘むものも摘まるしものも、天は拘はるところなし、心せよ摘む者と摘

まるしもの散らぬ間を傲り顔なる花も散るべき花も迷ひ浮るしもの
も同じく春よ翫弄ばるしなりうたてやな。

松島に於て芭蕉翁を讀む

余が松島に入りたるは四月十日の夜なりき。奥の細道に記する所を
見れば松尾桃青翁が松島に入りたる、明治と文化との差別こそあれ、同
じく四月十日の午の刻近くなりしとなり。余が此の北奥の洞庭西湖に
輕鞋を踏入れし時は風すさび樹鳴り物凄き心地せられて中々に外面
に出でし島の夜景を眺むべき様もなかりき。然れどもわれ既に扶桑衆
美の勝地にあり。わが遊魂いかでか飄乎としてそより出で、以て靈境の
美神と相通化せざるを得んや。

は生命ある靈景と相契和しつゝあるなり。枕頭の燈火誰が爲に廣室を
守るぞ。憫むべし。燈火は客を守るべき職に忠信にして、客は臥中にあれ
ども既に無きを知らざるなり。燈火よ客の魂は魄となりしかならざる
か。飛遊して室中には留らず。汝何すれぞ守るべき客ありと想ふや。

また滅滅又明。此際燈火はわれを愚弄する者の如し。燈火われを愚弄
するか。われ燈火を愚弄するか。人生われを愚弄するか。われ人生を愚弄
するか。自然われを欺くか。われ自然を欺くか。美術われを眩するか。われ
美術を眩するか。韻美。是等の者われを毒するか。われ是等の者を毒する
か。詩文。是等の者果して魔か。是等の者果して實か。

燈火再び晃々たり。われ之を悪くむ。内界の紛擾せる時にわれは寧ろ
外界の諸識別を遠けて暗黒と寂寞とを迎ふるの念あり。内界に鑿入す
る事深くして外界の地層を没却するは自然なり。内界は悲戀を醸すの

場なる事を知りながらわれは其悲戀に近より其悲戀に刺されん事を
樂しむ心あるを奈何せむ手を伸べて燈を搖き消せば今までは松の軒
に佇み居たる小鬼大鬼共哄々と笑ひ興じてわが廣間を填むる迄に入
り來れり而してわれは一々彼等を迎接せざりしかども半醒半睡の間
に彼儕の相貌の梗概を認識せり。

小鬼大鬼われを圍めり然れども彼等は悉く暴戾惡逆なる者のみに
あらず悉く兇横なる暴威を逞うする者のみならず中にはわが枕頭に
來つて幼稚なる遊戯をなしつ嘻笑する者もあるなり何となく心重く
なりたれば夜具の袖を舉げて一たび拂ふに大鬼小鬼其影を留めず消
え失せぬ少時にして喧笑放語傍若無人なる事前の如し餘りにうるさ
くなりたれば枕を蹴つて立上り一隅の圓柱に倚つて無言するに大小
の鬼儕再び來らず靜かに思へば鬼の形しけるは我身を纏ふ百八煩惱

の現躰なりける。

靜坐稍久し無言の妙漸く熟す暗寂の好味將み佳境に進まんとする
時破笠弊衣の一老叟わが前より顯はれぬわれ仍は無言なり彼も唇を結
びて物言はず。

彼は無言にして我が前を過ぎぬ暫らくして其形影を見失ひぬ彼は
無言にして來り無言にして去れり然はあれども彼の無言こそは我に
對して絶高の雄辯なりしなれ知る人は知らむ桃青翁松島に遊びて句
を成さずして西歸せしを而して我を蓋ひし暗の幕は我をして明らか
に桃青翁を見るの便を與へたり。

怪しくも余は松島を冥想するの念よりも一句を成さず西歸せし蕉
翁の無言を讀むの樂みに耽りたり古へより名山名水は詩客文士の至
寶なり生命なり然れども造化の秘藏なる名山名水は往々にして韻高

からず調備はらざる文士の爲めに其粹美を失却する事あるを免かれず。

飄遊は吾性なり。飄遊せざれば吾性は完からざるが如き感あり。天地粹あり、山水美あり、造化之を包みて景勝の地に於て其一端を露はすなり。詩性ある者が景勝の地に來りて神動き氣躍るは至當の理なり。然れども景勝の地は僅に造化が包裡する粹美の一端なる事を知らば、景勝其自身に對する觀念は甚だ大ならずして景勝を通じ風光を貫いて造化の秘藏に進み、其粹美を領得するは豈詩人の職にあらずや。如何にして造化の秘藏に進み、粹美を縦にするを得む、如何にして俗韻を脱し高邁なる逸興を樂むを得む請ふ共に無言なる蕉翁に聽かむ。

美は遂に説明し盡す能はざる者なり。美は肉眼の輕佻なる判斷によりて凡人に誤解せらるゝ。同じく雄大なる詩人哲學者をも眩惑しつゝ

いある者なり。至妙なる繪畫能く人を妖魅す、然れども繪畫の妙工も一種の妖魅力に過ぎざるを奈何せむ。吾人眞如を捕捉すと思ふ時に眞如の燦然たる光は眞如を惑はし去る。美を觀るの眼も亦た斯の如し、正面に立つて美を觀る事は雲のかいりたる時の外はかなはず。迷宮の中にあつて美の所在を争ひ右も走り左も馳せ、東に疲れ西に憊るゝ者比々皆な是なり。韻士は力を籠めて韻致を探り、哲學者は思ひを凝らして析解を試むるも、迷宮の迷宮たるは始めより今に至るまで大變らんところはあらざらむ。

然れども迷宮と知つて迷宮に入るは文士の樂しむところにして、迷宮に入る事能はざるは文士の悲しむ所なり。古へより文士の景勝を探る者未だ迷宮に入らざるに、未だ妖魅を受けざるに、未だ造化の秘藏に近かざるも、先づ筆管を握つて秀句を吐かんとする者多し。造化は對し

て禮を失ふ者と云ふべし。彼等は彫琢したる巧句を得べし。然れども妖魅せられざる前の巧句は人工なり。安んぞ神靈に動かされたる天工の奇句を咏出する事を得んや。ひとり探景の詩文のみに就きて云ふにあらす。凡ての文章が神よ入ると神に入らざるとは即ち此境にあり。古來の大作名著が神に入れるは孰れ神靈に動かさるゝを待ちて筆を握らざる者のあるべき。一たび妖魅せらるゝは蓋し後に澄清なる識別を得るの始めなるべけれ。

景勝は多少のインスピレイションを何人にも與ふる者なり。故に景勝は如何なる田夫野郎をも詩氣を帯びて逍遙する者とならしむるなり。然るに所謂詩客なる者多くは景勝を以て詩を成さざる可らざる所と思ふ。景勝をして自然に詩を作らしめず自ら強いて詩を造らんとす。こは實に設題して歌を造る歌人の惡風と共に日東の陋習なり。彼等を

して造詩家たらしむるも詩人たらしめざるも茲に存す。彼等をして作調家たらしむるも入神詩家たらしめざる者茲に存す。而して此事ひとり景勝を咏する詩人に限るに非ず。人間の運命を極めんとする近代の意味に於ての文學家が筆に役せられて文の神を失ふも皆此理に外ならず。試に思へ當年芭蕉の俳句を作らざる可らざるは、今日の文人が文章を捏造せざる可らざるよりも甚しかりしを。況や扶桑第一の好風に遊て一句を作さずして歸りし事如何許の耻辱にてやありけむ。然るも凡庸の作調家が爲すと能はざる所を芭蕉は爲せり。芭蕉が余の前にひるがれる一卷の書なると是を以てなり。

われ常に謂へらく絶大の景色は文字を殺す者なり。然るにわれ新に悟るところあり。即ち絶大の景色は獨り文字を殺すのみ。あらずして「我」をも沒了する者なる事なり。絶大の景色に對する時に、詞句全く盡

るは即ち我の全部既に没了し去られ恍惚としてわが此にあるか彼に
あるかを知らずなり行くなり彼は我を偷み去るなり否我は彼に随ひ
行くなり玄々不識の中にわれは我を失ふなり而して我も凡ての物も
一に歸し廣大なる一が凡てを占領す無差別となり虚無となり模糊と
して踪跡すべからざる者となるなり澹乎たり廖廓たり廣大なる一は
不繫の舟の如し誰れか能く控縛する事を得んやこゝに至れば詩歌な
く景色なく何れを我何れを彼と見分る術なきなり之を冥交と目ひ契
合とも號くるなれ。

冥交契合の長短は靈韻を享くるの多少なり靈韻を享くるの多少は
後に産出すべき詩歌の靈不靈なり冥交契合の長き時は自ら山川草木
の中に己れと同様の生命を認め來つて一條の萬有的精神を遠暢し唯
一の裡に圓成せる眞美を認めわれ彼れが一部分か彼れわが一部分か

と疑ふ迄に風光の中に己れを筈入し得るなりこの時に當つて句を求
むるも得べからず作調家は遠く離れたり詩人は斯る境界にあつて句
なきを甘んずべし蕉翁が松島に遊びて句なかりしは果して余が讀む
ところの如くなりしか或は非か一卷余が爲には善知識なり説の當非
は暫らく措きて余が松洲に泊せし一夜の感慨は斯くの如し家に歸り
て奥の細道を閲するに蕉翁は左の如く松島に於て誌せり。

ちはや振神のむかし大山すみのなせる業にや造化の天工いづれ
の人か筆をふるひ詞を盡さむ

ゆきだをれ

瘠せにやせたるそのすがた、
枯れにかれたるそのかたち、

何を病みてかさはかれし、
何をなやみて左はやせし。

みにくさよ、あはれそのすがた、
いたましや、あはれそのかたち、

いづくの誰れを何人ぞ。
里はいづくぞ、どのはてぞ。

親はあらずや子もあらずや、
妻もあらずや妹もあらずや、

あはれこの人も言はず、
ものを言はぬは啞ならむ。

啞にもあらず舌あらば、

いかにたびとをかたらずや。

いづくの里を迷ひ出て、

いづくの里に行くものぞ。

いづこよりいづこへ迷ふと、
たづぬる人のあはれさよ。

家ありと思ひ里ありと、
定むる人のおるかさよ。

迷はぬわれを迷ふとは。
迷へる人のあさましさ。

親も兒も妻も妹も持たざれば、

闇のうきよにちなみもあらず。

みにくしと笑ひたまへど、

いたましとあはれみたまへど、

われは形のあるじにて、

形はわれのまろふとなれ。

かりのこの世のかりものど、

かたちもすがたも捨てぬとは、

知らずやあはれ、浮世人、
なまけあらばそを立去りぬ。

こはめづらしきものでひよ、

啞にはあらでものしりの、

乞食のすがたして來たりけり。

いな乞食の物知顔ぞあはれなる。

誰れかれと言ひあはしつ、

物をもたらしつとひしに、

物は乞はずに立ち去れど、

言ふ顔にくしものしりこじき。

里もなく家もなき身になりながら、

里もあり家もある身をのしるは、

おこなる心のしれものぞ、
乞食のものしりあはれなり。

世にも人にもすてられはてし、

恥らふべき身を知るや知らずや、

浮世人とそしらるゝわれらは、

汝が友ならず、いざ行かなむ。

里の兒等のさてもうるさや、

よしなきことにあたら一夜の、

月のこゝろに背きけり、
うち見る空のうつくしさよ。

いざ立ちあがり、かなたなる、

小山の上の草原よ、

こよひの宿をかりむしろ、

たのしく月と眠らなむ。

立たんとすれば、あしはなへたり、

いかにすべけむ、ふしはゆるめり、

そこを流るゝ清水さへ、

今はこの身のものならず。

かの山までと思ひしも、

またあやまれる願ひなり。

西へ西へと行く月も、

山の端ちかくなりけり。

むかしの夢に往來せし、
榮華の里のまぼろしに、

このすがたかたちを寫しなげ、
このわれもさを哄笑ひつらむ。

いまの心の鏡のうちに、
むかしの榮華のうつるとき、

そのすがたかたちのみにくきを、
われは笑ひてあはれむなり。

むかしを拙なしと言ふも晩し、
今をおこぞと言ふもむやくし、

夢も鏡も天も地も、

いまのわが身をいかにせむ。

物乞ふこともうみはてし、

とふべす過ぎしは月あまり、

何事もたゞ忘るゝをたのしみに、

草枕ふたゝび覺ぬ眠に入らなむ。

ほたる

ゆうべの暉をさまりて、

まづ暮れかゝる草陰に、

わづかに影を點せども、

なを身を恥づるけしきあり。

羽虫を逐ふて細川の、
浅瀬をはしる若鮎が、
静まる頃やはたる火は、
低く水邊をわたり行く。
腐草に生をうくる身の、
かなしや月に照らされて、
もとの草にもかへらずに、
たちまち空そらに消ぬにけり。

蝶のゆくへ

舞ふてゆくへを問ひたまふ、
心のはどぞうれしけれ、

秋の野面をそこはかと、
尋ねて迷ふ蝶が身を。
行くもかへるも同じ關、
越へ來し方に越へて行く。
花の野山に舞ひし身は、
花なき野邊も元の宿。
前もなければ後もまた、
「運命」の外には「我」もなし。
ひらくくくと舞ひ行くは、
夢とまことの間ちかまなり。

雙蝶のわかれ

ひとつの枝に雙つの蝶、
羽を收めてやすらへり。
露の重荷に下垂るゝ、
草は思ひに沈むめり。
秋の無情に身を責むる。
花は愁ひに色褪めぬ。

言はず語らぬ蝶ふたつ、
齊しく起ちて舞ひ行けり。
うしろを見れば野は寂し、
前に向へば風冷し。
過ぎにし春は夢なれど、

送ひ行簡は何處ぞや。

同じ恨みの蝶ふたつ。
重げに見ゆる四の翼。
雙び飛びてもひねわたる、
秋のつるぎの怖ろしや。
雄も雌も共にたゆたひて。
もと來し方へ悄れ行く。

もとの一枝をまたの宿、
暫しと憩ふ蝶ふたつ。
夕告げわたる鐘の音に、



おどろきて立つ蝶ふたつ。
 こたびは別れて西ひがし、
 振りかへりつゝ去りにけり。

眠れる蝶

けさ立ちそめし秋風に、
 「自然」のいろはかわりけり。
 高梢に蟬の聲細く、
 茂草に蟲の歌悲し。

野面には、
 鷗のこゑさへうらがれて、
 林には、

あはれ、あはれ、蝶一羽、
千草の花もうれひけり。
破れし花も眠れるよ。

早やも来ぬ、早やも来ぬ秋、
萬物秋となりにつれ。
蟻はおどろきて穴索め、
蛇はうなづきて洞に入る。
田つくりは、

あしたの星に稻を刈り、
山樵は
月に嘯むきて冬に備ふ。

蝶よ、いましのみ、蝶よ、
破れし花よ眠るはいかよ。

破れし花も宿假れば、
運命かみのそなへし床こなるを。
春のはじめ迷ひ出で、
秋の今日まで酔ひ酔ひて、
あしたは、

千よろづの花の露よ厭き、
ゆうべよは、
夢なき夢の敷敷を経ぬ。
只だ此ましく寂として

露のいのち

待ちやれ待ちやれ、その手は元へもどし
やんせ。無残な事をなされまゐる。手の指の
先までも、これこの露よさはるなら、たち
まち零ちて消ぬますぞへ。
吹けば散る、散るこそ花の生命とい悟つ
たやうな人の言ひごと。この露は何とせ
う。吹きもせず散りもせずゆうべむすん
でけさは消る。
草の葉末に唯だひとよ。かりのふしどを

たのみても。さて美^あい夢一つ、見るでもあ
し。野ざらしの風颯々ど。吹きわたるあか
に何がたのしくて。
結びし前はいかありし。消^きえての後はい
かあらむ。ゆうべとけさのこの間^まも、うれ
ひの種とありしかや。待ちやれと言つた
はあやまち。とくく消してたまはれや。

髑髏舞

うたゝねのかりのふしどにうまひして
としのき経ぬる暗の中。

物の数とも思はじな。
月なきもまた花なきも何かあらん、

この墓^{かぶつ}中の安らかさ。

たもとには落つるしづくを拂ねば、

この身も溶くるしづくなり。

朽つる身ぞこのまゝにこそあるべけれ。

ちなみきれたる浮世の塵。

めづらしや今宵は松の琴きこゆ、

遠^{とほ}の水音も面白し。

深々と更けわたる真夜中に、

鴉の鳴くはいぶかしや。

何にもあれわが故郷^{ふるさと}の光景^{あかり}を、

訪はいいかにと心うごく。

ほられたる穴の淺きは幸あれや。

墓にすねたる石輕み。

いでや見むいかにかはれる世の態を、

小笹踏分け歩みてむ。

世の中は秋の紅葉か花の春、

いづれを問はぬ夢のうち。

暗かれや實に春秋も、

あやめもわかぬ暗の世か奇。

月もあく星も名残の空の間に、

天を衝く立樹にすがるつたかつら、

うらみあり氣に垂れさがり。

繁り生ふ蓬はかたみにからみあひ、

毒のをろちを住ますらめ。

思ひ出るこゝどむかしの藪ありし、

いどまもつけでこのわが身。

あへなくも落つる樹の葉の連とあり、

死出の旅路をいそぎける。

すさまじや雲を蹴て飛ぶいさづまの

空に鬼神やつとふらむ。

寄せ來るひいき怖ろし鳴雷の、

何を怒りて騒ぐらむ。

鳴雷は鬨體厭ふて哮るかや、

どくろとてあざけり玉ひぞよ。

昔はと語るもをしきことながら。

今の鬨體もひとたびは。

百千の男なやませし今小町とは

うたはれし身の果ぞとよ。

忘らるゝ身よりも忘るゝ人心、

きのふの友はあらずかや。

人あらば近ふ寄れかし來れかし、

むかしを忍ぶ人あらば。

天地に盈つてふ精も近よれよ、

見せむひとさし舞ふて見せむ、

舞ふよ鬨體めづらしや鬨體の舞、

忘れはすまじ花小町。

高く眺ね軽く躍れば面影の、

寛裳羽衣を舞をさめ、

かれし咽うるははさんと溪の面

うつるすがたのあさましや。

はらくと落つるは葉末の露ならで。

花の鬨體のしとしづく

うらめしや見る人なきもことはりぞ、

昨日にかはれる今日の舞。

纏頭まんとくの山を成しける夢の跡、

覺めて恥かし露の前。

この身のみ秋にはあらぬ野の末の

いづれの花か散らざらむ。

うたてやなうきたる節の吳竹に、

迷はせし世はわが迷ひ。

忘らるゝ身も何か恨みん悟りては、

雲の行來に氣もいそぐ。

暫し待てやよ秋風よ肉なき身ぞ、

月の出ぬ間まにいざ歸かへらむ。

彈琴

悲しとも樂しとも、

浮世を知らぬみどりこの。

いかなればこそ琵琶の手の、

うごくかたをば見疑るらむ。

何を笑むなる、みどりこは、

琵琶弾く人をみまもりて。

何をか囁くみどりこは、

琵琶の音色を聞き澄みて。

浮世を知らぬものさへも、

浮世の外の聲を聞く。

こゝに音づれ來し聲を、

いづこよりどは問ひもせで。

破れし窓に月満ちて、

埋火かすかになりゆけり、

こよひ一夜はみどりごに、

琵琶のまことを語りあかさむ。

みづのうた

この夏行脚して廻りありきける
さき、或朝ふさおもしろき草花の
咲けるところに[○]出でぬ。花を眺む
るに餘念なき時、わが眼に入れる
ものあり、これ他の風流漢ならず
して一蚯蚓を[○]り。あかしきこさあ
りければ記しとめぬ。

わらじのひものゆるくなりぬ、
まだあさまだき日も高らかに、
ゆうべの夢のまださめやらで、
いそがしきかな吾が心、さても雲水の
身には恥かし夢の跡。

つぶやきながら結び果てし立上り、
歩むとすれば、いふかしきかな、
われを留むる、今を盛りの草の花、
わが魂は先づ打ち入りて、物こそ忘れぬ、
この花だにあらばうちもね死なむ。

そこ這ふは誰ぞ、わが花の下を、
答へはあらず、はひまわる、
わが花盗む心なりや、おのれくせもの、
思はずこぶしを打ち舉げて
うたんとすれば、やよしばし。

「おのれ地下に棲みなれて
花のあぢ知るものならず、
今朝わが家を立出でしより、
あさひのあつさに照らされて、
今唯だ歸らん家を求むるのみ。

「おのれは生れながらにめしひたり、
いづこをば家と定むるよしもなし。
朝出る家は夕べかへる家ならず、
花の下にもいばらの下にも
わが身はねらます宿るなり。

「おのれ生れながらに鼻あらず、
人のむさしといふところをおのれは知らず、
人のちりあくた捨つるところに
われは極樂の露を吸ふ、
こしより樂しきところあらず。

「きのふあるを知らず

あすあるをあげづらはす、
夜こそ物は樂しけれ、
草の根に宿借りて
歌とは知らず歌うたふ。」

やよやよみしす説くことを止めて
おのがほどりに仇あるを見よ、
智慧者のほまれ世に高き
蟻こそ來たれ、近づきけれ、
心せよ、いましが家にゆるぎ行きぬ。

「君よわが身は仇を見ず、

さはいへあつさの堪へがたきに、
いざかへんなん、わが家に、
そこには仇も來らまじ、安らかに、
またひとねむり貪らん。」

そのこといまだ終らぬに、
かしこき仇は早や背に上れり、
こゝを先途と飛び躍る、
いきはひ猛し、あな見事、
仇は土にぞうちつけらる。

あな笑止や小兵者、

今は心も強しいざまからむ。
うちまはる花の下、
惜しやいづこも土かたし、
入るべき穴のなきをいかん。

またもや仇の來らぬうちと
心せくさましほらしや。
かなたに迷ひ、こなたに惑ひ、
ゆきてはかへり、かへりては行く、
まだ歸るべき宿はなし。

やがて獲とらもをちのきし

敵はふたしびまどひつく。
こしぞと身を振り跳ねをせれば、
もろくも再びはね落され、
こなたを向きて後退さげさる。

二つ三つ四ついつしかに、敵の数の、
やうやく多くなりけらし。
こなたは未だ家あらず、
敵の陣は落ちなく布きて、
こたびこそはと勇むつはもの。

疲れやしけむ立留まり、

こゝをいづこと打ち案ず、
いまを機會ぞ、かゝれど敵は
むらがり寄るをわはれ悟らず、
たちまち背には二つ三つ。

振り拂ひて行かんとすれば、
またも寄せ来る新手のつはもの、
踏み止りて戦はんとすれば
寄手は雲霞のごとくに集りて、
幾度跳ねても拂ひつくせず。

あさひの高くなるまゝに、

のちのかわきはいやまして、
のどをうるほす露あらず、

悲しやはらばふ身にしあれば
あつさこよのふ堪へがたし。

受けしる手きすのいたみも

たゝかふごごになやみを増しぬ

今は拂ふに由もなし、

爲すまゝにせよ、させて見む、

小兵奴らわが背にむらがり登れかし。

得たりと敵は馳せ登り、
たちまちに背を蓋ふほど、

くるしや許せど叫ぶとすれど、
聲なき身をばいかにせむ、
せむ術なくてたをれしまし。

おどろきあきれて手を差し伸れば
パツと散り行く百千の蟻。

はや事果しかあはれなる、

先に聞し物語に心奪はれて、

救得させず死なしけり。

ねむころよ土かきあげ、

塵にかへれどほふむりぬ。

うらむなよ、凡を生とし生けるもの

いづれ塵にかへらざらん、
高さも卑きもこれを免れじ。

起き上ればこのかなしさを見ぬ振に、
前にも増せる花の色香。

汝もいつしか散らざらむ。

散るときに思ひ合せよこの世には

いづれ絶えせぬ命ならめや。

月前の柳

まねく手はほそくたゆめを空とほく

なびかぬ月のうらめしきかな

花間蝶

こゝろありやなしやはしらす花のうち
に
うさをはなれぬ蝶ぞゆかしき

雨後の花

雨すぎてうらめしげなる花のおも
ちるまで友とちぎらざりしに

あさしとなちぎりそがめそうきよには
はなれがたきもはなれやすきを

史

ふみわくるみちのおくこそいづこなれ
まよへとはたがおしへそめけん

發句

行くへさへ音もきかせぬ岸の水
雪そらに旅雁迷ふ歳の暮
冬の月雁のつばさも凍りけり

宿魂鏡

上

花よ花よと浮れぞめきし人の心も稍静まりて、一輪早咲きの躑躅の上を羽翳の蝶の行きもどりする四月の末の春景色。

牛込とのみ町名は聞洩らしたり、男爵戸澤と表札も嚴しき邸構の門前に、二人乗の腕車駐まりてうるくくと下る田舎爺、その後又跟きて物思ひありげの優しき小娘、玄關先にてひそく、叩く聲も田舎物の調子高く、庭運動の鬚むしやの男又見認められて、何用ぞと聲掛られ、をづく答ふるは、この御邸に山名芳三と申すものは居りませぬか。

鬚むしやの男先きよ立ち、奥庭近き離室の傍まで行き、これが山名氏の居間御遺慮なく御はいりなされ、山名氏も今しがた庭に見知られた

が、此聲よ室内より現はれ出る一少年、めづらしや爺さんか。

挨拶一通りは済みて室の中をここへを見廻す孫兵衛、さても見事な其繪額、その床の間にあるは、何に、羅馬から取寄せた半身像、さても結構、その書架の中は、やれく澤山の書物だぞ、結構お文机、扱く結構いやその結構で思ひ付た、十年前よ日光参詣の時の事を思ひ出せば、やれ脚半、やれ股引、やれ杖よ、やれ草鞋よと、家中で騒ぎ散した馬鹿くしい旅支度、瀛車といふ便利なものも出来た今日、むかしが何だか可笑く思はれる、これ見され奥州白河在から、娘は白足袋に疊つき我は下駄かけ羽織着て、熏らす煙草の烟の間に、那須黒磯も通り過ぎ、夢宇都の宮よ一やすみ、雲筑波の峯をも遠く拜みて、板東太郎も一瞬の間よ渡りこし、心持よくまどろむ隙よ、上野くの掛聲聞いて出れば最う東京、右よ付き左

に纏ふ車夫を推退け、娘の手を緊と取つて、東西南北當途もなく歩き出し、牛込——町と胸の中に幾百度となく繰り返し、何の路を行き、何の辻を曲るものやら、迷つたわく、東京といふ所には毎日何十人と迷兒が出来る由、大人でさへ能く迷兒又はならぬと思ふ斗り、馬車又驅られ車又逐はれ、牛込く、どうるさく人の足を止め、牛よりも晚く市中を歩き暮し、やつとの事でどこやら鼻に奥州なまりの残つて居る老躰車夫の親切らしい口振又、駄賃の相談整ひて、こゝまで乗つて来てはつと一息、いかな事く、是非とも東京又置いて来い、置いて来やうと噂奴と熟談又及んで来たなれど、此様子では置いて行つては後の氣掛り、我も大事の大事の獨り娘を置いて行かふと決たは能々なり、どつくり御前と相談をして、後々まで間違の無いやう、この白髮頭の氣の濟むやう、是非とも爲てもらはねばなりません、何れも是が茶、黒茶かね、何れも咖啡なんだ

か我儕又は飲まれましたね、ウム美しい、娘、手前も飲んで見ろ、東京又居れば斯ういふ物も飲み慣れねばならぬイヤそんな恥かしがらいで宜わ、ハ、年といふものは變な奴だて、御前を背中又負つて跟踪歩るきした事のある芳三殿又何の遠慮があるものか、観音まうで地蔵の祭日、何處へ行くにも連立つて人又も笑はれる程仲が宜つたではないか、似寄つたく、芳三と阿梅が夫婦遊びするを見るに付け、隣り同士でもあり舊縁もあり、優り劣りの無い家柄、誰が言ひ出したでもなく親々の中又固めた言名付、忘れもせぬ、芳三殿、御前が十五の春又東京に修行又出たいと言つた時、この我は達て思ひ止まれど、娘の不憫ひとつ口を酔くして諫めても、草深い田舎又埋もれて居る時世又あらず、今に今又歴々の官員に成り濟して、其時は叔父様も東京又呼でやらうといふ御前の剛情に根負して、そんなら我もと、修行料の助に若干か、可愛い娘の

支度料よと蓄つて置いた中より割きて熨包み目出度く御前を旅立せ
は爲たもの、我娘可愛しと思ふ心から懸離れて居る御前の身の上
氣に掛り、今頃は何をしてゐるか、病氣よもかゝらず息才で學問をして
ゐるか、もしや又た廣い都の引手数多の仇花よ迷ひ込んで、阿梅の事忘
れ果てゝ呉れは爲まいか、この志貫き遂げるまでは故郷の土を二度踏
まぬと言つた御前の言葉が耳に残つて、それまでは迎ても歸るまい、迅
くたて歲月、春も秋も箭の如く飛んで行け、首尾よく御前の修行が濟ん
で、立派な官員よ成つて呉れて、而うして阿梅を呼んで呉れて、初孫の顔
見よ來いと迎ひを立てられて、何が何だか分りもせぬ後々、の夢を
結びつ覺めつ、漸く今年阿梅は十七、五つ違ひで御前は二十二、嗚奴は女
だけに氣の揉め方も多いと見え、何うでも今年は埒明けて安心が爲た
い、と言慕つて病氣が起らぬは宜いと思ふ程の高き方、何でも我ら

娘を連れて行けと云ふ我が出ねば自分で出るといふと詮方なく奥州
は知つての通り雪足切れて間も無い今日、今年の寒さよ揃ひよも惜し
き新芽の桑、是から急がしくなるばかりの蠶時を脱け出て、娘の身装も
御前の顔よ關らぬ程の物を整へ、目立たぬ様に目立せて、都下りの花簪
ホイこれはしたり忘れて居た芳三殿、これは御前よ、嗚が丹精して織つ
た夏衣、二年前から用意してあつた品物、爰には御前の父様からの一封、
それよも阿梅が事は書いてある、後でゆるく讀んで下され、娘が事は
必らずく。ホイこれはしたり林太どのから御前よ何やら頼があるこ
か、此手紙、それも後で讀んで下され、林太も此頃は學校の助教よなつ
て、鹿爪らしい事はつかり、御前の噂が出る度よ、何うぞして、己も東
京よ出て見たいと言ひ續けて居る阿梅も一昨年暮れよ學校は卒業
して免狀も取つた程なれば、些どやそつこの事は談し相手よもなりま



せふ、山家育ちの藪鶯氣又は入るまるが必らず見捨てし呉れてはなりませぬぞ。阿梅何もそんなに赤い顔をして黙つて居る事はない、元の様は仲好く遊べ、イヤ遊べではない、話しでもし、芳三殿御前も黙つて居るのか阿梅、芳三殿、さてくもどかしい人達だぞ、これ芳三殿、これ阿梅。

長たらしき孫兵衛の述懐を、始めから終まで紙巻煙草の烟の間から聞澄して居た芳三、阿梅が事はかねて胸もあり、孫兵衛の親切も忘れては濟まぬ事百も承知、何學校か又三年高等中學、又四年、この間の學資半分は我家よりも身代柱太き孫兵衛が仕遣つた事、親々の間も約束がある事、阿梅が最早年頃になつた事、鄙又は珍らしき容姿なる事、一々胸も納めて居て、折々固くるしき政治學の蟹書の上も、異な姿が現はれて、自分で自分を笑つた事もある、秘その阿梅が遙々と出て来て見れば、何と

なく可愛さが無いでもなければ、道ならぬ事とは知りながらツイ外れ
出した駒の脚躰地も他路も跳ね行きて、今では取つて還しもならぬは
ど他の花も心が移れば、かわいやこの少女、何れも知らず居るか、圖ら
ぬ罪を造つてと、自分ながら自分が怖くなる氣持ち、そう思つて下向
なつて居る阿梅の顔を竊み視れば、何やら口惜そうな眼付、何やら恨め
しそうな口付再び密と睥むれば、いや、あの口元は昔しの通り緘つ
て居て、あの眼元も昔しの儘も利口らしく凛として、羞かしいが一杯一
方の眼も、うれしいが一杯他方の眼も、その眼をそつと上向きに自分の
顔も射込まれて、ハツと外向ける我眼は、答ぬを待つて焦立ち顔の孫兵
衛の面も衝りて又た當惑、珈琲の熱いのを最う一杯も紛らして扱説出
るやう。我も其事が氣になつて、去年の夏も既歸省を思ひ立つた位、大
學までは首尾能く進んで、最う三年も過てば先づ一通りは修行の結果

が現はれる筈なれば、歸りたくはあれどそれまでの辛抱と思止まりました。大學となつてからは費用もすつと多くなり、そう／＼は御世話も興り悪く、何處かの學校も内職の教授でも爲たらと思つて居る中、不圖した事から此邸の主人、今は九州巡回中の戸澤男爵も見出され、達てといふも辭みもならず、食客とも屬かず、顧問とも屬かず、學校で調べる政治學を實地の研究、男爵は某省の次官を勤めて旭日の勢ある御方なれば早晩大臣又は進まるゝ筈、我も大學さへ濟めば同じ省の高等官は成れる約束、其時よなれば、イヤその時よあるまでが肝心のところ、今の身で阿梅さんの世話をするは易けれど、學問の障礙ともなり、出世の路の躓石ともならば相互の爲よならぬ譯。と言へば、イヤ／＼何も世話を爲せるの何のといふ譯では毛頭なし、そう云ふ出世の道がついて居るなら猶更大切の御前の身、何うして阿梅故に世帯苦勞あせさせては

第一御前の兩親も申譯がありませぬ。これ阿梅手前も何とか言ふが宜い、何をぐち／＼疊の縁を坐つて居るのだ、世話をしてもらふといふは今の事ではない、一生の末の末の事だ、修業が濟んでから負さらふと抱れふとそれは其時の事、それまでは御前の物を此方が預つて居るも同前、よしか、御前の出世は阿梅の出世、何うして／＼御前の出世の邪魔させて宜いものか、それじやから御前も相談しやうといふのは全然の田舎物では御前が高貴なつた時よ恥辱なる様な事があつてはならず、何うしても多摩川の水とやらで一二年は日向臭い垢を滌させねばならぬまゝとは鼻が一生の智慧袋を叩いての名策、何うじや御前も感心したろ、アハ、御前は黙つてばかり居るが、何許ぞへ遣つて置かうといふ氣は無いか、學校丈は廢止したが宜からうと誰やらは言ひ居つた、隣村の阿夏とかいふ娘三年計り東京も出して置く中、洋語だか唐語だか

出鱈目な喋り散らし、兀頭の爺を捕まへて、やれ耶蘇が何うしたの、やれ男女同權が何うだの、果ては御袋の頭を打やす程の見幕もう、娘を持つた親は東京の學校よは出さぬ事、と言ひ居つた、それも何よ、御前が是非學校よ遣りたいといふなら達て廢せといふではないが、成らふ事なら御郎方よ奉公させ、少しは世間といふものも覺わさせ都の言葉をも習はせて、イヤ御郎と云へば此方は、もし出来る事なら御前一所よ、イヤイヤ、それは宜くない、修行中の御前よ。

この時長廊の端より物靜かに此一室を目掛けて歩み寄るものあり、その眉の清げなるその頬の艶やかなる、その丹唇の香ばしき、その眼元の妖やかなる、罪知らぬ天女の神々しさも斯くやあらんと思はるゝばかり、その年齢を問へば漸く三五の望の月、薄暗き黄昏時をうち照らし、て、琴歌微かゝ歌ひながら、足取緩く彼一室に近づきて、遠慮なく障子を

サット開けば、中よは當惑の面ざしあやしき芳三よりも、フット見上げて瞬きもせず凝視めたる阿梅の眼中物言ひた氣なり。思案中ばの孫兵衛のみは、霜枯あたまを下垂れて、障子の開けしよも氣は付かぬ様子。たゞこの一瞬時、障子はすらりと閉されて、足音荒く歸り行く乙女。あれは、と阿梅の心の中よは一場の疑團、うち解けぬ顔の芳三よくらしや。

御客人は最う御返りなされしかと、何氣なき面をつくるひて獨坐無言の芳三を騒がして入り來るは最前の乙女。はい、今しがた福田氏執事の名を頼んで近所の羈亭に届けてもらひました。我も直ぐに行くからと、は言ひましたが、それは先づ明日の事と、言ふ顔を眺めて、何故今夜御出なさらぬ、而うして泊つて御出でなされば宜いよ、ハ、そんな口をどこから、學校から覺わて來てか、華族女學校よは悪い教師が居ると見ぬ

る、それよりは昨日のロングフェローの詩は何うなされし、能く解かり
ましたか。イエ解りませぬ、解からぬ事は矢張り解りませぬ。また其んな
事を、夫人は何方へか御出掛なれたか。例の龜野様と、あの舞踏會へ。舞踏
會、何故貴嬢も御出あさらぬ。イエ舞踏會は大嫌ひ、あの龜野も大嫌ひ。嘘
を、あの龜野は貴嬢も、大の大の大執心だと云ふ事を聞きましたよ。それは
向ふの御勝手、妾は大の大の大嫌ひ、母ですよ。龜野が大好といふのは、い
つでも、やれ舞踏、やれ夜會と、一所へ行きますが、それは母ばかり、それよ
りも、それよりも、それよりもが何うしました。人を貴郎は、と言ひさま、何
事ぞ、男の隻手を手込に引寄せて花の如き口唇も押當てしが、いたく
く、と男の聲の下、あやしやポロく、と落つる乙女の涙。

これ阿弓さん赦して下され、我が悪るかつた、何も其んか泣く事は
無い、サ、サ、この手巾で顔を拭いて、オ、善い見よなつた、善い見よなつた、

ら能く聞いて下され、成程あの阿梅と我との間も許嫁のある事は我も
豫て聞知つて居る、知つては居れどそれは親の勝手に爲た事、我と阿梅
よ何の約束があるではなし、昔なら知らず今明治の御世よ、言名付の何
のと、親の定めた嫁御寮を大事がつて拜領する馬鹿ものは一人も無し、
成程あの孫兵衛といふ老爺に學資にながしは助力を受たが、それは金
づく、金づくから何千圓が何萬圓でも、後になつて、元金利子耳を揃へて
返済して遣れば、何も面倒な事があらふ筈なし、法律さへあれば天下は
樂々と治まる當世よ、その法律を學んで居る我よ何の其處等の拔目が
あるふぞ。イエそれでも、イエそれでも、とは、何よあの阿梅が東京よ居る
様よなつたらと、それは譯も無い事、何處か馬鹿堅い屋敷も頼んで、めつ
た外出もならぬようよして置けば、その内よは氣が變るといふ事もあ
らふ。何よ氣が變らなかつたらと、そんな無益らぬ事は廢止て下され、あ

れ、あの聲音は、あれは確か又福田斯うして居ては悪るからふ、さ、早く、早く、また緩々話させふぞ。

オヤ何處かへ御出なさるの、荷物を造らへて、と突然聲懸けて入り來しは彼の弓子。前回に物語りし事ありてよりは一月程も過ぎし或朝の事なり。昨晚夫人から斷りが出ましたから。と見向きもせずして言ふは芳三。母が何を言ひましても父様が未だ御歸りにならないから。と悲しげと言ふは弓子。イエそれでも斷りが出てから此處又居るのは快よくありませぬ。そうして何方へ。何方と言つて格別行くところはありませぬ。ま、あ學校までも、イエ學校では此節の民黨ばかりに學校の友人も教師も戸澤次官の提灯持ちと、この芳三を輕卑るから、講堂も最う三月計は出ないで居たから、試験前よなつて行くのも面白くない。それでは

何處よ、田舎にでも、田舎、あの白河よ、左様もう斯うなつては東京よ居るのも何だかうしろめたいから。何か悪るい事でも爲されたの。イエ悪るい事は爲ませぬ。氣の弱い事を。氣の弱いは我の持性。田舎よ御出なされたらこの妾は、何うなど爲さるが宜し、あの龜野といふ方もあるのよ、何うかなすつたの、昨夕一晩寐ずに御出なすつたの母がまた何か酷い事でも言ひましたか。左様我の事を薄のろだの、厄介物だの。イエあれは母の氣質、それはど斗の事は辛抱して、妾が様に笑つて居て、イヤ笑つて居るといふ事は我よは出來ぬ。そんなら阿梅さんは、あれは矢張麻布よ。連れて御歸りなさるの。な、馬鹿を。白河のどちら。白河は白河、白河在、御手紙は下さるの。上げます、上げられたら、あれ誰やらが妾を呼んで居る、悲しいことよなりましたね、必よ必よ、忘れて下されますな。また後よ來られたら、それまでは待つて下さいよ。と涙ぐみて出でし行く。

暫らくありて阿鶴とか云ふ腰元袖も持たせし袂紗包中又は怪しき古鏡ひとつ、何やら呷きて芳三の手も渡し出て行きしが、懐中も投入れんとして何氣なく袂紗を披き鏡面を視れば、鮮やかなる紅血兩三點、あの美しい指をむごたらしう傷つけしか。

下

露置きし庭の小萩も枯れ盡きて、弓張月の影凄々袖なき樹梢に隠れてぞ行くその月の迹を追ひ、中空を渡る鴈ひとつら、落つるは聲か、ひら／＼／＼／＼落るはのこり葉、風もなきに。

その聲か、その落葉か、その月か、または霜かたゞしは風か、ゆらく／＼と窓前の敗蕉を動かすよと見しが、燈火微かなる窓を拂ふて、さら／＼と音するは人の拍手もて打つ如し。

窓下の一室には、腕を曲げて冷やかある座睡の夢、端々く覺き醒され

て、いたく驚ける一個の若者、何者ぞ、何者ぞ、我を喚びしは何者ぞ、と、屹とした聲よて、然も急調に罵れり。

霎時は返答を俟ちて耳聳てしが、内よりも外よりも聲らしきものは聞ぬざれば、疑念の首かしげ、誰ぞ、誰ぞ、と言ひつゝ衝と起ちて障子を荒々しく引開け、半身を外も露はして、そも我を呼びたるは、と語氣鋭く、忙はしげも、庭も下りて、徘徊する事稍久しかりしが、我は懐かしと思ふ聲を聽きたり我は其聲を再び聽きたしと思ふ、我は其聲が我を爰へ招き出でたりと思ふなり、など獨語しぬ。

再び歩み出て彼方の隅を驗べ、此方の折戸を試み、さて往返數回の後、首を垂れ、口を嚙み、茫然として彼敗蕉の下も立ちしが、忽ち我も反りたる如く、遽然として室内も入りぬ。

こゝは山間の一小村。白河を離るゝ事僅ふ三里。頃は秋の末世を捨てつ、世に捨てられて、都の夢をくりかへす山名芳三。

芳三が常住の位置と定めたる、彼の敗蕉葉下の一屋は、母屋を離るゝ事半町計り、五年前に没去りし先代の隱居が生前の閑室、中頃物置同然に扱はれて、破損の箇所も少なからぬを、この夏歸郷したる芳三、母家の繁雜を嫌ひて、雨洩る簷を繕ひもせず其儘に學問隱居。

この子亭には二室あり、東に向ひたる一室には群籍什具を藏め、西に開ける一室を座臥の場所と定めたり、此室には何一つ器具もなく裝飾もなし、粗造の卓子一脚その中央に据ゑられてあれど、稀に一二部の洋書を載することあるのみ、それすら主人の眷顧を受くる事は多からずと。この一室恰も空洞の如く墳墓の如きに、測り難きは主人の胸中。
一室の中何事をか爲る、香を焚き經を誦する枯禪の味とは正反對の

この幽居、幽居とは云へど全く孤獨なるにはあらず、世間孤獨を裝ふものにて極めて親昵なる友を持てること少なからず、この芳三の幽居もその類ひ、彼れ天を棄て、地を捐て身を捨て、世を抛てたりと雖、天にも地にも、身にも世にも換られぬ一人の伴侶、その名を妄執と名けんか、その名を煩惱と名けんか、何とでも呼べ、我にはその妄執とその煩惱とが廣々たる天と漠々たる地の間に此生命を繋げるもの。

春といひ夏といふも人間を葬むる塚の異名のみ、彼芳三、過ぎ易き歡樂と、欺かれ易き希望の生涯を遺れて今や四月、覺束なくも塞翁の駒に乗せられし昨日の志空しくなり、無常流轉の浮世を秋風に誘はれて唇寒むく、愴然として空洞の幽寂を守り、籬にからめる朝顔の枯蔓に笑はれもすべき憔悴のおもて。

觀すれば地獄極樂、心邊數寸の裡にあるものを、迷へば魑魅魍魎眼前

幾尺の地にあるものを、愚なるかな人間、悲しくもなき風を悲しいひ、倒れもせぬ崖を倒れしといひ、曲みもせぬ運命を曲むといひ、二六時中何事かの憂苦に追はるゝは、あはれなり芳三八年の苦學を一夕の澁茶の烟に巻かれ、何を觀せしか、何を迷ひしか、浮世厭なり、功名うるさし、社會は蒼蠅の簇かるところ、五十年は皺波を寄せる爲めの時間、朋友もおもしろくなし、親身も何の爲にあるやら益もなし、この我れ何の爲ぞ、何の故に産れしか、なほ哲學者とみたる虚想に耽れば、日に月に募る人間嫌ひ、我ざらひ、當初の程は彼の歸郷に仇喜びせし孫兵衛、この様子では娘もやがて、呼戻してと、未だ見ぬ孫の顔を想像してはくく、ひとり笑ひに鼻の疑惑を受けし事ある程なりしが、彼の舉動の漸く奇怪なるを見るに付け、彼の顔色の漸く蒼ざめて行くを見るに付け、彼のはら亭の漸く人足を絶つを見るに付け、無言では居られず、彼の齋室に訪づれ来て、

種々に説き慰むれど、いつかな聞入れる景色なく、御前の顔は鬼が見ゆる、うるさいく、又打ち消され、音なく追出されて、涙溢れぬばかり、鼻と相談、いつそ阿梅を呼還して看病させたらと、遙々人を出して奉公先の暇を乞はせぬ。

浮世厭なりたるも、朋友疎くなりたるも、親身なつかしくなくなりたるも、功名うるさくなりたるも、我といふもの解わからなくなりたるも、その元は彼が懷中に隠れたる一幻鏡の仕業なり、この幻鏡の來歴委しく知らんと思は、造化の主を呼べよかし、幾千年前よりいづくいかある鬼神が戯れ、鑄て、我人間界に傳へたりしかは、作者にも讀者もも秘密の天機、この幻鏡深く見惚れるもの、危ふきことあり、人間始まつてより、この幻鏡を釣りこまれて、奈落の底に宙乗りしたる數の多ければ、或學者は之を盲鏡と呼び、或博士は之を死鏡と命けしとぞ、學者もも博士もも、

この幻鏡の由來は未だ解らぬとの事。この古鏡いかよして戸澤弓子の手を渡りしか、不言々不説々。唯だ弓子の魂魄が鏡の中を打ち込まれて別離の時の形見の品をかりし事のみ、前回は見えて明なり。

病氣と聞いて驚きたる阿梅四月前を歸村しながら一言報知も無かりしは餘りの事とは思へども窮窟な奉公やめて慕はしき人の枕元も坐るやうなるは又た一つの樂しみ看病の間はうれしき談話もああらふか、また病氣の平癒つてからはと、心の中も色々の事想ひ構へて歸村したる阿梅三日を歸ると其足で、彼芳三の蝸室も案内もなく入らんとせしよ、面相怖ろしく音聲激しき芳三の一喝に膽潰れ、嘔り泣きして我家に立歸れり。

次の日の朝山名の母家に都土産なを携へて行き、昔を忍ぶいろりば

た、折り焚く櫛のひまゝに、芳三の様子概略は聞取りしも、秘胸に治まらぬは何故の狂亂、何故の獨棲、定備の男口、啞の平吉といふが、村中きつての魯鈍だけに、芳三の機嫌損ふ事もなく時刻々々に食膳を運び入るゝに狂亂の状態絶えて見し事なしと言ふに力を得て、一所に連れてど泣顔にて言へば、それ宜かると擧家に言葉を添られて、勇氣を回復したる阿梅、怖づく平吉の尾に隨きて行くに、平吉には何の變りし様子も見せぬ芳三、阿梅の顔を見ると齊しく、この賣女奴、何しに來た、と罵り付けられ取絶る術もなく引返しぬ。

阿梅歸村してより第三日目、今宵孫兵衛が手打の新蕎麥、この風味を、この頃病氣の高じたる芳三殿にげけたらば、と母に言はれて、阿梅は涙を袖に拭ひ、彼蝸室の近傍まで歩み寄りしも、仲々そこに進入る勇氣はなく、母家の板敷までふらふらと逍遙ひ行き、平吉居たらば再た一

所に行つてもらはんと、其處此處を見廻す中、芳三の父、右衛門に呼上られ、蕎麥の筈は何とも言はずに、其處に居合はせし小婢の手に渡し、招かるゝ儘に奥座敷の爐邊に座を取りて、小さき胸に湛にかねたる悲を、押かくし、問はるゝまゝの都がたりに、十日の月の影傾き盡くるまで時を移して後、空箆を抱へて棟屋を立出たり。

その歩みは家路に向はで、彼別室の後ろまで、拔足差足誰に忍ぶでもなき懸路の闇、この時何れより吹寄するか、風一陣颯と起りて、裾を拂ひ、例の敗葉をひと搖ぎするに、何者と聲鋭く障子を開きて立出る。芳三ひやりと胸にこたへて驚ろき退る。阿梅、こんもりとしたる生垣をさそくの隠れ場息を潜め身を震はして、跣まり居たり。

芳三は向前の如く庭に下りて、徘徊すること稍少時、我は再度懐かしき人の聲を聞たり、その聲の主は何處ぞと、獨語しながら、足を早めて、阿

梅が匿れし生垣近く歩み來るに、怖さ半分、見たさ半分、耐へかねて、衝と起上り、芳三様も聲震ひて確とは聞かれず、や、や、そなたは、どうれしきに飛上る芳三、能くく、視れば、懐かしき人にはあらで、日頃憂しく思ふ阿梅なり。なに、阿梅か、人を、と叫ぶ聲音の物凄く、人を、人を、と言ひ捨て、一散走り、室内に入りぬ。

絶ゆる入るばかりの悲しさを、爰で泣きては何の様な憂目に遭はんも知れずと、湧き上る涙を袖に推し包み、駈けもどる我家の門柱に纏らみつき、聲枯るゝまで鳴き立てしとぞ、あはれ阿梅。

一室の内に反りて、卓子を押退け、動乎と中央に座を占めたる芳三の耳には、微かに風に乗り來る阿梅の悲鳴を何と聽くらむ。

汝我を欺くか、戀よ、我を狂人と呼ぶは汝か、戀よ、汝我を愚人と笑ふか、戀よ、我が學問を捨て、榮達を捨て去るを、汝、我を變物と嘲るか、戀よ。

と獨り言ちしながら、懷中より例の古鏡を取れば、照々と寫り出たる意中人の面影。その面影を、右に眺めつ、左に眺めつ、起して視つ、臥させて視つ、仰ぎて眺めつ、俯して眺めつ、取つて視つ、措きて視つ、一視は一視より想を亂し、一想は一想より心を奪ひ、恍々惚々として精神天涯に浮び去り、夢とも現とも、幻とも覺とも、身一ツを置かぬる一室の中、立ちつ座りつ、胡思亂想、何物をか探り求むる如く、手を廣げ、何物をか捉へ得たる如く、空を攫み、いよゝますゝ紛々亂々迷々惑々、頓て突然聲高く、
や、御身は、と叫び出でぬ。

御身か、其處に立つは、弓子か、あらずか、なつかしや、いや爰へは來しぞ。なせ一言も口をきかぬぞ。なせ笑はぬぞ。なせ泣かぬぞ。戀か、戀ならずや。いかにゝ。

なに、御身は涙を零すか、うれしと微笑むか、何と言ふ、我を戀ふる

心知らずやと、その言草は此方にあり、何に、むごい御方と、それは此方も言ひたき事、何に、この戀故に死にますると、それは此方も同じ事。

や、や、御身は矢張鏡の上に。今物言ひしは御身か、但しは鏡か、いまはしや、幻鏡、見事この我を狂人にしたか。戀も情も、汝幻鏡のいたづらか。己れ幻鏡まごゝろ籠めし弓子の姿も、汝が妖魅の仕業か。まごこかいつはりか、咄、我を玩弄ふは汝か。と言ひ放ち、彼古鏡を真向の壁に抛付れば、鏘然たる音もろ共に、朦朧として異態の怪物現はれ出たり。鬪體にして鬪體にあらず、人間にして人間にあらず、悽慘醜毒の狀一々筆に盡し難し、那邊の幽暗界より、何事の要むるものありて、そも此處には現はれけむ。
何者ぞ、汝、われ狂亂の餘りに、熱病みが熱に浮されて見るといふ鬼物を己れの胸より描き出しかこの現在を狂亂といふべきか、または人間初めより狂亂に生れたるものなるか、但しは天地斯の如き忌はしきも

のありて、いつか一度は、人間として必らず出逢ふべき者なりや、天の戯れか地のいたすらか、何者ぞ、この戯れは、このいたすらは、幻鏡か、戀か、さらずはこの我自己か。

彼は再び古鏡を拿上て、我か懷裡に納めんとしたり。この時忽焉として、壁上に意中の人の形を再現せり。可愛や、弓子か。と言はんとする時、彼方の壁上看見し怪物が、そろ／＼と歩み出るに、可愛の弓子も歩みはじめて、行き戻り入り亂れ、或は走り或は駐まり、逃げつ追はれつ、追はれつ逃げつ。忽として消ぬ、忽として現じ、忽として浮び、忽として滅す、斯くすること霎時なりしが、聲も出ず手足も動かす、ひたあきれにあきれて背に汗の玉なすばかりの芳三、只見れば、美人の姿は何時しか消ぬて、彼怪物のみ悠々として壁上を横行するに、己れツと言ひさま、手に持つたる古鏡を再び抛付れば、障子の破るゝ音庭上に落つる響を聞きしが、か

の怪物の姿この時全く消ぬて、遠吠の犬の聲かすかに聞ぬぬ。

幻か、弓子、我は幻を幻と知る、幻の幻なるは知れてあれど、幻の極は實、實の極は幻なりと我に囁くものは、執着の戀、執着？、執着といふもの、まことに世にあらば、生命の向ふの、死といふ暗の中にも、その執着は續くべきか、戀？、何故に戀しきぞ、我心に問ふに、戀しきが故に戀しきなりと言ふが最後の理論、御身の家柄にも、御身の爵位にも、御身の富貴も、微塵ほどの望みはなき我、何が可愛きやと、我胸に問へど、御身の姿は美しくし、御身の形は尊とし、御身の眼は涼し、御身の言語は優し、御身の情は濃し、御身の魂は淨しと感ずる外には何事をも、知らぬ胸、多年の學問も此戀に會ひては鈍刀ほどの役に立たず。迷ふものは我、狂ふものは我、ど知れど、さて其迷と曰ひ、狂と曰ふは狂はぬもの、迷はぬものが、假定めて曰ふ言葉、われ迷ひてあるか、われ狂ひてあるか、善しこのまゝに、幻鏡の

弄ぶまゝに、迷ひと狂ひの最終を見極めたらばおもしろからむ

雲何の心ぞ、一天の群星を蔽ひ去りて、窈冥たる天地唯だ幽暗と寂寥との領地あるのみ。前山の修竹ざわくと音して、瀏々と吹寄する風、一際激しく彼窓前の敗蕉を拂ふに、疲れて眠れる癡狂の人、再びむつくと起上れり。

その聲は弓子、我を呼ぶは御身ならずや。といふ聲と共に風は歇めり、すらくと障子を開きて、入り来るもの、これこそは戀に、戀に、戀ひ焦れし現實の弓子、ちよるくと歩み寄りて、男の肩に隻手を掛け、屈んで顔を覗きこみ、はらりと無言の涙惜しげもなく男の膝に溢すに、精神蕩けし芳三、ふつと見上れば、恨むことあるらしく、訴ふることあるらしく、又た願ふとあるらしく、額際にもつれかゝる二縷三縷みどりの髪、覆せたりや、むかしの面影には似も付かぬ弓子、是も誰故、貴郎故、親の許さぬ戀をして、人知れず胸を痛むるなさけなさ、あまつさへ彼龜野奴が執念く母を説き賺かし、阿鶴までも味方に付け、未だ學校が濟まぬから、未だ年が早いからと父様の否むのを無理遣に、今年の中又祝言するのさせるのと、病みほうけた人の心も知らないで、慈悲でも情けでも無き母のなされ方、それも其筈、母とは言へど洗つて見れば、泥に染みたる節なし竹。本の母様をむごたらしう追ひ出して、憂ひに死なせた非道の女。初めて母と呼べ、辭義をせぬかと言はれし時の子供心の口惜さは今でも忘れは致しませぬ。今日この頃の悲しさになつかしや、母様が居られたら貴郎と妾の戀中も、何とか粹して下されて、うれしい事にもなられらものを。無き人の數に入りたる母様は呼びても叫びても還り來まさん由はなく、この世で頼みと思ふ戀人は、秋になりても雁金のそよと礫の

音信も、鳴く音悲しき蟋蟀、夜床の底の涙川、末白河の關越へて、遙々と會ひに來ました、顔見に來ました。

そう言ふ御身は、幻鏡の上の弓子ではないか、幻鏡のいたすらはいつまでぞ、この我を何うする積りぞ、幻、幻、幻鏡の不思議さよ。イエ、其御疑は理りながら、鏡の上でも、夢の中でも無きこの妾是非に逢はねばならぬ事あつて尋ねて來たに。そう言ふ御身は露差はぬ弓子、斯う言ふ我も昨日の儘の我、夢か、夢なるにせよ、我れ覺めたりと思ふ間は夢ならず、鏡か鏡なるにせよ、我れ實なりと思ふ間は鏡の上の幻ならず、まいてや物を語り涙を落す御身を、疑つて宜きものか。オ、嬉しや、打解けて下されたか。と、男の膝に寄り縋るに、不憫や、御身は斯程瘦せるまで我に心中盡したか、いつはり多き人世に、尊としとすべきはその心中、長年の學問、爪垢はどの効もなく、今宵はじめて戀といふ寶珠の色を悟つたり、さて是非

に會はねばならぬといふ用事は、

誓ひし事のいつはりならずばもろとも

何と言ふ、その聲は御身の口からか、イエ、何とも曰しませぬ。と言ふ女の顔を覗き見れば、風にも堪ねぬ女郎花、いらしや涙にうるむ眼を舉げて、そつと男の顔を見て莞爾と笑ひて、そのまゝに、男の膝を假枕、すや〜と眠るあはれさよ。この時、何物ぞ、斷りもなくこの室内に踏み入りしは。

渠なり、前にも見ぬし事ある怪物の再び壁上に現れしなり。兩個を見て、から〜と高笑ひの聲苦く、やがて壁を離れて、芳三の傍まで來ると見わしが、忽ち消えて影も残こらず。

阿梅か、人を、阿梅か、人を、オ、怖や、オ、怖や、と何を言ふやら譯もなき

紅血に漂ひて光もなし。

夢に夢見る心地茫然として衆人顔を見合せしが、電信と、一聲に、又た驚きて、こゝへ〜と言ひながら立出る孫兵衛、何にも知らぬ配夫までがケマン顔にて手渡す一封、當名も讀まず引裂きて讀下せば。

今朝三時四十分弓子死す彼件は中止すべし、

なに弓子死すと、弓子死すとは、弓子とは、と言ふ聲を聞付けて、拱きたる腕を解きて出で來れる福田、弓子が何とせし、なに、弓子死すと。その當名は、や、これは我々當てた電信、主君からの、我々といふ御前はと孫兵衛の訝り顔、オ、孫兵衛爺か、御前は、福田よ、忘れたか、そう〜解つた〜、この人は、あの戸澤様の御家來で、福田と言はるゝ御方と、衆人々紹介すれば、挨拶するは芳右衛門のみ、他は不思議をうゝ顔見て居たり、彼件中止すべし、とはあれと、此場々來合せて語らすゝ引還すも口惜し、語らばな

は口惜がらむせめても死したる人の枕元まで、一應は事の顛末有辨と打明けて、ありたけの涙溢させ申さむ、この芳三殿主人戸澤の目鏡にて邸に招じ、行末は高官も就かしめんと、の下心なりしを、主人の愛嬢弓子と怪しき素振ありしとて主人留守中、内政が獨斷して寄宿を斷りしはこの夏の初め、それより弓子は床に臥し、追々募り行く病の容態のあやしきと、それと悟りし主人男爵、この福田は内々の相談ありしは昨日今日とはあらねども、政治向の雜務も取紛れ、その運びも至らざりしが、昨朝張りつめし戀の弓子が、逢ひたしと苦しき息も一言いはれしを聞きたる主人、行け福田、あの山名を婿と貰ひ受けて來よと、命を受けて、瀛車も晚しと飛んで來たそれがし、六日の菅蒲とは残念至極の事したりと、聞いて愕ろき呆るゝ孫兵衛、この一朝も頭は白雪となりしとぞ。

可憐の阿梅も十日あまり病みて、誰の後を追ふでもなく闇の向うへ
旅立ちしとぞ。』

悪 夢 断編

實朝館

(實朝公曉對面)

實朝義時着座

義時 薄々承り及ぶところ、此度我が君又は、武運旭の登るが如くして、
右大將に昇進せらるべき由、佐兵衛殿の御陰徳とは申せども、御年
若き我君が、日本國中隠れもなき御威徳を帝にも照覽ましますず
ば、いかで斯く迄も朝恩の優渥なる事の候ふべき。平家追討の往昔
より御手は就き御恩を受けたるそれがし共々でが此上なき面目。



實朝 いや徳もなく武も無きわれら、何條斯る嘉讚を受くべき、唯だ思ふ子細もあれば、いや、唯だ朝恩の有難さよ、御内命を拜領せんと思ふのみ。

義 愈御拜領の其上よ、源氏代々の先例ももあり、旁々以て今秋^{この秋}の御參宮は御取行ひめさるしや。

實 言ふよや及ぶ、源家累世の守護の神、八幡大菩薩よ參詣の心はいかでお疎^{おろそか}ますべき。それは借て置き、和殿よは愈禪師公曉を呼び取りしと聞きつるが、今は何處よ置き給ふぞ、何故それがしには對面させ玉はぬか、兄弟とは言へ、僅に見覺あるのみの禪師が人と成りての姿形はいかよぞや。

義 さればに候、禪師幼少の頃より山門よ人と成りたれば武邊の事よは習はねど、何處やら故佐殿の面影があらはれて、長低く額潤る



く智慧分別もありそうな、當年僅か十九歳行末頼もしき若者かと思はれます。

實 して禪師は還俗の心でもふるか。但しは佛門の心を残し、長く緇衣の袖をうち拂ひて、世俗の事には關はらずと申すか。

義 いや禪師殿は言少なく心優しき少年にて、還俗致すも物うるさし、ならば此儘にありたしと申されて、一向に俗縁には意なき様子。君は對面の義はわれらも直^{じき}に勧めますれど、所勞ありとて鎌倉も留まらず、金澤最寄の禪寺に退ぞき、一向専念し看經せられて、寂靜三昧に餘念なき由承り及び候。

侍士某入場

某 唯今館の御門に番てをりしところ、怪しげなる僧形のもの、また年若きがいと驕傲なる顔付にて、我君様へ直々の拜顔を頼むと申

すにより、住所姓名を聞糾すべきの所彼僧中々の剛情にて、汝等の知るところよあらず速に君に言上せよとのみ言ひ募り、よくの事と存じ候へば、御叱責に遭ふは知れた事なれど一應言上及びます。何れ旅僧の事なれば、寺院建立の願か左もなくば何處ぞの山門の諍争の訴へ事と定つたれど、いかん成敗仕るべくや御伺ひ申上ます。

實 その僧を爰と呼べ。身が直々對面致そう。

某 ハ、それまでもあまり見苦しき態を致すものなれば。

實 いや爰へ呼べといふ。

某 ハ、承りました。

侍士退く

實 義時殿は暫らく次の間にて休息めされ、その見苦しき僧こそは

禪師公曉に極まつたり。それがし對面致せし上、兎角は又た後の事。
(義時默禮して退場。何は兎もあれ、骨肉相争ふ源氏のならばし、子は親を打ち弟は兄に除かれ、餌を争ひて友の尾を喰ふ池の魚、その家統を繼ぐ身とて互に心は許せねど、疑念は疾惡の基とやら、ハテ心地よき對面は出來ぬものか。

侍士公曉を以て再登場

士 これなる僧にムります。この通り穢なき法衣を着し居りますもの。

實 イヤ何を申すぞ。退り居るふ。

士 ハ、承りました。

侍士退場

實 や、和殿は公曉禪師でムらふがな。

公

御明察の如く、某こそは三井寺より人ど成りし公曉にムり升、此回義時の招きによりて參幕はせしもの、本來迦葉に従ひ佛土を願ふ身の、憚り多くて幕府にも足を留めず、暫らく僻地に身を置き、て鎌倉童の口の端を避て身を慎しみ居たりしが。

實 イヤ何とて左程に世を恐れ玉ふぞ。鎌倉は源氏武運の泉源、こゝに足を留めたりとて誰に憚あるものぞ。

公

さのたまへど、それがしが俗縁に遠きを知りたまへば、近頃の動勢の推し迫れるをうち蔽ひ、入らぬ事とそれがしの耳にふたしておはす心か。源氏の武運とは申せども、今は寒さの秋霜にうたれて枯るゝ朝貌の、生垣に寄りて育ちたればその垣こそは追々に力を増して伸び上れど、枯れたる蔓は日にまして疎に生地をあらはせる、あはれ今の有様は。

實

何と言はるゝ、それは和殿が若氣の思慮、何とて源氏の運はそれほどに脆からふぞ。八幡大菩薩は源氏の弓矢を護る神にて座さぬか。

公

その八幡とても、奸賊に與してあらば如何にせむ。

實

ア、そは勿躰なし。八幡宮の神躰といつば

公

何條源氏の縮まる運を見て、神慮を惱まし玉はざるべき。

公

や、次の間に、あの咳拂ひは、何者か彼處にひかへまするぞ。

實

イヤ何に、あれは差したる者でない。

公

御隠しあるな。扱情なや、兄弟の二世の誓もあるものを、何ぞ斯くまでは心を置きて油断せず、法衣を着つる此公曉までを疑て、武士を伏せて對面あるとは何事ぞ。

實

和殿も然し思はるゝか。イヤ何に、和殿も我を疑ひて、何と言はるゝ、

武士を伏せてと、九郎判官を討たせし佐殿の心は如何にありしとも、我は何とて和殿を疑ふべき。和殿も然し思はるゝか。源氏は骨肉の中に毒虫の、かたみに争ひ合ふものとしも、定まつてあると思はるゝか。情なき心よな切角の對面に、互の心をうち開けて、この後とも覺束なき、祖先の業を續きたしと、胸の底にて思ひしも仇なりしかや。

公

覺束なき祖先の業と、然らば君には、あの義時が……

實

や、壁に、壁に、あの壁に、あれ蝶が一匹舞ひ込んだわ。それそこに、や

ア公曉、御身の背に留つたわへ。それをここに。

公

何に、蝶が一匹と、いづこに、どれどこに居るか。

實

あれが見ぬか。

公

ア、あれこそは、ヤア蝶と見れば蝶なり、蝶に似て蝶にあらず。それ

そこに君の頭にとまりしよ、ヤアかれこそは、亡き我父が亡靈の、か
りの姿と覺ゆたり。な、な、何を言はんとて爰へは來りしぞ。

三浦義村館

(猿樂興行)

其一 公曉一室

腰元阿鶴入場

(公曉横になりて書見ながら寝入りたる見ゆ)

鶴 もし禪師さまへ、禪師さまへ。あらまア御書見かと思つたに寝て
ムるよな。今日は御館で猿樂の興行。館中上を下へと混雜の中で、は
て法師といふものは氣樂なものぢやなア。もし禪師さまへ。これは
したり禪師さま。と言ひながら傍へ寄つて頬をそと突けば眼を開

けて起直る。御目が覺めましたか。

公

イヤ目は覺めぬ。覺めぬが眼は開いた。何じや阿鶴かそなたは。は
て惜しいところで。最少し待つて呉れたが宜いぞ。言ひて再び横に
なり寝やうとする。

鶴

これはしたり禪師さま。何んぼあなたが法師じやとてそれは又
たあんまりな。今宵は貴郎が八幡宮の別當に御なりなされた御祝
に御館では猿樂の興行があるといふに、それを向岸の火事か何か
の様に全るで知らぬ顔もあんまりな。あんまりそれは。あんまりと
いへばこれはしたりあんまりな。これ禪師様、起きて下され、安閑と
している場合ではありませんよ。これ禪師様、あなたも餘程果報者。
(と言ひながら無理に突き起す)

公

何にをくどく、申すのだ。果報者とは何が果報者じや。果報は寢

て待て。一切成佛く。

鶴 あれく。また寝て仕舞ふ。こうしては居られず。急がしい中を、
、そうじや、何の事はない、直ぐ此處へ御姫さまを。それよく。はて
さて氣が揉めることいこのう。公曉さま、さうして寝て待つて居らし
やれよ、今まにその剛情の眼をみんごと醒して上ませうぞ。その時
になつて拜んで下さるな。南無阿彌陀佛。私までが佛くさい。ヲホ、
參りませふ。

其二 八重子一室

八 (八重子化粧道具を取散し、舞蹈衣裳にて室内をうろく。あるきする
見ゆるしく)

八 晩い事わいな。あの阿鶴は何うしやつた事ぞい。御日さまもトツ
プツと落ちられた。ひと時も遅れてはならぬ。一大事。早く早く、早く

といふにあの阿鶴は何をして居やるか。

あの足音は確かに阿鶴。斯ういふ時は耳敏い。何だか心が落付かぬ。
斯うしてうろろあるく内も足元がふらく。

阿鶴入場障子を開きて

鶴 御姫様

八 何ぞいのう。公曉様は何うなされた。

鶴 イヤ最もあされて物が言はれませぬ。この混雜の中で大船に乗つ
た氣で高躰をかひて寝て居られます。愛想もこそあのお態では何
のあなた、ヲホ、可愛いどころではムりますまゐ。

八 何を言ふぞい。寝て居なると、それはまた。して御起し申したか
いな。

鶴 起しても起しても、果報は寝て待つてと言つたざりで、談話の戸口

も開けられぬ。能く能くの果報嫌ひ。御姫様、妾しや矢張仲章さんが
能うムんすわいな。

八 何を言ふかと思へば、またそんな事を。それどこのはなしではな
い、早く行って起こして下され、これ阿鶴拜むから最う日が暮れたで
は無いか。時刻が遅れてはならぬといふに。

鶴 何だか様子の有りそう。その心配そう。な御顔わいな。そんなら
妾が引請ませう。さア御出あそばせ。日頃内氣なあなたがまた何ふ
した機はらみで、あ、讀めた讀めました。何んな内氣な鶏でもコケツコウと
は鳴きます。何んな、堅氣な猫でも、鼠の番より猫の戀。その代りこ
の阿鶴も猿樂が濟んだら何處ぞの暗陰かげであの好い男とチユ
〜チユ〜と鳴きませふ。
(このところ舞踏足で八重子の手を引き室を出づ、これをキツカケ

に舞臺廻る)

其三 公曉子亭の場

阿鶴は八重姫の手を引きて折戸の前まで來る此處に
て八重子入りかねたる見ゆるしく

鶴 さア此處まで御連れ申したからはこれで媒人の役は濟みまし
た。これからずんと入つて、その可愛い手であの愛らしい男の顔を
突て御遣なさい。それから惜しい夢は何うなされたと、こう言つて
責めて御遣なさい。

八 いしよ。よして御呉れ。最う歸つてもよい、いしよ。

鶴 かへりますとも、それほどの事に粹がきかないで何としませふ
ぞい。(歸らふとする見じ)

八 もう歸るの。待つて御呉れよ。あの折戸を開けるのが何だか。

鶴

それ御覽なさい。それなら、私が斯うして此處を開けて上ますから、そら御入んなさい。(ト突飛す如く中に入れ外面よりビシヤリと折戸を閉し)油断のならぬ。(ト小聲にてふりかへり)退場す。
戀の闇にはあらねども黄昏れて行く空の色雲の通路吹きとづる。風にはあらで幼なぎの見る人なきに氣のどがめ。障子に手を掛けまたおろし。後先見まはしそつと聲懸け。

(このところチヨボ)

八

公曉さま御免あそばせ。

(どいへども何の答なし)

八

公曉さま此處開けて下され。八重子でムいます。

(どいへども何の答もなし)

八

さらば御免あれ。時に取つての失禮は。

(と言ひながら障子開けてツと入らんとするに、公曉は端然として几に向ひ法華經を開きて黙誦す。この躰を見て流石に傍へに進み難く暫時は躊躇居たりしが氣を取直し後ろから聲低く)

八

公曉様唯今までは夢を見て居られしと聞きましたに、何んな夢を、よもや今宵の夢は御存知ありまする。

公曉様、この八重が、女の身にて無遠慮に御室へ参りしこと定めて御輕蔑もムりませう。これには譯ある事。最前阿鶴をよこした時、横になつて居られたといふに、何せ今は起きて居られます。看經も時こそあれ、今宵の御難義を知らずにかあさましや、暫らく御耳を暫らく。

(公曉顧みず)八重子静におちくと進む)

暫らくと申すに御聞入なきや。公曉様情ない御方とやなア。ト言ひながら右へ廻りてツツト顔をのぞきて聲高には申されねば。御悪しみあるかも知らねど、無禮ながら御耳元迄近寄りました。一の耳は御法の聲に傾けても一は妾に借してたべ。」

こよひ。こよひ。今宵はな恐ろしい企謀がムんすわいな。義時どのと仲章、猿樂果て、後御身を後園に連出して。月見に事寄せまだ御存知なき古井戸の蓋に仕掛の深だくみ。悲しい事には我父様必らず恨んで下さるな。北條氏の威權に引かされて口頃直なる心も曲る。臭竹の黒くもなき腸を黒色のすまぬは我身のみ。始めて御目に懸つた日から何となく懐かしい御僧形ならふことなら還俗されて。それが出来ねばあの儘にても長く此家に足を留めて給はれ。と祈りし甲斐も荒波にうちよせられてはいかにせん。もし公曉様聞か

ましたか。何でそのやうに黙つてばツツかり聞かましたか。聞かせぬか。」

今宵は必らず御身を大事に氣を配り。悪漢共の巧計に陥らぬやう。祈るは神佛、神様も佛様も頼まれぬ事もあれば必らず御氣を許さすに。」もし公曉様聞かましたか。聞かせぬか。」戀でもムんせぬ。浮氣でもムんせぬ。妾の申す事はこれぎり、これぎり、でムんすわいな。」御耳は塞いであらうとも。妾の真心は届かすにはよもあるまゐ。」聞かましたか。聞かせぬか。」

(阿鶴再登場)外面の方より姫君様と呼びて、態と知らぬ顔に折戸に近ければ八重子はあはて、座敷を出て

鶴 八
聲が高い。何で今の様に呼ぶぞいのう。
てもあんまり長いので奥様が姫は何處ぞい〜と探して居ら

れます。それ故に態と呼つて來ましたわいな。でもまアあなたも、
ヲホ、聞かせましたか、聞かせぬか。私の聲より貴嬢の聲が、ヲホ、
その代り今夜は私が部屋を留守にしたとて、御無理は決して申さ
れますまいぞよ。ヲホ、行燈でも點火て参りませふか。

(兩人退場)

公

伸びたわく。われながら剛々しきこの黒髪。二月ばかりも看經
を斷ち、香も焼かず。戒も守らず。この髪の色はどに。わが心の中
も黒々と、迷執の奴となるぞ口惜しき。

いかなれば苟且ならぬ佛の縁、誓の船に帆を上げて法の港に急
そぐ身の、この黒髪が伸びれば伸びる程うしろの方に引かるゝ思
ひ。一分、一分、奈落の道へ。
生滅の岸に立ちて、悟明の壽を詠むれば、おろかや妄執の夢は覺

めんとすれど、なほ覺め難きは、なほ覺めやらぬ假寐の夢なき夢ぞ
かし、王位珍寶、必竟するに馬前の塵こやみなき流轉の波に浮びて
は、一切遷滅せずといふことなく、盛者必らず衰ふる事あり、合會必
らず離別あり、壯年は久しく停らず、盛色は病に侵さるめり、命は死
の爲に吞まれ、法は常住あるとなし。この代謝の理を知り悉しなば、
いかで、あ、いかで、源氏の運を悲しむべき。かくこそ悟りてありな
がら、己が儘吹く風のごと、わが身なれどわが身で無き怨讎の念、さ
らく、さつと襲ひ來て、倏忽わが胸中の明燈をかき消すはいかに。
わが身は夏草の、しげみを分けてはひまわる蛇に似て、口に吐く
焰は腦に燃ゆる火の、朝の空の白露に霎時こそ思ひは冷ゆれども、
熱惱の火焰は深く、よしや表面は法の雨、篠つく如く降りしくども、
洗ひもされず消しもせられず、裡も心の火は。

あらかしや夕の景色、空にきらめく星屑を眺めてあれば虚空も何とやら騒がしや。はて夏の夜はいふかしや、わが見てあるうちに、雲たちまちに起り風天上に吹き暴れて丑三のすがた荒々し、物凄や、物凄や、西の天より搔のぼるその有様や、雷神さへも諸共に勢すさんで中空目がけて責め上る、あは怖ろしや、無数の星もかき消す如く亡せ行きて、残るは唯だ一點の墨の色。烏黒やみの其中に、馳せ交ふ雷光吼り狂ふ雷音、そも何者の悪戯ぞ此の狂變は、はて不思議やな。

さりながら天地も情なきものならず、わが心の態を知ればかや、思ひ極むる事をしも、思ひきはめて成し遂げぬ心弱さを笑ふにや。またもひらめくあの光樹々の梢も顛ひ動きて、おのゝき怖るゝ様も願れたり。いかに我が心なきと佛性を授けられ、おめくゝと大事

の前に弱兔の細腰、隠るゝ森も無き程になりくゝに身を責められ、て此世からなる無間地獄に墜ちながらなは、金蓮を慕ふかや。あはれ武士の家に産れて、心黒き古鼠の策畧にはめられ、幼なき頃に追ひ遣られた、知らぬが佛三井寺の、不運の親の末期にも近江の濱の瀬に近く、浅からぬ御法の縁、真如の月、うき事知らず棲みなれて、この春まではあつばれ佛弟子、晨には夙に起きて、一念看經の外はなし、只管罪業を滅して、穢土を離れて淨方に遊ばんことを願ひ、夕には思を澄まして、父祖重代の爲に後生を吊らひ、且は又た、恨みを吞て西海の藻屑となりし平家の一族、敵よ味方よと云ふは浮世の事、佛海は邊なく、涯なく赤と白との隔てなければ、彼方の空をうちながめて、彼の殿原の未來をも深き誠を籠めつゝも祈りしとは仇なるか、今はしも、さしにも蔓延りし源氏の武運も、手斬り足斬りつゝ

くゝに斬りさいなまれて、跡はいざ白浪の消ぬ間こそ果敢なけれ。斯くと知つたら義時の使者を追ひ反へし、墨染衣の願遠く、月三井寺の奥山に形ばかりなる草庵の扉を立て籠めて、浮世の塵には汚れずに、濁世の外に逍遙し、長く火宅を離れしものを、われ誤つたり、誤つたり、燈火に近く飛びめぐる夏蟲の、われから黒熱地獄に身を投げて、明日をも知らぬ此生命、名ばかり千壽は罪なきに好賊の手に落ちて、黄泉の人となり、和田義盛を始めとして、源家の名將大方は非運に盡きしも是非なけれ。

さても頼まれぬのは實朝殿。ほのかに聞けば此度は、功もなくして右大將を拜すべしと噂取々、故殿の恨も酬ひず、おめくゝ義時づらの推薦に、官位を貪る心の中こそ悪くけれ。

(公曉はやをら經を閉ぢ眼を解と開きてあたりを見廻し立上つて)

公

日も暮れたわい。何だか目の前にちらくものがあゝるやうな、それくゝ昨日うしろの山で撮んで來た草花が見んぞと筒の中で咲いて居る。ア、非情でも可愛いものがあるものよなア。

アハ、アハ、アハ、非情と有情何の譬ぞ、何のいたすらぞ、最前わが無言の障礙をなさんとせしは何ぞ、おかしや夢は味あるもの。

最前の夢に驚いて、宿業を浮し迷霧を拂はんために經文に對して暫らく無言する處へ、思ひ掛なき女の告訴、聞けば聞くほどさてくゝ是非ない仕合かな。

運命つたなくて一木の支ふるものなき源氏の末路霜に打たれし秋草の一葉々々に枯れて行く、さてもくゝ是非なき運とあきらめては居るなれど、むざくゝ燈火に飛んで焼かるゝも残念。ト言つ

て逃げ隠れするにも三千世界に味方と言つては一人も無き此身。草を分けて潜む蟲あれど、刃を散さぬ席はなく。寐れば針、寤れば刺、死ても角ても末頼まれぬ生命。

あはれ佛の利生をかみわけて正覺の道に棲みならへる身に、ありながら何とて斯くは閻浮の巷に迷ふたる。殺生は大惡、とは知れど、殺生されては、大悲願にもかなはず。殺生、殺生、殺生せねば殺生され、殺生されねば殺生せねばならず。考へれば考へる程今讀んだ御法の味もサツパリと消えたやうな。ハテ不思議。一度大慈大悲の願を結びて佛弟子となれる身なれば、縦へば身は寸斷くゝにさいなまれて、鶯鴉の餌食に投らるゝとも更々恨みとはすまじきに思へば、物我の境界あやしやな。死ぬは易い死ねば濟む濟むとは云へ。濟まぬは我が心、あまりと言へば、奸賊奴輩、極惡非道の北條一家、

兎てもこの事に、いやくゝくゝ、勿躰なしくゝ、焦熱地獄は恐れねど、焦熱地獄にも猶ほ増さる心の誓は背かれず、矢張この身は、何も彼も知らぬ顔で、唯だ觀音の力を頼みに大火坑の底にも墜ちて見やうか、それも果敢なき頼み事、よしや觀音の力にても、未來は借て置き、現世の地獄は救はれまゐ、ハテ何としたり宜からうぞ、荒れたる波に浮寐の鳥、取つく巖にも見放され、行くも歸るにも、劍の山に圍まれたは難義至極、よし何事も運一つ、今宵は幸ひ告訴あれば逃るゝに難からず、アノ三井寺が戀しくなつたわい。

(三浦義村入場)

義

やれ、騒ぎがわらくて支度ははかどらず、肝腎の禪師殿には一室に入つたざりて顔を見せねば、漸く賓客の數も揃ふたれば、禪師殿を連れ出して行かずばなるまゐ、だがまア考へて見れば、恐る

しい義時殿のもくろみよなア。斯うせよと言ふから斯うした。あゝ
せよと言へば。あゝせねばならず。老耄れた身にせちがらいい。さて
く御氣の毒なは禪師殿。あゝそう言ふ中にこれが子亭はら、どれ様子を
見やうかい。

(障子を開きて)

義

こゝに居なすつたか。御前はまア若いにも似ず殊勝な御方。それ
ほど修行がつんだらば何事も心に掛る雲はあるまゐ。この我など
はこの年になつても今だに迷ふ事ばかり。

公

イヤこれは當家の御主人。何を言はれるかと思へば未熟な我の
修行を賞めて下さる。修行とは名ばかり。その實は執着。執着とい
ふても何もその様に驚ろく事はない。世の中は執着のかたまりぞ
や。我ばかりが執着ではふらぬ。北條殿も執着源氏も執着。

春 駒

(新編)

第一 門出

北風に窓閉されて朝夕の

伴となるもの書と爐火、

軒下の垂氷と共に心凍り

眺めて學ぶ雪達摩、

けふまでこれは梅櫻、

霜の惱みに黙しけれ。

霜柱きのふ解けたる其儘に

朝風ぬるしけふ夜明け、

書の窓うぐひすの音に開かれて、

顔さし出せば梅の香や、

南か北か花見ぬず、

いづこの杜に風の宿。

耳澄まし暫く聞けば鶯の音は

「春」てふものをおとづれぬ。

書とちよ、筆措けかしのいざなふは

いづこに我をさそふらん。

冬に慣れにし氣は結び、
杖ひき出づる力なし。

(この間見ぬず)

ひとむち當ても急がなん。

花ある方よ、わが行くは、

ゆふべの夢の跡戀し。

第二 雪の中

來し道は細川までを限にて

霞に迷ひうせにけり、

春の駒ひとこゑ高く嘶けば、

吾が身もやがて烟の中、

戀にむせびてうなだるし、

招きし花はいづこぞや。

夢にまでうつりし花の面影を

訪ね来て見れば跡もなし、

深山路の人家もあらず聲もせぬ、

廣野の中にわれひとり、

かこつ泪や水の音、

花ある方にそとげかし。

おりたちて清水飲まする駒の脊を

撫でさすりつゝ又一ト鞭、

勇めどもいづれをあてどしらま弓、

思ひ亂れて見る梢に、

鳥の鳴く音ぞかしましき。

立ち籠むる霞の彼方に驅入れば、

小高き山に岩どがり、

枯枝は去歲の嵐に吹き折られ、

其まゝ元梢に垂れかゝる、

さびしさ凄し、たれやたれ、

われを欺き、春告げし。

駒かへしこなたの森の下道を、

急ぎ降れば春雨の、

降りいでしよばぬるゝわが足元を、

かすかにはたく羽の音、

かなたへ隠れて間もあらず、

鳴く聲さけば雉子なり。

マンフレッド及ひフォースト (断編)

大陸文學漸く其絶頂に達せんとし一世を睥睨せしゴエテも既に老境に臨み、其戴きし大桂冠未だ嗣ぐべき人あらず、忽ち大月をアルプス山上に懸け來つて一篇のフォースト、ゴエテが最後の傑作として、ゴエテが桂冠の眞價として、全歐洲を震撼せり。此時に當つてはシェーキスピアアの崇拜熱も漸く薄らぎて英國文學何となく寂寥たる觀なきにあらず。前世記の幕と共にポーブ、クーパー等の群雄は冷却せる玉露の下に、無言の人となりて捲き去られ、シェーリー、スコット等未だ大陸文學に對

して傲顔なる能はず。

フォースト出でしより幾年ならず、以太利に飄遊して豪逸峭嶮の名をチャイルド、ハロルドに震ひしバイロンの手に成れるマンフレッドなる戯曲出づ。バイロンは此時尙は壯にして其の心想漸く詩情より實動を渴望するの域に進み、其書架を其寢牀を、其醫師を、其從者を載せて、富豪なる貴族の華奢を盡してアルプス山を越ぬ、自ら詩界のナポレオンを以て許さんとし、峰巒を疾呼し、懸瀑を號令し、閃電暴雷を指揮し、崇巖なる自然を透視し、其幽玄なる至境に向つて萬斛の熱涙を傾瀉し去つて凱旋のシイザルに似て三寸筆頭に迸洩せしもの即ちこのマンフレッドなり。

ゴエテの始めてマンフレッドに接するや、拍手して己れのフォーストに想を同ふするを歎美し、能くも斯の如く其形装を異にして類似せる奇

想を縦にせし者かなと言ひし。而して、バイロンは自ら言ふ、われ獨字を解せず、フォーストを讀まざる前にマンフレッドの稿を脱せりと。フォーストはゴエテの傑作なり、世界の傑作なり、マンフレッドは實にバイロンの傑作なり、世界の一大奇觀と稱するも過譽ならじ。而して彼も鬼神談既に古文人の談柄に上るのみにして、文界將に實際に進まんとするの時に成り、此も實に近代の鬼神を驅馳し、新創の幽境に特異の幽玄的超自然の理想を着て出でたり。第十九世記の雙兒傑作と呼ぶるも豈に怪しむに足らんや。

ゴエテも厭世家なり、バイロンも厭世者なり、ゴエテは其日記に書して「われ運命の好侶として生れ、福祥世に全かりし、然れども今年七十三歳、回顧してわが過去の生涯を見る、四週間の樂日月を得し事あらずと。従れ自ら言へり、わが詩を作るは自己を責むるなり、自己を罰するなり

と、然れどもゴエテは其厭世家たるの分量、於て遙か、バイロンより及ばざりき。抑もバイロンが天地を跼促たりとし、人生を悲戲の最極と觀するに至れるは、其搖籃の中よりありし時より、否、寧ろ彼の幼少なるバイロンの爲に泣き、又た屢々小バイロンをして暗室に歎歎徹宵ならしめし母氏の胎中よりありし時より既に其厭世的迷想の根柢を固ふしたるを見るべし。而して又其美術に關する兩詩人の位地を熟察し來れば、兩者の理想の上より及せる隔離容易と看破することを得べし。ゴエテは古人も言ひし如く詩人よりも寧ろ美術家なり。其年齒未だ少かりし時山水の絶景に眩惑せられて、詩人と畫工との間より其前途を彷徨せしめて幾度も心を眩迷はせりと云ふものあるを見ても、後來一世を震動せし大技倆は其詩精の分量を持ちたりしよりも多く、自然の奥妙を恰も優婉なる少女が己れと同年輩なる己れと同位地なる美人の畫と對

して精微な観察し細緻な分析するが如き美術的風流詩想の粹を踏破したるを歸すべし。

バイロンに至りては然らず、其詩は即ち神微なる自然の上に幻寫せるバイロン自身也、卑猥なる人生を怒りて常に暴騰せる火煙なり、休憩すること能はざる慰藉すること能はざる所謂目を開きながらに切齒する熱汗なり、思想は實にアルプス山より落つる崩雪の如く、然も想像は一小詩人よりも多からざるは、抑も彼が自己に餘りに詩にして想像を容るゝの閑室に事欠けばなり、故に其詩の如きも往々にして咄嗟の間に成り、熟練を積む事なかりき、ゾラ、ツナア、オッ、チロンの名篇も僅に三日子を費せしのみなりと聞けり、之を以て見るにバイロンは寧ろ詩人にして美術家の聲譽は最も少く荷ふ事を得べきなり。

蓬萊曲の序

蓬萊曲將に稿を脱せんとす、友人某來りて之を一讀し詩て曰く、蓬萊山は古來瑞雲の鬘鍵くどころ、樂仙の盤桓するところ、汝何すれぞ濫に靈山を不祥なる舞臺に假り來つて狂想者を悲死せしむる。又た何すれぞわが邦固有の戯曲の軀を破つて擅に新奇を衒はんとはする。

余は直に之を遮つて曰く、わが蓬萊曲は戯曲の軀を爲すと雖も敢て舞臺に上げられんとの野思あるにあらず、余が亂雜なる詩軀は詩と謂へ詩と謂はざれ余が深く關する所にあらず、韻文の戰爭は江湖に文壇の良將あり、唯だ余が此篇を作す所以の者は、余が胸中に蟠據せる感慨の幾分を寒燈の下に、彼の蠶娘の營々として織絲を其口より延べ出る如く、余が筆端に露洩せしむるに過ぎざるのみ、然も彼れが勤むるは家を

造りて之に入らんとするなれども余が晝間劇務の後に滴々半烹の句を成すところの者は徒に余をして債を起して償ある白紙を反古と化せしむるに止まらんを知る。蓬萊山は大東に詩の精を迸發する千古不變の泉源を置けり、田夫も之に對してはインスピレイションを感じ、學童も之に對して詩人となる、余も亦た彼等と同じく蓬萊嶽に對する詩人となれること久し、回顧すれば十有六歳の夏なり孤筇其絶巔に登りたりし時に余は始めて世に鬼神なる者の存するを信せんとせし事ありし。崎嶇たる人生の行路遂に余をして彼の瑞雲横はり仙翁樂しく棲めると言ふ靈嶽を假り來つて幽冥界に擬し半狂半真なる柳田素雄を悲死せしむるに至れるなり。友人再び曰く、然らば汝は魔鬼魅魘の類を信するや。余答へて曰く、信するにもあらず信せざるにもあらず悲哀極めて頓眠する時に神女を夢み劇熱を病んで壁上に怪物の横行するを見るが如きのみ、友人乃ち放笑して去る。此に於て童子をして燈に油を加へしめ筆を走らせて談話の概畧を記し以て序に代ふ。

明治二十四晚春

透谷橋外の小樓に於て

蟬 羽 子 識

蓬萊曲

曲中の人物

鶴翁 (蓬萊山の道士)

源六 (樵夫)

雪丸 (仙童)

柳田素雄 (子爵、修行者)

勝山清兵衛 (柳田の従者)

露姫 (仙姫)

大魔王、鬼王若干、小鬼若干、
戀の魅、青鬼、等。

第一齣 第一場

蓬萊山麓の森の中 日没後

(柳田素雄琵琶を抱きて森中に徘徊し

従者勝山清兵衛少し晩れて来る。素

雄琵琶を取出て一弾調を成さず仰で蓬

萊嶽の方を眺盼する所)

素、

雲の絶間もあれよかし、

わが燈火なる可き星も現はれよ、

この身さながら浮萍の

西に東に漂ふひまのあけくれに、

なぐさめなりし此の靈山、

いかなれば今宵しも麓に着きて、

見ぬ悲しきかな。

戀しき御姿の見ぬはいかに、

わが心千々に碎くるこの夕暮

都を出で

わがさすらへは春いくつ秋いくつ、

守る關なき歳月を、輕しとて仇し

草わらんじ、會釋なく履きては

捨て履きては捨て、踏みてはのこし、

踏みてはのこす其迹は
白浪立ち消ゆ大海原、

越ゑ來し方を眺むれば

泡沫の如くに失行く浮世。」

牢獄ながらの世は逃げ延びて

幾夜旅寢の草枕、

夢路はるく、たどりたどれど、

頼まれぬものは行末なり。

折々に音づるゝと覺しきは

彼の岸に咲けるめでたき法の華、

からくも悶む手探れば、こはいかに、

まことと見しもの、これも夢の中なる。

浮世の水は何所とも知ず流れ行く、

われも亦た流るゝ儘の旅の身を、

寄せて息めんたのめもなし。
早瀬はやせ緩瀬ゆるせと變るは水のならひなる、

變れど止まることはなし、

わが旅もまた急ぐ急がぬ折こそあれ、

いつかはまことに静まらん。

その稍しづまる渚いさはには、

蛋たまごの刈藻の根を絶たで、

うたてや意おもひをしがらむなる。」

あちこちのめづらしき山、めづらしき水、

愛めづるが中こそ稍安く、

蟬の羽のひねわたる寐床ねどにも眠りけれ、

眠るといふも眼まなこのみ、

心は常に明あきらけく、世の無情むじやうをば

睨にらみつ慨げきつ唧せせちけれ。

左程にきはるゝわれなれば、

逃げ出いんこそ易やすけれど、

わが出いる路みちにはくろがぬの、

連鎖くさは誰がいかなる心ぞ、

去らばとて留とどまらんとすれば

答こたを舉あげて追おふものぞある。」

家出せし時

つらく別れし戀人は、はかなくも、

無常むじやうの風の誘まひ來て

無き人の數に入れりと聞きしより

花のみやこも故郷も

空しくなりて、われをのまむとする

菩提所のみぞ待つなる可し。」

去ねよ、去ねよ、彼世には汝が友の

待ちあくがれて招くものを

と罵る聲は、「死」のつかひよりや出らん、

われも世を去らまくほしき

思ひ出の昨日今日にはあらなくに如何せん

招けば「死もわが友ならず」

いづこを見ても鞭持の鬼

わが脊、わが面を圍むなり、

往け往けと追はるる儘に

行衛定めぬ旅衣、

汚れやつれて見る影もなき態、

鬼の姿にもまがうべし。

左ればとて世を避る身は

何ぞか新衣のひまあらん。」

世の鞭笞稍や遠ければ

深山霞立籠めて空しく迷す夕もあり、

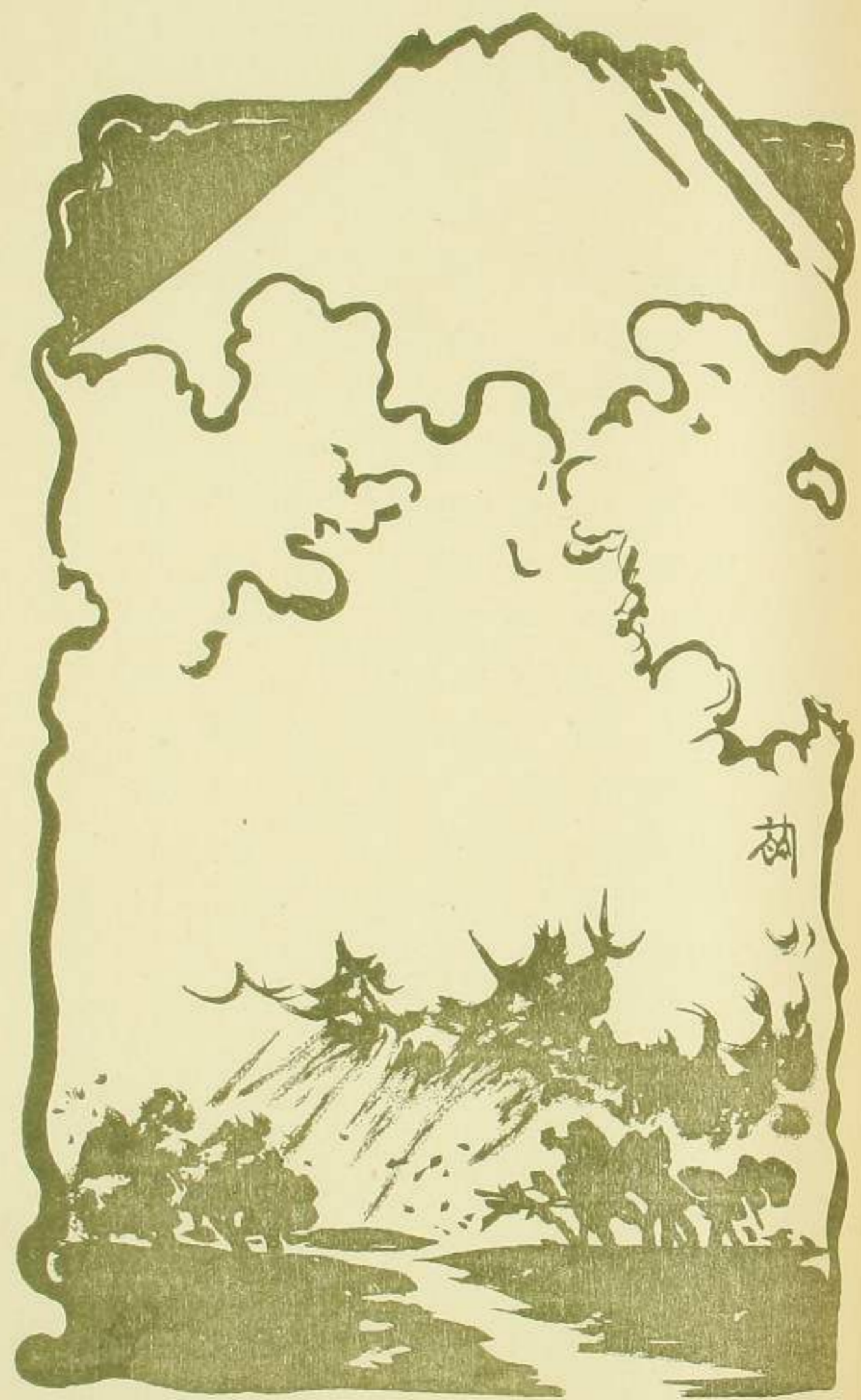
浮世の風こやみするところには

朝霧渡れる水の音に驚き覺る折もあり、

いづこを宿と定めねば

追はれぬ時は心も急かす、夢は現と

かはりつゝ、



燈火の疲れはてし、自らに消ゆるまで。
 書取上げて眠を驅りつ、
 書の無き折はまた
 狂ふまで讀む自然の書世のあやしき奥、
 物の理世の態も
 早や荒方は窮め學びつ、生命の終り、
 未來の世の事まで
 自づから神に入りてぞ悟りにき。」
 指屈むれば盡き難き
 名所の數々に、昔と今を訪ひはたし
 月をも花をも厭ぬる程に眺めにき、
 さても西の都の麗はしきも、

また東の方の花の堤の
屋形の船の酔心地おもひかへせば

仇なりし夢なりし幻なりし。

南の末にたゞよひし時には烟噴く山、
北の極をあさりし時には凍氷の丘、

めづらしめづらしと

たゞへ喜びしが、これも亦た瞬刻

の慰快なりし、今は早や夢にも

上らず回想も動かす。

われには早や珍らしき

者あらず、楽しき者あらず、

この世、この世、美しくしき

この世の悲しきかな、抑今は何者ぞ。

山を河を、野を里を、殿を城を、

載せ餘し置飾りても、わが眼には

空虚とのみぞ見ゆるなる。

空しくも見ゆるかな山と積む書の中、

われに來よとや招かすもがな、

何に樂しからん、其が中に、蠢ならぬわれ。

空しくも見ゆるかな、美しくしき戀心、

われに來よとや招かすもがな、

何に嬉しからん狂ふばかり欺かるゝを。

空しくも見ゆるかな、いかめしき家づくり、

何に喜ばん、人をひれ伏せて、鬼ならぬわれ。

位も爵もあらずもがな、わが爲には。

いまはしき繩は我を、なほ幾重

巻きつ繋ぎつ、

逃しはやらじこの漢と罵る聲の

いづれよりともなくきこゆるなり。

ぬぐへども、ぬぐへども、わが精神の鏡の

くもりを如何せん。

其の鏡にはつれなくも、

過ぎこし方のみ明らかに、

行手は悲し暗の暗。

その常暗の中を尋ねめぐり、あさりまはりて
いまだ眞理の光見ず、

見るは唯いつはりの、立消ゆる漁火のみ。」

悲しきはこの身なり、世に従ひ難くて、

世に充つる魔靈の軍兵になり終らで、

在家も出家もおしなべて

うち靡かせて、世を、我物顔なる怪しの

鬼の、圍みの中にあればぞよ、

四邊は暗く人は眠るに、

われひとりねの床に涙の露零。」

清、

（清兵衛素雄が袖をひきて）

素、

心を注ぎ玉へや怪しき聲のするに。
何に怪しき聲とや。

われは聞かず、其は何の聲ぞや。

近き彼方の森を襲ふ風の鳴るにもや。

否左ならず……あら復た聞こゆ……

今聞ゆるに、はて何所なる、怪しきかな。

我はぬきかず、そはいづこに？

何所とも知らず……彼方此方につぶやく聲。

素、

彼方此方につぶやくこゑ？あやし！

然なり然なり、聲すなり、われも今聞きぬ。

いかに、いかに、如何なる者の聲ならん、

鬼神の類や近づける。さもあらずば、

清。

御山の靈や迎へ出でぬるか。

走りても兎てもいまは詮なし、

怖ろしき目に會ひなんも計られず。

素。

何にを清兵衛は恐るゝぞ、おに神は

爰のみならず、何所にも住むなるを。

静まれよ、われは今、

彼を呼び出でん、いかなる様の者なりや。

あら聲すなり、聲すなり、

われに語ると覺ゆるぞ、おもしろし。

空中の聲。

何れより來りしや、さかしらしくも世を罵る

壯者、塵をあつめて造られながら！

世の塵は掃められて、世を逃れんともがくとや、

あら笑止！いつまでの旅路に思ひを遂げん。

五十の年月長し短かし問ふひまも

暴風雨吹き起り、秋の氣躍り、

波に呑まるゝ捨小舟散り落つる樹の葉。

死の波寄する時いかん、身の秋來る折いかん、

あはれ、あはれ塵を蒐めし空蟬の五尺、

なほ傲り顔に、狭き世を旅び渡り、

暫時留まる春の駒に、

むちあげて、おのれの終りを急がする。

素。

おかしくも嘲るかな、

抑も何物にてか、定まれる人の運命を

おのれを外に譏るらん。

の空中

おろかなるかな、われを知らずや。

この靈山に棲み馴れて、世の神々を

下女下男と召使ひ、ひれふさするもの

われなるを知らずや。

素、

怪しきことを言ふものかな。

さては神々の上の神なるは汝か、

まことや、痴愚なるは神と呼べるもの、

世に禍危の業をのみなし、正しき者を

滅びさせ、偽はれるものを、昌させ、

なほ神とは自から名告るなり！

の空中

まだ罵るや塵の生物！

秋き世の旅は早や爲さずとも、

わが住む山に登れかし、高き神氣を
受けなば誤まれる理の夢の覺めもやせん。
雪を踏みて登らずや神の力もて。

語らんことは彼方にて。

おさらばよ、爰は浮世、長くは談らじ。

あな怪しの神よ、はや去ぬるか、

またしくひまに顯はれて早や消ぬるか、

めづらしき聲、めづらしき罵言、

いづれに失せて行きぬるや。

濃き雲を離れて現はるゝ星ひとつ、

それか？それならじ、それも早や隠れぬ、

何所にや去りけん、も一度顯はれずや、

素、

いなよ、早や呼び返へすべき術はあらじ。」
御雪を踏み登れと言へり。

神の力もて登れと言へり、
かねて望みはありながら、

いかでわれ、このわれが、

神の力なくて登るべきや雪の御山に。」
清兵衛、これをいかすに可きか。

清

父君に托ねられて都を跡に旅鳥の、

ねぐらをぞこと白波の

打ちかへし打ちかへす君が心の荒磯を、

主なればこそ、……頼なればこそ、……
わが身は良しや深山路の

昔の袂に老ひ朽ちぬとも、

君が身に恙あらせじと祈りつ

願ぎつ歳月空しく過にけり。」

君のありこし不満、不平、不和の

はじめ、をばり知れるこの身、

兎ても世には歸へり玉はじと、

涙ながらに思ひあきらめても

さて悲しきかな、君が心の荒らくして

悪魔を呼びて朋友となすとは！

今宵いかなる故やらん

櫛の根を枕の昨夜の夢裡も、

こゝろにかゝる折しもや、今の悪鬼の

罵り嘲する聲音、わが健き足の、

歩めぬほどに怖ろしや、怖ろしや。」

素、昨夜の夢ど？ おかしきこともあらば

何ぞか今まで隠しつる。」

清、否、おかしきことならず、おそろしき

目に會ひぬ。

素、其の恐ろしきことこそおかしきなれ

いざ語れ、語らずや。

清、きみは彼方の檜の根を枕となして、

狼の遠吠絶て息めば心は早や眠り、

眠ると思へばまた覺めて、
眠る覺むるの境もわかずなりしころ、

世を去り玉ひしと聞きつる

露姫……の、端なくもわが枕邊に

佇まれける。」

素、何に、露！露姫とや！

露がいかに……姫がいかにせし。」

清、姫はやつれ衰ろへし姿して、

「素雄どのを何ぞよこさぬ」

と、ひと言は聞しも、あとは野風

のそよ吹くのみ。」

素、笑しや、夢はいつはり多し。

其を心にかけてなば、世には、

まことばなかりなん。

姫がこど、われも思はぬにはあらねども
空蟬うつせみのからは此世に止まれど、魂魄たまげは
飛んで億萬里外にあるものを。
つらく、思へば、このわれも、

世の形骸かたちだに脱ぎ得たらんには、
姫が清きよよき魂たまの翻々たもとたる蝴蝶ことうをば
追おふて舞まふ可まし空高く。

人の世の塵ちりの境まがひを離れ得で
今日までも、愚おろかや墟坑ちちかに呻吟うごめけり。

とても限りなき苦悶くもんをば
こよひ解とき去り形骸かたちをば
世に捨てし行かんや、「死」とも「滅」とも

清、

世の名を付けて、われを忘れさせ、

彼方あつちの御山おんやまの底そこの無なき
生命いのちの谷たにに魂たまを投げいれん。」

素、

「死」とや、「滅」とや？ 其は恐ろしき
者なりかし、わが君これを願玉ねたまふ
あな悲し護まもり玉へや神かみよ佛ほとけよ
徒らに神の名を呼びそ。
死は恐るべき者ならず、

暫しが程の別れの悲しみのみ、
わが如く世に縁ゆかりなきものは、

死こそ歸ると同じ喜びなれ。去るならず
別るしならず、めぐり會あふ人もあるべし

うれしところは思ふ可けれ。

世にありて、

梁を走せ、佛壇に潜み、
柵を掠め鍋を覗ふ業、

鼠はなせど人の事ならじ。

鐵の鎖につながれて、窓には風も通はさぬ
囚牢の中に世の人安々眠れども、

悲しみ覺ゆし身にはまどろまれず、

したしむものは寂しく懸る軒の月。

軒下に狭まく穢さき籠の中、

擦餅に育てあげられし鶯の、
春になれば鳴かぬや何せ鳴かぬと責られて、

聲は折々揚げしかど

庭面の梅が香欲くて鳴しのみ。

この囚牢、この籠を、

こよひならねば何時破るべき！

おさらばよ清兵衛！

この囚牢、この籠にもおさらばよ！

これよりはわれわが君ぞ！

魔にもあれ鬼にもあれ、來れかし來れかし

わが道案内させてん、

早や行かん、おさらばよ！

待ちたまへ、わが君よ、

悲しき思出をせらるゝかな、

清、

素、

みやこには戀し戀しと父母の
老ひたる君や待ち詫び玉ふなるに、
そを捨て、何地へ渡り玉ふぞや。

要あきことは言はずもわれ、この世
わが物あらず、わが物ならずかぞいろも。

戀ひし親しの睦みとて

母が落せしひとしづくどても

思へば長からぬ世の寶ぞ。」

誰が抑も何心にてや造りたりけん、

このわれ、塵のわれ、ひとやの中のわれ、
くらすさ、さびしさ、やましさ、かなしさ、を
知らず顔なる造りぬしや誰れ？

清、

こはいかにわが君狂ひたまふか？
いづこへや行き玉ふなる。

素、

狂ひはせず、静かに家に歸るなれ、
われを捨ておけ汝は行きて、

ひとやのうちの家を守れかし。

おさらばよ、かねて背きたらちねにも！

清、

否、いづこへなりと従はしてよ、
君が爲には何にか惜まん。

素、

否よ、否よ、われひとりならでは……
雪の中には伴は要なし。

いざや、いざや、別れぞ、別れぞ、

(素雄行んとす)

生別れとも死別れとも
ならはなれ!

第二齣

第一場 蓬萊原之一

(柳田素雄琵琶を抱きてたゞひとり
この原を過るところ。)

素、

おさらばよ! 烟の中に消ゆよ浮世、
おさらばよ! 住み古りし旅馴れし

これよりは罵らじ、われにも物を思はせど、
塵の世。

かたみに忘れん、敬意も恨ごしるも、
わが在りし跡も無からせよ。」

思ひを出づる、

終日歩みの疲れに、假の宿なる

草叢に、しばしまどろめば、

齒を切ませ、眼をひらかせし野ばら!

その花のゆかりに、あやしくも

ひと夜を眠りもやらず過せしを、

明くる朝は無殘刺ゆゑに、

わが掌に紅の班見し。」

木の枝を、

其が儘なる旅の杖投げ置きて

ひとむら繁き花の野に、

横雲眺めて熟ねむり。

口紅々と登れるころに起出でて、

見ればわが杖花の蔓にまどはれて、

われと共に起たざりけり。

今はいかに、おどろがもとに

朽ちはてしあらんそも。」

われのみと思ひは差ひて。

情なき人に飼はれてや。

あはれ小狗の瘦せさらばへたるが、

わが前に悲しく尾を垂れて

物欲し氣に鳴きしにわれも

物言はぬ涙を催して

糧を分ちて取らしつゝ、

旅路の伴とせし事もありき。

彼狗今はいかになりし、

架にや飼はれて堯に吠ゆる

たぐひとなりもやしてん。」

實に思ひ出れば限無し、

みな共に彼方の烟に埋もれよ。」

こゝ新らしき世なる可し

夜陰の中にも物の景色變りて見ゆ、

雪の御山よりおくる山おろし

高き所に雲の宿をあらすらん、
見るが内に濃雲淡くなりもてゆきつ。
おもしろやたちまちに星の天！
御山を遶りてひるがれる

裾野原見渡す限り草ばかり、
さてかすかに見ゆる遠山々、

それには交はる模糊たるけふりは
上界下界の墻にやあらん。

その墻を踰へ來しわが身の

今立つところは神が原
拂ひ盡せる浮世の塵。」
いまは神の時にもあらん、

外方にては怖ろしとまでに聞きし

雪崩の音も全たく止み、

世にありし頃には胸とゞろきし流星も
今眺る天には絶わて落ちず。

誰が連ねけん、限なき虚空を隙もなく
美しくしき星の華を咲かせて、歌人に、

おもしろき曲うたへよと促すなる。

こゝに來りてわが胸は、

燃ゆる火焰の消ぬかり、世ならぬ春風

そよぐ、吹くに、流石にわれも溺々にて、

かつて笑ひし岸の柳の今はわが身なる

吹けよ神風、ひるがへし

ひるがへし連れ行けよ。」

見上れば雲の外なる蓬萊の山、

雲の上は白雪、雲の下は春の緑、

下には卑しき神の住みて

上には尊ときものや住むらん。

まぼろしの眼に入るや聖き靈躰、

星を隣にはくむらし。

美しきかないはほの白妙。

わが踏行くは彼方ぞやく。」

いぬるかし、いぬるかし浮世の響、
立消ゆる下雲の彼方に静まりぬ
閑慎し響の車輪もおど、

憂目見し罪の火燃ゆるさま、

早やわが傍にあらずなりぬ。

吹く春風に送られて

何に白雲の彼方を的に、

心の駒の手繩弛めていざ歩む。」

(再び立止まりて)

わが琵琶の音しばらくきかず

戀しきものは汝なるを、

この寂しさ、このをもしるさに、

好しや昔の戀妻と、

野の月を窓の内までのぞかせて

歌ひつ弾きつむつれしころの

心地さはく、物の思ひの繫らぬ今宵、

あたりの草花に耳かしがせ、
空を歩く鬼神の靈精をも

驚ろかしてんく。」

(背より琵琶を取下ろし熟視)

これなるかな、これなるかな、この琵琶よ

いつしも變らぬわが友は、

朽ち行き、廢れはつる味氣無き世に

ほろびの身塵の身を、あはれと

弱きわが心、狭きわが胸の、たのみなき

祈り願しときよ、この琵琶が、
未來をはかなみて消ぬまほしと

わがむねの門叩きそめけり。

これよりは朝暮の世浪寄する憂時も、

月に浮るゝ小夜中も花の霞の其中も

ひと時離れぬ連となりけり。

ひとり寝の、眠りの成らぬ

暗の夜に、覺めながら切齒る苦惱も

起き出でゝこの琵琶を取上げ、

切々と揚げて弾けば、陰るゝ悲湧上り

嘈々と抑へてひけば重ね積る憂は消ゆ、

毒を吐く大蛇の蟠渦に途塞れ

こわさ、かなしさをなさせなさを
この琵琶よ！一調高く、毒氣散らせ、
大蛇の形見ぬすならせぬ。

この琵琶よ！この琵琶よ！

夜鴉苦しく枯梢に叫ぶ夜半も、
鳴血鳥窓を掠めて飛行く時も、

汝をたのみて、調亂れながら、

わが魂の手を盡して奏でぬれば

忽如現世も真如のひかり！

まばゆきばかりの其光に、

かき眩まされていつしか再た曇る、わが
魂鏡これをしもまた琵琶の音に、

再び回へすはどけの面！

世の人のいたづらなる戀の闇路も

この琵琶やわが燈火なりし、

世の人の空しき慾の争ひにも

この琵琶やわれを静めにき、

世の人の様々の狂ひの業にも

この琵琶やわれを定めにき、

さても險しき世にいかでわが琵琶の如

わが悲哀にもわが歡喜にも

朋友となり分半者となる者や無ん。

(調を整)

みやまの裾には鬼神棲むと聞けり、

鳴れよ、鳴れよ、驚かすまで！

(かき鳴らす)

いかなる曲をや弾かん、
誰が作をや弾かんと、の詩人のを、

(黙量しつゝありて)

何の曲をや弾かん、どの曲を。

(空中に唱歌の聲あり)

素

あらあやしいづれより送るぞ妙なる聲、

此方の森の千代の松、風に浮れて

歌ひ出るか、

彼方の雪の巖間より落る雪解の
水音が、わが琵琶の音を浮べて

自然なる歌曲よむか。

左なくば天津乙女や降り来て

空虚よりもたらす天歌かも。

歌へかし！歌へかし！

さてわが琵琶を合せてん。

(仙姫内にて歌ふ)

歌

きみ思ひ、きみ待つ夜の更け易く、

ひとりさまよふ野やひろし。

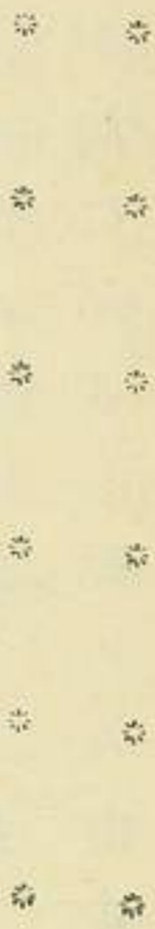
彼方なる丘の上に咲く草花を

たをりきつゝも連なき身、

誰が胸にかざし眺めん由もなく、

思はずも揉めば散りける花片を、

また集むれど花ならず。



素。

(仙姫過ぐ、二頭の鹿之に随ふ)

怪しきかな、怪しきかな、人の來ぬ!

獸けものひとつだに住まぬところと思ひしに。

さても其の人は、其人は

あやしの光を先に立て、

美しや、美しや山乙女!

やさしめづらしの鹿かじきもともに。

われけふ迄の長のへめぐりに

この姫のときを見ざりけり、

前に聞きし歌は、ことほりや

この姫ひめの朱唇しゆくわん洩れし者なれば、

あな知らず顔に過るやわが前を、

露も見ぬ淺芽うらや生かに足元珠玉たまを轉まわして。

知るや知らずやわが在るを、

何にめづらしとてか天そらのみ仰ぐ、

數ふればとて、よも星の數は盡じ。

鹿かじきもなとてや心なき、ひい——その其聲は、

誰を呼らん、誰を戀しと慕ふらん」

(琵琶を置捨て歩み寄り)

それなる山姫に物申さん、

これは登山のものよ、もの問はん。

姫、

あらおどろかされぬるよ。

許せかし許せかし、はからぬところの
めぐりあひ、思はぬ琵琶の合せ歌、

その歌のこゝろ、さて問はで

別れんことをしさに、

無禮とは知れど君留めぬ。」

姫、

其聲は人の世のものらしや、こゝは世ならぬ

ところなるに、いかにして君、……

まがふ方なく世の人なるよ！さて

この人の調べやらん、先に聞し琵琶の

天高く鳴り渡りて、彼所の家わが住を

迷ひ出でしこの原に君に逢ふかな。

素、

恥かしや未熟のしらべごと、

思はぬところまで鳴りさはぎて、

きみが妙なる天津縛のさまたげをしぬ。

さて亦めづらしや

こゝは名にしあふ廣野目も逾に、

幾十里に亘る寂寥を、

きみいかに、ひとりこのわたりに棲玉ふ。

夜は更けて世に聞馴れし夕梵の

鐘の音も、奈良も吾妻も彼方の天

その天のあの浮雲の下よ

麻にからめる世のもつれ！

さては、さては、わが美しの姫も

あの世に誼つらばれてや、おやはらからにも離れてや
鷹集たかばさに追れし小鳥かも。

いな、いな、いな、鬼が人どて、人が鬼どて

左はむどくせじこの花を、この玉を。

姫、

ほゝ何の怪しむことかは、鬼が人どて
人が鬼どて、世のものならねば

――愛あるもなく誼つらふもなきものを。」

素、

はていぶかし、その聲音の
むかしのわが妹いに能く肖につる。」

わが妹よ、わが妹よ、彼ぞ、彼ぞ、

始めて世のあはれをわれに教へしもの、
在あるが上に狂くるはせたりしもの、

また彼ののみよ、

われに優やさしさ教へしもの、

われに楽しさ覺おぼわさせしもの、

左は言ことながら冷渡ひまる

さびしき墳墓かぶつに入りてより早や幾いくとせ、

天あまが下に新らしきものは無なき歳々の

梓弓しりきう春の足早あしはやみ、行く秋の飛鳥川

枯梢かれせう枯葉かれはもしがらまぬ。

思おもひ思おもひ廻まらせば

行く水の流れ流ながれて彼かの一葉ひと、今は

いづくの江海かうかいに漂たふやらん闇やみの先まき。」

或ある夜よ寢覺ねがの夢ゆめまくら

おどろき起てば、君がすがた
燈火の裡に消ね行くを、

呼止かねて明石潟

輾轉反側る牀の中、

曉の鳥の音待たれし」

(はるかに牧笛を聞く)

姫、わがわらべならん、あの笛は。

(仙童雪丸來る)

雪、わが姫はこゝに在すか、彼方此方と

索ねくたびれぬ、いざ來ませすや。

(素雄を顧みて)
こゝなる人は何者ぞ？

姫、めづらしき旅の客なる。

雪、おもしろき物語にてもありしや。

素、いざ、姫君よ、まからふよ。

(姫に向ひて)

さても君が身は、

樂しき境遇ならずや。

姫、左ればよ、自らは樂し苦しを覺ねど、

日どなく夜どなく野遊びして

疲るゝまではあさりありく。

また疲るれば、

森の樹蔭に自然がしつらへし

草の菴蓬を被ぎて床となせば、

素。

夜風いさゝか寒しども、

うつくしき樂しき夢のみ結ぶなれ。

紅々と樹葉に朝日のうつるとき、

起出れば鹿の集むる

山樹の果香ばし

足らぬときは自らも立出て、

掘りこる草の根甘し。」

其は樂しさの極みなり。

わが苦しさに、戀の苦しさに引代へて、

露姫！露姫！汝のみが

老ゆるも知らぬ平穩は？

素。

そはいかなる人なりや？

かくすまじ、かくすまじ、

汝こそわが戀人ならずや。

(仙姫も仙童も鹿も去る)

喃喃、待てや露姫！

ひとことだにも、われを思ふと言はずして、

復た新らしき物思ひせよとや。

ひとことをのこせ、われを愛すと、

愛せずや戀せずや、喃、喃露姫！

腹立しや腹立しや、この琵琶よ、

彼を呼出し汝は罪負へよ、

もふ汝にも益はなし、

うち破りてん、

(琵琶を取上れば鏗然響あり)

否、否、否、汝は破らじ

わが腸の破るゝに任せなん。

第二場 蓬萊原の二

(蓬萊原の道士鶴翁と柳田素雄連立

ちて出づ。雲重く垂れて夜は暗黒)

素、

わが眼はあやしくもわが内をのみ見て外は
見ず。わが内なる諸々の奇しきことがらは
必らず究めて残すことあらず。
且のあやしむ光にありて内をのみ注視た

外なるものを明らかに見きはめんとぞ
すなる。

暗のなかには忌はしきもの這へるを認る、

然れどもおのれは彼を怖るゝものならず、

暗の中には嫌はしき者住めるを認る、

然れども己れは彼を厭ふ者ならず、

暗の中には醜きもの居れるを認る、

然れども己れは彼を退くる者ならず、

暗の中には激しき性の者歩むを認る、

然れども己れは彼の前を逃ぐる者ならず、

わが内をのみ見る眼は光にこそ外の、この

世のものにも甚く惱みてそこを逃れけれ、
いかで暗の中にわが敵を見ん。
暗を厭ふは己れが幼かりしときのみ、
光りの中に敵を得てしより暗は却われを
隠すに使あるのみ。
今己れが友なる暗に己れの閉ぢくちたりし
眼を圓く開きて、
今日迄おのれを病ませ疾はせたりし種々の
光に住める異形の者の悪氣なく眠れる態を
見る中に、……またおのれは今暗に住める
あやしきものどもの樂しみ遊べるさまを見
る中に、たゞひとことの足らぬ心地とする。

鶴

其はいかなる事ぞや。
世の人に煩累あるは常なり、然れども凡そ
わが道の術にて愈さぬものはなし。
きみが足らぬと言へるはいかなる事ぞ、
語り聞せよ、己れは之を立どころに癒して
ん。

素

われ未だわが足らぬところを癒す者にあは
ず、そもわが足らはぬはわがおのれの中よ
り出ればなり。世は己れに向ひて空しき紙
の如し、そが中に有らゆる者はいたづらな
るものゝ仇なる墨のすさみなれ、然れども
己れが目には墨の色は唯だ其のおもてに浮

べるのみにて、其の中こそは空しき紙なる
 をうつすなれ。
 われ世の中に敵をもてりき、われ世の中に
 きらはしきものをもてりき、然れどもこは
 わが世を逃れしまことの理由ならず。
 わが世を捨つるは紙一片を置くに異ならず。
 唯だこのおのれを捨て、このおのれを――
 このおのれてふ物思はするもの、このおの
 れてふあやしきもの、このおのれてふ満ち
 足らはぬがちなるものを捨てし去なんこそ
 かたけれ。
 これこれ若き旅人、そのおのれてふも

のを御すること難んずるも是非なけれ。
 わが道の術とはそこぞ、そこぞ、
 そのおのれてふものは自儘者、そのおのれ
 てふものは法則不案内、そのおのれてふも
 のは向不見、聞よかし、
 わが道術は外ならず、自然に逆はぬを基
 となすのみ。
 そのおのれてふ自儘者は種々の趣好あるも
 のよ、石塊を拜むも彼なり、酒に沈むも彼
 なり、佳人に樂しむも彼なり、墨に現する
 山水に酔ふも彼なり、蠶と同一書庫に眠る
 も彼なり、無邪氣のおのれかな、是はわが

素

道術にて濟度しつるものどもなればなる。

世にはまたくさくさの苦しみあれば、われは「望」てふものをわが術にて世の人の懐裡に投げ入れ、なやみ恨めるものゝ蒼めし頬に血の色を顯はし、またわが術にて世の見えずして權勢つよきものゝ繫縛をほどく「自由」てふものを憤り慨けるものゝ手に渡し、嬉しみの聲を高く擧げしむる。斯くして佛とならぬものはなし。

休めよ休めよ、わが時間は迅きこと彼方の峯を驅けまはる電光に似て、わが誕生とわが最後とは地に近ける流星の火となりて走り下り消に失する暇よりも速く、わが物を

思ふは恰も秋の蟬の樹に倚りて小息なき聲を振り立つるが如くにして、汝が説く詐欺の道にて佛となる可き性ならず。

自由？ これ頑童の戯具のみ！
望？ これ老ひたる姫の寢醒の囁言のみ！
哲學も偶像も美術も、亦美人も、わが身を托する宿ならず、唯わが意は

見よ、あれなる空間を馳する雲なり。
見よ、あれなる峯を包める精氣なり。
雲もなほ己れがまことの願ならず精氣も

鶴

なほまこと己れが願ならず、
 然はあれども人界とこの「己れ」を離る
 りばかり今の樂しき欲望なるべけれ。
 おはれなる不満を訴ふものかな。人界を離
 るゝは、身を人界に置きてもかなはぬ事や
 ある。好し人界を離れ得るども、
 汝が如きはまことの安慰ある者ならじ。
 考へよ、蒼穹にも星くすの数は限なく、
 争は日として夜として絶間なく、
 碎かれて、敗られて落ち来る者は
 多からずや、
 好しや汝が光を放つ者となり得て、

素

高く彼方に懸るども汝の願は互
 つまじきぞ。
 われ願を盈すが欲ならず、われ願てふものを
 蓄へず、われ盈つる欲くるを意に止めず。
 唯わが心は、時に離れ間に隔り、
 恰も彼の芒星と呼ばるゝ星の、
 己れの軌道を、何に物煩なく驅奔る如きを
 こぞ樂しまんとするなれ。
 この退屈の世、この所業なきの世、この偽
 形の世、この詐猜の世、この醜惡の世、
 この塵芥の世いかで己れの心をひと時息む
 可き。

地のいと穢きはどりに楽しく棲みて夜に入れば悲し氣におもしろき音を爲す地龍子を、頑童等は鉤の頭に苦しめて、魚を欺むく料となせど、われは世の頑兒が遂に彼に似たるを憐れむなり、彼も己れを料らず頑童も己れを知らず、彼も其住ところを美しくしき家と思ひ、これも己れの宿を此上なきところと思ふ、彼も其聲をおもしろしと夜すがら鳴きつ、これも其情を樂しと短き世に倣り、夜の白むまではおのれを見る眼さへあらす。
おのれは怪しむ人間が智徳の窓なり、

美の門なりとはめちぎる雙の眼の、まことに開けるものなりや？
開かば、いづれを観る？まことに開かば観る可きに、あはれ人の世の態を、その穢れたる鼻孔を、その爛れたる口を、その渴ける状を、その餓ゆる態を、その膿める腸を、その壞れたる内神を。聖しとて、氣高しとて、嚴格なりとて、萬類の長なりとて、傲り驕れる人類はわが涙の色を紅になすもの、
いかでいかでわが安慰を人の世に得ん、いかでいかで、道師が優しき術にて

鶴翁、

この暴れたる心の風を静め得ん。
希有なるかな、わが術は然らん者
に施さん由なし。

汝はおのれを頼みて生く可き者ならず、

またおのれをたのみて死ぬ可き者ならず、

わがいましに爲す可き事あらず、

往きね、往きて、汝が心の儘になせよ、

極樂——地獄——岐は明らかに

この二道に別る、其の何れをも汝が

擇ぶまじならん。

(鶴翁去る)

素

唯、わが行く可きところ

この二道の外なきや？
極樂？ 地獄？ 抑もわが

露姫は何方へや行きし？

汝が逝にし世は何方？ そこそ

わが行く可きところなる、地獄、極樂は

わが深く意に注むるものならじ。

汝あらば地獄いかで地獄ならん、

汝なくば極樂いかで極樂ならん、

わが汝を思ふは戀のいたづら心にはあらず、

われ、まことに汝なくば笑ふ可き機なけれ

ばなり。

露姫！ 露姫！ いづれにあるや、

いづくに待つや、いづくに臥するや、
思へば奇しき戀なるかな、

第三場 蓬萊原之三、廣野

素、

われ我心を知る能はず、われわが足の行く
所を定むる能はず、何を願ひてこゝなる荒
野に入り來りしや。

わが願ふどころ如何？ わが思ふ所如何？

大地を開かしめ蒼海を乾かして、

過ぎし世々の出來事と、其中に働かし巨人

をも呼出でしおもしろき物語をなさんか、
こはわが力ならず。

然はあれども、然はあれども、これを爲せば、
死せるものを呼活さでは、わが美しくしの者、

わが慰籍の者、わが露姫を

呼び出づることかなはじ。

仙姫と化りて其の姿を現はせし露姫、物を

得言はず、露姫よ露姫よ、きみが妹よと言

ひ得ぬは、「死」なる惡鬼のつきまとへば

なり。

われ輕き草鞋に足跡到らぬところなければ、

未だひとたびも得踏入ぬは死の關の彼方なり。」

こよひしも、死せる者を呼活ることのいよ難

からば、われから、好し、死の關を踏躰ぬん。

然なり！然なり！

(樵夫源六出づ)

其處なるは何人ぞや。

われは諸國遍歴の者。

いづこより、來りいづこへや行玉ふぞ。

われ來りしところ知らず、行くところをも

知らぬなり。

風は北より來れど、其の行くところは南な

るにあらず、北に歸る可き爲なり。

われも亦行くところあるに似たれど、

まことは元に歸るのみ。

源、

素、

源、

知らずや、死するは歸へるなるを。

エ、！「死」するは歸へるなりとは！

彼處の無底坑より微かに聞ゆる梭の音を君何

と聞玉ふぞ。

あれこそは名にしあふ

死の坑なれ、人の彼處に落つるものあれば

再び還らぬ別れなり。誰れ言ふとなく彼の

坑の中には美しくしき姫ありて誰が爲めに織

る衣ならん梭の音。

ほのかに聞けば彼の梭の音は、

變はり無き歌を唱ふとなむ。

恨める男のありて、其男の來ん迄は彼の坑

素、に梭の音を絶たぬ可しとよ。
足れり、足れり、もふ説くなかれ、

源、其の坑こそはわが到るべきところなれ。
何を言はるゝぞ、其處は恐しき地獄の道

素、なるを知り玉はぬや。
否、否、地獄を恐るゝものと思ふや。

源、恐ろしや、恐ろしや。
何をか恐れん、わが恐るゝところは

世なりかし。死は歸へるなれ、
死は歸へるなれ！
おさらばよ！

第四場 蓬萊原の四、坑中

素、

暗の源なる死の坑よ！

人生の凡ての業根を燒盡して、人を

善ならしむると聞ける死の坑よ！

吾人の限なき情緒を斷切りて、

黒暗のうちに入らしむると言ふなる

死の坑よ！

善惡の岐を踏みたがへしも踏み守りしも一

様平等に安寂なる眠に就かしむると聞ける

死の坑よ！

われ汝に問ふことあり。

汝が中に、ひとりの姫を、日となく夜となく
休まぬ梭の音を、作しむるはいかに。

いまも其の梭の音は

わが耳を、壁裂く如くにきこゆるなり。
恨めるごとく、哀しむごとく、訴ふる如く
責むるごとく、歎く如く、啣つごとし。

「死」よ！汝いかなる權ありて、

この音をこの樂を、この歌をこの詩を
作さしむる。

暗の暗なる死よ！われ汝を愛す。

然れども、汝がこの梭の音の理由を、

われ我身を汝に任さじ。

(二) 醜魅出づ

素、 流石に、暗の源泉なる死の坑の鬼なるかな、
みにくき面なるよ。

魅、 汝は何者ぞ。

素、 われは「死」の使者なるが、汝の問に答へん
とて出で來れるなり。

魅、 おもしろし、おもしろし、左らば語れよ。

素、 凡そ死の使者數多あるうちに、われは「魅」
てふ魔にて、世に行きて痴愚なるものを捉
へ來る役目に従ふなり。

魅、 われ眞實は君が今視る如き醜くき魅なれど、

世に行きて働らく時は、
希まれに美しくしき姿と化かりて心空しき男女おのこもみちを
尋ねありく、

これに會ふときは、先づ其眼まなこをわが魔術に
て眩くらませ置きつ、然して後に其胸むねに乗入る
なり。わが乗入る後は賢かしこきものも愚おろになり、
愚なる者も痴おろ賢かしこくなる。

素す〇
待て待て、さては汝いましにぞある、戀の魅まと聞
きつる鬼は。

鬼よ、われ語る可きことあれど——われ語
る可きことあれど、汝いましが醜みにくくき面おもて見みては、
醜みにくくき面おもて見みては、

らく美はしき者となりてわが前に現はれよ。
われ戀てふものを嫌はぬにあらねど、其戀
の本性を極めぬにもあらねど、止み難きは
露姫を思ふの情！
美しくしき戀しの姫の姿となりて、いまわが
前に現はれよ。

醜魅消去りて後しりなる襖あはを開けば露姫
機はたに向ひて梭はたぎを止む

素す〇

露姫よ、露姫よ！

これを二度目ふたたびなる今宵の逢瀬あひだ〇
何ぞ物言はぬ〇

露姫よ、露姫よ！ わが汝いましを愛するは世に

言ふ戀にはあらぬかし。

何ぞ物言はぬ。

露よ露よわが汝を思ふは、世の物を思ふ

の情にはあらぬかし。

紅蓮大紅蓮淨園淨池ありとも、汝なくて

われに何の樂かあらん。

何ぞ物言はぬ。

其のやつれし姿は、われを恨める心なりや。

思出れば

六とせの往日に早やなりし、世に激するこ
どありて家出の心急はしく世をはかなみつ、
己れを迷ひつ如法圖夜、

せかし裁せし旅衣、

露の玉をぬひこめて、袖に隠るゝ小櫛をば

踏折りて思ひ残すこと

梨子の杖ひとつ、これに生命の導させ、

をちこちにさまよひて長の年月、

小夜月のおぼろの中に世の態も、

人の態も學び學びて早やくも疲れぬ。」

戀てふものゝ綱手の力足らなくて、

世の荒浪に流れ出でゝは捨小舟、

寄せてはかへり、かへりてはまた寄する

無情の波。

このわれ何ぞか世をし悪まんや、

世も亦左程にはわれを悪まざりし者を、

あやしくもいつの間やらん、

世はわが敵となり、われは世の仇と化りぬ。

誰が撃つや鼓誰が閃すや劔、

見ぬぬが内に恐ろしき戦とはなりはてぬ。

この戦争はわれを狂はして、

出家の旅も住家と同じく、

苦痛の中に悶へしめ、ひとの樂はわが樂

ならず、ひとの榮譽はわが榮譽ならず、人

の慾、人の望は、わが慾わが望ならず、人

の喜、人の悲はわが喜、わが悲ならずなりゆけり。

今更思へば譯も無き

人の笑ひも泣きもせぬところ、われは

おどがひ解もしたり血涙流しもしぬ。」

露姫！露姫！何を物言はぬ。」

秋風の松の葉越しに鳴る聲を聞けば、きみが

終りを音信るなりけり。

悲しやな、悲しやな、わが胸に

これより凍つく冬氷。

早や散りたまひしか、

正木のかつら幹離れ、

招きもせぬ秋は疾く寄せて葛葉の翻々と落ち散りたまひしか、あな無残!

露姫! 露姫! 何ぞ物言はぬ。」

散りにし後の露姫は魂魄わが旅寝の天に舞ひ來らで、

いな來りしかども、夢にのみ。

いづくの宿に身を置くなる。

浮世の旅の修行の間を、

しばしは離れ乖くとも

いつかは元の比翼の空、

高砂の尾上の松を下に見て

進れ飛ぶべしと思ひきりに、

げはつれなき別れなりし。」

露姫! 露姫! 何ぞ物言はぬ。

(露姫梭を弾)

きて歌ふ)

露。

露なれば、露なれば、

消ぬ行く可しと豫て知る、

露なれば、露なれば

草葉の陰を宿と知る。」

露なれば、露なれば

月澄む野邊に置く可しと知る、

露なれば、露なれば

ひとたび消ぬても再た結ぶなれ。」

露が身を戀しと思はゞ尋ね來よ
すみれ咲くなる谷の下みち。」

第五場 蓬萊原の五。

索（素雄懸瀑に對する崖徑に立つ）
雪解ゆきげに層かさめる瀑水たきみづ何を憤いかりて轟とどろろきわたれ
る。

まろび落ちころげ下るたきつ瀬何を追ふて
電火いかづちよりもはやく落る。
湧わき騰たかり捲ま登のぼる瀑烟たきけ何を包かまんこて狂くるひま
はれる。」
われは見る、白龍の水を離れて奔躍はしりたぎ跳舞はなを。

白龍はくりゅう！ 白龍はくりゅう！ われ汝おれ稱なづぶに、
暫しばし静しずまらずや。
われ興き無なき世よに生なれて、幽鬱ゆううつを友
とする故ゆに、

慰なぐさむる者ものならず。
また孤棲山ひそりせの奥おくにも、わが心こころには休やすみなく
騒さわがしき響こゑの絶たねば
聲こゑなく渡る杜鵑つとみも、わが耳みみには百雷もものかみ合あ
せて落おる如ごとくにて、
長ながき夜よをまばたき少すくなく窓まどを睨にらみて
わが身の滅なびを近寄ちかせし。

滅びもわが物ならず、招けば背せむらを向けて走
るまどろしさに、

われ已れを促うながしつ世の繩を斷切りて、

美はしき自然の中に入らんとせし。

自然も亦われを迎へず喜ばず罵りて言へ

り、死す可き者よ、何ぞ夙ふく死なぬと。

白龍、白龍、今汝いましを囑あづかまん事あり、

むごく悲しく世のあらゆる者に捨られし

このわれを、汝いましこそわが友なれや、抱きて

渦うずまき怒れる底無き水に伴はずや。

龍りゅうよ龍りゅうよ、鬼おにに從したがはず神かみに從したがはぬ龍りゅうよ、

(默坐稍久し)

(雲を開きて月皎々と中天に

照り、雄鹿雌鹿相追ふて崖を

登り來り、續いて仙姫も蘿に

すがりて登る)

素、美なるかな、美なるかな、白玉の盤、

美なるかな、美なるかな、清涼宮、

月輪つきりんよ、汝いましを思ふとどに見る毎に、

雲に棧橋かきはしなきを怨むかし。

暗き夜の寒き衾しとね

浦のしほ風吹くときに、

われ汝いましを招まねびてわが琵琶を

夜と共になで明せしこといくそたび、
今もわれ命することを白龍聴かず、
白龍聴かずして、わが胸に
汝に聞かす可き訴ごとの積り起りぬ。
いでわが琵琶に。

(仙姫歌はんとす)

素。

其の歌は誰ぞや誰ぞや、
歌へや歌へや、其聲は戀しき者なり、
其聲は、わが琵琶の慕ふ聲なり、

(仙姫の歌)

美しくしや大空歩むひかりのひめ、
物をおそれずひとりたひ。

星をあたりに散り失なせ、

雲を行手に消えしむる。

われもひとり住むなり、この山に、

寂しと思ふけふこよひ。

松が枝傳ひて降り玉はずや、

かたり明さむ短夜を。」

羽衣無き身をいかにせん、

君を戀ふとて舞ひ難し、

つばさ並べて舞ひたらばと

仇し思ひぞ是非なけれ。」

大空たのしき旅なめれ、

こゝにしも樂きことぞある、

姫。

來まさすや、來まさすや、わが洞に、

草花束ねてまゐらせん。」

月や聴かぬ、いたづらなる願を

するかな。松が枝憎くし

其陰に、光を残して入りにけり。

左らばわなみも洞に歸り、

寢待ば明日の太陽は出でん。

鹿よ左こそ疲れけめ、

こよひのいとま取らしてん。」

(雄鹿雌鹿去る)

(素雄仙姫に歩み寄りて)

素、

仙姫よ再び逢ひまゐらする。

姫。

先程の旅客ならずや、いといとふ悲しき顔
色におはすはいかに。

素。

然なり、われ白龍の騰降するを見て、己

れを連れて水底に沈めよと命せしに聴かず、

われ月を見て君が歌ひしごとく、雲に棧橋

を得て登り行かむとすれども得ず。

猛落つる瀑浪、岩根を搖ぎて碎け碎け湧く

うしほ、これを見る己れが胸も其の如く、

内の亂れ故に、外には悲しさ溢るゝなれ。

然れども然れども、わが悲を拭ふ道な

きにあらず、拭ふ道なきにあらず。

姫。

其はいかなる事ぞや。

素

露姫なる！露姫なる！己れが悲を拭ふ可きものは。

仙姫よ、仙姫よ、露姫は君に其儘似たる者

よ、仙姫よ、仙姫よ、君は其儘露姫なるよ。

露姫！露姫！わが汝思ふ心知らずや。

いましなくてはこの琵琶も、この琵琶も

悲さを鳴るのみなる。

この琵琶が招び出たる仙姫は

露よ、露よ、いましに甚く似たる。

いましならぬか、露よ、露よ！

露

其の露姫に似たると云ふ、君が戀人に似たると云ふ

素

露

わなみも今宵は何故か寂しき心地のする。何と寂びしとは言ふ。

寂びしと思ふ心地けふまでは覺ゆざりし、

何故とも知らず寂しきなり。

わが洞には焚火の用意もあり。

今朝集めし、よもぎもあれば……

いざまれびとよ來れかし、

來れかし、來れかし、ためらはで。

第三齣

第一場 仙姫洞

素

(素雄仙姫洞の外に立出て)

眠！ いましをあやしきものと
今ぞ知る、何ぞ仙姫にのみ臨りて
われには臨らぬ。
いまし來らねばわれひとり夢の如くに
醒めてこの洞のうちには得堪へぬ心地
すなる。

こゝに立出ればむら雲の、

行衛も知らず月のみさねまさりて、

草も花も、樹も土も眠らぬはなき。

眠！ あやしきはいましなり、この原の
なべての物を安ませて、何ぞわれひとり

を安ませぬ。」

なほあやしきは露姫なり、我が安まぬ

胸の彼には通はずやある、彼がむかしの

戀はいかにせし？

眠てふもの戀の友ならじ、彼れの戀、

ありしまゝなれば、いかでおのれを

斯くまでに寂しき洞に覺めて

あらせん。

(素雄再び洞に入る)

さても美はしや仙姫、いづこの寶の

山よりぞ、このめづらしき珠玉を取りもて

來て、誰がたくみの業にてや彫り成せるぞ

この姫を？

蔽へるよもぎのなくもがな、蔭なせる

松の樹梢をば残りなく折り去りて、満々

たるあの月をこゝに下し來りて

天が成せる眞の美をしらべ盡さまし。

堅く結べる其の花の口元には、時代をし

知らぬ春含み、

其唇頭にはしのゝめの丹き雲を

迷はせり。

黄金のかたきもいかでかは、其の暖かき

吐氣に會ふて解ざらん。

緩くは握れど、きみが掌中には、盡ぬ

終らぬ平和と至善、

かたくは閉づれどきみが眼中には、不老

不死の詩歌と權威をあつむるとぞ

見ゆる。

黒髪のひと筋二筋、きみが前額には

天地に盈つる美を凝らすとおぼし。」

靈ぞ神ぞ、おごそかなる！」

抑も誰やらんこの姫は？ わが露姫

か？ いな、われ然らぬを悟りぬ。

然らぬか、然らぬか、わが露姫の姿なるを

いかにせん。

是幻なる可きや？ これ現なる可きや？

これ實なる可きや？ 此れ偽なる可きや？
わが想ど、わが戀ど、わが迷どが、ともに
わが爲のたくみとなりて
この原に、露姫を、この原の氣より
つくりいでしや！
誰知らぬものぞなきわが想の態戀
の態、迷の態、惡魔、わが敵なる惡魔
まで詳にこれを知るならめ。
惡魔、彼か、こゝに露姫を活し出しは。
然れどもこの露姫はもこの露姫ならず、
わが戀せし露姫は斯る情なき姫には
あらざりき。

(あたりを見廻して)
笑止、笑止、誰に科あらん、われを迷はせし
もの、このおのれの外ならぬに、われを眠
らせぬもの、このおのれの外ならぬに。
逝ねよ逝ねよむかしの記憶戀てふ
魔魅に、このおのれを、あたら卑下なる
迷悶の僕となすは悲し。
戀！ いましとわれといかばかりのちなみ
かある？ いくたびか汝を退けて、わが
肉を腐らすもの汝なれど罵りながら、
この身いつしか汝が愛しき朋と
なる。いまし故には、地獄と極樂の

境に咫尺を辨ぬ霧を重ぬる
ことぞ常なる。

露姫起きよ！露姫起きよ！

見よ、この露姫は性なき珠なり。

露姫！露姫！何ぞ起きぬ。

何が故に眠る？

安息てふもの汝が無意無慾の世
には用なかる可きに。

何を夢見て眠る

世の煩累も戀のもつれもなきいましてが
仙棲に。

何を樂しみて眠る？

憂悲のひまにしばしの慰藉を求めて
うつくしき嬰兒になる爲ならで。

眠れる人よ、眠れる人よ、抑も誰がためぞ、

その快よげなる莞然る顔容は？

露姫か、あらぬか、抑もわが戀人か？

あらぬか？

わが暗に求め、光に呼び、天にあさり地
に探れる露姫は、

このくるしき胸の、亂るゝ絃をおさむる
者にはあらぬ。

(高らかに笑ふ聲松樹の中より起る)

素。

叱！何者ぞ？そも眠れる天地の

寂寞を破りて怪しき笑ひ聲をなすは？

(松樹を傳ひて降れるは一青鬼)

青鬼、われよ、おかしさに得堪へて笑ひし者は。

素、何者ぞ何者ぞ？ 鬼か、鬼か、

めづらしや。

さても汝が顔色の蒼く苦きことよ、

何に悲しきことありて然はなれる。

其は後に更に問はん、抑も何が故に

わが前に笑ひしぞ。

青鬼、わが笑ひしは、いましが爲すこと、あまり

におかしければなり。

素、何が故におかしきや。

戀てふものを知らずや、わが狂へるは、事
故なくしてならず。

青鬼、戀とはいかなる痴愚を迷はす雲ならん、

其雲の中に迷へる者を見る毎に、

われおかしさに得堪へて思はずも笑ひ

嘲るなり。

人之れを呼びて神聖ものとなす。

是をよるこばぬものなく、これを願はぬも

のなし、その爲すところを見れば暗きあた

りに手を取合ひて、

きみなくばわがいのちもなにかせんと言ふ

に、答へてわれも亦きみ故にこそながらふ

れど、愚なるかな、明朝は死ぬ可きいのち
を、戀てふものに一夜を千歳も更らじと契
るこそ。

われ數多き小女の小暗き窓の下風の通ひ
もせぬあたりにて人に知れぬ露の玉をこぼ
すを見き、これを問へば戀ゆゑとわれいく
千度少年の悲し氣の面して燈の油盡きに
しあとに膝を組み思ひを廻らす者を見き、
これを問へば戀ゆゑと。

また山をも抜きたる喜にやと思はるゝ程
に傲り樂しむ者を見き、これを問へば戀の
成りし故と。

死するも生くるも戀故に、春も秋も戀故に、
泣くも笑ふも戀故に——其戀てふ者は人を
樂しますとは聞けど、わが見るところを言
へば、樂しますにあらで苦しますなり。假な
る、偽なる、まぼろしなる戀てふもの故に

——人の美はしき顔は價なき動物のひとつ
と見ゆるぞあはれ!

素

扱は一度も戀てふものを味はぬ鬼よな、汝
が着き面にては、誰が戀衣縫ふおろかをせ
ん、何ぞ變化の術をもて、美しくしき男となり
て、世に來り、優しき乙女の門に立たずや。

青鬼

戯むれど、われ戀てふものに狂ふ愚ならず。

わが婦をんなを見るときは、其の何が故に優しき
かを疑はぬ事なし。
美なし、情なし、わが胸には。いかで汝いましが迷
へるこゝろをくむを得ん。
來よ、この仙姫せんぎを呼よ覺さして彼かれが戀心いかな
らんを尋ぬべし。

(素雄推し止め)

素、
其仙姫せんぎはわが物なれば汝いましが荒あさべる手を觸ふ
けしむること能はず。眠れるひとよ、眠りる
うちに怖ろしき夢をや見ん、これも是非な
し、わが戀人よ、われは今去い可かきど、今去い
可かきど眠れよ、眠れよ、覺さむること勿なれ。

(素雄行かんとし、鬼を顧みて)

鬼よ、來れ、汝いましと共に山に登らん。

青鬼、
山に登ることは、鬼と魔の外かなはじ、汝いまし

素、
いかにして登る權を得んや。

素、
おろかや、われ人の世に屬まとは言へども風
を御し雲を攫つかむことを難しとする者ならず。

青鬼、
然れども汝いましは塵の兒なり、いかでか精なる

ものゝ爲なる業を爲し得ん。

素、
われ塵の兒なりと雖、塵ならぬ靈たまをも持て
り、この靈を洗ひ清めんために、いで御山
に登らん。

青鬼、
然らばひとり行きぬ、われは止まる可き。

素、 何ぞ行かぬ？

青鬼、

御山にはわが權の元なる王住みて、われには山の根を守れど命と玉ひて登ることを許されず、こゝには鬼と魔が身を養ふ可き、
氣の中の物――

(そも鬼の食ふものは見ゆる肉にあらずして氣の中に流るゝ精あればあり)

を得ること易からずして、わが軀を肥すに由なく、いたづらに世のおかしき者を、多く見て多く笑ふのみ。

左ればこそ、いましが顔の蒼ざめて見ゆるなれ、實にあはれなる鬼よ。

鬼の中にも汝が如き幸なき者を見るはわが期はざりしところなる。

然れども貸す可き力なし、われも鬼の世にわが爲す可きところなく、汝も鬼ならぬわれに借る可きものはなからん。
往け、樹蔭に入りて再び形なきものとなれよ。

然れども、われ必らず汝を誡めん、この仙姫を覺ます勿れ。

(青鬼は樹に登り、素雄は去る)

第二場 蓬萊山頂

素、

(柳田素雄山頂に達して四望眺矚する所)

大地は渺々、天は漠々、

三界諸天の境際明らかなり。

萬景萬色一様になりて廣がりつ、

山河都邑無差別夜陰の中。」

六道八維雲に隠れ雲に現はれつ、

凡てわが脚下に瞰おろすなり。

鐵圍——金剛——須彌——幻現二界の中

に眺る。

無邊無涯無方の佛法も、玄々無色の自然も、

この靈山に於てこそ悟るなれ、

大地大なる菩薩天高からや！

我眼！我心眼！今神に入れよ、

この瞬時をわが生命の鍵とせん。」

いで御雪を踏立てし彼方なる危巖の上に立

たむ。

(危巖の上に登る)

(雪崩の響凄まし)

大地今崩壊るや？

用なき大地今崩壊や？

くづるしも惜からずいな、いな、いな、

聞くは雪崩の響なり。」

(俯瞰して)

底は見えず断崖幾千仞、

誰が立掛しぞこの壁を。

鬼神とても、よもやこゝをば飛登らじ、
電光とても鳴神とてもこの山側には
住まざらむ。

思へばわが身は羽毛ならぬに、

雪さへ積れるこの巖の角に

立つとは如何、如何。

人か？ 神か？ 人の世は夙く去りて

神の世や來れる？

神ならねば、いかで、この業は？
神かわれ？ われ神か？ 咄！

咄！ いかでこのわれ！

依々形骸あり！ 形骸、形骸！

塵の形骸！ 昨日の儘の塵の

形骸！ 咄！、なほ人なる。

われ神ならず。天地の神は父なる。

いで父を呼ばむ、神を祈らむ。

(巖上に危坐して祈請す)

天地に盈つる靈、照覽あれ照覽あれ、

日を鑄り、月を圓めしもの、耳を傾け玉へ、

われ世の形骸を脱ぎ去らんと願ふこと久し。

靈山に上りて、魂は、魂は淨められしかども、

未だ存る形骸やわが仇の巢なる。

悪鬼夜叉に攻め立てられて今迄の生命は、長
き一夜の寝られぬ暗の中。

脱去らしてよ、この形骸、この形骸！

雪ぐ可き恥辱の山高み。

拂ふ可き迷の虚空廣み。

形骸ゆゑぞ、形骸ゆゑぞ、

脱去らしてよ、この形骸、この塵骸！

(鬼王三個部下若干を率ひて出づ)

第一
鬼王、

叱！愚の物よ！何をか祈る？

(素雄飛起きて)

第一
素、
鬼王、

誰ぞ、誰ぞおろかど嘲るは？
われよ、このわれよ、さても愚の片！

塵にて造られながら形骸を厭ふとは。

往け、往け、再び世に還りて

草小屋の陰に隠れよかし。

咄！罵るか、生々しき鬼奴！

愚ろかなる物！静まれや！

この山の魔に従はぬか、

この山の鬼の眷族にならずや。

素、
叱！悪鬼われを知らずや！

義の兒ぞよ！汝とは異なる性ぞよ！

蹂躞れ！蹴踏せ！

紛末にして、細塵になして、地下に

投ふぞ、ござかしき少年思ひ知らせでは。」

第三
鬼王、

第二
素、
鬼王、

素。

(小鬼共哄然笑ふ)

鐵獸！小鬼共！神に背きて
人を誑ひ、世を逆行かす白徒！

さばきの日を待ちて、汝を、汝を、熱火に
投げ入れふぞ。

怪しきかな、この靈山に悪鬼を見んとは、
左ては靈山も頼なき澆李になり果しや。」

(小鬼共再びせつと笑ふ)

第一
鬼王。

神とや？おろかなるかな、神なるものは
早や地の上には臨まぬを知らずや。
われらの主なる大魔王、こゝを攻取りて
年経たり。

素。

小鬼の
一個。

汝がごとく愚なる物は問へ滅びさせ、
かしこきものには富と榮華を給ふことを知
らすや。
さばきの日とや？あら不惑なるかな、
けふこのごろの裁判を知らで、いたづらに
頸延べて知らぬ未來を待つや。」
煩はし、汝が如き、わが言葉敵ならず、
往け、われ魔王を待たむ。
往け小鬼ども！
しれもの奴、生ざかしき漢、
諸共に撃ち碎きてこの岩より投ふぞ。
いざ、いざ皆のもの——來れ、來れ。」

大魔王

(大魔王出づ)

またしても小鬼共の働らき立、無益く、
うち捨てよ、引去れよ、鬼共。

この男、塵とは言へど面白き、
骨のあればぞ、こゝへ呼びしなれ。

早や往け、引き退けよ」

鬼王共
一聲に

王のおほせぞ、

わが大王のおほせぞ、みな慎みて聽けよ。

萬づ世に生きよ、わが魔王！

萬づ歳、よろづ歳君が物なれ！

(鬼王小鬼皆去る)

大魔王

塵！われを覺ゆるやいかに。

素

然り、汝は山門に現れし者よ、
聲のみは彼處にて聞きし。

大魔王

汝がことはわれ始め終り盡な知る、世を憤

り、世を笑ひ世を罵り、世を去り、戀人

を捨て、なほ足らずして己れの滅を欲ふは

愍然塵の子かな！抑も何故に斯くはなり

し。

素

わが悲しみは、魔王よ、汝が知る所ならず。

わが憤は魔王よ、汝が喜び躍る所ならず

や、わが笑ふ者、わが罵る者、人生の深き奥

を思ひ念らせばなり。

大魔王

おかしやな、おかしやな。

王侯貴族は珍寶權威を得れば、
勇み喜びて世を此上なき者と思ふ。

商估は黄金の光の輝々を見れば、

苦もなく疾もなく笑ひ興して世を渡る。

農家は秋の穂並の美しくしきを見れば

濁酒三杯の楽しさ忘れずと言へり。

少女は賤の夜業の小唄のかたはらに

戀のさしやき聞くことを

またなき憂晴しと思ふなる。

少年は目元涼しきをどめの肩に

倚りつゝ胸の動揺めくを、
天が下に唯一の極樂と思ふなる。

素

然るに怪しきは汝なり、何を左は苦しみ悶
ゆるぞ。

凡そわが眼の向ふところは浮世の迅速き樂
事にあらずかし。

望にも未來にも欺かれ盡してわが心は早や

世の詐欺を坐して待つ忍耐を失せたりける。

始めには樂しと思ひしこと、後には其の後

面をのみ窺ふ習慣となりつ、

自然にわが眼塵の世を離れて高きが上に

彌高く形而上をのみぞ注視ける、われに大

鵬の翼なくとも能く世の雜紛を搏きて、

蒼穹に精魂を舞ひ遊ばしめし、わが精魂の

蒼穹に舞ひて心地はづかに清しくなりければ、わが苦める顔色も和らぎて——茲に始めて嘗むる戀の味、あだかも百種の草花一度に咲ける花園に、われと彼とわれ、抱き合ふて歩める如く、この世の中に、忌はしき地獄を排して、一朝に變れる極樂園。然はあれども、世の極樂は長からず、忽如に惡鳥花を啄み去り、暴風も草をなぎて行けり、戀てふ者も果なき夢の迹、これもいつはれるたのしみと悲しみ初にき。」

「語れよ、語れよ、息まで語れよ。」
 おもへばわが内には、かならず和らぐ雨の性のあるらし、ひとつは神性、ひとつは人性、このふたつはわが内に、小休なき戦ひをなして、わが死ぬ生命の盡くる時まで、われを病ませ疲らせ惱ますらん。
 つらく、わが身の過去を思へ回せば、光と暗とが入り交りてわが内に、われと共に成育て、
 このふたつのもの、たがひに主權を争ひつ、屈竟の武器を裝ひて、いつはつべしとも知

らぬ長き恨を醸しつあるなり。
この戦ひを息まする者「眠」てふ神女の贈
る物あれど、眠の中にも恐ろしく氷の汗を
しぼることもあるなれ。

眠はた長き者ならず、起出れば野に充つる
小幟大旗、山を崩す軍叫喚、

鳴神の銃の音、電光の劔の火、

外の敵には、露懼るゝこと知らぬ我ながら、
内なる斯のたゝかひには、

眼を瞑ぎて、いたづらに胸の中なる兵士を

睨むのみ。

大魔

説くなかれ説くなかれ、

を止め汝を穩やかに、楽しき者となさん、
いかに。」

素

汝が力にて能はゞおもしろし。

大魔

去らば來よ、彼方の巖に登らん。

大魔

暫時爰にて眺めて居よ、わが再び還り來ん

王

迄は、おさらばよ！

素

(大魔王去る)

あやしき魔王かな、こゝにて何を見よと謂
ふや。天の美か、地の和か、われを靜むる
者いかに。

素、

(俯し覗ひて)

あら間近なるあの烟は?

燃上る、あの火は? 其色の白き黒き、赤

き青き入雜れるは、何事ぞ、何事ぞ!

あれ、あれ、あの火は都の方よ!

都よ! 都! 都のいつの間にかこの山の麓
に移れりと覺ゆる。

その火! その火! 都! 都!

みやこ! さてもわが呱々の聲を擧げしと

ころ。

みやこ! わが戯れしところ無邪氣なり
しところ。

みやこ! われを迷せし學の巻も、わが狂

ひ初めしいつはりの理も、

わがあやまりし智慧の木も親しかりしもの

も悪かりしものも、そこに、

あれ、あれ、あの火の中に!

さてもあの白き火は?

これは出づ、高厦珠殿の間より、

さてもあの黒ろき火は?

これは群籍寶典の真中より、

さてもあの赤き火は?

これは酣醉踏舞の際より、

さてもあの青き火は?

これは茅屋廢家のかたはらより、
陰々陽々暖々愴々、烟となつては火に還り、
火となつては再た烟となりつ、
立登り立騰る——虚空もこげて星も落ち散
る、物凄やく。

あの火の下に、あれ、あれ、何者ぞ？

(巖の極角に進みて)

あれ、あれ、わが住馴れしあたりは早や灰
となれる、早や、早や、灰よ、灰よ！
むかしの家はなく、生命の氣もなし、
むつみ遊びしものも優しかりし乙女子も、
わが植たりし草も樹も、

ひとつは觸體となりて路に仆れ、
他は死の色に變れる、あれ、あれ、いまはし
や悪鬼ども灰を蹴立て、飛びつ躍りつ擧ぐ
るかちどき。

白鬼、黒鬼、赤鬼、青鬼、入り亂れ行き違
ひ、叫びつ舞ひつ、鼓撃ち跳ね遊び、祝ひ
歌唱ひ、酒筵ひるげ、酔ふてはなほも狂ひ
躍り、

落散る骨をかき集めて打たき、
まだ足らぬ、まだ足らぬと
つぶやく聲のきこゆる。
嗚呼、わがみやこ！あれ、あれ、みやこ！

捨てたりとは言へ、還へるまじとは言へ、
わがみやこ、悲しきかな、あの火！

無残、限りなき人を

晩からず盡な灰にす可きぞ。」

いづこにや隠れし、妙なる法の道、

いづこにや逃れし、まこと世を愛る人、

あの火に燬かれしか、はた恐れて去るか、

あなや！あなや！

(大魔王再び出づ)

何にを左は悲しむぞ。

おそろしき世の態を見ればなり。

何と左は悲しむぞ。

大魔王

素

素

出でしとて世はわがまことに悪む所ならず、
まことに忘れ果る所ならねばなり。」

(大魔王からくくと笑ひて)

おろかな世は笑ひつ泣きつ消へ行くに、

汝ひとり忘れぬぞや。

神とし尊崇るもの此世にては早や

権なきを知らずや。

あれ、あれ、あの火の中には、神も佛も、よ

も住まざらん。

住まざらんとはおろかなり、神より疆きも

の、彼に打ち勝ちて、彼の權威を奪ひ取れ
るを知らずや。

大魔王

素

大魔王

素の
王大魔

其は誰ぞ何物ぞ？

其疆き者を知らば汝は降り拜くや。

尊崇て汝が王となすや如何。

もとよりなり。

そはわれぞ、罪の火をもやして白き黒き

赤き青き、その火を以てこの世を焼盡さん

とするものわれぞ。

人を、世を、灰と化し、昔の塵にかへすも

のは、斯く言ふわれぞ。

火を、風を、電火を、鳴雷を、洪水を、高

き山を、ひろき海を、思ふが儘に使ふもの、
斯く言ふわれぞ。

素の
王大魔

暗をひろげ、死を使ひ、始めより終りまで
世を暴し、世を玩弄ぶもの斯く言ふわれぞ。
ひれふせよ今、ひれふせよ、塵！

(素雄默然)

王大魔

千萬の小鬼大鬼を随へて雲に乗り風に鞭う
ち、雨に交りて天上天下を横行するもの斯
く言ふわれぞ。

俯伏せよ、ひれふせよ、降らすや。

(素雄なほ默然)

王大魔

いまだ降らすや、

汝が通例ならぬ膽あるを見てこゝへ召寄

せ、わが鬼の頭のひとりとなさんと思ふに。

いまだ俯伏さすや。

(素雄なほ默然)

いまだひれふさぬ。

さらばわが魔力もて滅さんに、

火に投入れて灰となさんに、

なほ降らじと思ふや。

(素雄奮然として立ち)

素

叱！ 悪魔！ 狂ひぞ狂ひぞ。

汝が雲の住居、汝が飛行の術、汝が制御の

権はわが友とするに足ど。

限なき詛ひの業、盡くるなき破壊の業は過

去未來永劫の我が仇ぞ。

大魔王
素

口さかしや！ 降らずや！

降れとや、あな、けがらはし天地の盡くる

迄は、汝とわれと睦む時あらじ。

往け、往け、往かすば、わが真如の劔の

鋒尖を見せんか、いかに。

おもしろし、汝が滅の力。

試みよ、今このわれに。

滅ぼすは易き業なれど、滅ぼすは、

滅ぼすは、泡沫を消すより迅速けれど。

流石に、汝を滅ぼさんは。

降れ、降れ、も一度思ひ廻らせよ。

いまだ往かぬ、いまだ降れと言ふ。

素

大魔王

穢らはしき魔、咄、悪魔、思ひ知らせでは。

(大魔王大笑して去る)

素、あやしわが眼自然に見ずなりぬ、

明相無明相にまだしきもせず開きし我眼。

魔聲、わが力知らずや。

素、あな魑魅、毒魔、わが滅盡の業を、いまはじ

むるや。

いでいでこの鐵拳にて戦はんや。

あらあやしわが腕動かすなりぬ。

魔聲、わが力知らずや。

素、口惜しや、口惜しや、おのれ悪鬼われを玩

弄ぶや、左らばわが脚を擧て蹴らんや。

魔聲、あやし雙の脚しびれて立たず。
わが力知らずや。

あはれのものかな！思ひ知れ！

いざ行かん、空しく時を費やしけり。

おさらばよ、塵！

(素雄眼を瞬開きて)

素、いかに、いかに重くかゝりし雲に縫はれ

し天の門開らけ、清く流るゝ天の河。

いかに、いかに、わが眼の再び物の色を別

ち、脚も立ち、腕も動くぞうれしき。

見へず早や、あのいまはしき魔、魔よ、魔

よ、いづこへや往ける。

無念骨髓に透りて、御雪には熱を催せしわ
がふところより迸り出る凍れる血。
無念、無念、われなほ神ならず靈ならず。
死ぬ可き定ようごめく塵の生命なほわれに
纏へる。

事問はん、その「我」に、いましてが
行く可きところいづこぞ？

世か、還るか、世より？

世に還らば、いづれに住みて、いかなる業
をやなす？

嗟、呼、わが還へる路には、猛虎あり、毒
蛇あり、猛虎毒蛇わが恐るゝ所ならず然

れどもわが戦ふを好まぬもの、戦ふを好ま
ぬにあらす、わが性は戦争に習れぬなり、

世よ、わが行きて住むべき家ありや、

世よ、わが還りて爲すべき業ありや世よ、

汝しが曾て與へし古寺の朽ちし下壁の、蝙蝠

と共なる巢は、「寂寥」を宿すには足れど、

この暗幽に眠らぬものには一夜をも送らる
べきところならず。

われ世を家とせず、世よ汝もわれを待
ぬ可し。

わが家いづこ？ わが行くところ？

咄！ 咄！ 魔、われをいかにせんずる。」

見おろせば限知らぬ山の底、
あやしき火や登る、そこよ、そこよ、
わが行く可きところ、そこ地獄、
死の水の流は速し、そこよ、そこよ、
わが筏おろさん、そこよ陰府道、
この身生きて甲斐なし、ありて要なし、
思ひ極めていで一躍して捺落の真中に！
風の如く、火の如く、雷の如く、流星の如く
落下らんや。
さもあらばわれ、粉となれ、塵と化れ、
舞下らん！舞下らん！
思へば安し、もとより塵なれ。

世のおきて亂し、世のさだめ破るものわが
後に生れざれ。

いま去らん、消え失せん、世の外に。

(一躍巖を離れんとする時
樵夫源六走來りて抱止む)

素、 誰ぞ、誰ぞ、何者ぞ、われを止めていかに
する？

源、 待ちね、待ちね旅人。

素、 樵夫ならずや、いかにしてこゝへは來し。

またいかなればわが死を止むる？

源、 危ふかりし、危ふかりし、そこは險し、
落ちては……此方へ此方へ。

素。

いなよ、この世はわれを苦しめ、また欺む
けり、われを無からせんとせり。
いかで長く留るべき、早や興なければ。
見よ、世の方に燃へさがる火、われいかで
ながらへん、今こそ時なれ、死ぬ可き時。
見よや彼方におもしろく翼張る者あり、あ
れ、あれ、あの鳥、あの鷺、このわれ、い
かで劣らん、いでひとおどり、奈落への旅
路急がん。

(源六素雄を捉へて動かせず)

源。

あわれ旅人のむとく狂ふかな、
おそろしやこの頂より舞下りんとは、

素。

しばし、みやこ人、しばし静まりてよ。
こはいかに、こはいかに、
何ぞて、左はもがくらん。
なだめぞ、なだめぞ、虚偽のかたち、汝も
小鬼のひとりなるべし。
思へば人誰れか鬼ならぬ、
美しくしき顔なるも、柔しき態なるも、いみじ
き言吐くも、けだかき行ひするも、おとそ
かに説くも、あらたかに論ふも、優なる
舉動も、清らなる意も、外こそは神なれ、
内は鬼なる。

人は皆な鬼なるか、

わが見しとく灰の中にときめけるものぞ
もは人か鬼か、鬼ならん、鬼ならば人なら
ん、人ならば鬼ならん。
往け樵夫、われ鬼の世には還らじ、
知らぬ地獄にはまた樂しきこともあらん。

(源六素雄が仙姫洞に

遺せし琵琶を取出て)

源、

おそろしく狂ふかな。さても旅人よ、
この琵琶を覺へずや、わが鬼ならぬはこれ
にても知りたまへ。

素、

其はわが琵琶ならずや、いかに、わが精神
のいとも親しき者ならずや。

(一滴の涙凄然として落つ)

いかに、いかにわが琵琶よ、わが爲に、い
かなる音を鳴らんとする、そも此處に。
琵琶よ、わが亂るゝ胸は汝が慰籍の界を踰
へて……果なし。

見よや、われを納むべき天は眺るが内に高
きより高きに、蒼きより蒼きにのぼりのぼ
りて、わが入る可き門はいや遠み。

見よやわが離る可き地は、唯だ見る、蛟龍
の背を樹つる如く怒濤の湧く如くわが方に近
寄り近寄り、埋めんとす、呑まんとす、そ
の暗き墟に。

琵琶よ汝を伴なふて何かせん、汝を頼みて
何かせん。
わが精神の、わが意情の誠實の友なりし
わが琵琶よ、早や用なし。
清くいさぎよき蓮華の上に、汝を携へて、
浄土の快樂長からんと思ひしことはいつは
りなるかも、實にいつはりなるかな。
いまは早や、汝のいとま取らす可し、
わが埋もる可き世の奥なる地獄の地に、汝
が通ふ道あるやいかに、疑はし。
行け、往け、夜も懼れず空を翔るあの、あ
の鶯の跡追へよ、汝も自由の身！ 琵琶よ

汝も不羈の身！ 天地心なからんや、汝が
爲に流す涙なからんや。
往け、逝け、わが先軀せよ！
いづこへや行く？ 往け、いづこなりとも！
われと共なる可きや？ 往け、行かば汝が
通ふ所あらん、わが通ふところは未だ知ら
ず。

(琵琶を投下るす)

おもしろやおもしろやわが琵琶の、風にひ
るがへり、氣を拂ひ退けて、
怒れるや、恨めるや、泣けるや、笑へるや、
喜ぶや、悲しむや其音？

自然の手に弾かれて、わが胸と汝が心とを
契り合せつゝ、

落ち行なり、落ち行くなり！

エー、エー其音は、エー、エー其の琵琶の、

エー、エーわが琵琶の其音はわれに最後を
促すなる！

いでこのわれをも舞ひ下らせん、

舞ひ下らせん抑もや

烈火の中にか熱鐵の上にか。

いでいでわれも行かん、

地よわれを嚼むに虎の牙現はせ、海よわれ
をのむに罅の口開け、いで、いで、わが中に

も、生命われを脱けんともがくと覺ゆる。

(素雄振りきりて飛び躍んとす)

危ふし、危ふし、さても怪しの旅客かな。

源、
素、
怪しと？ 世の生涯こそ怪しけれ、

過ぎこし経験や鏡なる……

死こそ物の終りなれ、死して消ゆるこそ、

死すればこそ、復た他の生涯にも入らぬ、

來れ死！ 來れ死！

この崖を舞ひ下らでも、わが最後の力、世

に充つる精氣の力と相協ひてわが死を致す

に難きことやある。

いでわが命するに………いでわが命するに

……いでわが命ずるに……わが召ぶに

……わが召ぶに……

死！ 來れるよ汝！

來れるよ汝！ 笑めるもの！

來れ、來れ、疾く刺せよ其針にて。

いま衰るへぬ、いま物を辨ぬ、いま消ぬ

行く、いま死、いま死！ 死よ、汝を愛す

なり、死よ、汝より易き者はあらじ。

おさらばよ！

(仆る)

源

こはいかに、こはいかに、舞下りもせでこ
しに終りぬるか、あやしやな、あな無殘！ た

び人よ、たび人よ！ 早や起きず、其の魂

はいづこに行くならん、

おそろしや、おそろしや！

あはれ、あはれ、死なしけり、失なしけり。

蓬萊曲別篇を附するよ就て。

余が自責の兒なる蓬萊曲は初め兩篇に別ちて世に出でんと企てられたり。即ち素雄が山頂に死する迄を第一篇となし、慈航湖を過ぎて彼岸に達するより尙其後を綴りて後篇を成さんとせしも痼疾余を苦むる毎に甚しきを覺ゆるを以て中道にして變じて之れを一巻となす事とせり。故に僅に慈航湖の一齣を附加するの止を得ざるに至れるなり。然れども他日病魔の退くを待ちて別に一篇を成すの心なきにあらず、姑らく之を未定稿と著して卷尾に附するのみ、讀者之を諒せよ。

著者識

蓬萊曲別篇

(未定稿)

慈航湖

(露姫玉棹を遣ひ素雄失心して
船中に在り)

露、
これは慈航の湖の上、波穩かに、水滑らかに、岩靜かに、水鳥の何氣なく戯はれ遊げる。松の上に昨夜の月の軽く残れる。富士の白峯に微けく日光の匂ひ登れる。おもしろき此處の眺望を打捨てし。
いざ急がなん西の國。

仆れたる素雄に向ひ

素雄ぬしよ、はや覺たまへ、

世とは離れて、きみが恐るゝ者のひとつだ
にこゝには在らねば。

きみの爲めに死にし露は今きみを載せて、

この船に。

きみを迎へ出で、原の彼方に相見てし

露は今きみの傍らに。

起きよ、起きよ、素雄ぬし

西の國への旅路めづらしきに。

まだ起きぬ、去らばこの琵琶を以て

呼覺してん。

(琵琶を取上げて彈す)

素雄ぬし、いかなる夢に——樂めるか、
惱めるか、まだ起きぬ。

(再び琵琶を鳴す)

素雄ぬし、何を覺め玉はぬ。

いで最一度。

(三たび琵琶を鳴す)

誰ぞ、誰ぞ、わが魂を攪き亂すもの？

その鐘の音はいかに、わが行可きところ

未だ定らぬか。

空しく澄むかな梵音、われ己れを惡魔の手

に任せ、——否な任せしとは言へ、わが

露、
好意にて與へたれば、其の音いかに美しくし
とも、其の調いかに甘しとも、わが地獄の
路を閉づ可きや。
まだ覺めぬ、己れを魔に與へしと言ひ玉ふ、
はかなく狂ひ果しかな。
いで最一度、この琵琶を澄さん。

(四度琵琶を鳴す)

素、
走れ、走れ、急げ、急げ、あれ、そなたに、
それ、こなたに、こゝにも居る、彼處にも
居る、鬼共急げ、急げ、急げ、
われを陰府に連れ行けよ、
鬼は言ながら、好し、

このわれは永遠毒火に焼かるゝとも……
……思へば、いとしき彼人は、
彼こそはわが行く道に在らぬべし。
左すれば永き離別もこの一時よな、
悲しきはこの事なり。
まだ狂ふよ、いで最一度。

(五度琵琶を鳴す)

素、
それなるは如何、棹の形せるものは陰府の
鎗なるか、わが苦痛の時は來れるか、それ
なるは如何、優しき鬼なるかな、その優し
き顔以てわれをいかにする。
露、
わなみは鬼にあらず、露姫よ、露姫よ

きみが妻なるよ!

(六度琵琶を鳴す)

(素雄かつばと起ちて)

わが露姫とや? その音はわが琵琶
ならずや。わが精神ならずや。

(四方を顧みて)

こゝはあやしき霞の中、いかにいかに
わが露姫のこゝに居るとは。

露、
そは語るまじ、蓬萊が原にて仙姫と化りて
きみに會ひしときにも語らざりし、死の坑
にて梭を止めて相見しときにも語らざりし、
すみれ咲く谷の下道なる洞にても語らざり

素、

し。

わなみこれを語る可き權なし。

それよ、それよ、われ蓬萊山の靈野に入り
しことを覺ゆ、露姫よ、汝が鹿を連れて過
りしを見き、汝が死の坑に梭の音を止めし
ことも、また瀑をめぐりてあやしき谷の洞
にも汝の眠れるを却かせしことも……ま
たこのわれが雪を踏んで靈山に登り、世の
王の嘲罵に得堪へで……仆れしまでは現
に覺ゆれど後は知らず。
さてはわれ早や世とは離れぬるか、死の關
も早や越ぬるか、めづらしきこの和平の

湖は、これぞ神の境に入る可き水ならん。
餓鬼道に入るも惜らじこの身と思ひ定めし
を、

われ終に世を出ぬ。

われ終に救はれぬ。

われ遂に家に歸りぬ。

(奇鳥過ぐ)

素、

あれ見よ、あやしの靈鳥ならずや

彼の名を知るやいかに。

わなみは知らず。

露、

見よ彼鳥はわが方を注視つゝ、浮木に憑り
て、物言ひた氣に見ゆるなり。

言はしめん、言はしめん、靈なる鳥よ、い
づれより來りいづれに飛ぶを尋ねはせず。
語れ語れ、語るべき事あらば。

(鳥は水を離れて語を残して飛ぶ)

〔悟れ！ 悟れ！ 夢より醒るもの。〕

〔祝へ！ 祝へ！ 世より歸るもの。〕

〔樂しき西に疾く急げ！〕

〔彼の岸に疾く上れ！〕

〔魔はこれより汝が敵ならず！〕

〔よるづのもの盡な汝が友なる可し！〕

〔たのしめよ、たのしめよ！〕

(靈鳥去る)

素

まことなり、われもわが長き夢を初めて破り、けさぞ生命に歸る心地する。

露姫よ！ 露姫よ！ われ初めて悟りぬ。其の玉の手を借せよ。

(露姫手を出せば握りて)

露姫よ、昨日は戀の暗路の侶連、

昨日は世の苦惱の安慰者、

昨夜は變りて眠を攪す者なりしを、

忽ち今朝は救誓の慈航の友。

日輪霞の彼方に立登りぬるに、

ためらはい遅れん、

疾く彼の岸に到らん。

露姫

彼の岸よ、彼岸よ、樂しきところは彼岸よ、恨なく憂なく辛なきは彼岸よ、

素雄

彼岸よ、實に……

友を追ひ、分け來し雲は消行きて

盡きぬやどりに歸へる厂金。

透谷子漫錄摘集

明治二十二年四月より (同氏廿二歳ノ時)

四月一日 病來久しく文筆に倦み自傳も中斷れとなり居たりしが近頃漸く舊來の精神を回復し勇氣を奮ふて學事にも從事する様になりたれば再び自傳を記述するを始めんと思ふなり。

余は實に過る二三年の間を混雜紛擾の間に送りたり、愛情の爲め、財政上の爲め、或は病氣の爲め、是等の凡てが余をして何事をも成すことなく過ぐる二三年を費消せしめたり。人生僅に五十年、今日の壯顔は明日の白頭、時日の無罪なる小童は今日の多恨多罪なる老人となりんとす、況んや余の如き多病なる者に於てをや。實に余が眼前には一大時辰機あるなり、實に此時辰機が余をして一

時一刻も安然として寢床に横らしめざるなり。嗚呼余が前後左右を見よ、驚く可き余の運命は萎縮したるにあらずや、自ら悟れよ、自ら慮れよ……獨立の身事遂に如何んして可ならんとする?

同十二日 「楚囚の詩」と題して多年の思望の端緒を試みたり、大に江湖に問はんと印刷に附して春祥堂より出版するととし、去る九日に印刷成りたるが又熟考するに餘りに大膽に過ぎたるを慚愧したれば、急ぎ書肆に走りて中止するとを頼み直ちに印刷せしものを切りはぐしたり。自分の参考にも成れど一冊を左に綴込み置く。

自序

余は遂に一詩を作り上げました。大膽にも是れを書肆の手に渡して知己及び文學に志ある江湖の諸兄に頒たんとまでは決心しましたが、

實の處躊躇しました。余は實も多年斯の如き者を作らんことに心を寄せて居ましたが然し、如何にも非常の改革、至大艱難の事業なれば今日までは黙過して居たのです。

或時は翻譯して見たり、又た或時は自作して見たり、いろ／＼に試みますが、底事此の篇位の者です。然るに近頃文學社會に新体詩とか變体詩とかの議論が囂しく起りまして、勇氣ある文學家は手に唾して此大革命をやつてのけんを奮發され數多の小詩歌が各種の紙上に出現するに至りました。是れが余を激勵したのです。是れが余をして文學世界に歩み近よらしめた者です。

余は此「楚囚」の詩が江湖に容れられる事を要しませぬ。然し、余は確かに信ず、吾等の同志が諸共に協力して素志を貫く心になれば、遂には狹隘なる古來の詩歌を進歩せしめて、今日行はるゝ小説の如くに且つ最

も優美なる靈妙なる者となすに難からずと。

幸にして余は尙ほ年少の身なれば、好し此「楚囚」の詩が諸君の嗤笑を買ひ、諸君の心頭を傷くる事あらんとも、尙ほ余は他日是れが罪を償ひ得る事ある可しと思ひます。

元とより是は吾國語の所謂歌でも詩でもありません。寧ろ小説に似て居るのです。左れど、是れでも詩です。余は此様にして余の詩を作り始めませぬ。又た此篇の「楚囚」は今日の時代に意を寓したものではありません。せぬから獄舎の模様なども必らず違つて居ます。唯だ獄中にありての感情、境遇などは聊か心を用ひた處です。

明治廿二年四月六日

透谷橋外の僑寓に於て

北村門太郎識

楚囚之詩。

第一

曾つて誤つて法を破り

政治の罪人として捕られたり、

余と生死を誓ひし壯士等の

數多あるうちに余は其首領なり、

中に、余が最愛の

まだ蕾の花なる少女も、

國の爲とて諸共に

この花婿も花嫁も。

第二

余が髪は何時の間にか伸びていと長し、

前額ひを蓋ひ眼を遮りていと重し、

肉は落ち骨出で胸は常に枯れ、

沈み、萎れ、縮み、あゝ物憂し、

歲月を重ねし故にあらず、

又た疾病に苦む爲ならず、

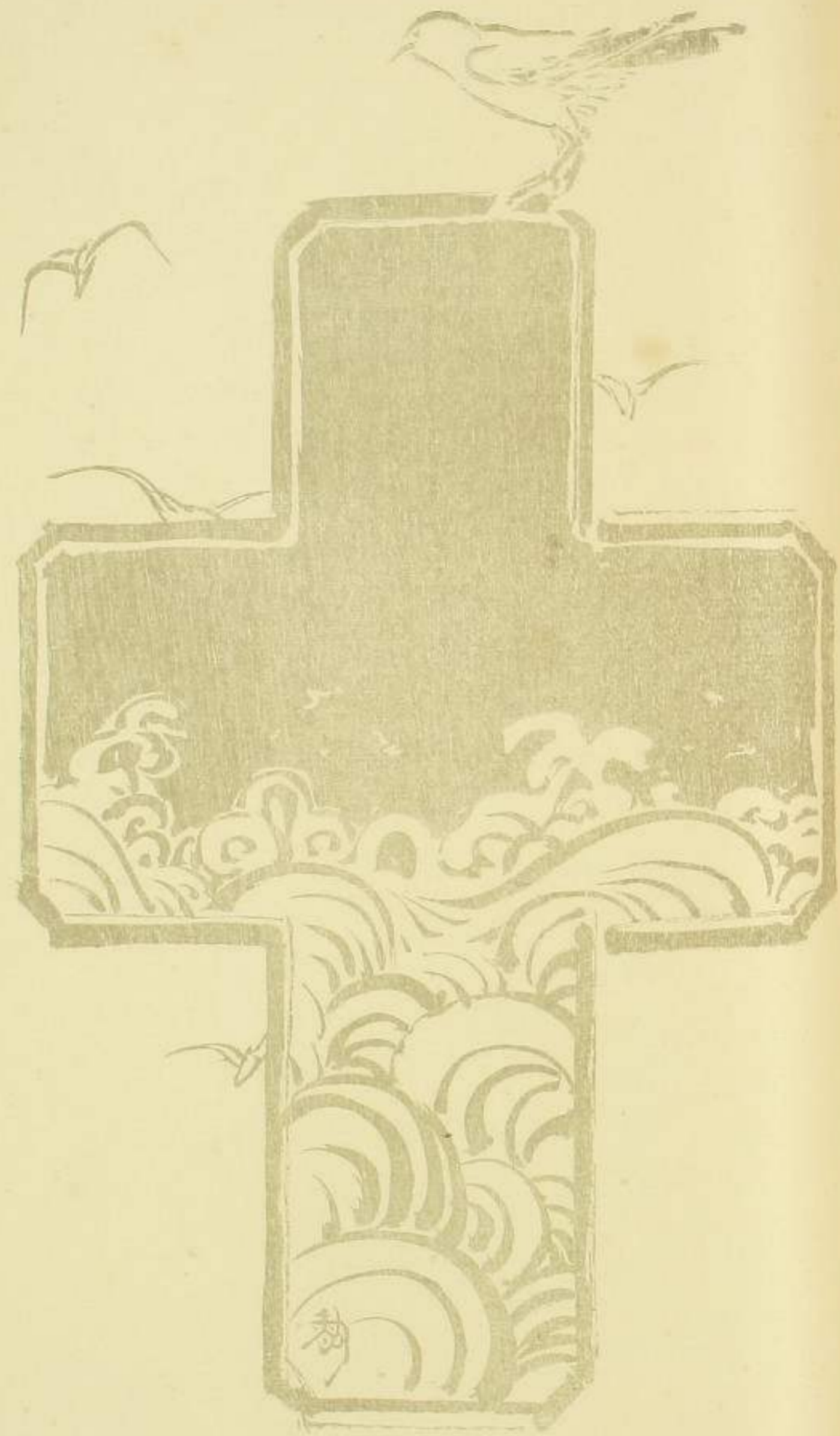
浦島が歸郷の其れにも

さて似付かふもあらず。

余が口は涸れたり、余が眼は窪し、

曾つて世を動かす辨論をなせし此口も、

曾つて萬古を通貫したるこの活眼も、



はや今の口の腐れたる空気を呼吸し

眼は限られたる暗き壁を睥睨し

且つ我腕は曲り、足は撓ゆめり。

嗚呼楚囚、世の大陽はいと遠し！

噫此は何の科ぞや？

たゞ國の前途を計りてなり！

噫此は何の結果ぞや？

此世の民に盡したればなり！

去れど獨り余ならず、

吾が祖父は骨を戦野に曝せり、

吾が父も國の爲めに生命を捨たり、

余が代には楚囚となりて、

とこしなへに母に離るなり。

第三

獄舎！ つたなくも余が迷入れる獄舎は、

二重の壁にて世界と隔たれり

左れど其壁の隙又た穴をもぐりて

逃場を失ひ、馳込む日光もあり、

余の青醒めたる腕を照さんどて

壁を傳ひ、余が膝の上まで歩寄れり。

余は心なく頭を擡げて見れば、

この獄舎は廣く且空しくて、

中に四つのしきりが境となり、

四人の罪人が打揃ひて——
會つて生死を誓ひし壯士等が、
無残や狭まき籠に繋れて！
彼等は山頂の鷲なりき、
自由に喬木の上を舞ひ、
又た不羈に清朗の天を旅し、
ひとたびは山野に威を振ひ、
慄悍なる熊をおそれしめ、
湖上の毒蛇の巢を襲ひ
世に畏れられたる者なるに
今は此籠中に憂き棲ひ！
四人は一室にありながら

物語りする事は許されず
四人は同じ思ひを持ながら
そを運ぶ事さへ容されず、
各自限られたる場所の外へは
足を踏み出す事かなわす、
たゞ相通ふ者とは
全じ心のためいきなり。

第四

四人の中にも、美しくしき
我花嫁……いと若かき
其の頬の色は消失せて

顔色の別けて悲しき！

嗚呼余の胸を撃つ

其の物思わしき眼付き！

彼は余と故郷を全じふし、

余と手を携へて都へ上りにき——

京都に出で、琵琶湖を後にし

三州の沃野を過りて、濱名に着き、

富士の麓に出で、函根を越し、

遂に花の都へは着たりき。

愛といひ戀といふには差あれど、

吾等雙個の愛は精神にあり、

花の美しくしきは美しくしけれど、

吾が花嫁の美は、其蕊にあり。

梅が枝にさへずる鳥は多情なれ、

吾が情はたゞ赤き心にあり、

彼れの柔き手は吾が肩にありて、

余は幾度か神に祈を捧たり。

去れどつれなくも風に妬まれて

愛も望みも花も萎れてけり。

一夜の契りも結ばずして

花婿と花嫁は獄舎にあり。

獄舎は狭し

狭き中にも兩世界——

彼方の世界に余の半身あり、

此方の世界に余の半身あり、
彼方が宿か此方が宿か？
余の魂は日夜獨り迷ふなり！

第五

あとの三個は少年の壯士なり、
或は東奥、或は中國より出でぬ、
彼等は壯士の中にも余が愛する
眞に勇豪なる少年にてありぬ。
去れど見よ彼等の腕の縛らるゝを！
流石に怒れる色もあらはれぬ——
怒れる色！何を怒りてか？

自由の神は世に居まされぬ、
とは言へ、猶は彼等の魂は縛られず、
磊落に遠近の山川に舞ひつらん、
彼の富士山の頂に汝の魂は留りて、
雲に駕し月に戯れてありつらん、
嗚呼何ぞ穢なき此の獄舎の中に、
汝の清淨なる魂が暫時も居らん！
斯く云ふ我が魂も獄中にはあらずして
日々夜々軽るく獄窓を逃伸びつ
余が愛する少女の魂も跡を追ひ
諸共に、昔の花園に舞ひ行きつ
塵なく汚なき地の上にはふバイヲレット

其名もゆかしきフオゲットミイナツト

其他種々の花を優しく摘みつ

ひとふさは我胸にさしかざし

他のひとふさは我が愛に與へつ

ホッ！是は夢なる！

見よ！我花嫁は此方に向くよ！

其の痛ましき姿！

嗚呼爰は獄舎

此世の地獄なる。

第六

世界の太陽と獄舎の太陽とは物異れり

此中には日と夜との差別の薄かりき、
何せ……余は晝眠る事を慣として

夜の静なる時を覺め居たりき。

ひと夜、余は暫時の坐睡を貪りて

起き上り、厭わしき眼を強いて開き

見廻せば暗さは常の如く暗けれど、

なほさし入るおぼろの光……是れは月！

月と認めれば余が胸に絶へぬ思ひの種、

借に問ふ、今日の月は昨日の月なりや？

然り！踏めども消せども消へぬ明光の月。

嗚呼少かりし時、曾つて富嶽に攀上り、
近かく、其頂に相見たる美しくしの月

美の女王！曾つて又た隅田に舸を投げ、
花の懐にも汝とは契をこめたりき。

全じ月ならん！去れど余には見へず。
全じ光ならん！去れど余には來らず。

呼べど招けど、もふ

汝は吾が友ならず。

第七

牢番は疲れて快く眠り、

腰なる秋水のいと重し。

意中の人は知らず余の醒たるを……
眠の極樂……尙は彼はいと快し

嗚呼二枚の毛氈の寢床にも

此の神女の眠りはいと安し！

余は幾度も軽るく足を踏み、

愛人の眠りを攪さんどせし。

左れど眠の中に憂のなきものを、

覺させて、其を再び招かせじ。

眼を鐵窓の方に回へし

余は來るともなく窓下に來れり

逃路を得んが爲ならず

唯だ足に任せて來りしなり

もれ入る月のひかり

ても其姿の懐かしき！

第八

想ひは奔る、往きし昔は日々新なり
彼山、彼水、彼庭、彼花に余が心は残り、
彼の花！余と余が母と余が花嫁と
もろともに植へにし花にも別れてけり。
思へば、余は暇を告ぐる隙もなかりしなり。
誰れに氣兼するにもあらねど、ひそひそ
余は獄窓の元に身を寄せてぞ
何にもあれ世界の音信おとづれのあれかしと
待つに甲斐あり！是は何物ぞ？
送り來れるゆかしき菊の香！

余は思わすも鼻を聳へたり、

こは我家の庭の菊の我を忘れて、

遠く西の國まで余を見舞ふなり、

あゝ我を思ふ友

恨むらくはこの香

我手には觸れぬなり。

第九

またひとあさ余は晩く醒め、

高く壁を傳ひてはひ登る日の光

余は吾花嫁の方に先づ眼を送れば、

こは如何に！影もなき吾が花嫁！

思ふに彼は他の獄舎に送られけん、

余が睡眠の中に移されたりけん、

とはあわれな！ 一目なりと一せきなりと、

(何せ言葉を交わす事は許されざれば)

永別の印をかわす事もかなわざりけん！

三個の壯士もみな影を留めぬなり、

ひとり此廣間に余を残したり、

朝寢の中に見たる夢の偽なりき、

噫偽りの夢！ 皆な往けり！

往けり、我愛も！

また同盟の眞友も！

第十

倦み來りて、記憶も歲月も皆な去りぬ、

寒くなり暖くなり春、秋と過ぎぬ、

暗さ物憂さにも余は感情を失ひて

今は唯だ膝を組む事のみ知りぬ、

罪も望も、世界も星辰も皆盡きて、

余にはあらゆる者皆……無に歸して

たゞ寂寥……微かなる呼吸――

生死の闇の響なる。

甘き愛の花嫁も、身を抛ちし國事も

忘れはて、もふ夢とも又た現とも！

嗚呼數歩を運べばすなわち壁。

三回まわれれば疲る、流石に余が足も！

第十一

余には日と夜との區別なし、
去れど余の倦たる耳にも聞きし、
曉の鶏やまた時に急ぐ鳥の聲、
とは言へ其形……想像の外には曾つて見ざりし。
ひと宵余は早くより木の枕を
窓下に推し當て、眠りの神を
祈れども、まだこの疲れたる脳は安らず、
半ば眠り——且つ死し、なほ半ばは
生きてあり、——とは願はぬものを。

突如窓を叩いて余が靈を呼ぶ者あり
あやにくに余は過にし花嫁を思出たり、
弱き腰を引立て、窓に飛上らんと企てしに、
こは如何に、何者……余が顔を撃たり！
計らざりき、幾年月の久しきに、
始めて世界の生物が見舞ひ來れり。
彼は獄舎の中を狭しと思はず、
梁の上梁の下俯仰自由に羽を伸ばす、
能き友なりや、こは太陽に嫌はれし蝙蝠、
我無聊を訪來れり、獄舎の中を厭はず。
想ひ見る！此は我花嫁の化身ならずや
嗚呼約せし事望みし事は遂に來らず、

忘わしき形を假りて、我を慕ひ來るとは！
ても可憐あはれな！余は蝙蝠かぶとを去らしめず。

第十二

余には穢なき衣類のみなれば、
是を脱ぎ、蝙蝠に投げ與るれば、
彼は喜びて衣類と共に床に落たり、
余ははい寄りて是を抑ゆれば、
蝙蝠は泣けり、サモ悲しき聲にて、
何せなれば、彼はなほ自由を持つ身なれば、
恐るゝな！捕ふる人は自由を失ひたれ、
脚を捕ふるに……野心は絶へて無ければ。

嗚呼……是は一の蝙蝠！

余が花嫁は斯る見悪くき顔にては！

左れど余は彼を逃げ去らしめず、

何せ……此生物は余が友となり得れば、

好し……暫時獄中に留め置かんに、

左れど如何にせん？彼を留め置くには？

吾に力なきか、此一獸を留置くにさへ？

傷いたましや！なほ自由あり、此獸には。

余は彼を放ちやれり、

自由の獸……彼は喜んで、

疾く獄窓を逃げ出たり。

第十三

恨むらくは昔の記憶の消へざるを。

若き昔し……其の樂しき故郷！

暗らき中にも、回想の眼はいと明るく。

畫と見へて畫にはあらぬ我が故郷！

雪を戴きし冬の山、霞をこめし溪の水。

よも變らじ其美しくしさは、昨日と今日、

——我身獨りの行末が……如何に

浮世と共に變り果てんども！

嗚呼蒼天！なほ其處に鴛は舞ふや？

嗚呼深淵！なほ其處に魚は躍るや？

春？ 秋？ 花？ 月？

是等の物がまだあるや？

曾つて我が愛と共に逍遙せし。

樂しき野山の影は如何にせし？

摘みし野花？ 聽きし溪の樂器？

あゝ是等は余の最も親愛せる友なりし！

有る——無し——の答は無用なり、

常に余が想像には現然たり、

羽あらば歸りたし、も一度、

貧しく平和なる昔のいほり。

第十四

冬は嚴しく余を惱殺す、

壁を穿つ日光も暖を送らず、
日は短し！して夜はいと長し！
寒さ臉を凍らせて眠りも成らず。
然れども、いつかは春の歸り來らん。
好し、願みる物はなしとも、破運の余に。
たゞ何心なく春は待ちわぶる思ひする、
余は獄舎の中より春を招きたり、高き空に。
遂に余は春の來るを告られたり、
鶯に！鐵窓の外に鳴く鶯に！
知らず、そこに如何なる樹があるや？
梅か？梅ならば、香の風に送らる可きに。
美しくしい聲！やよ鶯よ！

余は飛び起きて、
僅に鐵窓に攀ち上るに――
鶯は此響には驚ろかぞ。
獄舎の軒にとまれり、いと静に！
余は再び疑ひそめたり……此鳥こそは
眞に、愛する妻の化身ならんに。
鶯は余が幽靈の姿を振り向きて
飛び去らんとはなさずして
再び歌ひ出でたる聲のすゞしさ！
余が幾年月の鬱を拂ひて。
卿の美しくしき衣は神の恵みなる、
卿の美しくしき調子も神の恵みなる、

卿がこの獄舎に足を留めるのも
また神の……是は余に與ふる惠なる、

然り！神は鶯を送りて、

余が不幸を慰むる厚き心なる！

嗚呼夢に似てなほ夢ならぬ、

余が身にも……神の心は及ぶなる。

思ひ出す……我妻は此世に存るや否？

彼れ若し逝きたらんには其化身なり、

我愛はなほ全しく獄裡に呻吟ふや？

若し然らば此鳥こそ彼れが靈の化身なり。

自由、高尚、美妙なる彼れの精靈が

この美しくしき鳥に化せるはことわりなり、

斯くして、再び余が憂鬱を訪ひ來る——

誠の愛の友！余の眼に涙は充ちてけり。

第十五

鶯は再び歌ひ出でたり、

余は其の歌の意を解き得るなり、

百種の言葉を聴き取れば、

皆な余を慰むる愛の言葉なり！

浮世よりか、將た天國より來りしか？

余には神の使とのみ見ゆるなり。

嗚呼去りながら！其の慣れたる態度

恰かも籠の中より逃れ來れりども——

若し然らば……余が同情を憐みて
來りしか、余が伴たらんと思ひて、

鳥の愛！世に捨てられし此身にも！

鶯よ！卿は籠を出でたれど、

余は死に至るまでは許されじ

余を泣かしめ、又た笑ましむれど、

卿の歌は、余の不幸を救ひ得じ。

我が花嫁よ……否な鶯よ！

おゝ悲しや、彼は逃げ去れり

嗚呼是れも亦た浮世の動物なり。

若し我妻ならば、なほ逃去らん

余を再び此寂寥に打ち捨てし。

この惨憺たる墓所に殘して

——暗らき、空しき墓所——

其處には腐れたる空氣。

濕りたる床のいと冷たき。

余は爰を墓所と定めたり、

生ながら既に葬られたればなり。

死や、汝何時來る？

永く待たすなよ、待つ人を。

余は汝に犯せる罪のなき者を！

第十六

鶯は余を捨てし去り。

余は更に快鬱に沈みたり。

春は都に如何なるや？

確かに、都は今が花なり！

斯く余が想像中ばに

久し振にて獄吏は入り来れり。

遂に余は許されて。

大赦の大慈を感謝せり。

門を出れば、多くの朋友、

集ひ、余を迎へ来れり、

中にも余が最愛の花嫁は、

走り来りて余の手を握りたり。

彼れが眼にも余が眼にも全じ涙――

又た多数の朋友は喜んで踏舞せり。

先きの可愛ゆき鶯も爰に來りて

再び美妙の調べを、皆に聞かせたり。(終)

八月十五日

虫干しするにいろ／＼の反故出でたりその内に昨年又

は一昨年のもも多くありその二三を爰に抜出して綴籠め置くな
り。

これは父上へ送りしものなり。

拜啓小生は今日以後一大不孝者とならんとするを前知したり生は實
に暗涙を硯に垂れて此書状を書き認むる者なり、嗚呼事皆止むを得ざ
るに出づ、何の止むを得ざる事かある、其は此最後の手紙を以て詳に赤

心を吐露致す可し、

生は決して正明なる大人が生の一身を愛せざる如き事なきを知れり故に生は常に大人の意に背かざらん事を思へども生は終に考行者となるを得ざり此は生の性質の然らしむる所なりと雖傲慢不屈の不信仰(神)に對して云ふの致す所ならざるを得ず、嗚呼危かりし此不信仰心は殆んど生の貴重なる生命を覆没せんとしたり、生は此點に至つては實に我が思人なる石坂嬢に深く謝せざる可からず嬢は詳に生の性質、意志、企圖を貫察して、生の爲めに神の貴きを知らしめたり、生は過日一篇の長文章を草して自己の性情の變化を説き其性情は嘗つて生の信仰を妨げしも今に至りて却て至極の信仰心を誘起したるを論じて過日石坂嬢に投ずるとひとしく生は嬢と永く別るゝ旨を告げて歸りたり、則ち斷然身を砂漠に抛つての覺悟ありたればなり、

生は今詳に生の性情の由つて來りし所を述べんとすれども徒らに時間を費やして勞して効なきを知れば敢て此に石坂嬢に送りし書面を繰り返さず若し生の性情如何んを知らんと思召さば願はくは東京日々新聞に當時掲載中なる詩人コロリアの少年の時の傳を御覽下さる可し生の少年の時の教育と行爲とは毫も彼れに異なる所なし却て今日病氣中の執筆よりも生の性情を見るには近からんと信じ申候
小生は自ら常に思へらく、小生一身の浮沈は能き習慣を得ると然らざるとにあり若し悪しき習慣になじまば最も不幸なる一人となるべし能き習慣よなじまば人よ勝りたる幸福を得べしと是れ生の如き過激なる人種ありては普通なる天則として今更ら喋々を待たざるなり

熟ら過來の生活を看視するよ二種の原因よよりて一よ破滅したるな

り其第一は「神の信ず可きを知らざりし事」其第二は「人の愛を買ふの道を知らざりし事」右二種の原因は總べての悪性を誘起したり

則ち

第一 「不安心」 第二 「功名心」 第三 「凡慾」

第四 「不經濟」 第五 「驕傲奢侈」 第六 「不尊敬」

第七 「無愛敬」 第八 「社會を輕蔑せし事」

第九 「飲酒癖」 第十 「權謀心」

其他も尚ほ數ふ可からざる多數の悪性を醸出したる、嗚呼斯くの如くよして猶ほ仆れざらん事を望むも豈得べけんや其未だ仆れざるは未だ心の確なる所あるよ由れるかと生は少しく自ら寄る所あり、生の性質は極めて激烈なり悪習慣を醸せし事も亦激烈なり此に至りて身の破滅も亦た激烈ならざるを望むも豈得べけんや事既又此に至れり

生は實又激烈なる勇氣を以て身を保護するよ非ざれば殆ど再生の見込なきなり、

例へば相場師が全敗を取りたる後非常の大膽を以て大合戦を試みるが如し、生は實に是を試みんとして商業上よ入りたるなり然るも尚ほ中途よて敗れたり、生は元より商業と見込を立てし譯よはあらず、唯激烈なる企圖を以て激烈なる全敗を取回へさんと企てしのみ、生は横濱に入りてより非常の忍耐力を以て此大膽なる血戦を起すまでに運びたりしも思考の足らざるより遂に再び一層の大敗軍に陥りたり、生は既に自ら生の才能は成すあるに足らず則ち此非常なる敗軍を回復するの見込なしと信じて疑はず

生の一身は名譽と功業とを成さんと思ふの心にて固まりたり、此心を外にせば生の魂は無一物なり生の腦髓は死物にひとし、發狂するか白

痴になるかの二にあらざるよりは此心に離れて安穩なる生活を過す事を得ざるべし、生は既に名譽を得功業を成すの機會を失へり今や其道絶へて無し、是れを之れ我生の大敗軍と云はずして何ぞや

生は我が未だ狂せざるを怪むのみ白痴とならざるを奇とするのみ、蓋し此六月以來、生は自ら驚く程の耐忍力を以て此大敗軍に伴ひたる失望落膽を拒ぎたり、然れども此間に又た生を救ひたる援兵なきにしもあらざりし其援兵の第一は日常の遊戯なりし其第二は我が親愛なる石坂嬢にてありし、

此二者は能く生を助けて狂せしめざりし故に生は去る十七日までは泰然として毫も自ら恐怖せざりしも遂に生は僅に四日間にして落城したり十六日の夜生は石坂嬢を訪ふて二時頃まで其室に對談したり此夜の談話は一言も己れの不幸に及ぼさず嬢も亦た生を日本人中の

洒落なる人傲世の客、英雄の末路と評せり其後三日を経て十九日の夕景生は嬢を訪ふて三時の樓鐘を聞くまで對話せり、此日生の嬢に面するや嬢は左も悲しげなる怪しき眼付にて生の容顏を熟視し居けり生も自ら其奇狀に怪しみて之を問へば貴君の顔色痛く衰へたり、果して如何なる不幸ありてか君を苦しむる斯くの如きぞと生は其敏察に驚いて遂一從來の失敗を告げ又た後來望む所なし唯貴嬢の活潑に生活し勇猛に世に盡さん事を希ふと云ふ一語を述べ是れより翌日の午後までも眞の歐州風の交際を以て生は心を慰め居けり

生は實に此四日間於て殆んど發狂せんとせり、恰も落城するに近かりし此は則ち彼の援兵の力を失ひけるに由れり既ち遊戯の權を奪はれたり又た石坂嬢と交際を絶つ可しと決心したり此は則ち十六日の事として十九日に至りては已に落城を告げんとせり嗚呼我神經の激

烈なる殆んど生をして自ら驚かしむ
右も出でたる石坂嬢の事も付きては歐州人ならぬ大人も多少の辨解
を呈せざるを得ず

抑も石坂公麿氏は凡べての朋友の上も立ち志望膽畧巍然として諸輩
を心服せしめ居たり其公麿氏が最も心を置き最も計り得ざりしは小
生なりき、小生の氣風は遠く公麿氏の上も在りたり之れ則ち公麿氏が
生の傲慢不屈なるをも拘はらず生も結ぶも最も親密なる交際を以て
せし所以なり、又た石坂の一家にて最も公麿氏と意氣相投せしは氏の
姉なる美那子にてあり又た美那子と生との交際を結ばしめたる主因
は公麿氏と生との間に存せし親密の交際にてありけりと云はゞ生と
美那子との志望の相投する所あるをば推想あるべし、生の傲世逸俗の
氣風は公麿氏及美那子の最も敬愛せし所なりし、又た彼等の淡泊にし

て高尚なる思想は小生の夙に欽慕して止まざる所にてありし、美那子
は常に云へり此社會は尊敬す可き社會にあらず財産を持ち名譽を負
ふ人の如きは皆是れ土芥に比しき者なり名譽もなく財産もなき壯快
の男子こそ我夫と定む可き者なりと以て生と意氣相投じたるを知り
玉ふ可し生は實に歐州風の交際を以て此敬愛す可き一貴嬢を友とせ
り、生は今に至るまで曾つて一回も戀情に關する事を云はざりけり、抑
も石坂嬢は教育も高く智識も持し加之其父より受けたる榮譽を荷へ
り、此榮譽ある嬢子は遂に戀情の爲めに其身を破らんとせり、嬢は實に生
を慕へり生も亦た嬢を慕ふの念日一日に加はれり、生は始めより敗軍
の將なる事を承知し居りければ、是より世を輝かさんとする此一少女
を誤せらせんとは決して思はざりし然れども凡俗の人間何ぞ良心を
全ふするを得んや兩個の熱愛其極度に達して尙ほ五六日を経ば約婚

の契約書も將に出でんとするに至りて、生は最も激烈なる良心の奮闘を以て全く其迷雲を排したり、嗚呼嬢は眞の神の教を以て衆生を救はんとする有要の一貴女なり生は實に大敗の餘成す所なき一糟粕のみ我れは曾つて人を救はんが爲めには己れの生命をも犠牲に供せんと企てし事もありにき況んや區々たる戀情をや、嗚呼嬢をして其目的を達せしむるには生と結婚などと忌はしき志望を脱却せしむ可し、是れ生が斷然此交際を破らんと計りし所以なり、此戀情は則ち石坂嬢が世を益せんが爲めの犠牲なり、

石坂の一家の日本人共は生と美那子とは怪しむ可き親友なりと評する趣きを聞きし事あり又た石坂の老母は生と嬢との交際を絶たしめんと欲する様にも見へたり、碌々たる未開の頑民案じ煩ふ事なかれ余と美那子とは堂々たる紳士令嬢の交際に劣る所なかりき

生は石坂嬢と別るゝに當りて重要な誓言を約せり則ち人生の正路を取つて進む可き事はなり、蓋し嬢は生の激烈なる性質を知る者なり誤つて輕卒の事を企て遂に貧苦に陥らん事を前知するに似たり我れ何ぞ親友の言葉を無にせんや、嬢は實に第二の大矢なり、

生は斯くの如くにして勇猛にも我痴情に打勝ち又た我親友の心をも動かして二人の幸福を恢復し得たると同時に驚く可き洪水の如き勢力を以て神に感謝し神に歸依す可きを發悟せり余が斯くまで勇猛なる決心を成し得しは是れ神と捧ぐる献上物なり、イヤ我れ眞の神の臣下となり神に忠義を盡くす可し我れは敗軍の將なりと神は嘲り給ふまじ神は却て我をあはれまん、左なり左なり、我身は神に捧ぐ可し、我心は神に従ふて及ばん限りは神を敬ひ尊ぶ可しをさらば左らばイヤ左らば之れより慾の世界を離れ眞の神の園に遊ぶを待つのみなり、

生の一身上に付いては冷淡にして御考へなき大人よ生は今日生の云ふに忍びざる所を公言したり、斯く公言する以上は生が生の生活を撰むに横濱の西洋人の如く専横奸悪なる人の下に壓抑され居るの望なきを悟り玉へかし、生は既に商業上にて大勝利を博し分取物の山を積むの見込なくんば生の商業界に入る可き最初の決心は全く消滅に歸せしなり生の試みたる商業は實に小さき者なりしかども生の期せし所は最も甚しき大相場にてありし、此大山は深みにはまらざる内につぶれて去り此に至つて生の商業界に立つべき企圖は全く敗れたり、何となれば元と生は商業を作さんが爲めに商界に入りたる者にあらずして此大山を試みんとしたる故なればなり

(以下略)

左の一文は昨年八月十八日のものなり。

拜啓

親愛なる貴嬢よ生は筆の蟲なりと云はれまほしき一奇癖の少年なり、生は筆を弄ぶ事を以て人間最上の快樂なりと思考せり、然れども時として此たしなみは却て云ふに云はれぬ不愉快を感せしむる事もあり、其は他ならず、詩文を試みて意想を寫す能はざるの時、書簡を認めて所見を述ぶる事叶はぬ曉、精神鬱快として殆んど人事を忘るゝに至る如き之れなり、

生は貴嬢の風采を慕ふ事いと永かりし而して親友たるの時日は斯の如くそれ短し、生は貴嬢の親友として世を送るを得ば他に何の求むべき幸福あらんやと曾つて思考したりき、計らざりき、此得難き幸福を破つて遠く貴嬢に別るゝの日に迫らんとは、嗚呼天も亦た無情なる乎今や貴嬢に別れて遠く去らんとするに際し聊か貴嬢に懇願する所あり、

其は他ならず生のミザリイを聞いてたもと云ふ一事是なり、
貴嬢は常に生のハツピイなるを祈りたまふ我親友なりかし、然らば則ち生のミザリイを察して心の苦を慰むる術もがなあらば是れを指示しくれたまふ可き道德上の義務をもちたまふ御身なるべし、是れ即ち生が誰にも語らぬ心中の苦を打明けて貴嬢に書き送りまいらす所なりかし抑も生が所謂心中の苦とは何者ぞ、下に生の經歷を述べて以て其詳細を吐話し申さん。

嗚呼若し生をして一の大家たるを得るあかつきありと念はしめば、生は今に於いて己れの履歷を語るの必要なかるべし、生は寧ろ堂々たる自傳を玉の如き名筆を以て書き始む可し、然れども其望なしとせば生はしばらくの間おもしろき妄想を持ちたる事を隠さず白狀することぞ能けれど思ふなり、げに生の生活は世の有爲の少年の爲めに一部の警

戒書となるべし、生の失敗は以て彼等に示す可し、秘し隠す可き者にあらず

生の父は封建制度の下にありて、嚴格なる式禮の間に成長したる人たるにはあらず、傲慢磊落の氣風あれども或る一部分に至りては極めて小心なる所もあり、明治十一年祖父の中風病にかゝるや、直ちに官を辞して郷里に歸り爾後七年間孝養を盡して怠る所なく、是れが爲めに僅かの財産も消費し去れども意に介せざる如きは其小心なる一例なるべし、又た生の母は最も甚しき神經質の恐るべき人間なり、一家を修むるにも唯己れの欲する如く、己れの書き出せる小さき摸範の通りに、配下の者共を處理せんとする六づかしき將軍なり、倍て生の神經の過敏なる惡質は之れを母より受け、傲慢不羈なる性は之を父よりもらひたり、言を變へて之を云へば丁度五分と五分の血を父母より受けて此世

に現はれたり。明治六年生の父母は生を祖父母に托して京都に去れり、十一年まで五年間生は全く祖父母の膝下に養育せられけり、此貴重な時日の教育につき一言せざるべからず、生の祖父は凡そ世にめぐらしき嚴格の人にして活潑に飛はねる事を好む少年をこらすの術に苦しみたる事今もしばしば祖母の物語に聞き得る事どもなり、又た祖母は今でこそ至つて温順なれど其頃は生に取りて餘り利益を能へしとは覺へず何となれば彼れは實の祖母にあらずして生に對してはまゝ祖母たる人なればなり、生の天性は不羈磊落我儘氣隨なるに、此のやかましき祖父と我が利益には餘り心配せぬ祖母との間に養育せられたるなれば、此に生が淡泊なる小兒思想は或る奸曲なるむづかしき想像心にからまれて、物事に考へ深き性情を作りたるの事實は決して蔽ふ可からざるあととなりとす、偕て此際生の習慣、郷校にありての舉動等を

も詳に述べんと欲すれど、餘りに長くなりては讀む人の氣心も如何かと存すれば其は讀者の鑑定に任して唯其筋骨のみを綴るべし、其頃生の最も好みたる小説は楠公三代記、漢楚軍談、三國誌等にして、日夜是等の小説を手離す事能はざりし程なりき、又た生の最も喜びたる遊戯は多數の少兒を集めて軍事をまねる事にてありし、生は常に自ら軍師となりて進退運轉を司どりけり、是等の遊戯は我やかましき祖父の最も嚴禁する所にてありしにもかゝはらず、清く快よき濱邊の砂上にあつまりてかしのつゝみこゝの丘を城堡と定め、伏兵を隠す可き場所をも見極めて、軍略をめぐらし、智勇を奮ひ、砂礫を飛して銃丸に代へ、長短の棒片は、刀鎗を代用せり、此遊戯は則ち生の祖父に對する不平を慰す可き單なる快樂にてありけり、然れども之れ以て全く生を慰むるに足らずして、鬱々怏々として月日を過したれば、生は最も甚しきパツシヨ

チイトの人物となり、又た極めて涙もろく考へつめてはなか／＼にい
やすべくもあらぬこまりものとなりたる事も亦明らかならん
何にかに付けて生は涙をこぼす事多かりし又たくやしくてたまらぬ
時は殆んど正体なくなき狂へり

偕て明治十一年の春となり我がやかましき祖父は中風病にかかりて
其性質は全く一變し生を叱責するの性は變じて生を憐愛するの情と
なれり、然れども生は遂に温良なる性質を養ふの暇はなかりけり實に
生は温良なる性質を受くる道には一度も接したる事なしと云ふも不
可なかるべし生の血統中にも亦た温良なる好性質をもつ者は一人も
なし況んや生の父は傲慢磊落の人にして生の母は極めて甚だしき神
經質なるに於いてをや、
生の父母は祖父を助けんとて東都より歸り來れり、生の活潑なる心に

仇する事は、生の母の神經質より甚しきはなし、又た生の母は普通のア
ンピションを抱けり則ち生をして功名を成さしめんと思ふの情切な
りければ毎夜十二時頃までも窮屈なる書机に向はしめ母自身は是れ
が看守人たり、又た母は婦女子の性として活潑なる舉動遊戯を好まず
して生を束縛して殆んど諸ろの頑童等との交通を絶しめたり、生の最
も苦しく思ひしは彼の戰闘戲をなすを得ざるにこそ、生の諸書就中歴
史小説を好むや、英雄豪傑の氣風を欽慕して寢ても起きても其事ばか
り思ひ續けていつも己れの一身を是等の英雄の地位に置かん事を望
み居けり、且つ又た生は既に考へ深かき小兒となりたれば諸兒の如く
笑ひ興じて愉快に光陰を送ると云ふ事出來ず最も爽快にして豪放な
る遊戯にあらざれば樂しみと思ふ事能はざりし、又た生は父母祖父母
皆、愛情に薄き人々なりと思ひ込みければ生を親愛する者一人もなく

人生の價直とす可き所なしと考へ居けり、是れ則ち後に生をして氣鬱病を發せしむべき最大なる原素なるべきか、此に記憶す可き一種の幸福なる事あり、其は他ならず生の母は生が小説を好むの癖あるをさらつて堅く之を禁制せり、若し生にして依然小説を讀むの權力ありて全く身をアンピシヨンの極度に踏みこましめば其結果は實に如何ぞや諸ろの英雄の少時によくある例なる自死を試みるに至らんこと必せり、

然れどもアンピシヨンの病は遂に生の身を誤れり、其は明治十五年に至りて始めて純然たる病氣の形をあらはしけり

明治十四年は生が父母に携へられて東都に移つりし初年なり、生は東都に移り泰明學校と云ふ小學校に入りしが、此學校は聊か以て生の不平を慰めけり、今其概略を述べんに、同校の校長谷口と云へる人は東京

中にて第一等の教師と評判せらるゝ程の人にてありし其人は生の淡泊なる性質を鍾愛し、最も親愛して生を教育せられけり、又た生は人の意表に出づる議論を好みて文章を造るに愉快活潑の氣象をあらはしければ、卑屈コンモンなる數多の教師どもにはかに生を敬愛するに至りたり、從つて校中の評判生の一身に集まり、生の最も得意とするアンピシヨンは此學校の生活には全く其功を奏したりと云ふ可し、此年は國內政治思想の最も燃ゆる盛りたる時なりければ生も亦風潮に激發せられて政治家たらんと目的を定むるに至り奮つて自由の犠牲にもならんと思ひ起せり從來のアンピシヨンは悉く此一點に集合し、畏るべき勢力を以て生の心を支配し始めたり、此年は多少、生をして愉快に其日を送らしむるを得たり、或日飄然として家を出で懷中には一錢の金をも持たずして東海道を徒歩し鎌倉に遊びたり、抑も鎌倉は詩人に

取りてのイタリーの如く最も生の渴望して一見せんと欲するの土地なりし何となれば其頃生の日常讀む所は重に日本の歴史にして其歴史中最も重要な事件は彼地に於いて演せられたればなり、又た或日は獨り千葉地方に遊びたり、生は此時滿十三年にも足らぬ少年なりしも、活潑に之等の運動を試みけるは實に生をして身を誤るの基たらしめたり、何となれば生は既に自ら謂らく斯くの如く活潑に生活は過ぎ行く可しと何ぞ知らん未だ一歳をも經ざる内生の一身は全くアンハツピイの占領する所とならんとは、

同十四年の十二月小學校の課程を終りて卒業の式を挙げたり、生は是より先き青年社會にありて演説の稽古をなし居りければ少しは其心得もあるものから演臺に上りて一演説を試みたる所意外の好評にて其座にありし明治日報記者の如きは其雜報欄内に生を稱して奇童な

りと云へり、

同十五年は生をして殆んど困死せしむべき程の一年なり、之等アンハツピイの第一着は我が極めて親愛せる善良の教師谷口氏の去て北海道に行ける事之れなり、其第二着は生が新たに入學したる岡千仞の私塾は實に生をして不愉快に堪へざらしめたり、其第三は曾て熱心に盡力したる青年黨の面々散りくゝに分離したる事等なり、其第四は政府の舉動漸くをかしくなりて此神經質の少年をして憤慨に耐わざらしむる事少なからず、其第五は生よりも一層甚しき神經家なる我家の女將軍は生が活潑に粗暴を交へて動作するをいたく嫌ひて種々の軍略を以て生を壓伏せんと企てたり、

右等の仇敵は交も生の心中を惱亂せしめられたれば爰に全く活潑なる天性をそこねて穩着沈黙なる肉落ち骨枯れたる一少年とこそなりけ

り、従つて又怯弱なる畏懼心をかもし年來腹裡に蓄へたるアンピシヨ
ンをして徒らにをそれをのしく事を知らしむるに至れり、アンピシヨ
ン果して成すに足らざるか生が生活は何に寄りて過ごさん何を目的
として世を送らんかなどと考へれば考へる程心を病まし氣を痛め終
日臥床にありて涙と共に一二月を過ごし何時癒ゆべしとも思はれざ
りし此に至りて生が父は何の原因より起りし病とは知らねど氣鬱病
とは知るものから生を放つて地方に旅行せしめたり、此は是れ生が旅
行の篤矢にして爾後重もに旅行を以て氣鬱を慰むるの機具となした
るも端緒を此に聞きしなり、

其年五月生は本郷なる共慣義塾と云ふに入塾せしが是れまた生をし
て不愉快を感せしむる者の一たりし、

翌十六年三月生は早稻田なる東京専門學校に入塾したり。生は常に學

問の仕方は自ら脩め自ら窮むる禪宗臭い説を持ち居けり、去れば學校
に在りても教科書をしらべんよりは數多の書史に涉獵すること面白
しと日々書籍室に入りて漸く鬱を慰め居けり、

翌十七年は生をして一度び怯懦なる畏懼心を脱却して再びアンピシ
ヨンの少年火を燃へ盛らしむるの歳にてありし、此時のアンピシヨ
ンは前日の其れとは全く別物にして名利を貪らんとするの念慮は全く
消え憐む可き東洋の衰運を恢復す可き一個の大政治家となりて己れ
の一身を苦しめ萬民の爲めに大に計る所あらんと熱心に企て起しけ
り、己れの身を宗教上のキリストの如くに政治上に盡力せんと望めり、
此目的を成し遂げんには一個の大哲學家となりて歐州に流行する優
勝劣敗の新哲派を破碎す可しと考へたり其考へは實に殆んど一年の
長き一分時間も生の腦中を離れざりし、嗚呼何者の狂痴ぞ斯かる妄想

を斯かる長き月日の間包有する者あらんや、

翌明治十八年に入りて生は全く失望落膽し遂に腦病の爲めに大に困難するに至れり然れども少しく元氣を恢復するに至りて生は從來の妄想の非なるを悟り爰に小説家たらんとの望を起しけり然れども未だ美術家たらんとは企てざりし希くは佛のヒューブ其人の如く政治上の運動を織々たる筆の力を以て支配せんと望みけり此年生は各地に旅行し風景の賞味家となれり又た種々の人間に交際して人情の研究家となれり、

此年の暮生は全くアンピションの梯子より落ちて是より氣樂なる生活を得たり、

以上縷述し來りたる生の經歷と性質とは以て生をして自ら小説家たるを得んと自負せしむるに足る者なり嗚呼此自負は則ち今ま生を苦

しむる事一方ならざるくせ者にこそ、

生は既に自ら生活を營む可き身にてあり鋭敏に商政を計るべき一個の無間暇男兒なり汝をして小説家となるべき企圖を抱しめんか汝は一椀の飯をも得る能はざるべし然れども汝の胸中にある小説家たらんと云ふ望みは遂に奪ふ可からざる者なり、

嗚呼此は是れ當今生の暇多き生活にともなひける一種の病氣なるべし生の身は須らく繁忙なる事業に従はしむべし是れ則ち此度生が斷然志を決して神戸地方に遊ばんとする所以なり、

我親愛なる石坂嬢よ斯くまで苦るしき生が心根を察して玉へ若し友の情あらば、

然れども此病ひは一時のみ生が去つて彼地に着せしを報ずる時あらば再び光りかゝやくあさ日の下に幸福なる月日を過すぞ知り玉へ

明治二十三年中 (同氏廿三歳の時)

二月廿二日 末兼來る談話半日、古文を讀み詩人を評するなど面白かりし、

霞伴を評して爲すありと言へり。

同廿三日 近來讀賣新聞の女學生攻撃盛に起る。

同廿四日 イビー先生方休業なり。

吾が「明治文明史」は項を分つて「宗教」と云ふ所に極めて重要な問題多かるべし。佛教の衰頽せる有様より起れる一般の宗教輕蔑心等は、大に道徳を破りたるものなり。

同二十七日 余が「渡守日記」を以て一パンフレットと爲さん心組愈々切なり、是れに由りて余は余が文學上に抱ける者を世に示すべし。

余一日遊びて此渡守を見、これを社會に紹介せん。先づかれの人形を示し、後に順を追ひて、左の如き者を出すべし。」

小兒(十二三歳)是れには小兒が渡守の前に來り、其愛すべきさま、無邪氣のさま等を序して、翁に其名を問へば翁無名と答ゆ。凡ての最後に彼少年が愛すべき男兒と成り、愛の爲めに死を決する迄に至るべし。盲人。彼をして心中の不平を談らしめよ、彼が政治家を罵るの口調、浮世を嘲るの慷慨重もに爰に現はるべし。」

尙ほ愚人及び舊友を來り訪はしむ。」

一里餘にして一小閭里あり、これに行いて見る。其里に一人の富める者あり。渡守屢々行き尋ぬ。渡守をして前に既に言はしむべし。かれが家は卑しからず、彼が學藝は淺からず、唯世界の外界を見るにあり、其奇怪にして、否々寧ろ彼の身の上と彼が身を隠せし原因をば秘密と

なす方好かるべし其里に一盲女あり、渡守尋ねて聞く、彼が身上の悲惨悉くひらき言へり。爰に其里に一富人あり、彼の盲女は先きに此富人の妻にてありしなり、而して彼少年は此盲女の兒なりしなり。」
渡守日記はチユードレヂツヒの口調にてやるべし翁曰く、「一度吾れ人間の最下流に居れり、爰に居りて世界の慘憺の甚しきを見たり、其相喰ふ所相噛む所のすべては吾眼中に集まれり、政治を説く者は虚然之を説き、宗教をいふ者は恍然之を言ひ、而して此下流まで達せず。」
渡守の生れし所其他何もわからず、唯一日記者此を過ぎて逢ひ、其所以を聴き、後尋ね到るに何もなし、これを末節に爲すべし、渡守は正さに哲學的詩人的の醇粹なる者となるべし、プラトンを讀みカントを讀みて、無衣遊士曰く吾れ世に飄ふと數載未だ曾て疑迷を脱せず、希の哲學も近世の哲學も、悉く以て余を慰癒するに堪はず、懔々とし恍々

とし虚然とし鬱然とし、想至り情極むとも以て余を如何ともするなし、甲武の邊境に一川あり、吾聞く此處に一隱仙の住めるありと、川のはとりに小藁屋あり、彼れ一棹に據りて衣食す、彼れ説き出で、人類の兇惡を攻撃す、Five years of town living、これ亦渡守翁談話の一項たるべし。」

三月三日 四谷に大火ありしが今朝亦淺草大火。

同 五日 三田町邊大火、イビー氏よりの歸途聖坂のコーサンド氏を見舞ひたり、其學校も其教會にも病めるも老たる者も充てり、彼等の荷物甚だ少し、辞して歸るに狂へる寡婦と見へし、老母少女の手を引いて飯櫃一つ中には茶碗と何か入れて居りまご／＼、す實に去り難かりし。

同 六日 近來甚だなまけ者に相成たり、多分春氣のせいならん、され

ども今春は大責任あり。

同 九日 余思ふ余が進路は露伴篁村等の一個くを評し又一字題の寓言を作るべしと。『餓』『愛』『劍』等は忘る可らず。『劍』は稍々春の屋の一圓札を擬すべし。

吾れ事實に由りて『處女』を書き始めたり。

余が少年なりし頃家を逃れて鎌倉に遊ぶ。大塔の宮の穴の中苦むすあたりの状を詳説せよ。少年園に與ふべし。

同 十一日 晴天風あり。大さん疲れて困つた。

一の島あり。此島にては他島より來りて結婚する能はざるの規則あり。之に對する嚴罰もあり。島長の家。に他より流浪し來りたる島長のむすこあり。かれが本島の謀叛の事を記す。流浪するに至るまでも是をど、だいとす如何

同 十二日 「チャリナー」を論じて基督教新聞に投ずべし

同 十三日 「露伴子」と題して彼の觀念漸々詩人的となるを贊め而して真正の詩人は其念ずる所莊大にして區々たらず云々。而して最も詩人に尊ぶ所は志節なるを論じ幸に子に於て奇節を見る願くは之を發達せしめよ。遂に見る所諒然。何が邦民の利益と成り何が同屬の害毒と成るか。真正の美は真正の道義にある事などを云ひ、君が釋氏を取て無用の如く論せるを見たり。君請ふギョーテの如く疑へ。此疑は以て君を詩人たらしむべし。酒云々を見て君が志をも知れり。旅行日記を見て須らく天真爛漫たるべし。詩人の天職は如上。詩人の意志は不羈豪放云々。詩人は須らく日を見月を見て區々たる科學的の算當に拘泥せざるべし。萬物悉く詩人の前には記號耳。其裏面こそ汝が研究すべき目的物なり。道德上の如き余は近來の基督信者が文學家に

責むる如くには言はねども成るべく注目あるべきなり。

同十六日「死」此題にて書くべし。蟬は三日にて死す、人は五十年にして死す云々。

吾は塔澤の片ほとりに居をいどなみて書を置き住むの思切なりし。「文字考」ラテン・タイの語は年を追て短く成り日本語は年を逐ふて長く成る。

「西行傳」成らんとす行いて日本の歴史を讀め、悲惨限りなき者何處にかある。日本の歴史には朝廷の……あるのみ、然れども貧民……説明する者なきなり。西行撰集を讀みてこれにて王者を論すべし、上院の墓に到る所を見よ。

何れの時にか不平なからん、不平の聲は何れの時にも聽ゆ、詩人あり歌人あり、僧あり、豫言者あり、日本の歴史に不平多し、然れども不平多

きは西行の時代に増すなからん、然れども西行は不平を詩歌に洩すの徒に非ず、彼は既に上に登れり、彼は既に不平を吊ふ身となりしなり。西行の時代は佛教の大に隆興せし時なり、少くとも陰に盛りなりしなり。撰集に見る所の諸名僧偶然ならず、之を爲せるは時なり、ひとり源氏の不平者に限らず。

凡そ詩人は自ら作りしに非ず、他より作られしなり。自ら詩人として生るれど、是をして詩を作るの詩人たらしめ、世界の靈秘を發表するの詩人たるは他よりなさるゝなり。今古に超越する者はシェークスピアなるが、彼如何にして彼に成りし、學識にあらず、唯身の經歷なり、少々字を作して世の荒波に逢へると甚しく、時代も戀時代なり、夫が故彼の如き者出來せり而して西行の時代如何。

西行の歌は實に人世を吊へり、人世を教へり、之れ蓋し彼が詩を歌ふ

の意ならず、自ら彼が胸臆を躍り出づるが故に然るのみ、今の詩人の如くならず、

西行の經歷する所多し、美人あらん、美衣あらん、金殿あらん、財寶あらん、而して凡て是れ彼に於て如何、彼れルーサーたりしならん若くはシェークスピアたりしならん、ルーサーがルーサーと成りし如く沙翁が沙翁と成りし如く、西行が西行と成りしなり、西行豈別人ならん、當時の……彼をして西行たらしめしなり、落語家遊三曾て曰く、西行は上院の愛妃に戀着して思ひ達せず、遂に出家すと、此の如きは秘密のみ然れども、大詩人の大悟するは重に此の如きに因せり、極めて清からざる前に極めて汚穢なるとあり、極めて善ならざる前に極めて悪なるあり、況んや西行の如き、豈少童の中に西行ならん、我知る極めて多情多望多恨なりし者、則ち西行なりと、而して若し大に疑ひ

し者も亦西行ならん、道を求むる者、道を得、始めより西行ならば、遂も西行を得ざらん、彼道なき所にあり、道なき苦境を渡りて、而して後、道を得けん、文覺上人の西行を見ざりし時、彼を呼んで僧にあらずと云へり、余も亦是れに似たる言を爲さんと欲す、彼れ僧に非ず、僧の時に於て僧たりしのみ、マホメットの時ならば、マホメットと成り、ルーサーの時ならば、ルーサーと成る人なるを信ず、かれ僧の衣を穿てる者のみ、大深大遠を貫視するは、敢へて他に譲らず。

四月二日 「盲目旅人」を書きて讀賣新聞にもて行け。

（編者云○此以後より七月まで漫録中絶す）

八月一日 昨日は「天香君終りに近くして筆熟せず、心大に怒れりしも、今日は心地よく數枚を走らせたり。

同二日 吾れ此夜月のさやけきを見ずして眠れり、あすは入谷の朝顔

見んと樂む此日陰雨濛々西風濕涼わが痼疾吾れを困頓せしめ書を
披けば眠らんとし歩を屋外又試れば氣萎む、天香君二たび稿を脱す
るに垂んとして是を繼ぐの心なく終日鬱々たり。

「あまか君の中に牢舎の段彼が眠れる間に神來りて眠りつゝ談るさ
まを書かば如何、是れ甚だ新奇にして人を喜ばせんも知らず。

吾れ小田原にあるの間に西行傳を終るべし、

西行の詩人としての性格は吉野山こぞのしをりのみちかねてまた
見ぬかたのはなをたすねむに於て見るべし、則ち千種万様の悲境に
入りて遂に達然高悟の人となりしにあり、ひとり佛道の故にあらず、
「こよひこそおもひしるらめ淺からずきみにちきりのある身なりと
は右は一院かくれ給ひし折のうたなり、其質直なると思ふべし。

同三日 知らず越せしきのふは二百十日とぞ、ふつか三日降りしきり

し雨足なほやます今日よりあけぼのよ早く起きてより雨雲のみ空
にかしり折々にしづくを流すにわが陋窓のながめもあきて心地常
ならず、されど夜に入りては月輕雲の間に出没し眺めまた尋常なら
ず、われ何事もなさで過ぎし。

同四日 曉起箆を曳て築地を歩む、雲重く雨を催ふし風はなく柳動か
ず、天香君將さに全局を終ぬんとしつなほわが氣到らず、これは時經
月歴るにあらでは出來上るまじと思ふ。

西行傳成りたらば、再來浦島こそ其次きに取懸るべきものならぬ、

第一來着、第二世の變遷、第三今の戀昔の戀、第四古往今來の小歴史、
つらく思ふに、盲目旅、金持乞兒等の小篇は今年の中に成り、渡守の一
篇もやがて成るべし、而して、再來浦島は明年を以て成り、天香君は明
後年を期すべし、西行傳は折を見て出すとよろし、盲者巡禮は世にめ

くら程つらきはなく又めくら程云々の句を以て始むべし。彼れ若くして明なし、錢はなし、鄙の里を辞して旅へ登る。終りに花の都に着きて、始めに大學に往きて眼の療治を頼む。癒ゆべからずといふ、病原の見るべきなし、ひとなみの眼にて見ぬはづなしと言ふ、しかも見ぬず、然らばもろくの寺詣でんといひて立ちよき。名譽地藏を拜み、錢のほとけ寺詣で云々。

「天香君」は、おとしものとし無名よて出す可し、おとし主序として中よ言へ「われかゝるものを作りてより日夜なやみ思ひし、誇大なる放言もて世をてらふが如き觀もあり、また未熟なる詩休よて世よ笑はれん恐れもあり、本屋よもて行く氣も起らず、遂よ心を決して養眞社の窓を犯して投入れぬ云々」

同十三日 「浦島」 浦島は奇異なる生涯を送れる者なり、釣よ往きてむ

すびくひける時魚かゝりてあはてふためきむすび投げ捨てしける
おかしさよ、魚も得ずむすびのすてるおろかさよ、魚は逃げむすびは
砂よ達磨様云々。

同十四日 うたひ稽古始めたり

同十五日 夕すゝゝいん先に出て風を迎ふ、子供等の集りて花火遊ぶ
ぞおもしろき、いもをかぢりつゝあるもの、水菓子ひとへらを有難そ
うよにぎるもあり、花火散りて足元に奔り逃げ出すよみの無邪氣
ある。

同十七日 夜われ早川にうつる。閑夏記第二及第三成る。此夜われば
よ伴はれて觀音よ詣り詠歌をきけり。

同十八日 江の浦まで歩みたり、景色よろし、わかき夫妻の六部を見たり、
渡守の腹案は成りて更よ今宵かねて貯ぬし、鼠の第二を思ひ出

てたり。

「鼠」或村は大家ありて、將に衰わて亡びんとす。この主人に妾あり、家折々にいさかひ起る、不祥の事のみ此家に多し。此等の事鼠ども出でし見る。家の事を真髓とし其亡ぶる様を國の滅亡またとへなば適ひもせむ、然らずもよし面白し。鼠は、どぶ鼠何助とか黒鼠何兵衛とかいろく、名を命すべし。一ツの鼠出でし猫と戦ひ傷けられているく、のいたみごとを言ひ、煤を取來りて療治しなとし、遂に辞世を言ふて死ぬ所面白からん。猫の攻め來るを聽て防ぎする事。火事の近きにあるを知りて皆共に集りて逃げ仕度する事。佛の來りて亡さぬ様佛具にて相談する様の暗夜に見ゆるなど。寺の坊主が來りて經を讀み折々布施に貰ひし物を開きてそつと見るなど、これを天井より見おろして互いにどよむ。否寧ろ家の出來事を一筋として其家の娘が

戀ひ男拵ゑて、そこへ往かんとするに之れを許さず、金ある家にゆくべしと勸むる様など、まとまりて面白かるべし。

「渡守」の腹案略成れり。或位ある者が戀して親と世とに許されず、ひとりは貴族ひとりには平民とす、女は憤りて尼と成り男は僧に成ること心妙ならねば諸方を遍歴しけり。或時或ば、の信心深きに感じて是より心を佛道に沈めけり。其村に落着て渡守となる爰をまむしや蜂の村としては如何、村の者を食はず他を困む。尼來りてまむしに食はれ云々。

同二十日 われ宮の下に行きて歸る。石垣山を越ぬ湯本におりて行きければ路なき野山をあさりて秋の虫にもしみく、懇意に成りたり。
同廿七日 東京に歸る。天香君の中に露姫を擁して出る時かしの實を取りにて仙人のくらしをする様面白かるべし。

同三十日 「源平名殘」 第一常盤、第二頼朝、第三義經、第四實盛等回を分て詩若くは散文にて書くべし。演劇詩にしくみてヘンリー五世の如く二篇若くは三篇に作るこそ好からん、然らざれば餘り長くて面白からず、第一篇清盛の病臥して死ぬところの場までか若くは義仲の没落までやるべし。

われ決心せり、ちよこく短きものをつららんより長大篇のみに心を注ぐべし、其間に清雅なる小散文を書くべし。

「天香君世に出でし演劇詩の可否決すべし、然る後われこれをわが舞臺とせん。

其終りは、天地ひとりでに靜平にして、こゝに天露ふたり立ちて祝する言葉にて終るべし。

其表紙に「星」を散すべし、其下よは琴もよからん。

九月一日 近頃よなき心地よき日なり、二百十日の厄日、人々が首をひねつて待ちわびしも今日よなりて見れば數日來の陰雲一拂し去り、曉日の光り涼しく長閑なり、われ酒を沾ふて國民の爲めよ祝せんと欲す。

此日湖處子來る、久野氏も來る、平和會議の爲なり、われ湖よ伴ふて其家よ往く之れが始めなり、一泊して歸れり、湖子余が「渡守」の趣向を激賞せり。

夜眠られぬまゝよ再び同篇の趣向を考へ直す

- 第一 落馬者。 第二 水一掬。 第三 百世契。
- 第四 奔逸。 第五 戀心地。 第六 空然家。
- 第七 浮浪人。 第八 初信心。 第九 渡守。
- 第十 初日。 第十一 第二日。 第十二 第三日。

第十三第四日。第十四第五日。第十五第六日。

第十六第七日。

同四日 朝靄の歌もらすなよあだうつくしの花消ゆる汝共よ散るものをうつくしども幾日経ぬべき盛りと見しははやすたり云々様の文字あるべし。バトル、ラナ、ブックスに似せて文字の戦なるものをものすべし。國文家の舊文字を経とし新文家の新文字のみに據るを笑ふなり。

詩人自ら先づ詩たるべし。

元祿文學は第三時期なり、則ち第一は風流時期、第二は佛教的時期、第三は哲味、明治の文學未だ新哲味なきと其甚大歎點なり。如何にして新文學界は起るべき。

同九日 「初戀心忘るなよ、一篇の詩となすことを、新蓬萊なるもの書き

初めたり。

「吾想界消ぬたり」の句を以て終るべし。

「破窓」の詩を入れて、琴のねきよくひくどきにひとりの女出で來りてそしるに感ず。これが辨才天なること。

「田舎政事家」無言詩人やるべし、前はサタイアなり。

「如何にして輕浮ならざるを得ん」これは文學の調子を慨し之を救ふには詩人の觀念極大ならざる可らずと云ふを主にて。

業平朝臣の曾てありし如く、大神宮にて某女と或男の愛せしとを昔になりて作りなば興あらん。

同廿一日 コーサンド氏より書簡來りて是より同氏の翻譯を爲すべき旨を傳ふ。

「伽羅枕」を批評すべし。元祿文學の弱点は高尚あるエキस्पレッツシヨ

ンを爲すも、稍々戲言的に陥るにあり、其妙處は洒々落々の中、舒述し去るにあり。

同廿四日 米九升七合あり。

日本古來の偉人を取來りて是れが傳記を批評的に歴舒するは名を廣くし多く讀まれ且錢を得るの一手段たるべし、日本偉人傳とでも名つけて出版するは宜しからん。

同廿五日 「蓬萊曲終りよ琴の弦きれて、始めて吾がなほ觀音堂にあるを覺ゆ、則ち爰ありしあり。

同廿六日 「九郎義經これはドラマとして向ふ一年間専ら研窮すべし。

同廿九日 コーサンド氏は行くとを始めたり、歸つて來て甚だ悲しかりし。縁日よておみながほしづきを買ふべし、お芋もおすきだ。

「義經」宇治河岸よて、賴朝に謁する所、始むべし、賴朝も向つて常盤と

雪も立ちし幼き心より北國よさすらひし苦み、其間の用意を語り、常盤の末後、其破節の苦を説き、平家の暴横を憤り、劍を握つて兄よ語る處を畫くべし、幕よ近づきて、長田よ向ひ、其劍の切れかきを、など面白からん、答として、シユリアス、シーザアを熟談すべし、ツワールレストアインも亦始めて靜を見る處面白く書くべし、然するは後に舞曲をさしむる時の強みを扶くべし、他の事は皆うツちやれ今はドラマの時來れるぞ。

十月十三日 「天香」の改作を爲すべし。月と慧星との會合は餘り奇なり、故に之れを廢して初齣を神等集りて「神つとひ」を爲し、天香の生長を祝し王位よ登せ、ひめ娶らせんと云ふよ始めん。

同十五日 「蓬萊曲」は余が最初の作として出づべし。彼の山姫が前に出で、自らの世よありての面白さを語り、姫は其勇氣をほむれどなほ

彼をもて人間とあし其戀心を悟らず人間をそしるべし。

同廿日 戀しらず姫は到底蓬萊曲に寫しがたければ短期もの故更よ
「戀しらす」ある散文を書くべし。則ち田舎の景よして一公子がさまよ
ひ行きて戀するさまをゑがくべし。いろくに戀わびつるとをも。

同廿二日 「楊貴妃」われ支那歴史的エピソード又はドラマを作りて自樂
天を泣かしむべし

十一月十一日 蓬萊曲の改作。手琴を主眼とすべし。彼れが仆るも時手
琴を打破るべし。之を崖よ投落すべし。

「西行の復生を作るべし」

- (1) 鴨立澤に詩人の感慨
- (2) 西行が鎌倉の懷古
- (3) 西行が入京
- (4) むかしの武藏野を想ふ
- (5) 西行死後の知人を喚呼す

同二十日 普連土女學校を教へ始む

同廿三日 芝公園地内三十八号寺門嚴かよ俗塵稍々遠きの處よ居を
トす

十二月二日 「四千圓の函」 サタイアよてやるべし

- (1) 當撰祝ひ(教員あり五十圓貫ひ京見物よ行き云々)
- (2) 召集狀 (壯士來りて祝す云々)
- (3) 出京 (召集狀を忘れ且夫人を携ふる爲めよ氣車より引返す)
- (4) 夫人よ西洋服を着けしむ。鹿鳴館に宴會あり。
- (5) 黨派争ひの爲めに演說會に妨害よ行く。白馬を買ひて壯士四五名
を引連れて行く。味方の者牝馬を持ちたるが故にあられて馬より落ち
大怪我を爲す。
- (6) 自黨の演說會に出でよ妨害起り短刀を振廻す。

八百圓受取り其内四百圓壯士も取られて慷慨す。壯士も不平起る。壯士もをどかされて逃げ還る。家に歸れば四千圓の頭痛。

(7) 下宿屋に來りたるに壯士幾人も來り宿す。車代まで支拂はす。たまらずして密かに逃出せり。壯士議場に待ちぶせて怒る。

同十一日 「義經曲」は余が第二の要作あるべし。荒村曲の翻譯成らば直に着手すべし。義經曲成功したらば直に「平氏曲」を作るべし。清盛の死ぬ所など餘程面白かるべし。斯くして源平對比して後世も傳ふるものを得べからん。義經曲成るまでよ一二の田舎景を寫したるもの出づべし。義經曲の後よ一二の田舎ドラマ作るべし。

「義經曲」第一齣初案 (富士河岸の野陣) 東國の武士舊を談り後を説いて……九郎二十餘騎を從て來る。梶原景時是を見て禮せずして過ぐ。義經頼朝も對面す云々。

「四千圓の函」の作意を用ゐて「狐夢貴人」といふ一篇のサタイア出來べし。右はジョン、キルピンの様な短きものにして成可くは韻文にてやるべし。

- (1) 召集令をふどころにして家を出で、
- (2) 宴席に招かれて美人の懷ろに眠る、
- (3) 森の中にて木の切株の上にて演説す、
- (4) 野中の牛舎議會にて會議す。狗吠、馬嘶く、これを相手にして戦ふ。
- (5) 名士の會合(豫算會議)たもとに入りたる黄白に眠る。
- (6) 黄白みな狐美人に吸取らる。

(此間一考すべし、何故なれば豫算計りにては面白からざれば)

(7) 狐夢議長に成り大臣に成り妾を貯へ……したり(實際)夢さめて見れば獅子小屋にあり。

同廿九日 東京を出で塔澤一の湯にて年をとる。

明治二十四年中 (同氏廿四歳の時)

一月 三日 歸京す

同 十九日 イビー氏翻譯の仕事始まる。

同 廿六日 「おその」は、せと爲すべし、人の門に寄りて爲すとはやめて森の中の場にて、樹陰に入る時に、手琴を取出で、戀の歌を弾せしむべし。

二月 四日 「賤伏屋の月」 田舎端物の外題なるべし。

同 十五日 新渡戸夫妻に教會にて面す。

「蓬萊曲」 其初には源兵衛なる從者の代りに一の哲學者を共にあらしめては如何「春は來ぬ」と云へる題にて櫻井明石君に贈らんとする

小詩蓬萊曲の後に**出づべし**、今日はじめて春のあたゝかさ覺ぬ、風なく日光いつもよりほがらなり。

彼姫が形と見しは是れ琵琶なりし(びわを捨てゝ行き)抱きて見れば之れ吾が理想なりし。彼姫は空しく我が理想と先きの戀人どが集りて出來し者なりし、理想と戀人どが凝成したりし者なりき、而して抱きての後は琵琶と化しけり。

同廿二日 盤梯山の破裂の時一少女の婚嫁に先立ちて死せるあり、彼に付きて一詩出來べし。

「おその」は蓬萊曲の次に出べきパムフレットなるべし。蝶を追ふて云々の小歌は此中に用ゆべし。おその之を歌ひて門に立ち或は義一之を夢みて語る所。

「蓬萊山一夜」これは余が蓬萊山に宿りし時の一夜の狀を寫すべし。

五月二日 「蓬萊曲」全く脱稿。十日印刷にかゝる。

同十二日 露國皇太子大津にて遭難、人心惶々。

「地龍子」我れ地龍子の輾轉する様を見て之れを小詩に作らんとを期す。

「重箱行脚」ぼろ箱行脚にても宜し。二千五百年來の寶物なる重箱に罅損を生じたり云々を以て始むべし、行脚鞋の脚色もこゝに入るべし。

同廿九日 「蓬萊曲」印刷成る。

六月一日 權濱にてシェーキスピーアのハムレットを演ずるを聞き

て行く山手公會堂に於てありし。中々面白かりき。春のやに逢ふ。

再びガイドたらんと欲してホテルへ相談に行きしも不都合多くて成らず。

同 七日 坪内雄藏君を大久保に訪ふ、専門學校にありて世話になり

し故。春のや吾れに語るに古事記時代を以てパラダイス、ローストを書くべきを以てす。吾れ清盛の作を語りしに彼非常に賛成シグラン
ドなりくと言へり。蓬萊曲を評して第一缺點は其優美なる場所を
取りて悽惻なる景色を寫したるを以てなり云々。

同 九日 今夜吾れつくく、音樂なきを悲めり。古事記を研究するの
念起れり。

○地龍子

行脚の草鞋紐ゆるみぬ。胸にまつはる悲しの戀も思ひ疲るゝまゝに
衰へぬ。と見れば思ひもうけぬ所に目新らしき花の園人のいやしき
手にて作られし物と變りて、百種の野花思ひくゝに咲けるぞめでた
き。何やらん花の根にうごめく物あり。眼を下向けて見れば地龍子な
り

○戯曲を論じて雲峰子に質す

猫は鼠に非ず故に鼠は鼠にあらざる謂は、誰か其愚を笑はざるものあらん。長歌の定義を以て戯曲を判し其定義に背けるを見て戯曲にあらざるとするは余が子の博學なるに奇とする所……テニオハの誤り多しとて戯曲を排す。新体詩界すらテニオハには……戯曲、尤も不規則なるべき戯曲に於て無理にテニオハを要す……君若し戯曲を作らば如何なるものかなす。役者をして一々樂器に合せて歌はしむべきや。役者のエキस्पレッツションをして悉く唱歌とすべきや。マローロー、ベンジョンソン、シェーキスピーア……定調とはいかなるものぞ。多分メテアを言ふなるべし。余は未だ戯曲にメテアあらざる可らざるを聞かず。英國のドラマチストは多くは……獨逸のバリーフルのラングエーヂにしてミステリアスの事をいふ

べし……^{ストーリーチャイズ}舞臺に曲すべきものと爲す可らざるものとの二種あるを知らずや。ブラウニング、ゴールドスミス等のドラマを讀め云々。「大盜曲」を作るべし。此中の理想は善とはいかなるものぞ。人間の善を成すは作り事なり。惡とは何ぞ、吾れ惡を成さず善を成すなり。捕はれて後の事などおもしろかるべし。

七月十三日 夜二時頃左の意匠成る。

○平家榮華の仇夢

第一幕 (1) 六波羅邸外。小兒探偵等と百姓町人出で百姓町人清盛を惡口する所。彼等の一二人捕はるゝ事。

(2) 源三位頼政と齋藤別當との問答。

(3) 清盛邸内にて清盛と常盤。清盛が常盤に對する愛情衰へ、長々來らざりし事。常盤は思ひ亂れて病あり病衰ふ事。清盛去る。

源三位來る、常盤と互に胸中をうらに問答す。清盛宗盛相携へて入る、清盛頼政と常盤と談るを聞きて面白からず、直ちに常盤を去らしむ。

第二幕 (1) 小松邸に於ける重盛宗清との對談、清盛の專横を現はす

(2) 頼政の娘爰に預けられてある、維盛との愛。

(3) 重盛、獨誦、宗盛入る。重盛深く之を戒しむ。平家の運を説き源氏の未來を談る。常盤暇を告げんとて尼裝束して來る、宜しく深刻なる感情あるべし。

(4) 源三位娘を家に連れ歸らんとて來る。維盛の婚姻なからしめんとす。重盛之れを慰藉す。宗盛之れを蔑視す。照子姫と維盛。

第三幕 (1) 六波羅に於ける清盛、兵を整へて法皇を幽せんとす。重盛來る。

(2) 熊野權現に於ける使丁、從僕等が樹を折り焼いて暖を取る所、政道の議論する所。重盛の憂苦死を祈る。(以下未定)

醉夢 (戀に酔ひたるもの、お園の如し) 未定案

魔夢 (蓬萊曲改作) 定案

仇夢 (平清盛が事) 定案

惡夢 (山賊が事) 定案

浮夢 (一世話物) 未定案

毒夢 (明智光秀が事) 定案

十月三日 三の橋際の腰掛けうどん屋に入りたるに學校の小使の家なりければ咏みてやる

極樂はすゝる温曇のけむのうち

十一月十三日 夜、毒夢想成る

○毒 夢

女主人公を阿鶴と稱す、其父は淺井家に仕へて大野佐右衛門といふ、二百石を取る。其兄は放縦にして出奔し、羽柴秀吉に據り、家には知らしめず。男主人公は三十石許の小武士、淺井に仕ふ。前沼吉繼九郎兵衛齋藤龍興は當のかたき、淺井長政も亦。

第一幕 第一。大野佐右衛門やかたの場

佐右衛門は忠義一圖の武士、其むすこは放蕩にして家にとては寄附かず、主を輕んじ家を賤しむ。此場に於て佐右衛門言ひ争ひ家を勘當すと言出す、之れを幸ひに出行かんとす。妹お鶴は父の入りたる跡に出來りて兄を留む、聽かず。兄は妹に婚嫁に苟且にすべからざるを説く、自ら言ふ吾れは大望あるものなりと。

第二。佐右衛門煙草くゆらし息子の事を思ふ。爰に妻女お政出來りて息子の事を嘆き父の短慮を論ず。近侍某來る。説くに齋藤戀慕のとを以てし利害の左右を論ず。

第三。大野別室。大野と妻女、いくなづけの前波に對するとに付きて眉をひそむ。妻女ひとり残りて娘を呼寄せ思ひきらしめんとす。娘終に陽に承引す。

第四。齋藤ぬけまいりして一杯飲まんを求む。三味の松花録を見よ。此類あり。娘いやがる兩親は無理に酌を取らしむ。齋藤歸る。

第二幕 第一。朝

第二。前波が家。貧武士の態、老僕一人あるのみ。對話よろしく嫁取りの話など。大野來る、齋藤の事情を談る。縁切らせたふもなし、切らでは成らず。前波思ひ切て斷るといふ。大野喜び歸る。

第三夜に入りて行燈取出し書机に向ひて兵書を読む。ほとくと音
なひてお鶴来る。物言ふも答ぬなし。老僕に向つて訴ふ。(以下未定)

明治二十五年中 (同氏廿五歳の時)

一月一日 ふた葉三葉去歳を名残の柳かな。

同 七日 フレンド教會々友を招じ餅會を催せり。

同 十一日 病床にあり、重箱行脚著作の念を決す。

同 十五日 コーサンド氏より愈々免職の相談あり、歸途歩上作あり。
ぬらくとからをはなれた蝸牛

是よりいよゝゝ文壇に躍出る考へ専らなり。

心中論を草せんとす(海音作心中二ッ帯を讀みて所感)。

同 十八日 巢林子理想の批評を思立つ。

同 廿一日 コ氏を送りて横濱に到る、大矢正夫君出獄して公道俱樂部

にあるを聞き行きて訪ふ、獄中にて〇〇の事を聞く、以て余が愛情
の議論を確むべし。

同 廿四日 宗像大助君來訪、櫻井明石君來訪。

同 廿七日 源實朝を害したる公曉を主人公として他の油地獄を作す
べし。

同 廿九日 イビー氏方も亦免職となる。

同 三十日 家尊任地より歸る。

二月一日 昨夜少雪あり鬼瓦に白班を痕す。

同 二日 久野正香君來訪清談夜に入る。

同 三日 明石愛山兩兄來訪快談夜に入る。

同 四日 隅谷巳三郎兄來訪。

今日の讀賣新聞を見るに余が曾て意匠を構へたる徳川千姫權現様孫女に付きて。坂崎(?)某の事に付きて新脚色を作り當今ことぶき座にて興行中との事御菊の前なる者云々。判事某の邸に千姫が情郎を埋めくしたる井戸あり云々との事曾て春の舍主人野分の千草にて此事に説及べり。

今日午後より降雪夜に入りて益甚しく近年稀なる大雪となれり積ると三四寸。

千姫物語(ヅラ派寫真主義の小説、但し徳川氏の忌諱に觸るべきや否や)

藤波氏王子を吊ふ歌

どもに見し紅葉の秋も過果て

落葉の音をきくもかなしき

十八日 湖處子及春のや先生を訪ふ。

廿六日 岩本善治君來りて明治學校文學會に同行を促す因て往く君

われに向ひて女學雜誌文學批評の筆を執るを勸む之を諾す。

三月四日 テンペストを讀む時不圖心に浮びけるはわが曾て法ねん

珠材羅刹篇を讀みし時に得べしと思ひし一脚色再燃し來りぬ。

(批) 沙翁の「大」の一は「魔」の宇宙想なり吾曾て之を論せしとありテン

ペストの「大」も亦其一なり

(作) 貴族の家に家令奥様と密通し生ませたる子の生長したる後その家令主人を毒害し其子をもり立てんとたくむ。其子大に迷ひていかにもせんようなし。他に忠臣あり其女と相愛す然れどもまことの父なる家令は彼をして婚せしめず、遂にいつはり狂してトラセデーを起す云々。

五日 久藤翁を訪ふ歸途戸川安宅氏(殘花子)を訪ふ仲々に面白き談話ありし。

七日 戸川氏來訪愛山兄來るもろ共に深川蛤くひに行く。

八日 女學雜誌社に到り岩本氏に會ふ。擔當するとなりたる批評の

第一を置いて來りたり。元祿文學攻撃の第一着手即ち之なり。

依田學海翁を訪ふ、演劇に就きて同翁の説は。

第一 演劇は「眞」に近かるべき事則ち狐忠信の如き寺子屋の如き凡て不自然を排斥すべしとの意。

第二 せりふは成るべく自然即ち眞に近かるべき事、道具は出来る丈け美しくしき方よろし則ち觀客をして「眞」に樂み「眞」に喜ぶとを得せしむべき事。

第三 床淨瑠理は廢すべし役者自らをして言はしむべし。之れ即ち

作の問題に屬すべしと余は言ひぬ。

第四 日本演劇は木偶より起りたるものなれば五官を具へたる人間の學ぶべき所に非ずとの事。

第五 昔は人形芝居と踊りの一派と兩様ありしがいつか合して人となりしと。此點に於ては先生は能を度外視したりと余は思ひき。

第六 莊高なる者を古神的近世神的に興行するは如何と問ひしに答へて、之れ遂におどけとなるべし、幽靈も鬼神も若し眞に迫らば大に可なるべきも戯れに見ゆるこそ是非なれと言はれたり。

第七 俠といふと如何なる所より起りしやと問ひしに答へて之は實に著作家が盜賊、心賤き者を小人賤人小屋長屋連中を喜ばしめんが爲に義俠の心ある者となしたるより起りたる者なり盜みしたる金、家とり切りたる金もて人を救ふとは如何なるとぞと。余大に此説

に服したり。

第八 粹とは如何なる者ぞと問ひしに之も作者の不量見よりなりと答へられしくもの糸まきの中にある十八通などが其始めなるべしとのたまへり。余も此説に同意なり。

第九 昔は戯作者など言はゞ人の汚れと思ひしが唯馬琴に至りて少しく品格を上げたり然れども馬琴を先生と呼びし者はなしと。

十日 かねてねらひ置きたるナイトのシャーキスピア全集を得たり其價十二金なり。

十二日 余は芝神明町一番地なる高田與五郎といふ人を訪ふ同氏は元と吾父など同僚の官人なりしが去歲よりひまに成りたるなり能樂の事に堪能なりとの事なれば山内氏の紹介を経て尋ねたり其語る所の概略を記せば。

(一) 余が元と能にして劇に似たる者ありやの間に答わて、日吉派と云ふ者ありて奈良大坂の邊に行はれたりし、可成り古き者なるが能より脱して稍俗に流れたる者なりと言へり。昨年同派の人東京に來りて興行したるとありと。

(二) 金春を以て四派(金春金剛寶生觀世)中の最舊派とす、これは千年餘なり。

(三) 謠曲の番數は今は二百十番(内外合せて)なれども昔は千二百番もありしなり各時代に必ず謠曲に熱心なる人ありて新作ありたる様なり加賀の藤何とかも其証なり、西行櫻は西行の作江口は一休の作(其原稿藤堂氏にあり)。

(四) 代々能役者は仲々の勢力なりし金春家は五百石を領し寶生は二三百石を領せり代々の君のすきに從ひて家の隆替あり(つゞみ其

他も之に應じて得失あり。

(五) 豊臣太閤は仲々能樂に心得あり自ら蹈舞中大明に書を裁したり。

十七日 シヨンスなる宣教師と共に奥州の旅に向ふ。

(編者云此間旅行略記あり)

五月十七日 高輪東禪寺の寺内にうつる。

一つのアドベンチャアースマンを撰みてラフの大苦惱をしるすの妙味を悟る、如何。

七月十三日 狭穂彦の亂に付て皇后とインセストなど面白きと限りなかるべし。

八月廿三日 芝公園地第二十號四番に移る、樹鬱地高く尤も我意に適せり。

同三十日夜感、寺の大黒を借來りて非道なる慾張者を寫し出すべし。

幽界に對する觀念(自然的幽靈を論ず)

芭蕉翁の一例(俳道の自在を論ず)

世の狂亂(マッドチス、ラブ、ウワールド)

風流の賊(似而非風流を論ず)

悟迷一轉機(文覺、西行、芭蕉等の品性を評すべし)

同 卅一日 民友社より書狀來り國民の友へ寄書せんことを請ふ、わが其雜誌にあらはるゝ時機未だ來らずと自ら信せしと或は如何。

九月 性靈集第四、四十八 禪經曰佛以四隨說法隨樂隨宜隨治隨義、

佛苑曰積恩爲愛積愛爲仁

同 廿日 徳富猪一郎君に會す、石田政敏といふ優人に會す。

星野愼之輔君(天知子)を訪ふて一泊す、女學雜誌に同氏の文覺上人を

論ずる文を見て急に逢ひたく思ひし故なり、快談深夜に及ぶ。

○他界に對する觀念

ソロモンを引きて人生に自ら安んじ難き所以を見さしむべし、詩篇を引きて他にしたふ所あるを知らしむべし。

基督にありては靈魂を重んじ従つて生命を重んじ、我にありては靈魂の靈活を知らず、生命の無常のみを知る、故にスピリットなるものあるを知らず、惡鬼夜叉も之を信するに由なしと、エターナルの思想彼に存して我になし。

彼の惡鬼には神通力あり、フォースト五十八に「我にはいつでも惡形のみなり」彼の惡鬼は神の裡面なり。我には神通力あらず。ハムレットのは遠くより來れる如し、日本のは近接せり。殺されて世を去らず。去る能はず、念佛回向によりて成佛せざる可からざるが如し。高僧の手

にていかにともなる幽靈なり。エターニチーを知らざるが故に戀愛の如き高きを得ず。尤も是は東洋宗教の戀愛を重んぜざるにも起因す。吾幽靈は、其時よりすぐにエキジストして誰人にも言を加ふ、ハムレットのは然らず、ハムレットのみに出で他の者には見えず、母にさへ見えず。詩の上に於て他界に對する觀念二途あり、一は善美なるものをうつすなり、他は醜惡なるものをうつすなり、竹取羽衣等は前者に屬す、番町皿屋敷、お岩源氏等は後者に。

○前波新脚色

前第一 花見の幕、極めて賑はしくして其終りに前波を出して不満足を見すべし、終りに喧嘩をなさしめ戰國の狀を示し前波の武藝を見せしむべし。

第二 波の書齋獨想

花見の時に、彼少女をして極めて汚なき着ものをさせ、濁酒のびんをさげて行かしむべし。これを以て彼の人品を現はし、人々をして彼を笑はしむべし。然る後に前波の之を見て救ふ所とすべし。

同廿一日 熊本松崎鶴雄君へ一書。其中に認めたる句一ツ

西ひがし夢は一つのかれのほら

○悪夢作意

第二のアクトには

公曉が修善寺に往事を記し、或民家にて行き暮れ休らふ時、公曉に弟子僧あるべし。温泉場は焼跡にする方凄かるべし。

其第二幕は住所しれぬ高僧ありて、平家の遺族とすべし。範頼のあとを吊ふ所を出すべし。なみの形にて爰に範頼現はれて、いづこの誰ぞや、そも我なき跡を吊らふは、あの世まで迷ふは子故、成佛のしようげ

を我ど我が途へ、立ちふたがらせて川霧のあやめも知らぬ三途をば、わたりも得せず歸へり來て、このわたりにさまよふを、あはれとは思せかし。

同じく是れ圓頂緇衣の人。あはれ汝が公曉にてあらば、千万遍の回向にも増して成佛のよすがともなりぬべきに、南無阿彌陀佛とは聞けどいかにせむ、億万里外にかけ離れては、うらみの一言を語らむ。

公曉此に來りて亡靈に會す。亡靈此時平家の怨軍に圍まれていききれくゝに出来る。平家の怨全篇を貫くべし。

第一アクトは公曉のむす子けなる所を寫すべし。彼は北條氏を憚りて斯くするなり。廣元の孫女にラブさすべし。彼の家に通ふと多くなりて、義時ひそかに來りて様子を窺ふ。公曉宛然たる白痴なり。義時實朝の自滅を計りて實朝に彼娘をすゝむ。實朝これを諾して婚期近し

彼女父命を背き難くして諾す。うば彼女に説くに利を以てす。
第三アクトにては義時實朝と共に行くを約して行かず。
大江廣元は學師とすべし。其孫むすめあり。公曉爰に通學す學友あり、
北條氏を罵る。

(編者云、此間記事斷つ)

十月六日 「他界に對する觀念」の一文成る。

島崎兄の夏草を讀みて與へたる

夏草のしげみに蛇の目の光り

十一月三日 麻布笹筒町四番地に移る、山羊をコサンドより購ひて畜
ふ。

同 十六日 徳富蘇峰君より春期附録に著述の依頼來る。來年春八

玉子に遊て荒村行を著し政治社會を動かすべし。其主人公は女にて
美しくしき機織あり、男は政治に狂奔して東西に奔走して歸らず、云々

(編者云、此以下日誌中絶)

明治二十六年中 (同氏廿六歳の時)

八月三十日 國府津在前川村に來り長泉寺に投ず蓋し祖先の骨を埋
むる處、家族を携へ弟と義妹とを與にす繁雜なる旅行なり。

富井松子は曾つて一たび師弟の縁あるもの而して親しく交れるこ
と兩三年其人品に於て氣稟に於て我が深く重んずるところありし
もの、わが奥州にあるの間に於て慥焉として遠逝すわれ深く悼むの
心あり、知己は多く得べからず渠の如きは余が生涯に於て有數の友
なりしを惜いかな、余が此行に於て尤も多くの興をうちけされしは

渠を失ひし事の愁よりなり。

此行始めてエマルソン研究に着手せり十二月に於て脱稿し得んことを期すればなり。

九月四日 われ此地に來りてより後も常に自ら晏如たること能はざるを悲しむわれつらく、近時の自己を顧みるに危機にのぞめること久しと謂ふべし。凡そ一時間も書を讀めば則ち大に勞れて爲すところを知らず思想も亦た斯の如し此地に來りてより評論の爲に一文を爲さんには凡そ四五日を費せり斯の如きはこれまで曾てあらざりしどころ之を以て余は余が精神の當を失しつゝあるを知るものなり。

然れども萬事必然の因より余が多年の辛苦も漸くに水泡に歸したり寸蓄も之を成す能はず空しく唯だ獨立せざるの事業に苦役す斯の如くして余が精神遂に亂れざるを得ざるべきなり余はたしかに精神の不安の原因を知る而して遂に之を如何ともするなきを知る余は多くの者に欺かれたり希望にもライッにもすべてのもの余を苦しむるなり。

余は爰に於て從來のすべての忍耐を甘んじて打破すべしと決心す妻に對することも妻の家に對する事も我が家に對することも事業に對することも而して我は之よりすべての事に耐久の精神を破りて自ら好むところ自ら題するところの外は必らず之を爲すまじわが獨立の爲には愛をも犠牲に供すべし最後は三界乞食の境界に没入するの覺悟あれば則ち可なり嗚呼男兒何ぞ斯の如く長く碌々として遠慮をのみ事とすべけんや。

九月七日 日○本○人○が○萬○有○に○對○する○觀○念○

德川氏以前
德川氏以後

右を歴史的に研究すべし。基督教新聞に山田寅之助氏の萬有に
關する論文も見たり。

十一月一日 余は始めて日記を録するの暇ある身となれり。顧れば明治十七八年の頃桃紅日録と題して日に記し來れる文字今はなし。頃の大變動を過ぎて漸くにして今日もどの書生となれり。即ち先月を以て

聖書の友編輯の任を解かれ、
引續き教會の方にも苦情出で牧師としての太田君に對する反動起り。従つて余も亦た辞し去らざるべからざるに到れり。余は之を以て機會なりとす、

則ち斷然從來三年間執着せし宗教的生涯を打破し之より大に我が意志を貫くべし。われ多艱なる過去を通り來れり。この頑骨を枉げて

面白からぬ仕事も追いつかはれたり。看よ之よりの余が猛志を、エマ

ルソンを脱稿するの後直ち公曉と取菟らんか。おもしろしく、

三日 教會會議あり。われ議長としておもしろき滑稽をやりたり。

四日 ウートツオルスを霞町を訪ふ。

公有の人私有の人(人物を論ずべし)

透谷全集附録

心機妙變を論ず

哲學必すしも人生の秘奥を貫徹せず。何ぞ況んや善惡正邪の俗論をや。秘奥の潜むところ、幽邃なる道眼の觀識を待ちて、無言の冥契を以て或は看破し得るところもあるべし。然れども我は信せず何者と雖もこの『秘奥』の淵に臨みて其至奥に沈める寶珠を探り得んとは。

むかし文覺と稱する一傲客しばしが程この俗界を騒かせたり。彼は凡ての預言者の人物の如く生涯眞知己を得ることなく、傲逸不遜磊落奇偉の一人物として幾百年の後までも人に謳はれながら、一の批評家ありて其至眞を看破し思想界に紹介するものなく今日に及びぬ。

時なるかな今年の文學界漸く森嚴になりて、幾多思想上の英雄墳墓を出で中空に濶歩する好時機と共に、渠も亦た高峻なる批評家天知子の威筆に捕はれて明治の思想界に紹介せられたり。

天知君は文覺の知己なり、我は天知君をして文覺と手を携へて遊ばしむるを樂しむ、暗中坐禪する時彼の怪僧天知君を訪らひ豪談一夜遂に君を起して彼の木像を世に顯はさしむるに至りたるを羨まず。わが所望は一あり、渠が朋友としてにあらず、渠が裡面の傍觀者として、渠の心機一轉の模様を論ずるの榮を得む。

蓮池に臨みて蓮蕾の破るゝを見るは人の難しとするところなり。蓮華何の精あるかを知らず、俗物の見るを厭ふて幾多の見物人を失望せしむること多しと聞く。曉鶉に先ちて寢床を出で池頭に立ちて蓮女第一回の新粧を拜せんとするの志あるもの既に俗物を以て指目す

るに忍びず、然れども佳人何すれど無情なる、往々にして是等の風流客を追ひ回へすことあるは、人間界の心池の中に靈活なる動物の心機妙轉の瞬時の變化も、或は蓮花開發に似たるどころあり。

風靜かに氣沈み萬籟默寂たるの時に、急卒一響神裝を凝らして眼前に亢立するは蓮仙なり、何の促すところなく、何の襲ふところなく、悠然泥上に佇立する花蕾の一瞬時に化躰して神韻高趣の佳人となるは驚奇なり、然り驚奇なり、極めて普通なる驚奇なり、もし花なく變化なきの國あらば、之を絶代の奇事と曰はむ。絶代の奇事にして、奇事ならざるもの自然の妙力が、世眼に慣れて悟性を鈍くしたるの結果とや言はむ。人間の心機に關して深く觀察する時は、この普通なる驚奇の變化最も多く、各人の歴史に存するを見る。然りこの變化の尤も多くして尤も隠れ、尤も急にして尤も不可見のもの、他の自然界の物に比すべくも

あらざるものあるは、人生の靈活を信するもの、苟くも首肯せざるはなきどころなり。惡を惡なりとし善を善なりとし。不徳を不徳とし。非行を非行とするは俗眼だも過つことなきなり、但夫れ惡の外被に蔽はれたる至善あり、善の皮肉に包まれたる至惡あるを看破するは古來哲士の爲難しとするところ、凡俗の容易に企つる能ざる難事なり。もし夫れ惡の善に變じ、善の惡に轉じ、惡の外被に隠れたる至善の躍り出で、善の皮肉に藏れたる至惡の跳ね起るが如き電光一閃の妙變に至りては極めて趣致あるどころ極めて觀易からざるところ、達士も往々この境に惑ふ。

人間の無爲は極めて暗黒なるどころと極めて照明なるどころとあり。その無心の域に入れりすべきは生涯の中に幾日もあらず。誰か能く快樂と苦痛の羈束を脱離し得たるものぞ。誰か能く淨不淨の

苦闘を竟極し得たるものぞ。誰か能く眞に是非曲直の鐵鎖を斷離し得たるものぞ。唯だ夫れ人間に賢愚あり、善惡あり、聖汚あるは、その暗黒と照明との時間の長さを指すべきのみ。いかに公明正大を誇負する人ありとも我は之を諾する能はず、畢竟するにその所謂公明なる所以のものは、暗黒の影の比較的に薄きに過ぎず、照明なる時間の比較的に長きに過ぎず、眞の大知、大能、大聖に致りては我は之を人間界に索むるの愚を學ぶ能はず。然り、大知、大能、大聖は人界間に庶幾すべからず、然れども是を以て人間の靈活を卑うするところはなきなり、人間と呼べる一塊物 (A Peace of Work) を平穩靜着なるものとす。時は何の妙觀あるを知らず、善あり、惡あり、何等思議すべからざるところありて始めて其本性を識得するを得なり、善鬼惡鬼、美鬼醜鬼、人間の心地に混交し亂戦するを以て始めて人間なるもの、他の動物と異なる所を見るべし。

神の如き性、人の中にあり、人の如き性、人の中にあり、此二者は常久の戦士なり、九竅の中にこの戦士なければ枯衰して人の生や危ふからむ。神の如き性を有つこと多ければ戦ひは人の如き性を倒すまでは休まじ、休むも一時にして程経れば更に戦はざる能はず。人の如き性を有つこと多ければ終身惘々として煩ふ所なく、想ふ所なく、憂ふる所なく、らむ。この兩性の相闘ふ時に精神活きて、長梯を登るの勇氣あり、闘ふこと愈多くして愈激奮し、その最後に全く疲廢して、萬事を遺る、この時こそ、惡より善に轉じ、善より惡に轉ずるなれ、この疲廢して昏睡するが如き間に。

人の一生を水晶の如く透明なるものと思惟するは非なり、行ひに於ては或は完全に幾きものあらむ、心に於ては誰か缺然たらざる者あら

ひ。人は到底絶對的に善なるものとなる能はず然れども或限りある「時」の間に於て極めて高大なりと信ずる事は出來ざるにあらす其限りある時間の長短は一問題なりわれは思ふ其極めて短かきは石火の消えぬ間にして長きも流星の尾に過ぎじ。虚無を重んじ無爲を尙ふも畢竟この理に外ならず施爲多く思想豊かにして而して高遠なること能はざるは寧ろ彼の施爲なく思想なくして石火中の大頓悟を樂しむに如かじとすらむ。

文覺の袈裟に對するや如何なる愛情を有ちしやを知らず然れども世間彼を見る如き荒逸なる愛情にてはあらざりしなるべし。當時夫婦間の關係を推するに徳川氏時代の如く嚴格なるべきものにあらす、袈裟の如き堅貞の烈女實際にありしものなりや否やを知らず常盤の如き巴の如き節操の甚だ堅からざる女人多き時代にありて袈裟御前

なるもの實際世にありしか或は疑ひを挿むの餘地なきにあらす。然れども凡てのドラマチカルの事蹟を抹殺し去りても文覺が其妄愛に陥りて對手を害せし事は事實なるべし。少なくとも癡迷惑溺の壯年たりしことは許諾せざるべからず。

渠は油地獄の主人公の如く癡愚無明なりしものなるか。余はしかく信ずること能はず。彼の文彼の識世間の道法を辨せざるものとは認め難し。然れども渠は迷溺するを免かれざりしなるべし彼の本地は世間の道法に非ず世間の快樂にあらす世間の功利にあらす進取にあらす退守にあらす全然一個の梘白むすこたりしなるべく何物にか迷ひ何物にか溺るゝにあらざれば遂に一轉するの機會は非ざりしなり。渠は凡のものを蔑視したるなるべし淨海も渠を怖れしめず政權も渠を懸念せしめず己れの本心も渠を躊躇せしむるところなく激發

暴進鐵欄の以て繫縛する者あるに至るまでは停駐するところを知らざるなり。

渠は悪を悪とするを知る、然れ共悪の悪なるが故に自ら制止するとは能はず、能はざるに非ず、するの意志を有せざる也。善の善なることを知る、然れ共善の善なるを知て之を施すとは能はず、能はざるに非ず、施すの念を有たざる也。彼の一身は一側より言へば腕白也、他の一側より見れば頑執也。人の婦なることを知りて之を姦せんとす元より非道也、然れ共彼は非道を世人の嫌悪する意味に於ての非道とせず。人を己の慾情の爲に殺害するの悖虐なるを知る、然れ共悖虐を悖虐とする所以は極て冷淡なる意味に於て也。故に彼は此大悪を犯さんとする時に左轉右盼せず、白刃を睡客に加ふるの時に於てすら彼は尙大悪の大悪たるを曉知せざる也。

斯の如くに冷絶なる傲漢をして曇天の俄然として開け皎々たる玉女天外にひかり出でたるが如くならしめたる絶妙の變化はいかにして來りたるか。殺人の大悪彼を驚懼せしめ醒覺せしめしか。然らず。彼は始めより畏懼を知らず。

妙變を與へたるもの別に存するあり少しく是を言はむ。

彼は此の際に於て天地の至眞を感せし事、其一なり。凡てのものを蔑視したる彼は今女性の眞美を感得せり、血肉あるの女性は血肉の美を示せども、天地の至妙を示すものにあらず、始め貞操を以て辭せしものも、人間を嘲罵する彼の心絃には觸れざりしを、この際に於て豁然悟發して人間に至眞の存するあるを曉らしめたり。

彼はこの際に於て已れの意中物を害すると同時に已れの迷夢をも撃破し了れり。彼の惑溺は袈裟ありて然るにあらざりしも、この袈裟

の横死は彼が一生の惑溺を醫治したり。意中物は己れの極致なり。己れの極致を殺したる時にいかで己れの過去を存することを得む。彼は極致と共に死したり。而して他の極致を以て更生するまでの間は所謂無心無知の境なり。激奮狂奔して而して中奥に眠熟するが如き境なり。この境を過ぐるは心機一轉に缺くべからず。而してこの境は石火なり。流星なり。數秒時間なり。この數秒時間の後に他の極致は歩を進めて彼の中に入る。しばらく混亂したるに彼は新生の極致を得て全く向前の生命と異なるものとなるなり。

彼はこの際に於て天地の實を覺知せり。死彼に於て何の恐るゝところなく。生彼に於いて何の意味あるかを知らしめず。茫々たる天地有にもなく。無にもなきに似たる有様にありしものが始めて死といふ實を見たり。死は永遠の死にして再見の機あらざるべき實を知りたり。

無常彼に迫りて、無常の實を示し、離苦彼を圍みて離苦の實を表はし、戀愛その僞装を脱して、戀愛の實を顯はし、痴情その實體を現じ、大惡その眞狀を露はし、彼をして赫然として顛倒せしめ、然る後に彼をして始めて己れの存立の實なると天地萬有の實なるとを覺知せしめたり。而して彼をして天地神明に對して極めて眞面目なるものとならしめたり。

彼はこの際に於て戀愛の至道と妄愛の不義とを悟れり。曩に愛慕したるもの眞の愛慕にあらず、動物的慾愛に過るところあらざりし。然れども事の茲に至りて、始めて妄執の妄執たるを達破し、妄愛の纏蝨したるを頓脱し、戀愛の方向一轉して皮膚の愛慕を轉じて内部精神の美に對する高妙なる愛慕を興發せり。この愛慕は一の目的物に聚りて、而して四散せり、四散せるもの、再た聚りて、或一物の上に凝れり、彼の

以後の生涯是を證するを見るべし。

最後に彼は此際に於て佛智を得たり。彼は無慚無愧無苦無憂にして百煩惱の繁擁するところとなりて自ら知ること能はざりしなり。然るに發露刀一たび彼の心機を斷截するや彼は自ら依怙するところを喪ひたり。佛智はこの一瞬間に彼の中に入り、彼をして照明の心鏡に對せしめ、慚愧憂苦輾轉煩悶せしめ、然る後に自己を寄するところを知らしめたり。

凡そ傲逸彼の如きは亂世にありて一佛徒として終ること能はざるところなり、然るに彼をして遂に劍鎗に杖かきして、經典に倚らしめたるもの、抑いかなる鬼物の神力ならむ。他ならず、この一瞬時の發露刀なり、心機妙變なり。剛健彼の如く、執着彼の如く、驕慢彼の如く、血性彼の如きものをして、志の壯偉なる事は全盛の平家を倒して、孤島飄落の

人を起す程にありて而して胸中一物の希ふことろなく、單だ一寺の建立を願欲せしむるに過ぎざりしもの抑も奈何の故ある。曰く彼時の變化なり。熱烈の舌一世を罵り、勇猛の氣英雄を呑み。豪快天地を嘲るが如き舉動を爲しながら、別に一片の眞率無慾なるところ、專念回向するところ、瞑目靜思する處、殆數個の人あるが如き觀ある者何ぞや。曰く彼時の發心なり、彼時の心機妙變なり。彼時に得たるものが深く胸奥に印して抹除すること能はざればなり。噫このある意味に於ての荒法師が筐中常に彼可憐の貞女の遺魂を納めて、その重荷を取り去るを得ざりしと懸瀑に難行して、胸中の苦熱鎖し難き痛惱とは豈生悟りの聖僧の能く味ふを得るところならんや。冷淡にして熱血ある好漢遂に半悟の人とならず、能く自家の弱性を暴露し、罪業を懺悔せり。然り彼の一生は事業の一生にあらすして懺悔の一生なり、彼を以て改

革家なりと評する如きは蛇尾を見て蛇頭を見ざるの論なり。

文覺が袈裟を害したるは實に彼の心機を開發したる者也蓮花蕾を破りて玉女泥中に現れたるは實に此晨也至善の至惡を仆したるも此朝也無漏有漏に勝ちたるも光明の無明を破りたるも神性人性を撃碎したるも皆此時に於てありしなり而して其時間は一閃電の間に過ぎず人終に戦はずして勝つ能はざるか仆れずして起る能はざるかわれは文覺の爲に悲しむわれは彼の發機を觀して彼の爲に且つ泣き且つ喜ぶ彼をして斯の如き大毒刃の下に大發心を待せしめたる神意果して如何。天知子の一雜誌に載せし怪しき木像我眼前に往來して遂に我をして未熟の文を出すに至らしめぬ。アーノルドのあづま世に出るの時は近しと聞く英國の詩宗が文覺を觀るの眼光いかんは讀者と共に刮目して待つべし。

(終)

跋

戸川殘花

透谷子よ君は今ま天に昇りしか地に下りしか世には既に忘れはてたる人も有る可し今日もなほ昨日の如く君を思ふ人もある可し昔は芝の公園か麻布の霞町に車を走らせて訪はざれば相ひ見るとあたはず別るゝ時は實に別れしにて子ど我とは所を異にし身を別になせりされを眼に見る現身のあればにや子と別るゝは一日二タ日あるは一月二タ月と思ひぬこは大なる謬りなりき實に別れしは子が世にありし日にして世に在らざる今は別れしに非ず昔は呼ぶに如何

に速きを求むるも電話より早きはなく、書翰にては人して別に送るも一ト時は過ぐ可し、今は時と處を論せず呼べは應ふるなり思へば来るなり我が家にも路にても覺めても眠りても子は直ちに來るなりかく來るを思へば我には死別の悲哀を覺えず昨日は形骸に繋がる、身なれど今日は縛せらる可き糸もなし細もなし實に大自由の身なるよ子は自由の身となりぬ花の精ども遊べ蝶の神ども戯ひれよ思ひし人の枕をも訪へ慕はしき者の夢にも入れ臚くの春の夜半涼吹く風の夏の曉拭へる秋の大空乃よりするどき冬の月代に天使天女天童木精山川の靈と逍遙せよ天地を周りて英雄美人哲人の靈と談笑せよ子よ子よ子と現身の世に遊びし我は未だ

名と利の墨繩に縛られこの自由の世界をばこの自在の宇宙をば窮屈に年月を送るなり羨む可きは透谷子よ慕はしきは透谷子よあまりに慕はしきの餘り白金の里の瑞聖寺に詣で子の墳墓を尋ねればおはれ嬉しき住居かな一ト村茂る杉の木蔭に世をはなれたる一ト構へカナメの生ヶ垣結ひて實に方丈の住家なり誰がさへげしか愛の薫りの紅むは世にのこしたる君の手か秋の夜長もチンチンと抱き給ひし君の手か春寒むにもまけず桃は花筒にさゝれたり子は維摩の室にならひてか冷やかにして物いはずしるしの石の寂然として立てるのみアナ愚なりき子と談らんと思はば家にて可かりしに今の子には時も所もあらざるを。

子よ、子は悟りし人なり、覺めし人なりき、今はた花にも蝶にも
狂ひ給はじ、さはわれ、美妙に執着するは、菩提の縁ともなるも
のぞ、我に句あり、子よ聞け、

西行の幽霊見たり朧月

子よ、西行が幽霊になりしと云ふは、可笑しきと思はる可し
されど、子も愛し、山家集には

願はくは花の下にて春死なん、そのきさらきの望月のころ
とわり、願の一字に執着のはのかに見ゆるにはあらざるか、

春風の花をちらすと見る夢は、さめても胸のさわぐなり、鼻
夢にも花におくかれしは、花に着する意あるなり、

行方なく、月に心の澄く、て果はいかにかならんとすらん

墨染の袖かたしき、佐保姫どかたらひ、圓るき頭の影をかしく
嫦娥どおかせし夜もあらん、なごかは朧月の花の下に、西上人
はわくがれいですと云ふべきとあらんや、は子よ、丈夫は、大原
や蝶もで、舞ふ朧月とは吟じたり、子よ、梅白く、月清き夜はし
ばし姿を昔にかへして、我を訪はざるや、子よ、花香り、月朧なる
宵には、蝶となりては、來たらずや、世は日に、月に、名の木の花の
み盛りにして、黄金の色の山吹のみ、匂ふなり、子が遊たる文の
園生も、莠や生ひん、蓬や茂げらん、世を厭ひしも、今は昔となり
にけり、月は空しく、宴舞の都の空にすみ、花はいたづらに、絲竹
の園を粧ふのみ、誰か花と手をとりて、吉野の奥に住まん、誰か
月と住みて、須磨の浦端に、手鍋をさげん、自然界にも、情はなし

人間界にも情はなし情と見ゆるは剪綵花の一時時に匂ふのみ
みおら寒き世やあら冷かなる世や降るは小雪よ散るは霞よ
今はた思へば子が墳墓は暖かならめ子が墳墓は温かならめ
子よ我に歌あり

親子の愛の答より

妹背の花は開きしに

春光九十つれなくも

涙の雨にはとゞきす

四苦の一つの死出の路

花は散るもの散らぬこそ

花ならずとは思へども

風うらめしき春の暮れ

愛をも捨てん愛のため

愛にかふるに愛はあり

親子夫妻の愛もつき

天地自然の愛も消え

色なき空の月かけに

愛の色糸綱として

花もる鈴の音もさえ 慈悲圓かなる春を見ん
子が今の愛は骨肉が自然かそも 又圓滿なるかの相か子
よ我はこの文を草し子が敬愛せし天知子に子が墓前の桃花
一輪をそへて送りぬ子よ靈あらば桃花に乗りて天知子を訪
へ

蝶となりし君は何處ぞ桃の花

思ひいでよよめる

こゝは何處ぞ端聖寺不立文字の法なれど

我はおくれし春の雁つらぬる文字をゆるせかし

袖ふさかへす風すらも在し昔を思ひいで

透谷全集

不許複製

(文友館職版)

明治三十五年九月廿八日印刷
明治三十五年十月一日發行
正價金壹圓

編輯者 星野 慎之輔

發行者 大橋 省吾

印刷者 東京市小石川區久堅町百〇八番地 水谷 景長

印刷者 東京市小石川區久堅町百〇八番地 博進社工場

發賣元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

◎ 文 武 堂 發 發 ◎

(大 賣 所)
東京 堂 盛 文 館 瀨川
東京 瀨川 堂 盛 文 館

—(1)—

心ありてか散る花を、悲しきあどへよするなり。
 たはるゝ蝶も力なく、君がおくつき近くより、
 うつしみの世は春なりと、かたるにあらんあなわれ。
 今はなかく、忍ぶべき涙もいでした、すめば、
 老鶯の葉蔭より、法、法華經もたがためぞ。
 朧月夜に來ても見ん、君が唱ひし觸體舞。
 さはれ兄君世は今も、錦をかざりし觸體のみ。
 觸體と舞ふも面白や、觸體となるも面白や、
 月にあくがれ花に酔ひ、美妙の中に入るならば。
 こゝは何處ぞ瑞聖寺、柳は暗く花紅し。
 たゞぬかづきて物いはず、手向の水のぬるむのみ。

文 武 堂 藏 版 書 類

故 若 松 賤 子 史 遺 稿

忘 れ か ね た み

櫻 井 鷗 村 君 編 纂

三宅花圃女史序 戸川殘花君序
木村熊二君序 島崎藤村君序
湯谷紫苑君序 巖本善治君跋
故中島湘煙女史の追懷詩畫挿入

若松賤子女史異材を抱いて白玉樓中の人となりしより春風秋雨既に七星霜文界落葉の今日女史を追憶する無き能はず生前の述作今にして編纂せずんば散逸に歸せんことを憂へ即ち忘れかたみ、雛嫁、我宿の花等彼『小公子』と共に永く我文學史上の珍たるべきもの十數篇を收む。

洋裝美本全壹册 (紙數五百餘頁)

(近刊印刷中)

— (2) —

文 武 堂 藏 版 書 類

英 雄 小 說

武 俠 日 本

洋 裝 袖 珍 全 壹 册

押 川 春 浪 君 著

本書は著者押川春浪君が一大傑作なり、帝國新造軍艦の沈没は東洋大波瀾の發端なり、日、英、露、佛、米、比の英雄美人、兇漢刺客は、五大洲の活舞臺に勇躍す、東方侵略艦隊の横行、海底軍艦の行衛、大西珍の再生、露國猛將の憤死、比律賓獨立軍の苦戰、蠻勇俠客の奇珍、西洋鬼界ヶ島の悲劇、空中軍艦の出現等、讀去讀來、骨鳴り肉動き熱血迸る、愛國男兒必讀の快著なり。

渡 邊 審 也 君 畫

(紙數五百餘頁)

(近刊印刷中)

— (3) —

類書版藏堂武文

▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲
 遊山 憂慨 講御 史少 史少 史少 史少 叢山 地日
 俠陰 國世 談前 譚年 譚年 譚年 譚年 書水 本
 傳麟 高 中 鎮 旭 鬼 平 河 理 本
 傳麟 山 山 西 將 吉 相 湖 講 景
 附錄 文覺橋供養 幡隨長兵衛 助六、曉雨
 郎言 郎軍 川國 澤義 論

志賀重昂君著 (增訂拾四版) 正價金五拾錢
 同 (增訂拾貳版) 正價金四拾錢
 同 (大増補五版) 正價金四拾錢
 文學博士 高山樗牛君著 正價金四拾五錢
 文學博士 大町桂月君著 正價金四拾五錢
 文學博士 中内蝶二君著 正價金四拾五錢
 文學博士 國府犀東君著 (最新刊) 正價金四拾五錢
 松林伯圓講演 水野年方君著 正價金四拾五錢
 山路愛山君著 山中古洞君著 正價金四拾五錢
 福地櫻痴君著 水野年方君著 正價金四拾五錢
 文學博士 笹川臨風君著 正價金四拾五錢

類書版藏堂武文

▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲▲
 處世 偉人 元動 世世 東西 明治 明治 現を 名士 名家 逸事
 要訓 修養 談 十偉人 廿四傑 豪傑 秀美 氣質 嗜好 小品 叢譚
 伊藤山縣井上公實歷史

本増次郎君 (新刊發賣) 正價金六拾錢
 杉浦重剛君題 風間禮助君譯 中央新聞社編 藥判全壹册 正價金六拾錢
 諸名大家共著 (訂正第貳版) 正價金八拾錢
 著名諸大家著 (訂正第三版) 正價金六拾五錢
 鈴木光次郎編 (訂正拾貳版) 正價金四拾五錢
 鈴木光次郎編 (訂正第七版) 正價金四拾五錢
 櫻井鷗村君著 (訂正第貳版) 正價金四拾五錢
 中央新聞社編 袖珍全壹册 正價金四拾五錢
 津田梅子編著 (訂正第三版) 正價金四拾五錢
 櫻井鷗村校訂 (訂正第四版) 正價金四拾五錢

類書版藏堂武文

譯 君 村 鷗 井 櫻

譚 險 冒 界 世

(册 貳 拾 部 全)

▲ 少年
冒險譚
少 看 護 婦

櫻井鷗村君譯
菊判全壹册

正價金拾五錢
郵稅四錢

▲ 少年
冒險譚
初 航 海

櫻井鷗村君譯
袖珍全壹册

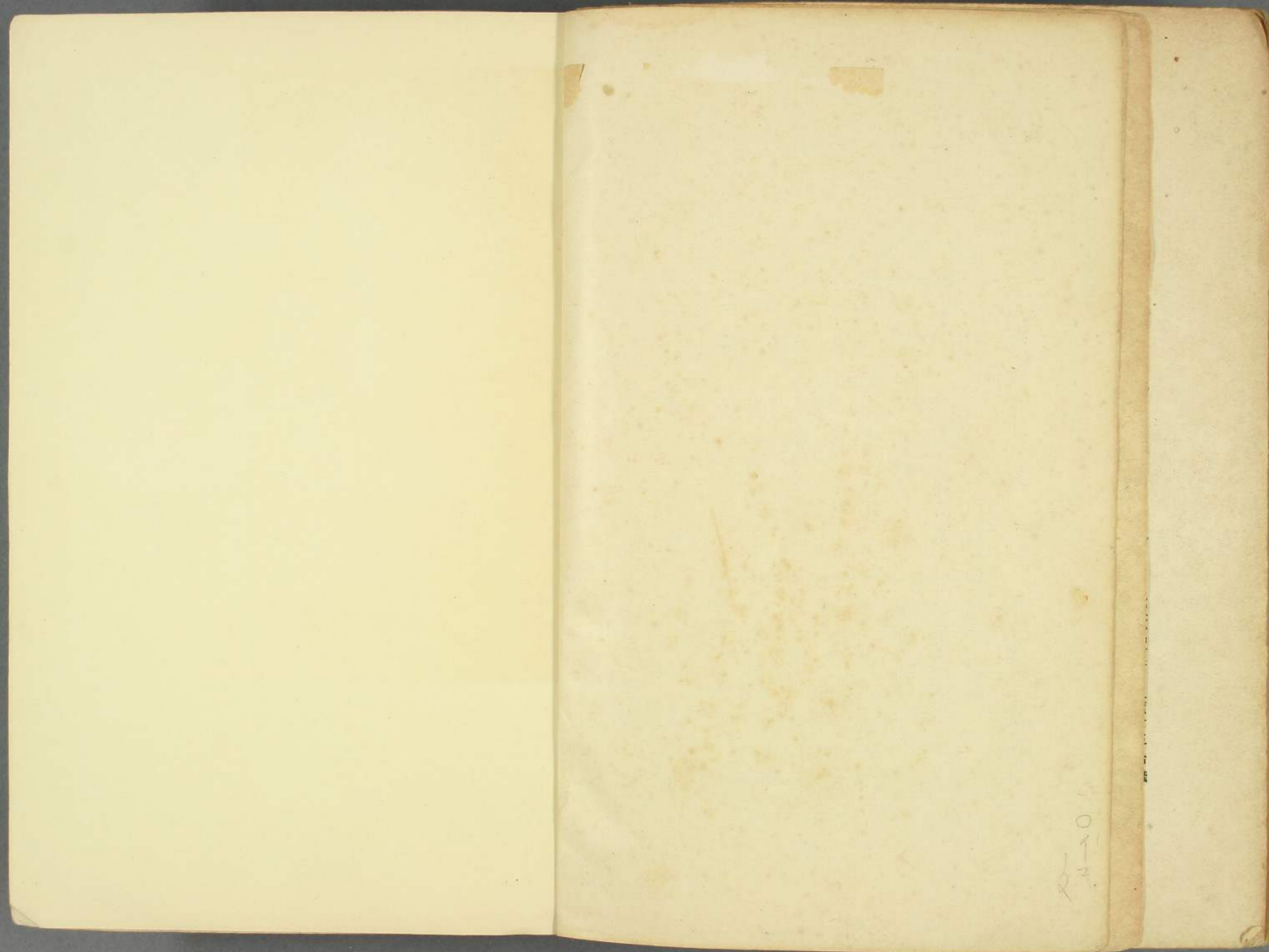
正價金廿五錢
郵稅四錢

- ▲ 金堀少年
- ▲ 遠征奇談
- ▲ 二勇少年
- ▲ 續遠征奇談
- ▲ 決死少年
- ▲ 航海少年
- ▲ 不撓少年
- ▲ 朽木の舟
- ▲ 俠勇少年
- ▲ 絕島奇談
- ▲ 漂流少年

◎ 全部出版完成每編讀切美本 ◎

◎ 每編口繪寫真版印刷密畫挿入 ◎

每編正價 金參拾錢 郵稅六錢



1012

